

飯土井二本松遺跡 下江田前遺跡

一般国道17号線(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書





1991

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第113集

飯土井二本松遺跡
下江田前遺跡

正誤表

頁	行等	誤	正
例言 2	6	飯土井町→	飯土井町字二本松391番地他
# 11		 内黒 →  灰軸	
		 灰軸 →  内黒	
16	第11図	ドットは黒が土器、赤が石器を示す。	

資料	群馬県埋蔵文化財	01-330
	調査団保管	16
No. 2-2006	平成3年3月5日	(5)

飯土井二本松遺跡 下江田前遺跡

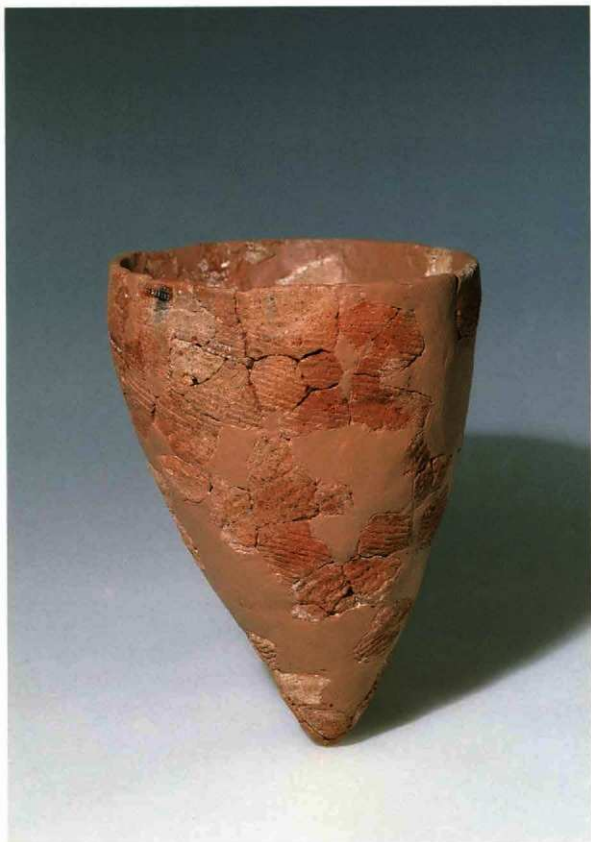
一般国道17号線(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



C区標準土層



尖底土器

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に、新田郡尾島町の国道354号線から前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・共用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って、埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和60年度に発掘調査しました飯土井二本松遺跡の報告書ですが、縄文時代早期の遺物を始めとする貴重な調査成果が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願ひ序とします。

平成2年10月

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

- この報告書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴い実施された飯土井二本松遺跡および下江田前遺跡の発掘調査の記録である。
- 上武道路は建設省関東地方事務局長が事業主体であり、発掘調査は群馬県教育委員会が当初実施し、1978年度以降は群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当している。

遺跡名	飯土井二本松遺跡	下江田前遺跡
所在地	群馬県前橋市飯土井町	新田郡新田町
調査主体	群馬県埋蔵文化財調査事業団	群馬県教育委員会
調査期間	1985年4月1日～1986年3月31日	1974年3月4日～15日
調査担当	原 雅信 小島敦子 岩崎泰一 金井 武 小林裕二 新井順二	井上唯雄 清水和夫 下城 正

- 資料整理および報告書の作成は群馬県埋蔵文化財調査事業団が行い、体制、期間は次の通りである。

事務担当 邊見長雄・松本浩一・神保佑史・桜場一寿・能登 健・田口紀雄・住谷 進・岩九大作
 国定 均・笠原秀樹・須田朋子・小林昌嗣・吉田有光・柳岡良宏・野島のお江・今井もと子
 松井美智子・角田みづほ

整理担当 原 雅信・岩崎泰一

坂庭常磐・青木静江・石倉和美・市田武子・大川明子・神谷みや子・鈴木紀子・関 正江
 高橋千代子・高橋裕美・田中晚美・南雲富子・新平美津子・萩原由美子・蜂巣綾子・松岡陽子

整理期間 1989年4月1日～1990年1月31日

- 遺構・遺物実測図、及び、都市計画図は、藤測研・藤技研にトレースを業務委託した。
- 関東ローム層の観察については、新井房夫氏（群馬大学）の分析所見を得ている。
- 石材の鑑定は、飯島静雄氏（群馬地質研究会）に依頼している。
- 縄文土器の展開写真（PL62）は、小川博忠氏に撮影依頼している。
- 遺構名称は発掘調査時の番号を用いている。なお、遺構と認定できないものは整理過程で除外したため、遺構番号に欠番が生じている。
- 報告写真については、遺構をはじめとして発掘調査に伴う撮影は調査担当者がそれぞれ行い、遺物写真については佐藤元彦（埋蔵文化財調査事業団技師）が一括して行った。
- この報告書を作成するにあたり、次の方々の指揮・助言を得ている。改めて感謝の意を表したい。
 石橋宏克・齋藤弘道
- 実測図中のスクリーン・トーンは次のことを表示している。また、この例に拠らないものについてはそれぞれ図中に凡例を示してあるので参照願いたい。

 砂壤土	 焼土	 内黒
 暗色帯	 炭化物	 灰輪
 B・P	 土器断面（繊維）	 カクラン
 H・P	 磨り面	

目 次

巻頭写真
序
例言

飯土井二本松遺跡

I 発掘調査の経過	1	(4) 中期後半以降	70
1. 調査までの経過	1	(5) 陥穴	104
2. 遺跡の位置と周辺のおもな遺跡	3	4. 古墳時代	115
3. 調査の方法	4	(1) グリッド出土遺物	115
4. 調査の経過	5	(2) 1号住居	115
II 発掘調査の成果	8	5. 奈良・平安時代	118
1. 遺跡の概要	8	(1) 住居	118
(1) 遺跡の概要	8	(2) 掘立柱建物	160
(2) 基本土層	9	(3) 土坑	164
2. 旧石器時代	12	6. 中・近世	165
3. 縄文時代	14	(1) 方形区画溝	165
(1) 早期	14	(2) 土坑	167
(2) 前期	49	(3) 井戸	171
(3) 中期前半	54	(4) 溝	172
		7. まとめ	177

下江田前遺跡

I 発掘調査の経過	179	II 発掘調査の成果	179
1. 発掘調査の経過	179	1. 調査の概要	179
2. 遺跡の位置	179	2. まとめ	181

付 遺物観察表

挿 図 目 次

飯土井二本松遺跡

- 第 1 図 上武道路路線図 (前橋市域)
第 2 図 道路の位置
第 3 図 グリッド設定図
第 4 図 飯土井二本松遺跡全体図
第 5 図 基本土層
第 6 図 ローム堆積状態
第 7 図 石器の分布と出土層位 (D区)
第 8 図 D区出土の石器
第 9 図 石器の分布 (A区)
第 10 図 A区出土の石器
第 11 図 石器と土器の分布 (縄文早期)
第 12 図 石器の分布 (東側集中区)
第 13 図 石器の分布 (西側集中区)
第 14 図 D区 縄文早期 石器集中地点 No. 1-3
第 15 図 石器の分布 (集中地点No. 4-8)
第 16 図 D区縄文早期焼土及び炭化物の分布
第 17 図 焼土及び炭化物
第 18 図 縄文土器 (早期)
第 19 図 縄文土器 (早期)
第 20 図 第 1・5・6 類土器の分布
第 21 図 第 2 類土器の分布
第 22 図 第 3 類土器の分布
第 23 図 第 4 類 a-e 種の分布
第 24 図 第 4 類 d-f 種の分布
第 25 図 第 4 類 g-i 種の分布
第 26 図 D区出土の石器 1 (縄文早期)
第 27 図 D区出土の石器 2 (縄文早期)
第 28 図 D区出土の石器 3 (縄文早期)
第 29 図 D区出土の石器 4 (縄文早期)
第 30 図 D区出土の接合資料 1 (縄文早期)
第 31 図 D区出土の接合資料 2 (縄文早期)
第 32 図 D区出土の接合資料 3 (縄文早期)
第 33 図 D区出土の接合資料 4 (縄文早期)
第 34 図 黒色頁岩の分布
第 35 図 接合資料の分布 (黒色頁岩)
第 36 図 母岩別資料の分布 1
第 37 図 母岩別資料の分布 2
第 38 図 母岩別資料の分布 3
第 39 図 土坑と遺物の分布 (前期後半段階)
第 40 図 礎分布 (前期後半)
第 41 図 礎分布 (重量別)
第 42 図 石器の分布 (前期後半)
第 43 図 縄文時代前期包含層の遺物
第 44 図 63号土坑
第 45 図 68号土坑
第 46 図 石器と土器の分布 (中期前半段階)
第 47 図 集石の分布
第 48 図 1・2号集石
第 49 図 3・4号集石
第 50 図 5号集石
第 51 図 石器の分布
第 52 図 61号土坑
第 53 図 76号土坑
第 54 図 縄文土器 (中期前半)
第 55 図 縄文土器 (中期前半)
第 56 図 76号土坑出土遺物
第 57 図 A区出土の石器 1 (中期前半)
第 58 図 A区出土の石器 2 (中期前半)
第 59 図 A区出土の石器 3 (中期前半)
第 60 図 撫糸文系土器
第 61 図 縄文時代中期後半(加曾利 E 3・4 式)土器分布図
第 62 図 1号縄文遺構と出土遺物
第 63 図 2号縄文遺構
第 64 図 53号土坑
第 65 図 土層の堆積状態 1 (53号土坑)
第 66 図 土層の堆積状態 2 (53号土坑)
第 67 図 2号縄文遺構出土遺物
第 68 図 2号縄文遺構出土土器展開図
第 69 図 縄文土器 (中期後半)
第 70 図 縄文土器 (中期後半)
第 71 図 縄文土器 (中期後半-後期)
第 72 図 縄文土器 (中期後半)
第 73 図 縄文土器 (中期後半)
第 74 図 縄文土器 (中期後半)
第 75 図 縄文土器 (中期後半)
第 76 図 縄文土器 (中期後半)
第 77 図 縄文土器 (中期後半)
第 78 図 縄文土器 (中期後半)
第 79 図 包含層出土の石器 1
第 80 図 包含層出土の石器 2
第 81 図 包含層出土の石器 3
第 82 図 包含層出土の石器 4
第 83 図 包含層出土の石器 5
第 84 図 包含層出土の石器 6
第 85 図 包含層出土の石器 7
第 86 図 包含層出土の石器 8
第 87 図 包含層出土の石器 9
第 88 図 包含層出土の石器 10
第 89 図 陥穴分布図
第 90 図 67号土坑
第 91 図 69号土坑
第 92 図 76号土坑
第 93 図 52号土坑
第 94 図 77号土坑
第 95 図 72号土坑
第 96 図 62号土坑
第 97 図 63号土坑
第 98 図 61号土坑
第 99 図 65号土坑
第 100 図 64号土坑
第 101 図 66号土坑
第 102 図 68号土坑
第 103 図 78号土坑
第 104 図 53号土坑
第 105 図 グリッド出土遺物 (古墳時代)
第 106 図 1号住居
第 107 図 1号住居出土遺物
第 108 図 住居位置図
第 109 図 2号住居と出土遺物
第 110 図 3号住居と出土遺物
第 111 図 4号住居と出土遺物
第 112 図 4号住居出土遺物

第113図	5号住居	第140図	22号住居と出土遺物
第114図	5号住居出土遺物	第141図	23号住居と出土遺物
第115図	6号住居出土遺物	第142図	24号住居
第116図	6号住居	第143図	24号住居と出土遺物
第117図	7号住居と出土遺物	第144図	24号住居出土遺物
第118図	8号住居と出土遺物	第145図	25号住居出土遺物
第119図	8号住居出土遺物	第146図	25号住居と出土遺物
第120図	9号住居と出土遺物	第147図	掘立柱置園
第121図	9号住居出土遺物	第148図	2号掘立柱建物
第122図	10号住居と出土遺物	第149図	1号掘立柱建物
第123図	10号住居出土遺物	第150図	3号掘立柱建物
第124図	11号住居	第151図	4号掘立柱建物
第125図	11号住居出土遺物	第152図	79号土坑
第126図	12号住居と出土遺物	第153図	79号土坑
第127図	13号住居と出土遺物	第154図	方形区南溝 (17・41号溝)
第128図	13号住居出土遺物	第155図	41号溝出土遺物
第129図	14号住居	第156図	17・41号溝土層図
第130図	14号住居出土遺物	第157図	土坑位置図
第131図	15号住居	第158図	土坑 (1)
第132図	15号住居出土遺物	第159図	土坑 (2)
第133図	16号住居と出土遺物	第160図	井戸
第134図	17号住居	第161図	C区溝群
第135図	18号住居と出土遺物	第162図	C区溝土層図
第136図	19号住居	第163図	D区溝群
第137図	19号住居出土遺物	第164図	D区溝土層図
第138図	20号住居	第165図	E区溝群と土層図
第139図	20号住居出土遺物		

下江田前遺跡

第1図 下江田前遺跡全体図

表 目 次

第1表	火山灰分析結果表	第8表	種別石材構成 (1)
第2表	石器の組成 (D区東側出土石器)	第9表	種別石材構成 (2)
第3表	石器の組成 (D区西側出土石器)	第10表	石器の器種・石材組成表 (包含層)
第4表	石器の組成と石材	第11表	縄文石器計測表 (1)
第5表	種別石材構成 (1)	第12表	縄文石器計測表 (2)
第6表	種別石材構成 (2)	第13表	住居・遺物一覧表
第7表	石器と石材	第14表	土坑一覧表

写真図版

飯土井二本松遺跡

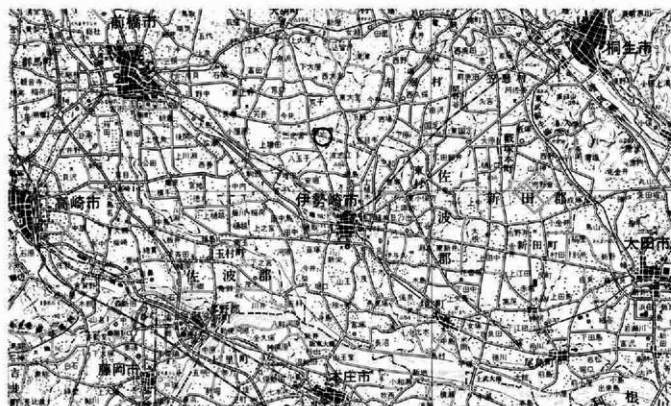
- | | | | | | | | |
|--------|---|-----------------------|--------|-------------------|---------------------|--------------|------------|
| P L 1 | 1 | 遺跡の全景（上空から遺跡を望む） | 6 | 坑底部下部施設（B列） | | | |
| | 2 | 遺跡の全景（東から遺跡を望む） | 7 | 棒状痕（A列） | | | |
| P L 2 | 1 | A1-10G遺物出土状態 | 8 | 小穴掘り方（B列） | | | |
| | 2 | A1-10G遺物出土状態 | P L 16 | 1 | 62号土坑 確認状態 | 2 | 土層 |
| | 3 | Ao-10G遺物出土状態 | 3 | 坑底部断面 | 4 | 坑底部下部施設 | |
| | 4 | Ao-10G遺物出土状態 | 5 | 63号土坑 土層 | 6 | 全景 | |
| | 5 | Ao-10G遺物出土状態 | 7 | 坑底部断面 | 8 | 坑底部下部施設 | |
| | 6 | B区旧石器時代試掘状況 | P L 17 | 1 | 64号土坑 土層 | 2 | 坑底部確認状態 |
| | 7 | D区旧石器時代試掘状況 | 3 | 坑底部断面 | 4 | 坑底部下部施設 | |
| | 8 | 試掘（Dk-05G） | 5 | 66号土坑 土層 | 6 | 坑底部確認状態 | |
| | 9 | Dk-05G 北壁土層 | 7 | 坑底部断面 | 8 | 坑底部下部施設 | |
| P L 3 | 1 | Ag-13G 北壁土層 | P L 18 | 1 | 61号土坑 土層 | 2 | 全景 |
| | 2 | Ar-10G 北壁土層 | 3 | 坑底部確認状態 | 4 | 下部施設断面 | |
| | 3 | Bk-19G 北壁土層 | 5 | 65号土坑 土層 | 6 | 坑底部確認状態 | |
| | 4 | Bu-19G 北壁土層 | 7 | 坑底部断面 | 8 | 坑底部下部施設 | |
| | 5 | Ca-21G 北壁土層 | P L 19 | 1 | 68号土坑 土層 | 2 | 全景 |
| | 6 | Dm-07G 北壁土層 | 3 | 坑底部断面 | 4 | 坑底部下部施設 | |
| | 7 | Ds-07G 北壁土層 | 5 | 78号土坑 土層 | 6 | 坑底部確認状態 | |
| | 8 | Du-09G 北壁土層 | 7 | 坑底部下部施設 | | | |
| P L 4 | 1 | D区砂塚土下（早期）遺物出土状態（西から） | 8 | 72号土坑 土層および出土状態 | | | |
| | 2 | D区砂塚土下（早期）調査状況 | P L 20 | 1 | 53号土坑 土層No.1 | 2 | 土層No.2 |
| | 3 | D区北壁土層 | 3 | 土層No.3 | 4 | 土層No.4 | |
| P L 5 | 1 | D区 砂塚土下（縄文時代早期）の調査 | 5 | 土層No.5 | 6 | 土層No.6 | |
| | 2 | D区 砂塚土下（縄文時代早期）の調査 | 7 | 土層No.7 | 8 | 土層No.8 | |
| P L 6 | 1 | D区砂塚土下（縄文時代早期）の遺物出土状態 | P L 21 | 1 | 53号土坑 土層No.9 | 2 | 土層No.10 |
| | 2 | D区遺物出土状態 | 3 | 土層No.11 | 4 | 土層No.11（棒状痕） | |
| | 3 | D区南壁土層断面 | 5 | 土層No.12a | 6 | 土層No.12b | |
| | 4 | D区砂塚土下試掘調査 | 7 | 土層No.13a | 8 | 土層No.13b | |
| | 5 | 遺物出土状態（試掘調査） | P L 22 | 1 | 53号土坑 土層No.13a（棒状痕） | | |
| P L 7 | 1 | C区 砂塚土下 全景 | 2 | 土層No.13b（棒状痕） | | | |
| | 2 | C区 砂塚土下の調査 | 3 | 土層No.14a | 4 | 土層No.14b | |
| | 3 | C区 西壁土層断面 | 5 | 土層No.15 | 6 | 土層No.16 | |
| P L 8 | 1 | A区砂塚土下（中期前半）遺物出土状態 | P L 23 | 1 | 53号土坑 土層No.17 | 2 | 土層No.18 |
| | 2 | A区砂塚土下旧河川縁辺部の遺物出土状態 | 3 | 土層No.19 | 4 | 土層No.20 | |
| P L 9 | 1 | B区1号縄文遺構 | 5 | 土層No.21 | 6 | 土層No.22 | |
| | 2 | B区調査区全景（西から） | 7 | 土層No.23 | 8 | 土層No.24 | |
| P L 10 | 1 | B区2号縄文遺構 | P L 24 | 1 | D区全景（西から） | 2 | D区住居群（西から） |
| | 2 | 埋設土器出土状態 | P L 25 | 1 | 1号住居 | | |
| | 3 | 埋設土器出土状態 | 2 | 1号住居 遺物および炭化材出土状態 | | | |
| P L 11 | 1 | C区 砂塚土上位面（旧流路）遺物出土状態 | P L 26 | 1 | 1号住居 | 2 | 炉 |
| | 2 | C区 砂塚土上位面（中期後半）の調査 | 3 | 炉断面 | 4 | 遺物出土状態 | |
| | 3 | C区 砂塚土上位面（中期後半）の調査 | 5 | 住居掘り方 | | | |
| | 4 | A-B区 旧河川（西から） | P L 27 | 1 | 2号住居 | 2 | カマド |
| | 5 | A-B区 旧河川 | 3 | 掘り方土層 | 4 | カマド掘り方 | |
| | 6 | A-B区 旧河川 | 5 | 住居掘り方 | | | |
| | 7 | A-B区 旧河川埋没土層 | P L 28 | 1 | 3号住居 | 2 | 掘り方 |
| P L 12 | 1 | B区砂塚土下陥穴群（西から、手前は旧河川） | 3 | カマド | 4 | カマド掘り方 | |
| | 2 | B区砂塚土下陥穴群（東から） | P L 29 | 1 | 4号住居 | 2 | カマド |
| P L 13 | 1 | 67号土坑 土層 | 3 | カマド及び貯蔵穴 | | | |
| | 2 | 全景 | 4 | カマド掘り方 | 5 | 掘り方 | |
| | 3 | 坑底部断面 | P L 30 | 1 | 5号住居 | 2 | カマド |
| | 4 | 坑底部下部施設 | 3 | 貯蔵穴 | 4 | カマド掘り方 | |
| | 5 | 69号土坑 土層 | 5 | 掘り方 | | | |
| | 6 | 全景 | P L 31 | 1 | 6a号住居 | 2 | カマド |
| | 7 | 坑底部断面 | 3 | カマド掘り方 | 4 | カマド土層 | |
| P L 14 | 1 | 76号土坑 土層 | 5 | 貼り床状態 | | | |
| | 2 | 全景 | P L 32 | 1 | 6b号住居 | 2 | 掘り方 |
| | 3 | 坑底部断面 | P L 33 | 1 | 7号住居 | 2 | 掘り方 |
| | 4 | 坑底部下部施設 | 3 | カマド | 4 | カマド掘り方 | |
| | 5 | 52号土坑 土層 | | | | | |
| | 6 | 全景 | | | | | |
| | 7 | 坑底部断面 | | | | | |
| | 8 | 坑底部下部施設 | | | | | |
| P L 15 | 1 | 77号土坑 土層 | | | | | |
| | 2 | 全景 | | | | | |
| | 3 | 坑底部断面（A列） | | | | | |
| | 4 | 坑底部下部施設（A列） | | | | | |
| | 5 | 坑底部断面（B列） | | | | | |

P L 34	1	8号住居	2	カマド	3	75号土坑	4	57号土坑	
	3	カマド土層	4	カマド土層	5	34号土坑	6	24号土坑	
	5	掘り方			7	39号土坑	8	43号土坑	
P L 35	1	9号住居	2	カマド	9	47号土坑	10	56号土坑	
	3	カマド	4	カマド掘り方	P L 55	1	4号井戸	2	4号井戸土層
	5	掘り方				3	7号井戸	4	7号井戸土層
P L 36	1	10号住居	2	カマド		5	5号井戸	6	6号井戸
	3	遺物出土状態	4	遺物出土状態		7	1号井戸	8	2号井戸
	5	遺物出土状態				9	3号井戸		
P L 37	1	11a号住居	2	カマド	P L 56	1	C区 溝群(東から)	2	25号溝土層
	3	貼り床状態	4	11b号住居		3	26号溝土層	4	4号溝土層
	5	掘り方				5	11号溝土層		
P L 38	1	12号住居	2	掘り方	P L 57	1	E区全景(北西から)	2	E区溝群
	3	掘り方土層	4	カマド	P L 58		早期包含層出土の土器		
P L 39	1	13号住居	2	掘り方	P L 59		早期・前期包含層出土の土器		
	3	カマド	4	カマド掘り方	P L 60		前期・中期前半包含層の土器		
P L 40	1	14号住居	2	カマド	P L 61		中期前半包含層出土の土器		
	3	カマド	4	貯蔵穴	P L 62		76号土坑・中期縄文遺構出土の土器		
	5	掘り方			P L 63		中期後半～後期出土の土器(1)		
P L 41	1	15号住居	2	掘り方	P L 64		中期後半～後期出土の土器(2)		
	3	カマド	4	16号住居	P L 65		中期後半～後期出土の土器(3)		
P L 42	1	17号住居	2	18号住居	P L 66		中期後半出土の土器(1)		
P L 43	1	19a号住居	2	19b号住居	P L 67		中期後半出土の土器(2)		
	3	掘り方	4	カマド	P L 68		中期後半出土の土器(3)		
	5	カマド掘り方			P L 69		中期後半出土の土器(4)		
P L 44	1	20号住居	2	カマド	P L 70		中期後半出土の土器(5)		
	3	カマド	4	掘り方	P L 71		中期後半出土の土器(6)		
	5	カマド掘り方			P L 72		中期後半出土の土器(7)		
P L 45	1	22号住居	2	カマド	P L 73		旧石器・早期包含層出土の石器		
	3	カマド	4	掘り方	P L 74		早期・包含層出土の石器		
	5	カマド掘り方			P L 75		早期包含層出土の石器(接合資料)		
P L 46	1	23号住居	2	土層	P L 76		中期前半包含層出土の石器		
	3	掘り方	4	カマド	P L 77		早期・前期包含層出土の石器(1)		
	5	カマド掘り方			P L 78		前期包含層出土の石器(2)		
P L 47	1	24号住居(北半部)	2	24号住居(南半部)	P L 79		包含層出土の石器(1)		
	3	掘り方	4	カマド	P L 80		包含層出土の石器(2)		
	5	カマド			P L 81		包含層出土の石器(3)		
P L 48	1	25号住居	2	遺物出土状態	P L 82		グリッド(古墳時代)・1号住居出土の遺物		
	3	掘り方	4	カマド	P L 83		グリッド・2・3・4号住居出土の遺物		
	5	カマド掘り方			P L 84		4号住居出土の遺物		
P L 49	1	1号掘立柱建物	2	3号掘立柱建物	P L 85		5・6号住居出土の遺物		
	3	4号掘立柱建物	4	2号掘立柱建物	P L 86		6・7・8号住居出土の遺物		
P L 50	1	17号溝(東から)	2	17号溝土層	P L 87		9号住居出土の遺物		
	3	41号溝土層	4	41号溝(北から)	P L 88		10・11号住居出土の遺物		
	5	全景	6	17号溝調査状況	P L 89		11・12・13号住居出土の遺物		
P L 51	1	19号土坑	2	20号土坑	P L 90		13・14号住居出土の遺物		
	3	21号土坑	4	22号土坑	P L 91		15・16・18・19号住居出土の遺物		
	5	23号土坑	6	25号土坑	P L 92		19・20号住居出土の遺物		
	7	27号土坑	8	28号土坑	P L 93		20・22・23・24号住居出土の遺物		
P L 52	1	29号土坑	2	30号土坑	P L 94		24・25号住居・25・41号溝出土の遺物		
	3	31号土坑	4	37号土坑	P L 95		墨書土器(1)		
	5	38号土坑	6	40号土坑	P L 96		墨書土器(2)		
	7	41号土坑	8	42号土坑					
	9	44号土坑	10	48号土坑					
P L 53	1	49号土坑	2	50号土坑					
	3	55号土坑	4	58号土坑					
	5	59号土坑	6	73号土坑					
	7	74号土坑	8	51号土坑					
P L 54	1	46号土坑	2	45号土坑					

下江田前遺跡

P L 1	1	調査状況
	2	溝土層
	3	溝全景

飯土井二本松遺跡



(1 : 200,000 地勢図 宇都宮)

I 発掘調査の経過

1. 調査までの経過

建設省は、一般国道17号の交通混雑緩和のため、東京一大宮～前橋間に大規模バイパスの建設を進めている。上武道路はその一環として計画されたもので、深谷バイパスの上武インターチェンジ（深谷市東方）を起点とし、利根川を渡河して群馬県に入り、前橋市北側を迂回して、前橋市田口町で現道に取りつく全長41.4kmの道路である。

昭和41年度に大宮国道工事事務所で調査が開始され、昭和44年度に高崎工事事務所に引き継がれた。都市計画は昭和46年3月に尾島町～伊勢崎市内、昭和58年3月に国道50号までの決定がおこなわれた。

これに伴い県教育委員会は、昭和45年度に開発諸事業との調整をはかる資料として、計画路線を中心に巾2kmの区域の埋蔵文化財分布調査を実施した結果、遺跡総数は472ヶ所にのぼった。

発掘調査は諸準備を整え、昭和49年1月から実施された。当初1班で進められたが、工事の進捗に対応して昭和59年からは3班、60年からは4班編成となり、昭和63年度で国道50号までの調査を完了した。一方、県教育委員会は埋蔵文化財の調査部門として昭和53年に群馬県埋蔵文化財調査事業団が設立され、同年以降の上武道路建設に伴う発掘調査は本事業団が実施し、今に至っている。

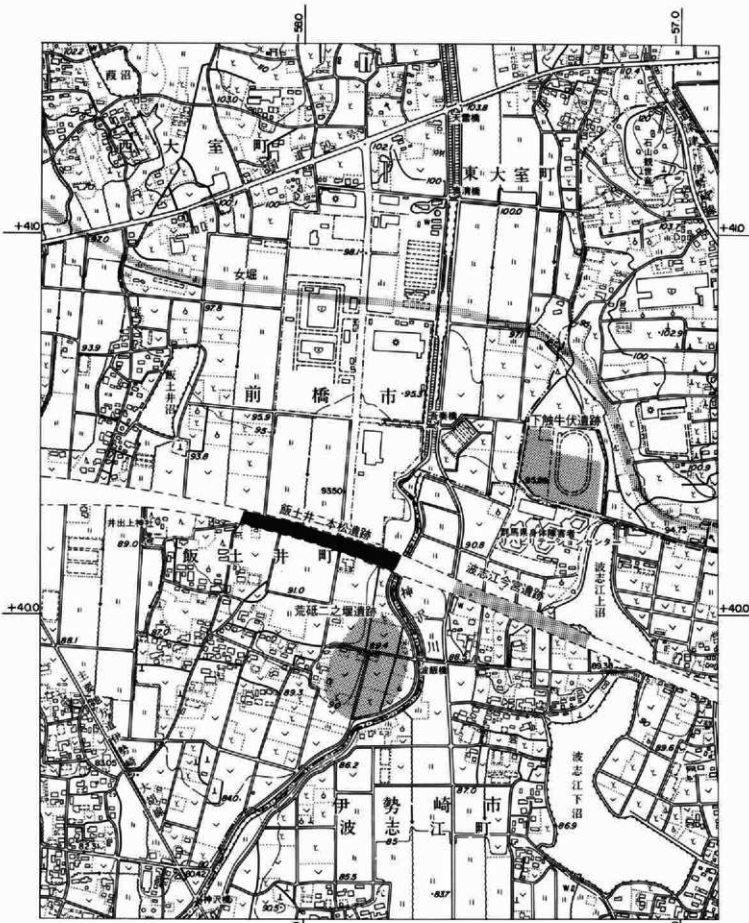
今回報告する飯土井二本松遺跡は分布調査で縄文包蔵地とされた前橋市のNo.146遺跡に近接する遺跡である。また、本調査に先立ち、昭和59年度に試掘調査を実施し、ステーションNo.921～942の範囲を遺跡として確定した。対象面積は18,000㎡である。

本調査は4班体制の初年の調査であり、神沢川西岸のNo.921～942に至る延長420mを全面調査した。以後、上武道路関連の調査は多忙をきわめた。

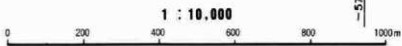
なお、上武道路は平成元年3月8日に国道354号から国道50号までが開通した。



第1図 上武道路路線図（前橋市域）



第2図 道跡の位置



2. 遺跡の位置と周辺のおもな遺跡

飯土井二本松遺跡は、群馬県前橋市飯土井町字二本松に所在する。飯土井町は前橋市の東南部にあたり、本遺跡の東側は神沢川を隔てて伊勢崎市と接している。周辺は前橋市市街地から11kmほど東方の農村地帯であるが、年々開発が進み、工業団地や住宅地が造成されている。

発掘調査時の現況は水田であったが、遺跡の立地する地点は微高地状になっている。遺跡の西側は井出神社のあるローム台地につながっており、さらにその西側は飯土井沼を谷頭とする細長い沖積地が形成されている。一方遺跡の東側は神沢川の現河道に接している。神沢川に伴う沖積地はさらにその東側の神沢川左岸に形成されている。

本遺跡が位置するのは、広く裾野を広げた赤城山の南麓、標高90m前後の地点である。赤城山は第三紀の複合成層火山で、山体にのるローム層中には板鼻黄色軽石層(YP)、板鼻褐色軽石層(BP)、八崎軽石層(HP)などが堆積しており、裾野では安定したローム台地を形成している。ローム台地は山麓を流下する中小河川や湧水から流出する小河川の浸食によって開析され、帯状の沖積地が刻まれている。遺跡の東側を流れる神沢川もそのひとつである。

赤城山の南麓や西麓のローム台地には旧石器時代の遺跡が多く分布し、調査も進んできている。日本初の旧石器発見で著名な岩宿遺跡も本遺跡から北東10km余りのところにある。また、本遺跡の東側、神沢川左岸のローム台地上でも下触牛伏遺跡が調査され、AT直下とBP上層で2枚の文化層が確認されている。また、赤城山南麓地域には、河川作用による砂壤土性の微高地がローム台地に付随して形成されている地点が多い。これらの微高地は、赤城山の山体崩壊土砂が山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。この微高地の存在は周辺の発掘調査で数地点が確認されている。

本遺跡が立地するのもこうした砂壤土性の微高地上である。本遺跡ではこの砂壤土の堆積が発達して

おり、砂壤土下に縄文時代早期の遺物包含層とローム層が検出された。また発掘区内の一部では砂壤土層中に開層があり、縄文時代前期・中期の遺物包含層が検出され、砂壤土の堆積が縄文時代までさかのぼることが判明した。完新世の厚い土壌下での遺構や遺物の検出は周辺ではほとんどなく、本調査は遺跡立地を考える際に重要な視点を提示している。

縄文時代の遺跡は、本遺跡から400m南方の荒砥二之堰遺跡で、縄文時代中期から後期の住居が調査されている。称名寺式期の柄籠形住居が多数検出されており注目される。また、先述した下触牛伏遺跡では、縄文時代前期の住居と時期不明の縄文時代の陥穴が調査されている。

弥生時代の遺跡は周辺での調査例がほとんどない。本遺跡や荒砥二之堰遺跡では弥生時代終末期の土器が検出されている。本遺跡から2km西方の宮川流域には弥生時代中期後半の住居が確認されている。

古墳時代の遺跡は周辺に数多く分布し、調査も行われている。本遺跡の南にある荒砥二之堰遺跡では古墳時代前期の住居群と方形周溝墓群が隣接して調査され、本遺跡で1軒検出された当該期の住居はこの集落の北端とも考えられる。また、北西1.5kmにある江竜川流域の荒砥荒子遺跡では5世紀代の方形区画遺構が検出され注目されている。二之堰遺跡や神沢川左岸の下触牛伏遺跡・流志江今宮遺跡では、古墳時代後期の住居や群集墳が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は本遺跡周辺での調査例はほとんどないが、遺跡の分布踏査では数多く分布することがわかっている。本遺跡北西2kmにある上西原遺跡では大規模な獨立柱建物跡などや郷名を示唆する黒書土器が出土している。

中世の遺構としては、本遺跡の北方600mほどのところにある女堀が調査されている。女堀は1108年の浅間Bテフラ降下後に掘られた用水堀であり、本地域の荘園開発を考える上で重要な遺構である。

3. 調査の方法

道路の調査対象範囲は、神沢川以西約420m、飯土井中央遺跡に接する約18,000m²である。この部分は桑園および水田に利用されていたが、上武道路建設用地となって以降は一部牧草地として利用されていた他は未耕地であった。ただ、上武道路が東西に横切ることから現農道が数本存在し、調査中についても生活道として常に確保する必要があった。

調査に際して、調査区の設定は国家座標を基準に実施している。グリッドは4×4mを1単位とし、南北に1・2・3…25、東西にa・b・c…zを付し、100mを大区画として西からA区・B区・C区・D区・E区に分割している。グリッドの呼称は北西隅を基点とし、Aa-01・Ba-01等と示している。

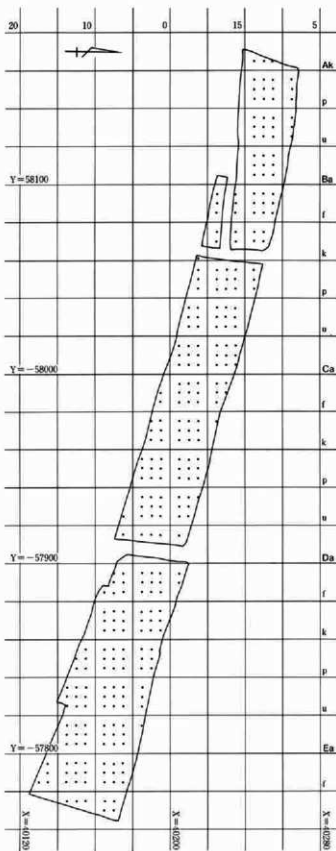
今回の調査を実施するにあたり道路の範囲、遺構、遺物のあり方を把握することを目的として1985年度に試掘調査を行っている。この段階でD区を中心に奈良・平安時代の住居群が存在すること、縄文時代の土器、石器類が豊富に散布すること等が確認されている。なお試掘調査は幅2mのトレンチを路線に沿って3～9本設定し実施している。

本調査はこれらの情報をもとに着手したが、上武道路建設計画との関係から神沢川に接する部分であるD・E区から開始している。表土除去は重機を使用し、引き続きC・B・A区へと進んでいる。

調査区内に存在する農道については、路線に平行するものについては調査区内に付け替え道を作り極力調査に努めたが、路線を横断する南北方向の農道については付け替えが困難な状態であったため未調査となってしまった。

遺構については縮尺1/20で実測図を作成している。包含層の遺物類は縮尺1/40でドットマップを記録している。写真は各担当者が撮影しており、カメラは35ミリモノクロ、同リバーサルおよび6×9版モノクロの3機種を使用している。

なお調査グリッドに伴う国家座標測量について



第3図 グリッド設定図

は、㈱測研に委託業務としている。

4. 調査の経過

発掘調査は1985（昭和60）年4月1日～1986（昭和61）年3月31日までの期間で終了している。

調査工程については遺跡東側に存在する神沢川高架工事との関係から同部分、調査区D区から着手している。

発掘調査の経過については調査日誌に記録しているが、ここではこの日誌をもとに着手から終了に至る経過を示しておきたい。

4月

年度当初は、調査事務所設営等発掘調査の準備期間となっている。合わせて調査工程に沿ってD区・E区の表土掘削を行うとともに遺構確認作業を実施している。

5月

E区において溝状遺構を検出し、調査を進める。D区では住居群が検出されはじめる。確認段階で1号住居については古墳時代に属す遺構であることが認められたため、まず2号住居以下の奈良・平安時代住居から着手するものとした。

6月

引きつづきD区住居の調査を行う。この段階で住居掘り方調査に伴う床面が複数認められる住居が存在し注目された。合わせてD区溝群の調査を行う。またA～C区の表土掘削、遺構確認作業を行い、A区17号溝の調査も着手した。

7月

1号住居調査。炭化材多数出土し火災住居と考えられた。他住居についても調査終了のためD区全景写真撮影。半ばよりD区砂埃土層下の試掘を行い、同層下黒色土層より縄文土器（早期）が出土する。引きつづき砂埃土層の掘削、除去を実施し、縄文時代早期面の調査に着手する。

8月

D区砂埃土層下の調査を継続する。縄文時代の調査終了後、2×4mを基本とした旧石器時代の試掘を行う。地下水が豊富に流出し調査は困難な状態が続く。

9月

D区調査継続。C区溝群の調査着手。B区調査を行い縄文時代遺物の取り上げ。A区は17号溝継続するが湧出水多く調査は断続的となる。

10月

D区調査終了後埋め戻し。A～C区の砂埃土層上面の調査継続。17号溝調査終了。B区41号溝調査し17号溝との関係が注目された。

11月

A～C区の調査継続。縄文土器、石器等遺物取り上げを行う。C区53号土坑（陥穴）スライス調査実施。

12月

A～C区砂埃土層上面の調査終了後、砂埃土層下の調査実施。A区において中期前半の包含層検出。C区砂埃土層下縄文時代早期面調査を行うが、遺物は出土しない。

1月

各区砂埃土層下の調査継続。A～B区間に旧河川が存在し、その東側に縄文時代陥穴群が確認される。C区については旧石器時代試掘調査終了後埋め戻し。

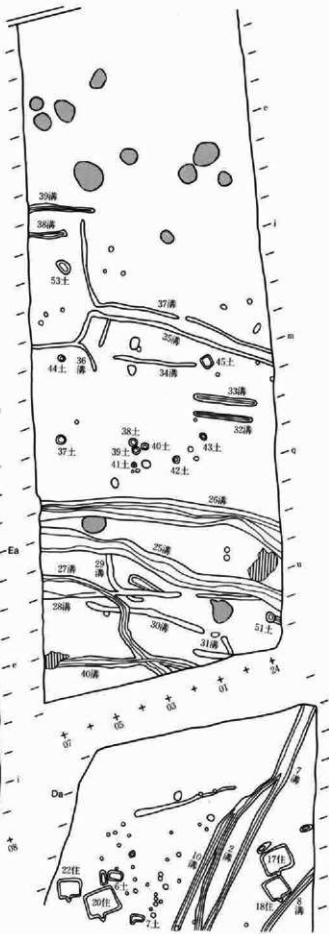
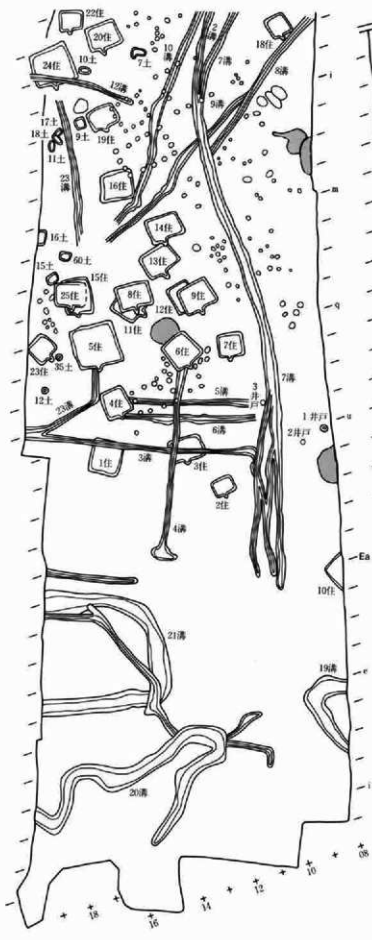
2月

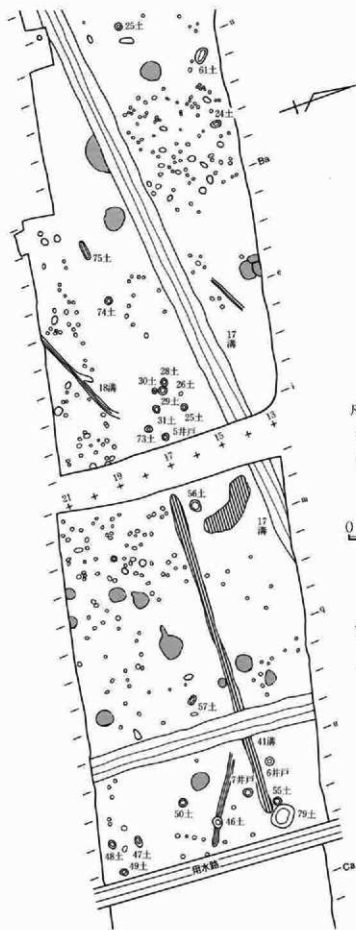
陥穴群については半載調査を行い、下部施設の確認をする。半ばに積雪（前橋市域26cm）がある。各区とも旧石器時代の試掘調査実施。A区において石器の出土を確認し拡張を行う。

3月

A・B区調査継続。旧石器時代調査は主としてA区で行う。

3月31日（月）をもって全調査が終了する。





第4図 飯土井二本松遺跡全体図

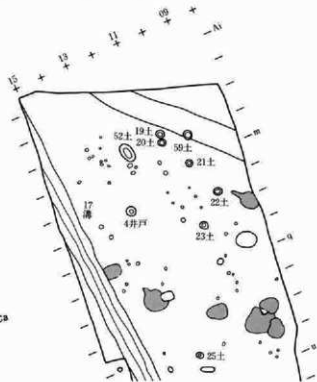
この全体図は、遺跡最上位面の遺構の検出状態を示している。

凡例

● 倒木痕

▨ 攪乱

0 1:500 20m



II 発掘調査の成果

1. 遺跡の概要

(1) 遺跡の概要

飯土井二本松遺跡は神沢川右岸、砂壤土性台地上に主として立地する。今回の発掘調査によって認められた最も注目されることは、台地上に厚く堆積する砂壤土層中に縄文時代各期の複数の文化層が確認出来た点である。

砂壤土は関東ローム層上に二次堆積し、現状では標高92m程度ではほぼ平坦面を形成し、神沢川に向かって傾斜する。本遺跡に西接する飯土井中央遺跡ではローム台地が広がり、砂壤土の堆積は認められない。本遺跡におけるローム層は、赤城山南麓における標準的堆積状態と一致するが、その地形的状態は一様ではなく、かなり起伏をもつことが認められている。このローム面の起伏は最大2.5mの比高差があり、当然のことながら砂壤土はローム面の低位部に厚く堆積する結果となっている。調査区内で最もローム面が高位となるB区においては、砂壤土が極めて希薄もしくは認められていない。ローム面は、このB区付近を最高位とし、東西それぞれに向かって傾斜する。この部分に砂壤土の堆積が存在し、さらにその層中に縄文時代早期・前期・中期前半の文化層(旧表土)が埋没していることが確認されたのである。

ただ、調査において、全域に各時代の文化層を確認しているわけではない。砂壤土に直接覆われた各期文化層が分布を異にして存在したもので、このことは当時の土地利用、その環境および砂壤土の堆積状況と関連するのであろうが、やや複雑な様相をもっている。

その分布は次のような範囲である。早期は神沢川寄りのD区に土器・石器が集中分布する。この確認面は、ローム層上に形成された黒色土層(腐植土層)であり、同層面に各遺物が出土する他、塚状遺構も認められている。この面はC区へ続き途中で旧流路

により分断され、また起伏を生じながらもB区に向ってゆるやかに高くなる。C区には早期遺物は全く出土せず、その分布域は、D区に限定される。

前期および中期前半の文化層については、A・B区の接する部分に存在する埋没河川の旧流路兩岸にそれぞれ認められている。

前期については、遺物量が少なく範囲も狭いため、その広がり是不明瞭であるが埋没河川左岸に接して分布する。土器型式では黒浜式および諸磯式土器が出土している。少なくとも、この時期の生活面が存在し、さらにその後砂壤土が堆積したことは確認できたものといえる。

中期前半は埋没河川右岸に認められるが、台地端部からやや離れた平坦部に特に遺物が集中する。土器型式では、小破片も多く含まれるもののそのほとんどが阿玉台1b式土器に該当するもので、時間的には極めて限定されるものといえる。

なお、この埋没河川両岸部では前期・中期前半および後半期の土器片が一部混在する状態もみられている。このことは、各時期における砂壤土層の堆積状態を否定するものではなく、この部分では埋没河川による影響を受けつつ砂壤土の堆積も進行した結果とみられる。細かな地形の変化、旧河川との関係など、部分的な影響を受けながら早期以降、中期中葉の間に堆積が終了したものと見える。

今回の調査では少なくとも3時期(早・前・中期)の埋没面が確認されたが、更に周辺の調査が進む中で、この砂壤土の形成および埋没面の確認、検討が行われるものと考えられる。この面をさらに砂壤土が覆い、その上面に中期後半(加曾利E3・E4式期)以降の縄文時代をはじめとする古墳・奈良・平安時代から中・近世に至る遺構・遺物が存在するのである。

中期後半期では、B区において遺物の集中部および住居状の遺構が認められた。それぞれ性格を確定し得ていないため、両者を縄文遺構として報告している。これ以外には陥穴が認められたのみで明確な遺構は存在せず、遺物が調査区全域にわたり粗密は

あるものの分布している。少なくとも、同期の集落の一端を担っていたであろうが、居住域としては利用されていない。

古墳時代では火災住居が一軒確認された。その他、周辺から特殊器台、紡錘車型石製品など破片ながら注目される遺物も出土している。

奈良・平安時代については、D区において住居が24軒確認されている。時期的には出土土器から8世紀後半から9世紀後半にわたるもので、住居および出土遺物とも良好な資料が得られている。なお同期に伴う生産域としての水田については確認されていない。

中・近世については特に注目される遺構は、A区・B区にわたり存在する方形区画を示すと考えられる溝の存在である。調査区内では溝の屈曲部は確認できていないが、検出された17号溝および41号溝を延長するとはほぼ方形の区画をもつことが推定される。出土遺物はほとんどなく、関連遺構も不明であり時期、その性格に確認は得られていない。

旧石器時代については、全域について試掘調査を行った結果、A区およびD区において散発的ながら石器の出土をみている。

以上がこの遺跡の概要となるが、詳細については以下の報告を参照願いたい。

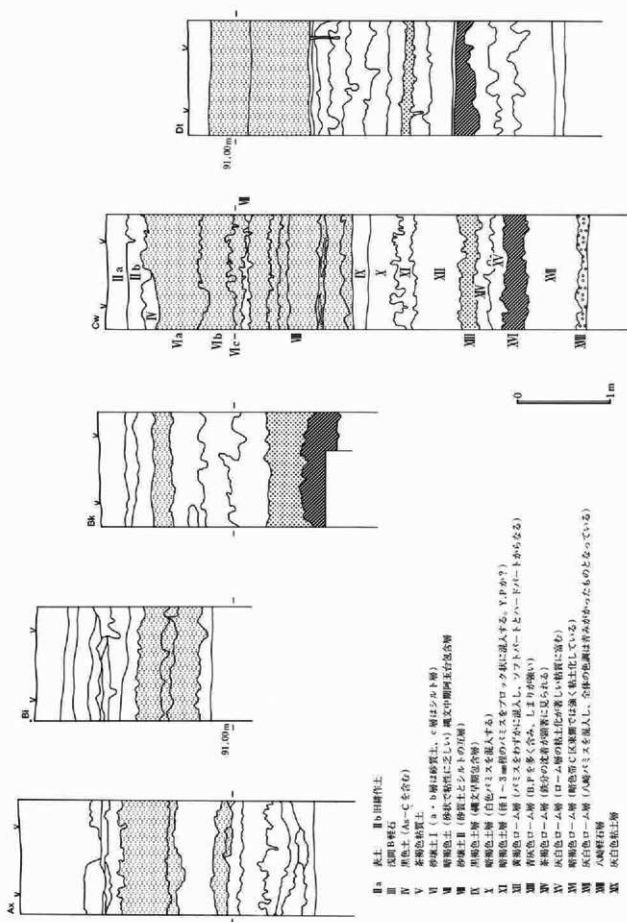
(2) 基本土層 (第5・6図)

遺跡は赤城山麓末端の台地に位置している。台地の幅は800mに及び、平坦な台地地形を呈している。今回の調査範囲は台地の東端から中央まで約400mである。その標高差は約1.6mで、既に、周辺地域では圃場整備が済んでいることもあり、ほとんど傾斜があることを感じさせない。遺跡周辺は一見平坦だが、実際には、旧河道の検出を含む凹凸に富む地形を呈していた。即ち、氾濫性堆積物(砂埃土)の堆積以前と以後では旧地形は極めて大きく相違していたのである。近年、赤城山麓の一角では同様な事例が認識され、その形成時期も特定されつつあり、浸食と堆積を繰り返す地形の変遷を生々しく伝えてい

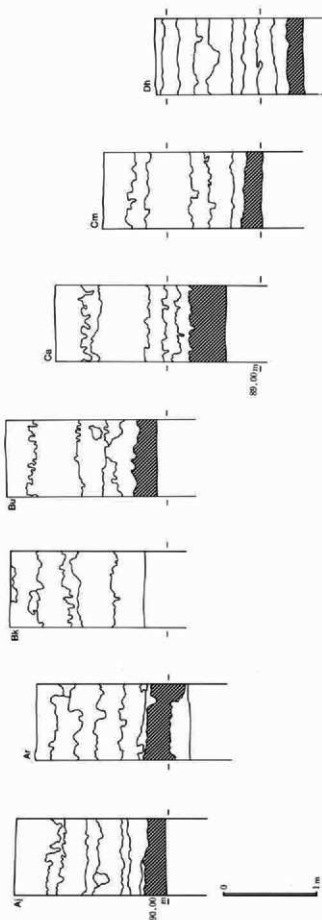
試料	1	2	3	4	5	6	7			8	9	10	
							純重量物組成	石	火山ガラス				粗 析 率
度	相対量比	絶対量	英	タイプ	絶対量	対象物(品数)	範 圍	主眼箇	最値値	(μm)	色	記 事	
Da-7 ①	C	縄文早期包含物(黒土)			-	-						アカホヤ大山原(Ak)不明(露下層?)	
+ ② (上部軽石質)	B	hy > au > mt (ho土)	r	-	pm	m	hy (30)	r1.704 -1.708	-	-	px 0.8	y wh	白赤軽石 (As-Sp) 一致 対比確実 (Ht-15kyr/Bp?)
+ ③ (下部砂質軽石)	B	hy > au > mt	r	-	-	-	hy (30)	r1.702 -1.707	-	-	0.2	y	灰黄色軽石 (As-Bp) 一致対比 O.K.
+ ④(17m) (粘土質ローム)	C	(以下AT+キック)			clear bw	++	gl	m1.499 -1.501		1.500	0.05 (glass)		ATglass含有様大 AT降下層率(21-22kyr, BP) (photoアリ)
+ ⑤(10m) (粘土質ベージュ)	C				-	+++	gl	1.499 -1.501		1.500	0.05		
+ ⑥(10m)	C				-	++	gl	1.499 -1.501		1.500	0.04		
+ ⑦(10m)	C	一地下水面-(35.8.9.)			-	+	gl	1.499 -1.501		1.500	0.04		
+ ⑧(10m)	C	やや褐色			-	+-	gl	1.499 -1.501		1.500	0.04		褐色帯 (岩屑?) 対比可
+ ⑨(10m)	C				-	-	-	-		-	-		

凡例 1. A (赤帯に良い) B (普通) C (悪い) 2. gl (ガラス) ho (軽石) hu (角閃石) au (普通軽石) mt (磁鉄鉱) 3. r (多い) m (普通) p (少ない) v (非常に) 4. ++ (多くある) + (ある) - (ない) 5. pm 型 (浮石質軽石) bw (ソフト) 6. 記号は3と同し

第1表 火山灰分析結果表



第5図 基本土層



第6図 ローム堆積状態

る。

調査の結果、一見平坦に見えた台地には現在遺跡の東側を流れる神沢川の旧流路が台地内部にも確認され、砂壤土の堆積以前と以後の地形は、大きく異なることが判明した。そのため、各地点毎に土層の堆積状態は微妙に相違している。第5・6図に各地点の土層図を示しておく。現在なお、確実に各々の土層を対比するのは困難だが、テフラの同定結果・出土した土器の型式分析から、土層の対比も可能な状況が生まれつつある。ここでは、C区東側の地点(第5図Cw)の土層の堆積状態を遺跡の基本土層とし、説明していきたい。

Ⅱa・Ⅱb層は、圃場整備以前の旧表土・耕作土である。As-B(Ⅲ層)・As-C(Ⅳ層)は、若干地形の低い地点で部分的に確認したのにすぎない。古墳時代以後の遺構はⅡ層を除去した段階(Ⅴ層の上面)で確認している。Ⅴ層・Ⅵ層は河川の氾濫に由来する氾濫性堆積物(砂壤土)である。Ⅴ層の上位部分より縄文中期後半段階の土器が出土する。当初、この二層は一括して把握していたものだが、A区・B区の調査が進展するにつれ、Ⅴ層に相当する層序から縄文前期後半と中期前半の遺構・遺物が確認され、また、氾濫性堆積物(砂壤土)の堆積した時期が縄文早期以後(Ⅸ層)、中期後半(Ⅵ層上面)以前に推定され、上記二点を根拠に堆積時期を含め、同層の存在を認定した。Ⅵ層は砂質だが、やや黒味が強く、上下二層の砂壤土と比べ、その土質は著しく異なる。Ⅸ層は黒褐色土で、この層序から縄文早期の土器や石器が出土した。層厚は約15cmを測る。以下、ロームの堆積状態は第1表の通り、赤城南麓一帯のロームの堆積の在り方と一致している。

2. 旧石器時代

試掘調査の結果、A区およびD区に当該期石器群の存在を確認した。両地点ともに石器は集中地点を形成することなく、ほぼ単独の状態出土している。A区に比べD区は土層の堆積状態が良好だが、水の影響でロームが粘土化している。A区出土の石器は暗色帯(Ⅻ層)から、D区出土の石器はAs-BPの直上(Ⅺ層)から出土しており、A・D両地点では石器の出土層位が相違している。

D区出土の石器(8図1)は、遺跡の東端部分から出土している(Dk-05G)。D区では石器の出土地点の周辺や他の地点からも石器が出土せず、また、下層からも石器が検出されなため、これ以上の調査は断念した。

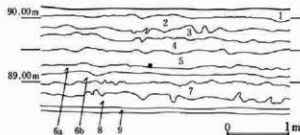
石器1)は、左右の側縁が平行する小形の剥片で、黒味の高い黒曜石を素材に用いている。背面を構成する剥離の方向は、剥片の剥離方向に一致しており、剥片端部には礫面を残す。打面は切断され、その形状は明確ではない。残存部分の状態から頭部調整の存在は確認できない。使用痕などは観察されない。

A区出土の石器(10図1-3)は、遺跡の西側部分から出土している(Aj-11G・Al-10G・Ao-11G)。石器が出土した地点は、A・B区の境界付近に確認した神沢川の旧流路から30mほど西側の地点で、台地の東側斜面に相当する。調査区内には、これ以上の石器の分布は存在しないものの、周辺の地形からするなら、この周辺には石器を製作した地点や礫群・配石が展開する集落が存在している可能性がある。石器の分布状態は、東側の地点に砕片や礫が近接して出土する傾向が、この周辺にナイフ形石器や調整剥片、形状の良い剥片が出土する傾向が指摘されよう。出土した石器の内訳は、ナイフ形石器1点・剥片2点・砕片2点・礫1点である。

1は横長剥片を縦位に用いたナイフ形石器である。左右の側縁に調整加工を施し、石器を作出している。左側縁では剥片を剥離する段階で使用した打面から、右側縁では剥片の表裏両面から、それぞれ

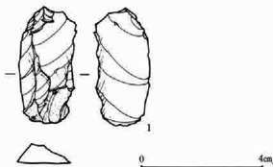
調整加工を施す。前者の加工は浅く平坦で、打面調整に伴う頭部調整とは確実に相違する。後者の加工は石器の基部に近い部分では裏面から表面に、先端では表面から裏面に調整加工を施す。石器の先端を欠損している。黒色安山岩製。

2は幅広の剥片で、平坦な礫面を打面に剥離している。背面を構成する剥離の方向は剥片の剥離方向に概ね一致する。ただ、剥片端部には90°方向の違



- 1 暗灰褐色土 ローム粒子・白色バミス混入 早期遺物位含層
- 2 暗灰褐色土 ローム粒子・白色バミスを多く混入
- 3 明褐色ローム層 As-YFの純層
- 4 黄褐色軟質ローム層
- 5 黄褐色硬質ローム層 As-SPを含む(基本土層Ⅺ層)
- 6a 灰褐色ローム層 As-BP混入
- 6b 青灰色ローム層 As-BPの純層(基本土層Ⅻ層)
- 7 暗黄褐色硬質ローム層
- 8 灰白色ローム層 粘性に富む
- 9 暗褐色ローム層 上位部分にATを含む

第7図 石器の分布と出土層位(D区)

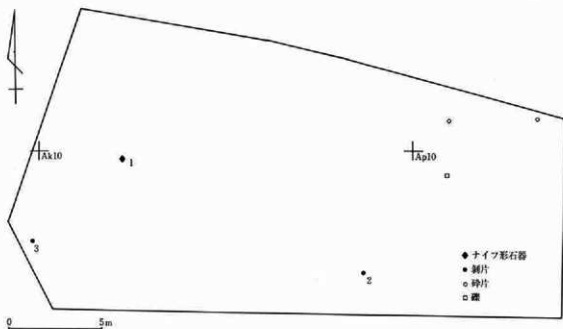


第8図 D区出土の石器

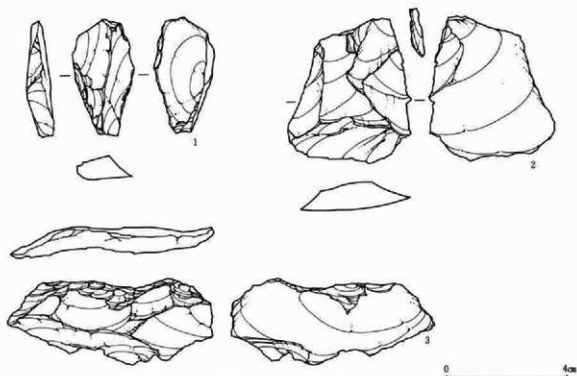
う広い剥離面が存在しており、板状の石核から剥離している可能性が強い。黒色安山岩製。

3は幅広の横長剥片で、剥片端部を一部欠損している。剥片の打面付近には「潰れ」が顕著で、その状

態は打製石斧に特徴的な「潰れ」に一致する可能性が強い。黒色頁岩製。



第9図 石器の分布 (A区)



第10図 A区出土の石器

3. 縄文時代

(1) 早期

a 調査の方法

発掘調査については、上武道路建設に伴う神沢川橋梁工事計画とも関連し、同河川に接する部分から着手している。調査区でいえばD区の調査を先行させ、引き続きA区まで実施する調査工程となった。

D区では表土下にあたる砂壤土上面に奈良・平安時代を中心とする住居群が存在し、さらに溝群・土坑などが確認され、縄文土器・石器類も多く出土している。ここで得られた縄文土器は中期加曽利E式後半期のものが目立ち、この遺跡南側に位置する荒砥二之塚遺跡との関連から同期の遺構の検出を想定し調査を進めたが、遺構の確認はなかった。この砂壤土上面における調査が終了した段階で砂壤土下、縄文早期面の調査に移行している。

堆積する砂壤土層は厚く、約2m前後の層厚をもつため重機により同層の掘削を行なっている。砂壤土層はその層中に細砂層・粗砂層・砂礫層などが水平堆積する互層状態がみられ、一気に形成されたものではなく、複数回にわたり堆積したものと観察された。このことはその後A区・B区における砂壤土層の調査により確認された前期および中期前半の埋没面の存在を想定させるが、この段階での調査所見ではその事実は得られていなかった。

縄文時代早期の文化層にあたる黒色土層(第Ⅴ層)はこのような砂壤土層により埋没しているが、その直上面は層厚10cm程度のシルト質の細砂層が一様に覆っている。

調査に際しては湧出水が多く、自然流出の状態にしておくと調査面が冠水してしまうほどの水量であり、連続的な排水を必要とする状態であった。調査当初、すでに一部において早期遺物が出土したため、その分布状況のある程度把握した段階で排水溝の設置を考えていたが、先行して排水を行わなければ調査進行に支障を生じる状況となった。このような事情からD区北壁側に平行して主排水溝を設け、調

査区内にも状況に応じて排水溝を作るようになった。このことにより湧水対策は講じられ、調査を進められたものの、遺物の集中する部分にも排水溝を作る結果となり、おそらくこの部分の遺物については失ってしまったものとみられる。この点は調査時にも担当者間で留意していたことであり、検出面に極力影響がないように排水を行うよう努力したが、今回についてはこのような調査方法となったことをあわせて報告しておかなければならない。

この面で出土した遺物類は全て位置・標高を記録している。その出土状況は第11図に示す通りであり、数ヶ所に集中地点が認められると共に、焼土遺構も4ヶ所存在する。これ以外に遺構はみられない。

このような遺物分布をみると、調査区北側へは確実に広がりをもつものとみられるが、西および東側については地形的にも限定され、南側については地形がゆるやかに傾斜すると共に、遺物分布も希薄となる傾向が認められる。

また、この面の埋没状態であるが、直接被覆するシルト質の細砂層の存在、その上を水平堆積する砂壤土層のあり方からみて、継続的な堆積が行なわれながらも早期文化層を大きく破壊するような営力は加わらなかったように観察された。このことは、遺物類が調査区内の高位部に集中する点、および焼土遺構の検出状態も含めて、旧地表面が比較的ゆるやかに覆われ埋没した結果とみられ、当時の生活面が良好な状態で保存されているものと考えておきたい。

出土遺物は土器片314点・石器類365点が出土記録された。土器片はほとんどが小破片であり、器形の復元し得た個体は1個体のみである。また、形式の特定できる文様をもつ資料も少なく、押型土器・沈線文系土器等の土器片が含まれている。

調査中は同文化層の埋没状態とも関連し、単一時期(単一形式)の生活面との印象が強かったが、遺物整理を経過する中で土器については複数の型式が含まれるものと判断された。ただ、時間的にみれば早期沈線文系土器群の中に位置づけることができる資料といえよう。

以下、土器・石器の分布状況および遺物の概要について報告していきたい。

b 遺物分布

D区砂埃土層下における縄文時代早期の遺物分布の状況は第11図に示す通りである。

遺物確認面は北西から南東方向にむけゆるやかに傾斜し、東方の神沢川に接する部分は急傾斜となっている。遺物は標高90.00mから90.30mにかかるこの緩傾斜面に分布する。この部分は地形的に微妙な変化をもち、遺物分布と密接な関係が認められる。

土器の分布状態をみると大きく二つの集中域が存在（Dg-Dkライン、Dk-Dyライン）するが、両分布域とも調査区内では高位部平坦面にあたっている。両分布域の間は地形的にはわずかに低くなり、分布域をより明瞭にしている。

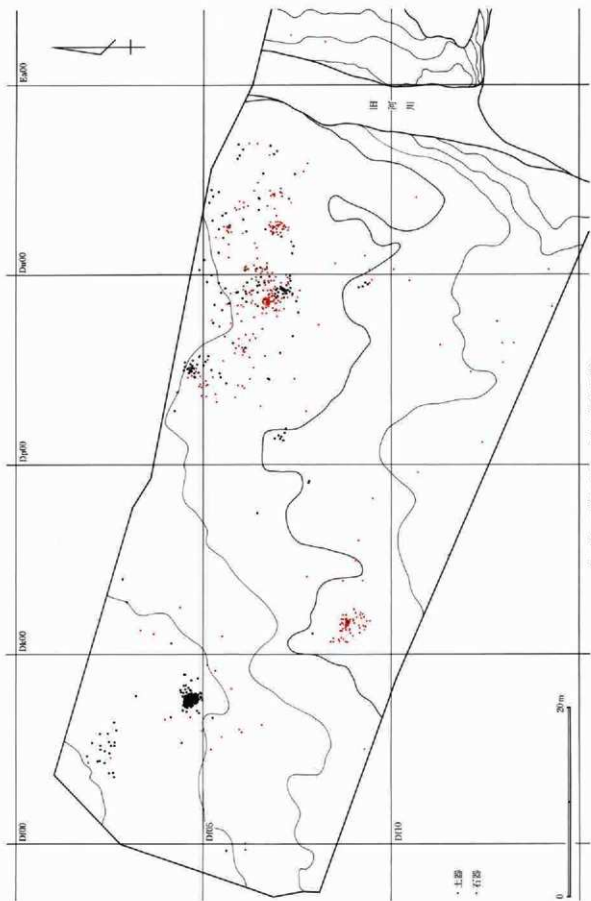
土器分布の中心はこのうちDk-Dyラインにあたる分布域であり、台地縁辺部に広範囲に認められ、さらに北側調査区外へ広がりをもっている。この部分には主として条痕文を施す土器が分布し、沈線文、および押型文土器も含まれている。分布域はこれら各種土器によって構成されるが、沈線文および押型文土器は同分布域内でもより東側に偏在する傾向が認められる。出土する土器片は小破片が大半を占め、器形を復元し得るような資料はない。またこの部分には炉跡状の焼土痕が2ヶ所、炭化物の集中散布が1ヶ所存在する。

Dg-Dkラインにおける土器の分布域には、さらに2ヶ所の集中部が含まれる。Di-04Gを中心とした密集する分布域と、Dg-02G周辺のやや散漫な分布域である。Di-04G付近の密集分布はおおよそ50cm程度の範囲に土器片80数点が集中出土するもので、これは資料整理の結果1個体分の土器（第18図1）が一括出土したことが確認された。他種土器をほとんど含まないが、近接して熱糸文系土器が1点出土している。Dg-02G周辺は沈線文をもつ土器、無文土器等を主として、条痕文をもつ土器も含まれる。この部分には焼土痕が2ヶ所認められる。

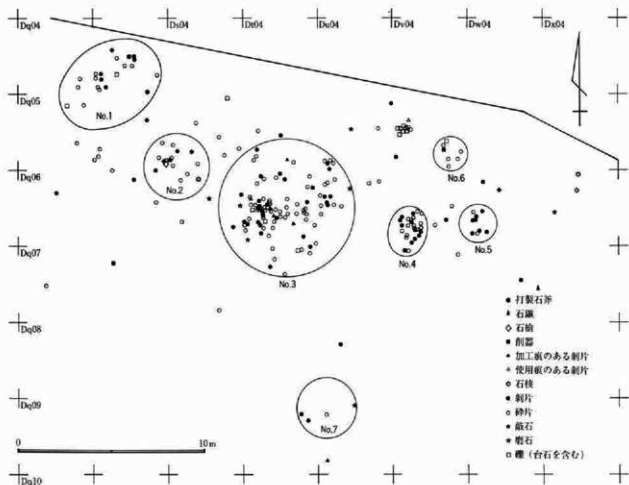
石器の分布は上述した土器の分布傾向に概ね一致する。その傾向とはD区中央付近に存在した浅い凹地を境に、分布域が分断されるという傾向であり、また、西側の微高地および東側の微高地には、それぞれ土器や石器が集中して出土する地点と、散漫に出土する地点の両者が確認される傾向である。そしてさらに、石器の分布域と土器の分布域が相互に重複分布する傾向が指摘され、また一方では、土器と石器の集中地点は各々の分布域を避け、分布する傾向が同時に指摘される。石器は氾濫性の堆積物である砂埃土の直下・直層に面的に出土している。互層自体の層厚が薄く、そのため、石器が面的に検出されるのかもしれない。とはいえ、焼土遺構が存在し、それぞれ土層は整合して堆積していること、また、接合資料も豊富に存在することから、旧地形を砂埃土が直接そのままバックしている、と断定しておきたい。以上の理由から、ここでは石器分布を積極的に評価し、各々の石器が集中出土する地点を「集中地点」と捉え、記述していきたい。

西側分布域 D区中央の凹地を境に、これより西側の斜面に分布する。その分布状態は、Dk-08Gを中心に石器が集中する地点1ヶ所（集中地点No.8）と、Dh・Di・Dj-04・05・06G（集中地点No.9）、およびDi・Dm-07・08G（集中地点No.10）付近に石器が散漫に分布する地点2ヶ所からなる。西側分布域には、約80点の石器が出土している。前者の集中地点（No.8）には剥片や破片が多い。後者の地点には石鏃や削器など完成した状態の石器が多く出土しており、特に、集中地点No.9の分布は尖底縄文の分布に一致する。凹地から西側の分布域では、集石遺構は検出されていない。

東側分布域 D区中央の凹地を境に、これより東側の尾根上に分布している。その分布は調査区外へ確実に並び、石器の分布は連続と続き、現状では弧状に分布しているように見える。当初、この地点で試掘調査を開始したため、また当時、夏季で水位も高く、排水作業と平行して調査した。そのため、一部遺物を遺失している可能性が高い。



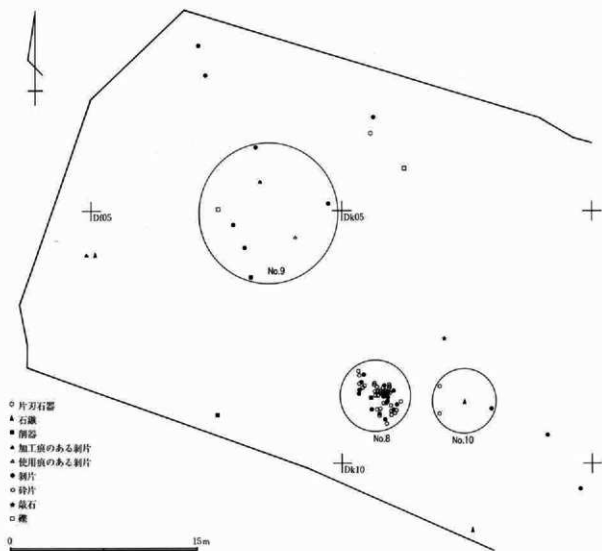
第11図 石器と土器の分布（縄文中期）



第12図 石器の分布（東側集中区）

No	器種													合計	
	石鏃	石槍	削器	加工痕 有石器	使用痕 有石器	石核	打 石	製 斧	片 石器	剥片	砕片	敲石	磨石		台石 (含礫)
1							2		7	12				2	23
2		1				1				5	8				15
3				2	1				31	64		3	3		104
4			1						10	15					26
5									7	2					9
6			1								5			1	7
7									2	1	1				4
外	4		1	1	2	2		1	13	21	2	2		12	61
合計	4	1	3	3	3	3	2	1	75	128	3	5		18	249

第2表 石器の組成（D区東側出土石器）



第13図 石器の分布（西側集中区）

No	器種											合計			
	石鏃	石槍	削器	加工痕 有石器	使用痕 有石器	石核	打 石	製 斧	片 刃 器	剥片	砕片		礫石	磨石	台石 (含礫)
8			1						16	37					54
9			1	1	1				4					1	8
10	1								1	2					4
外	2		2	1				1	5		1			1	13
合計	3		4	2	1			1	26	39	1			2	79

第3表 石器の組成（D区西側出土石器）

石器の分布状態は南側ではより散漫な分布状態を示し、石器の集中地点は認定できない。一方、北側では連続と石器が分布しており、7ヶ所の石器集中地点(No. 1～No. 7)を認定した。東側集中地点には、約250点の石器が出土している。どの集中地点にも剥片や破片を主体に出土しており、接合資料も多く、定形石器の出土は概して少ない。全般に石器製作の様相を示す一方で、焼土や炭化物の分布域も存在し、また、台石や磨石も多く、居住空間に似た様相を同時に持つ。凹地から東側では集石遺構は検出されていない。

なお、Ds-05Gを中心に出土した磨石(第29図3、接合資料-33)は、割れ面の状態が通常礫群を構成する割れ礫と同様な割れ面を示しており、さらに、周辺で焼土が存在していることから、熱で破損した可能性が高い。また、Dv-05Gに出土した台石(第29図6、接合資料-34)は、割れ面の状態は上述の磨石とは違い、かつ、形状も通常礫群を構成する礫と比べ著しく大きく、自然要因で破損した可能性が高い。

集中地点No. 1(第14図)

Dq・Dr-04・05Gに位置する。東側の分布域の最も西側に検出され、長径5m・短径3mの範囲に分布している。集中地点No. 2とは約2mの距離を隔て隣接している。石器の分布密度は低く、集中性を欠き、散漫な分布状態を示している。石器は砂埃土(泥濘性の堆積物)直下・Ⅴ層から出土しており、約15cmの高低差がある。

総計23点の石器が出土している。打製石斧2点・剥片7点・破片12点の他に礫2点が組成する。石器石材は細粒安山岩2点(打製石斧)・粗粒安山岩2点(礫)を除き、剥片や破片は黒色頁岩を使用している。接合資料3例が確認され、このうち1例(接合資料-15、第31図参照)には打製石斧の調整加工に類似した特徴を示す接合例がある。

集中地点No. 2(第14図)

Dr・Ds-05Gを主体に分布し、Dr・Ds-06Gにも少量分布している。集中地点No. 1とNo. 3の中間に位置する。径3mの範囲に分布するほか、周辺に散漫な状態で石器が分布している。石器の分布密度は低く、集中性を欠く。石器はⅤ層に出土しており、約10cmの高低差がある。

総計15点の石器が出土しており、石槍および石核が各1点の他に剥片5点・破片8点が組成する。定形石器の組成する割合は低い。石器石材は黒色頁岩が14点と主体を占め、このほかには細粒安山岩が1点出土しただけである。接合資料3例が確認され、集中地点内部で接合するもの1例(接合資料-26)、他の集中地点と接合するもの2例(接合資料-2・11)が存在する。

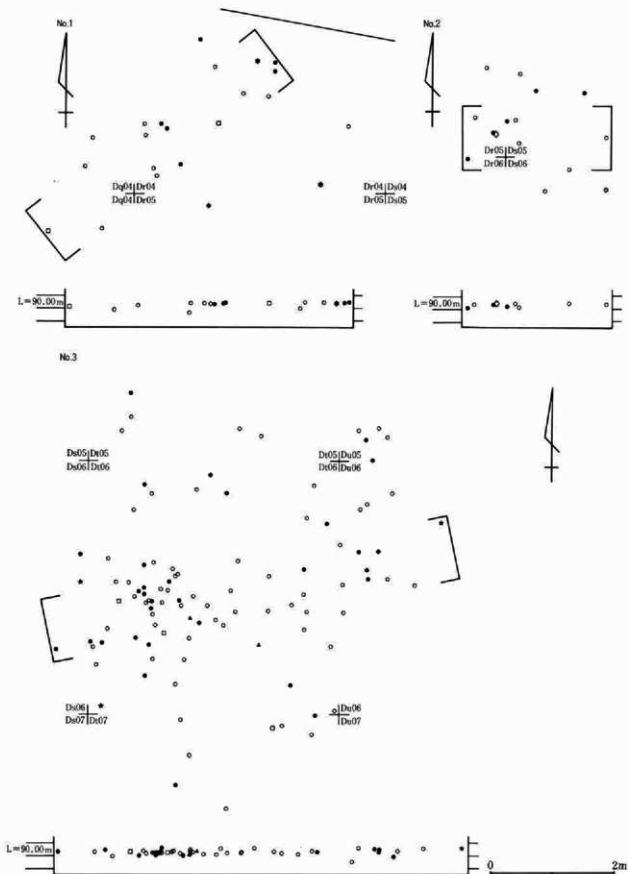
集中地点No. 3(第14図)

Dt-06Gを中心に、Ds-Du-05-07Gに位置する。東側集中地点の中央付近に検出され、最も広範囲に分布域を持つ。石器は7m×7mの範囲に分布しており、分布密度も高く、石器の集中性もある。石器は砂埃土(泥濘性の堆積物)の直下・Ⅴ層下位に出土しており、約25cmの高低差がある。試掘調査の段階で、排水処理の溝を設定したため、その全容は不明確である。

総計104点の石器が出土しており、加工痕のある剥片2点・使用痕のある剥片1点・剥片31点・破片64点の他に、磨石や礫が組成している。石器石材は黒色頁岩が主体で全体の80%を占め、このほか細粒安山岩や粗粒安山岩を使用している。接合資料は13例が確認され、周辺の集中地点と頻繁な接合関係を持つ。

集中地点No. 4(第15図)

Dv-06Gを中心に分布し、集中地点No. 3の東側に位置する。排水処理の溝で全容は不明だが、長径3m・短径2mの範囲に分布している。その分布密度は高く、良く集中出土している。石器はⅤ層に出



第14图 D区 縄文早期 石器集中地点 No. 1~3

土しており、約15cmの高低差を持つ。

総計26点が出土しており、削器1点の他に、剥片10点・砕片15点が組成する。石器石材は黒色頁岩を主体に、砂岩4点・細粒安山岩1点からなる。接合資料は4例が確認され、他の集中地点と接合関係を有す。

集中地点No. 5 (第15図)

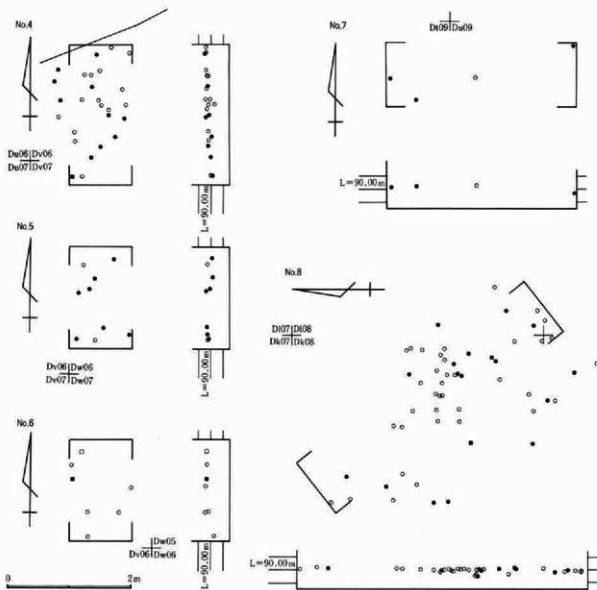
Dw-06Gに位置する。東側の集中地点の最も東に検出され、径1.5mほどの範囲に分布している。石器の分布状態は集中性に欠け、やや散漫に分布す

る傾向が指摘されよう。石器は1層に出土しており、約15cmの高低差がある。

総計9点が出土しており、剥片7点・砕片2点が組成する。石材は黒色頁岩を主体に、黒色安山岩・砂岩が各1点からなる。接合資料は3例が確認され、他の集中地点と接合関係を有す。

集中地点No. 6 (第15図)

Dv-05Gに分布し、集中地点No. 4・No. 5の北側に位置する。排水処理の溝で全容は不明だが、径1.5mほどの範囲に分布している。石器の分布密度は低



第15図 石器の分布 (集中地点No. 4～8)

く、集中性を欠く。石器はⅡ層に出土しており、約15cmの高低差がある。

総計7点の石器が出土しており、削器や台石(各1点)の他に碎片5点が組成する。石器石材は黒色頁岩が主体で、台石には粗粒安山岩を使用している。接合資料は1例(接合資料-25)のみ確認され、この接合資料は57mの距離を隔て、西側集中地点に出土した石器に接合する。

集中地点No. 7(第15図)

Dt・Du-09Gに位置する。東側集中地点の中では、最も南側に検出され、径3mほどの範囲に分布している。集中地点No. 1-No. 6が隣接して位置するのに対し、独立的である。石器の分布密度は低く、集中性を欠く。石器はⅡ層に出土しており、約15cmの高低差がある。

総計4点が出土しており、敲石1点の他に、剥片2点・碎片1点が組成する。粗粒安山岩を敲石に、変質玄武岩を剥片に、黒色頁岩を碎片に使用する。接合資料は確認されない。

集中地点No. 8(第15図)

Dk-08Gを中心に分布するほか、周辺にも若干の石器が分布している。西側の集中地で、最も明確に石器が集中しており、散漫に分布する他の集中地点(No. 9・No. 10)とは対照的である。2mの距離を隔て集中地点No. 10に、8mの距離を隔て集中地点No. 9に隣接している。出土資料は打製石斧の調整剥片を主体に、剥片や碎片を多く組成する特徴が指摘されよう。「廃棄か、遺棄か」ということであれば、同一の母岩が他の地点にはほとんどなく、石器製作段階の姿が明確でもあることから、「遺棄」の状態に近い。石器はⅡ層に出土しており、約15cmの高低差がある。

総計54点が出土しており、剥片(16点)や碎片(37点)の他に、削器1点が組成する。石器石材は黒色頁岩(25点)や、打製石斧に使用する傾度の高い細粒安山岩(23点)や変質玄武岩などからなる。接合資料

は、総て集中地点の内部で接合(接合資料-3-6・9)する。

集中地点No. 9(第13図)

Dh-Dj-04-06Gに位置する。尖底縄文の分布の周辺に分布しており、その分布範囲は広く、直径11mの範囲に及ぶ。石器の分布密度は低く、集中した状態にはない。石器はⅡ層に出土しており、約15cmの高低差がある。石器は散漫な状態で広範囲に分布するため、ここでは、個別の図面を用意していない。第13図を参照されたい。

総計8点が出土しており、削器や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片(各1点出土)など、完成した状態の石器が多く出土する傾向が指摘されよう。石器石材は黒色頁岩(4点)を最も多く使用している。石器の接合は確認されていない。

集中地点No. 10(第13図)

Di・Dm-08Gに位置する。西側の集中地点で最も東側に検出され、径5mの範囲に分布している。石器の分布密度は低く、集中性を欠く。石器はⅡ層に出土しており、約15cmの高低差がある。石器は散漫な状態で広範囲に分布するため、ここでは、個別の図面を用意していない。第13図を参照されたい。

総計4点が出土しており、石鏃1点・剥片1点・碎片2点が組成する。石器石材は石鏃が黒色頁岩を、剥片が頁岩を使用している。なお、剥片に使用した頁岩と同一母岩は存在しないようで、遺跡外部から搬入した可能性が強い。石器の組成内容や出土状態は、集中地点No. 9に類似している。

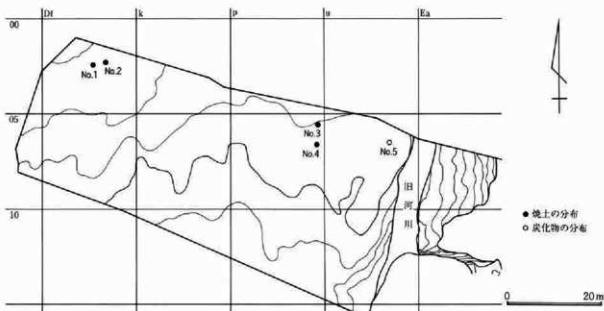
c 遺構 (第16・17図)

遺構の確認調査を行った結果、焼土遺構(弁状遺構)4ヶ所、炭化物分布地点1ヶ所が認められた。いずれも砂壤土層下の黒色土層面で検出されたものであり、早期の遺物出土層と同一面であることから、同期に伴う遺構と考えられる。また位置も遺物の分布域と一致しており、当時の生活域の一端を担っていたものとみられる。

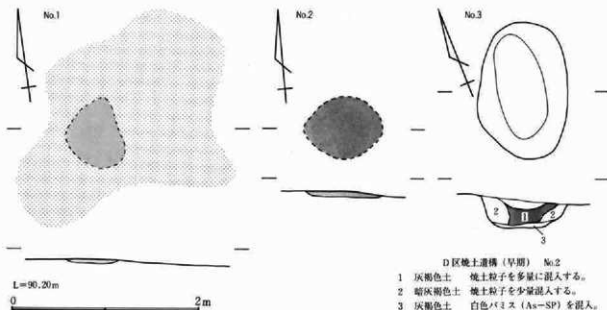
No. 1 焼土遺構 径60cm程度の不整形プランを呈し、深さ4cmで焼土ブロックが堆積する。周辺には炭化物の散布が認められる。

No. 2 焼土遺構 75×45cmの楕円形プランを呈し、深さ15cmの土坑で底部には灰、炭化物がみられ、その上層に焼土が堆積する。

No. 3 焼土遺構 径80cm、深さ7cmの浅い土坑で、焼土ブロックを多量に含んでいる。



第16図 D区縄文早期焼土及び炭化物の分布



第17図 焼土及び炭化物

d 縄文土器 (第18・19図 PL58・59)

D区砂埃土下の調査により総数679点の遺物類を取り上げている。この内土器は314点を数えていたが、調査後もしくは遺物整理の段階で縄文土器として認定し得たのは228点となった。これ以外については土塊のほか極小片および遺失が含まれている。

ここで報告する土器類はこの228点を対象としたものであることを付記しておきたい。

ここに含まれる土器群は全て第1群早期に含まれるが、以下文様を主として分類していきたい。

得られた土器類は少片がほとんどであるため、分類に際しては文様をはじめとして器厚、胎土等により行っている。分類された土器は次の通りである。

第1類 (第19図1)

1点のみ出土している。口唇部は外側に面をもち、やや肥厚する。熱糸文はRが巻かれるが、条間隔が開ききみである。輪荷原式段階に位置づけられよう。

第2類 (第18図1)

器形復元し得る唯一の土器である。水平口縁の尖底深鉢であり、1ヶ所に集中して出土している。破片点数は100点近くに及ぶ。口縁部はわずかに内湾きみで、頸部付近に低い段が認められる。胴部はふくらみきみで尖底部へ続く。器厚は1cm程度で尖底部も特に厚くならない。整形は良好で、内面は平滑面を形成している。文様は縄文、絡条体が器全面に施される。文様構成は模式図にも示したが、口縁部および底部は無文帯となり、縄文、絡条体は交互に横位施文され、5段構成となっている。施される縄文は不明瞭であり、原体も判別しにくいものであるが、LRが用いられている。沈線状に斜行する文様はおそらく絡条体を原体にしたものと見られる。節が観察される部分と沈線状に連続する部分が認められることから、絡条体を引きずりきみに施文したことが考えられる。この種の土器はこの1個体のみである。類例が少なく時期が問題となろうが、器形から判断して三戸式段階が考えられる。

第3類 (第19図)

沈線文の施される土器を本類とする。次の5種が

認められる。

a種(2) 口唇部は外削ぎ状で、横位沈線文が施される。沈線文は深く明瞭である。1点のみ出土。

b種(3) 口縁部はやや内湾きみで口唇部は尖る。沈線文は細く幅1mmで施文は明瞭。格子状の構成を加える。器厚は5mm。1点のみ出土。

c種(9) 幅3～4mmの太沈線が縦位に加えられ。器厚も1cmと厚手である。1点のみ出土。

d種(4・5) 不明瞭な沈線が横位に観察される。器厚7mm程度で、整形は良好。10点出土している。

e種(6～8・10) 沈線はやや太めで幅3～4mmで格子状構成もみられる。器厚はやや厚手で7mm～1cmで胎土に繊維を含む可能性がある。5点出土。

第4類 (第19図)

条痕の施される土器を本類とする。次の10種が認められる。本類が出土土器の主体を占める。

a種(13・14・16・17) 器厚4mm程度で胎土は緻密。条痕の間隔は狭い。33点出土している。

b種(20) 器厚6mm程度で胎土は緻密。条痕は細くやや不明瞭。20点出土。

c種(21) 器厚6mm程度で胎土は緻密で硬質。条痕は細く浅い。輝石粒が目立つ。1点出土。

d種(18・22～25) 器厚8mm前後。器壁に空洞が認められ含繊維の可能性。条痕は深く明瞭。5点。

e種(27) 器厚8mm程度。器壁に空洞が認められ含繊維の可能性がある。条痕は細く浅い。3点出土。

f種(28・29) 器厚1cm程度。器壁に空洞が認められ含繊維の可能性。条痕はやや太目。2点出土。

g種(30・31) 器厚1cm程度。器壁に空洞があり含繊維の可能性。条痕は浅く不明瞭。2点出土。

h種(11・12・15) 器厚5mm前後で胎土は緻密。条痕の間隔は狭く明瞭。32点出土。

i種(18・19) 器厚8mm程度。器壁に空洞があり含繊維の可能性。条痕は細く明瞭。17点出土。

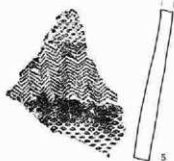
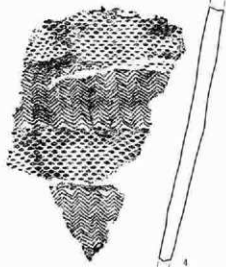
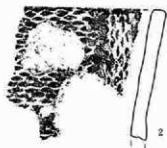
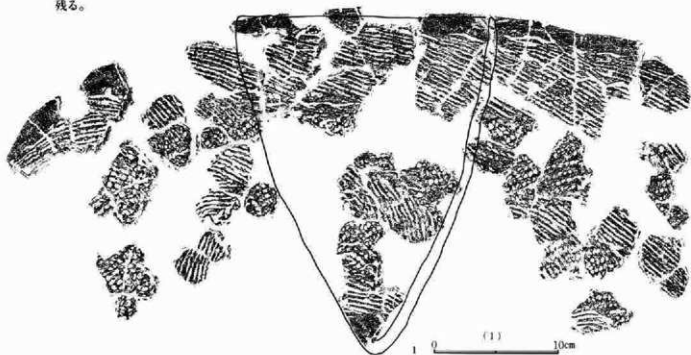
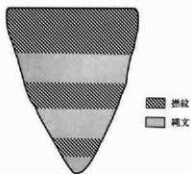
j種(26) 器厚8mm程度で輝石粒が目立つ。条痕は浅く不明瞭。1点出土。

第5類 (第18図2～6)

押型文土器である。2・3は楕円押型文。4～6

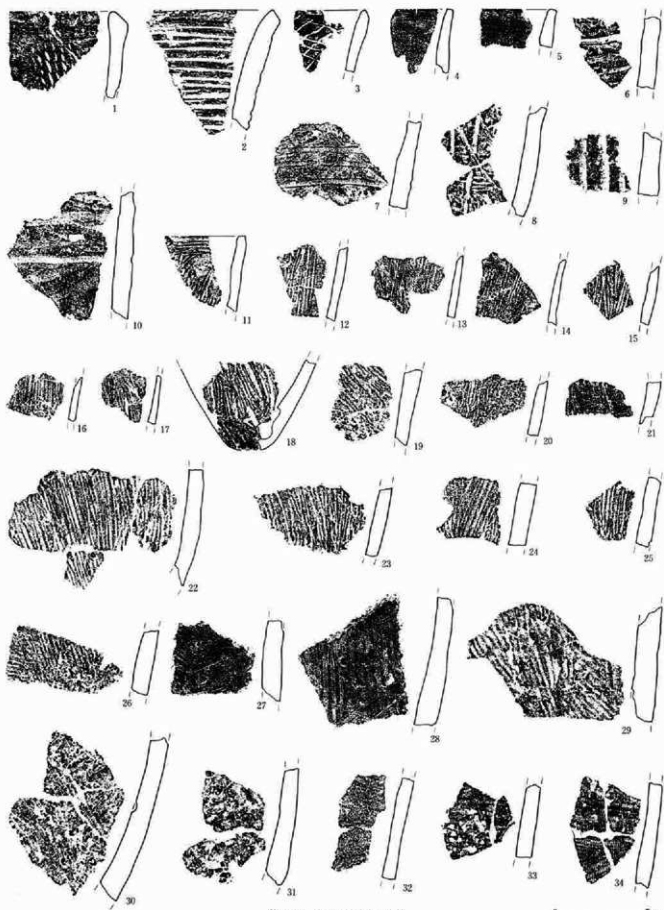
は楕円、山形の交互横位施文が認められる。2は口縁部で横位、縦位施文がみられる。4～6は文様、胎土が類似し同一個体とみられる。押型文は楕円、山形とも2cmを1単位とし直径6.4mm程度の棒状工具に1周4刻目を加えたものと考えられる。5点。
 第6類 (第19図32～34)

無文土器を本類とする。計4点出土している。器厚は7mm前後で胎土は緻密。器面は平滑で整形痕が残る。



第18図 縄文土器 (早期)

0 (2-6) 5cm



第19図 縄文土器（早期）

0 5cm

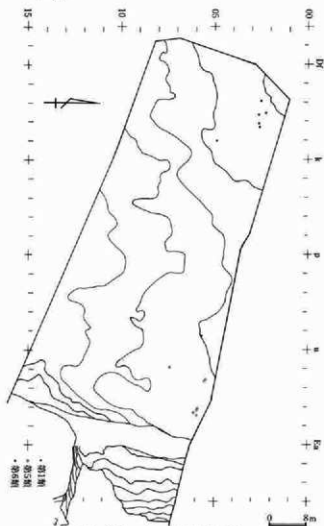
第1類・5類・6類土器の分布(第20図)

第1類燃糸文土器、第5類押型文土器、第6類無文土器の分布を示している。

第1類は1点のみでありD区西側Di-04Gに分布する。

第5類はD区東側に主として分布する。分布地点をみるとDv-05G・Du-07GおよびDx-05G付近と3ヶ所に分布が認められるが、この3ヶ所はそれぞれ個体を異にした押型文土器が出土している。Dv-05Gは第18図3、Du-07Gは同図2、Dx-05G付近は同図4～6が該当する。

第6類はD区西側に主として分布し、第3類d種と共合した分布を示す。他地点では東側Dx-05Gに1点認められるのみであり、分布はやはり偏在している。

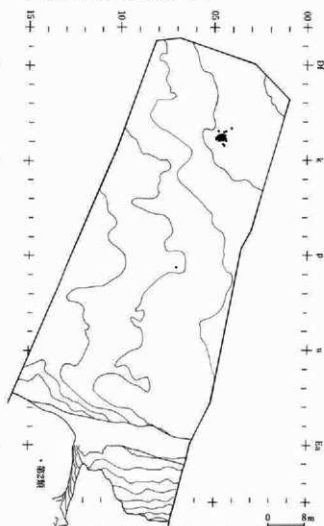


第20図 第1・5・6類土器の分布

第2類土器の分布(第21図)

第2類土器は器形復元し得た1個体のみが該当する。

出土地点はD区西側にあたるDi-04Gを主として密集出土している。破片総数は100点近くを数え、ほぼ完形もしくは完形に近い状態の土器であったと考えられる。出土状態はかなり細かく破砕しており小破片が大半を占め、この土器が本来どのような状態でこの地点に遺存していたかは把握されていない。しかし、他地点では集中部分から30m東側に1点出土しているのみで、集中分布域についてはほとんど攪乱を受けておらず、当初の位置を保っているものと考えられる。この集中部分には他種土器はほとんど含まないが、1点のみ出土した第1類燃糸文土器がこの部分から出土している。



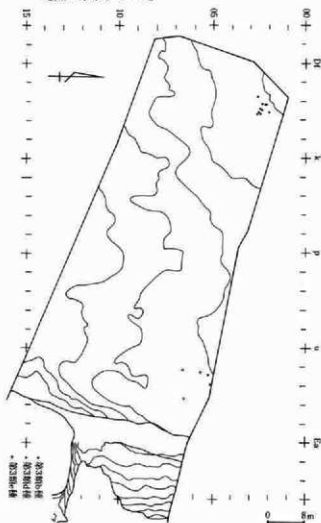
第21図 第2類土器の分布

第3類 b・d・e 種土器の分布 (第22図)

3類沈線文を施す土器の分布を示している。なお、a種、c種については分布地点が確定できなかったため除外している。

d種はDh-02G付近に集中して分布が確認され、他地点には認められない。このような分布状態を見ると、破片間の接合関係は認められていないが同一個体がかかり含まれている可能性もあろう。また、この分布域には、第20図に示すように第6類とした無文土器もまとまった分布をしている。分布からみる限り両種は密接な関連をもつように考えられる。

e種はDv・w-05・06G付近に分布する。他地点には認められず、量は少ないが分布の偏差性は認められる。b種は1点のみであるが、e種に近接した地点に分布している。



第22図 第3類土器の分布

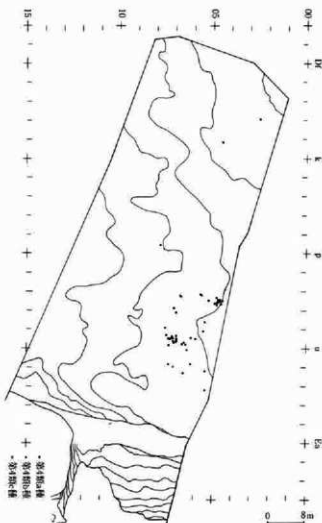
第4類 a・b・c 種土器の分布 (第23図)

第4類条痕文を施す土器の分布を示している。

a種はD区東側に主として分布する。分布状態をみるとDr-04G付近およびDt-06G付近の2ヶ所に集中域が認められ、その周辺に数片点在している。他地点ではD区西側に1点認められるのみである。

b種もD区東側に主として分布域をもつ。特に集中する部分はなくやや散漫な分布状態を示しているが、他地点にはD区西側に1点分布するのみであり分布の偏差性は明瞭である。

c種は1点のみ認められているが、D区東側にあたるE区斜面部に分布している。



第23図 第4類 a-c 種の分布

第4類 d・e・f 種土器の分布 (第24図)

第4類条痕文を施す土器の分布を示している。これら各種土器は出土量も少なく、分布もやや散漫な傾向を示すが、主としてD区東側に分布している。

d種は5点出土しているが、東側分布域に点在し、D区中央付近の低位部にも1点出土している。

e種は3点出土し、やはり東側分布域に点在しているがd種よりやや東側に広がりをもっている。また、中央付近の低位部にも1点d種に接して出土している。

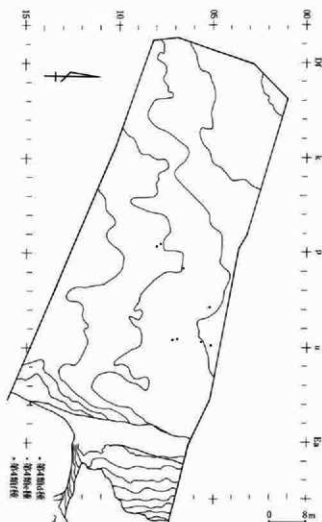
f種は1点のみの出土であり、東側Dw-05Gに分布する。

第4類 g・h・i 種土器の分布 (第25図)

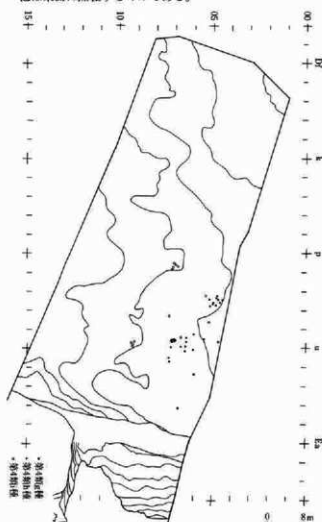
g種は2点のみ出土している。D区東側に分布し点に在している。

h種は土器自体はa種と類似した点も認められたが、器厚において本種のほうがやや厚手である点をもって分類している。D区東側に主として分布するが3ヶ所に集中地点が認められる。Dr-04G付近、Dt-06G付近、Dt-07G付近に集中する傾向があり、第4類a種と類似する分布状態を示している。他地点ではD区西側に1点分布が認められる。

i種も東側に主として分布するが、h種をはじめとして他種とは分布域を異にしている。集中分布域がDp-07G付近、Dt-09G付近の2ヶ所に認められるが、両地点は他種の分布が全くみられない。その他は東側に点在するのみである。



第24図 第4類 d～f種の分布



第25図 第4類 g～i種の分布

e 石器

出土した石器は合計328点で、石鏃や石槍などの狩猟具が8点、打製石斧が2点(接合資料)、削器や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片が16点、片刃石器が2点出土している。このほか、磨石や敲石など9点が組成しており、全般に良好な石器組成を示す。

石器石材は黒色頁岩が主体で、全体の6割を占める。このほかには黒色安山岩や細粒安山岩も多く用いる傾向が指摘されよう(第4表)。また、石器器種と石材の関係では、石鏃には黒曜石などの珪化の顕著な石材を多用する傾向、打製石斧や片刃石器などには黒色頁岩や細粒安山岩や変質玄武岩の「結り」の強い性質を持つ石材を使用する傾向が指摘され、最も選択されることが多い石材が、黒色頁岩であるということも含め、赤城山南麓や赤城山西麓の遺跡と同様な傾向にあることがここでも指摘されよう(第5・6表1・2)。石器石材と器種間の上述した傾向は、すでに、勝保沢中ノ山遺跡Ⅰの報告の中で指摘している。

石器組成 (328点)

①	剥片 30.8%	片刃石器 50.9%	②
---	-------------	---------------	---

①・石鏃	2.1%	・石槍	0.3%
・打製石斧	0.6%	・片刃石器	0.6%
・削器	2.1%	・加工痕ある剥片	1.5%
・使用痕ある剥片	1.2%	・石核	0.9%
②・敲石	1.2%	・磨石	1.5%
・台石	3.0%	・礫・礫片	3.0%

石材

黒色頁岩 62.5%	①	②	③	④	⑤	⑥
				④	⑤	⑥

①・細粒安山岩	11.3%		
②・粗粒安山岩	9.5%		
③・頁岩	5.2%		
④・チャート	2.7%		
⑤・変質玄武岩	2.4%		
⑥・砂岩	1.8%	・黒色安山岩	1.5%
		・珪質頁岩	0.6%
		・石炭質頁岩	0.6%
		・ホルンフェルス	0.3%
・その他	0.6%		

第4表 石器の組成と石材

石鏃 (7点)

黒曜石 42.9%	チャート 28.6%	黒色頁岩 14.3%	黒色安山岩 14.3%
--------------	---------------	---------------	----------------

打製石斧 (2点)

細粒安山岩 100%

加工痕ある剥片 (5点)

珪質頁岩 20%	黒色頁岩 20%	黒色安山岩 20%	細粒安山岩 20%	粗粒安山岩 20%
-------------	-------------	--------------	--------------	--------------

片刃石器 (2点)

黒色頁岩 100%

石鏃 (1点)

黒色頁岩 100%

削器 (7点)

黒色頁岩 71.4%	黒色安山岩 14.3%	細粒安山岩 14.3%
---------------	----------------	----------------

使用痕ある剥片 (4点)

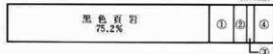
黒色頁岩 75%	チャート 25%
-------------	-------------

石核 (3点)

黒色頁岩 100%

第5表 種別石材構成(1)

割片 (101点)

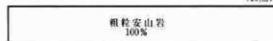


- ①・粗粒安山岩 8.9%
 ②・安山玄武岩 5.0%
 ③・砂岩 3.0%
 ④・チャート・黒色安山岩 各 2.0%
 ・珪質頁岩 ・頁岩 ・ホルンフェルス
 ・粗粒安山岩 各 1.0%

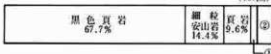
敲石 (4点)



台石 (10点)

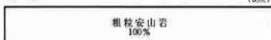


砕片 (167点)

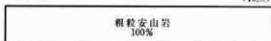


- ①・チャート 2.4%
 ②・安山玄武岩 1.8%
 ・砂岩 1.8%
 ・粗粒安山岩 1.2%

磨石 (5点)



礎・礎片 (10点)



第6表 種別石材構成(2)

石鏃(第26図1～7 PL73)

7点が出土している。形態の内訳は凹基無茎鏃5点・平基有茎鏃1点・形態不明の石鏃1点からなる。欠損資料は、石器の先端を欠損するもの1例(2)・「返し」のみ残存するもの1例(3)・下半を欠損するもの1例(4)と3点ある。石器石材は3例が黒曜石と最も多く、チャートも多く用いている。黒色頁岩を除く他の石材は量的に貧弱で、割片や砕片も石鏃の製作段階に作出するものではなく、ここで石鏃を製作したとはいえない。恐らく、石鏃は完成した状態で搬入と推察しておく。

1～3は黒曜石を用いて製作した石鏃で、1が西側の集中地点、他は東側集中地点からの出土である。この3点には基部の形態に若干の相違が指摘され、1の基部形態は5・6の基部形態に類似する。3は器体の半分以上を欠損しており、器体の形状は不明だが、復元状態を図示してみた。復元状態から推定するなら、3の「挟り」は深く、円脚鏃であることが推定されよう。4は器体の下半を欠損しており、全体の形状は不明だが、側縁形状から判断して、器体

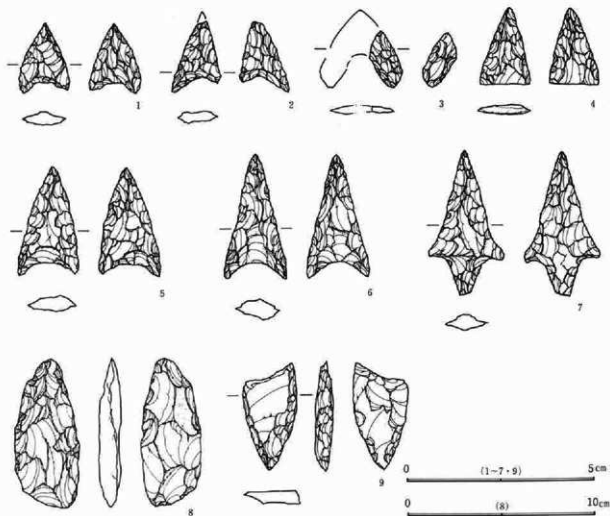
の形状は5・6に類似するといえるだろう。5・6は、ここではやや大形の部類に属し、「挟り」は広く、浅い。側縁形状は6が直線的で、5は弧状を呈す。7は台形に近い茎を持ち、やや内湾する側縁形状を呈す。茎の作出が側縁の作出に先行する。

石槍(第26図8 PL73)

1点が東側集中地点(Dr-05G)に出土している。石器表面の調整加工は丁寧だが、石器先端の作出も充分ではなく、完成した状態にはない。裏面の調整加工が表面の調整加工に先行する。裏面には礫面を部分的に残す。使用痕のある割片(第27図9)や接合資料-15・16・17など、類似した母岩が存在しており、遺跡の内部で製作された可能性が強い。器体の形状は木葉形状を、断面形状はD字状を呈す。

副器(第27図1～3・5・7 PL73・74)

接合資料を含む7点が出土している。東側の集中地点から3点、西側の集中地点から3点、東西集中地点で接合するもの1例で、量的に均質な出土傾向



第26図 D区出土の石器1 (縄文早期)

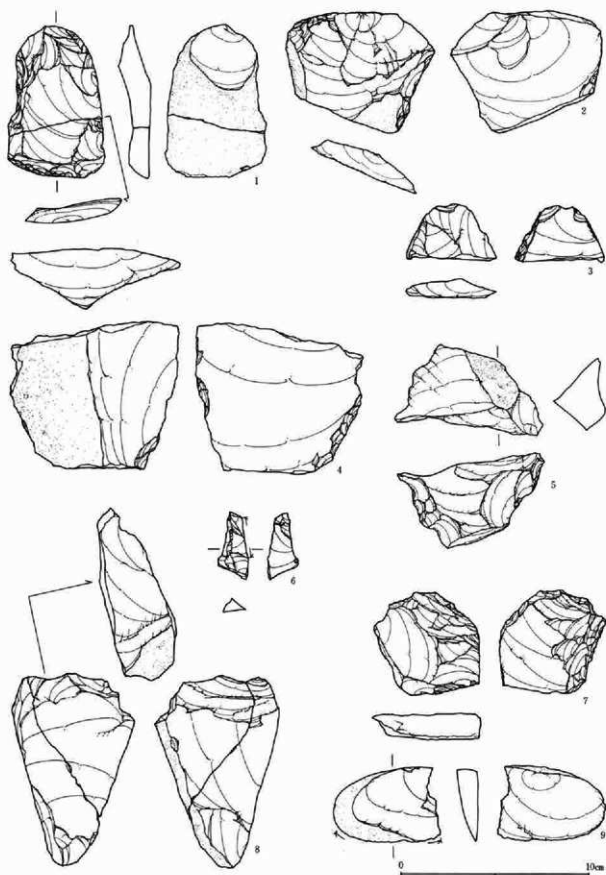
を示す。なお、複数の剥片と接合する削器は、実測図中(接合資料-3・12)に掲載した。

1は、約60mの距離を隔て東西の集中地点で接合する。加工が全面に及び、素材剥片の形状は不明確である。微細な加工を加え、刃部を石器下端に作出しており、角度ある弧状の刃部形状を呈す。広く礫面を残す。器体の中央よりやや下端に欠損する。2は、側縁を加工して刃部を作出している。調整加工は左側縁で浅く、右側縁で厚い。石器の下端に欠損する。東側集中地点に出土。3は、縦長剥片を素材に用い、表面側の左側縁に粗い調整加工を施す。器体の下半を欠損している。5は、縦長剥片を用い、左右の側縁に加工を加え、刃部を作出している。石

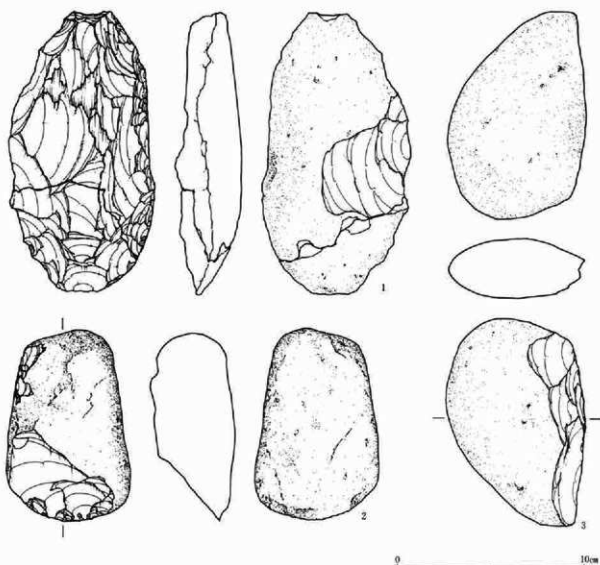
器の上下両端に欠損する。7は、側縁に礫面を残す横長剥片を素材に、ほぼ全周の調整加工を加え、石器を作出している。刃部作出の加工を石器下端に施す。刃部角度は45°に近い。東側集中地点に出土。

加工痕ある剥片(第26図9 第27図4 PL73)

2点が西側の集中地点から出土している。第26図9の石器は、平面形態と側縁の調整加工の特徴からナイフ形石器と判断され、欠損した部分から浅い加工を加えている。加工の意味や混入なのかどうか、判断できない。珪質頁岩。第27図4の石器は、左右の側縁に浅い調整加工を加え、刃部を作出している。石器の上下両端に欠損する。粗粒安山岩。



第27図 D区出土の石器2 (縄文早期)



第28図 D区出土の石器3（縄文早期）

使用痕ある剥片(第27図6・9 PL73・74)

西側の集中地点と東側の集中地点から各々1点が出土している。6は縦長剥片の右側縁に使用痕が、9は横長剥片の剥片端部に使用痕が存在する。6は西側集中地点からの出土で石材はチャート。9は東側集中地点から出土で石材は頁岩である。

石核(第27図8 PL74)

接合資料を含む2点が東側集中地点から出土している。2点とも黒色頁岩を使用している。図示した1点(8)は板状の剥片を使用している。石核の短軸部分の表裏両面で剥離作業を行い、横長剥片数枚を

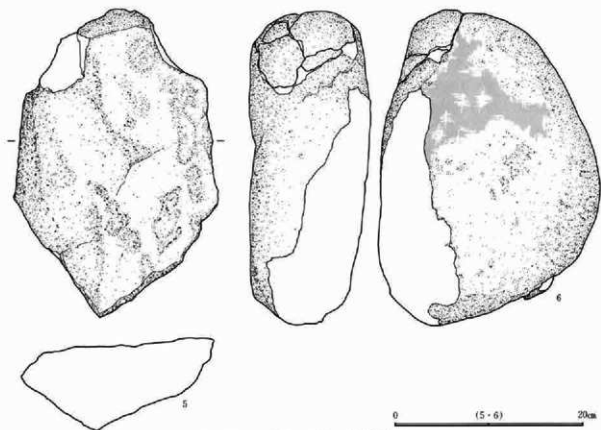
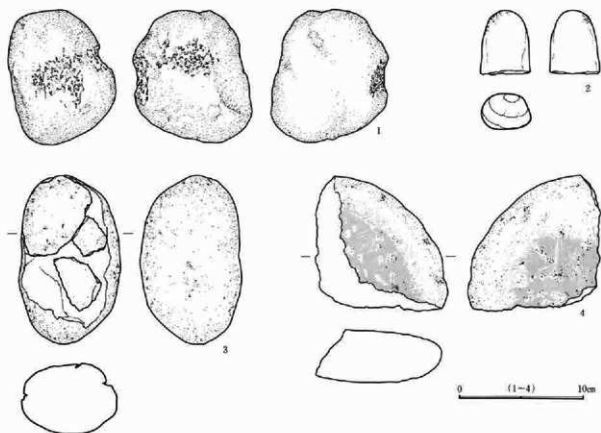
剥離しており、この作業段階で石核は二分している。

打製石斧(第28図1 PL74)

1点(接合-1)が東側集中地点から出土している。素材剥片の形状は不明だが、裏面は広く礫面が覆う。側縁調整は左側縁に比べ右側縁で丁寧で、加工の進捗状態から判断して石器は製作過程での欠損と推察されよう。細粒安山岩。

片刃石器(第28図2・3 PL74)

東西の集中地点から、それぞれ1点ずつ出土している。両者とも円礫を素材に石器を製作している。



第29図 D区出土の石器4（縄文早期）

2は柱状の円鏝を用い、小口的一端に加工を加え、刃部を作出している。刃部は2度の剥離で作出され、刃部角は45°に近い。この部分に連続的に使用痕が存在する。3は円鏝の側縁を裏面から粗く打ち欠き、刃部を作出している。刃縁には使用した結果、微細な使用痕が生じている。

敲石・磨石(第29図1～4 PL74)

1点を除き、東側の集中地点から出土している。敲石は3点が出土しており、このうち2点(1・2)を図示した。

西側集中地点から出土した敲石(1)は大形で、通常、敲石は掌に入る程度の鏝を選択する傾向に反す。石器形状は石器表面の中央付近に稜線を持ち、三角形の断面形態を示す。集合打痕を中央付近の稜線と左側縁に有す。2は左右の側縁と小口部分に打痕を有す。石器下端を欠損する。1は粗粒安山岩を、2は石英閃緑岩を使用している。3・4は磨石で、遺存部分は顕著に摩耗している。3は熱で破損した破片4点が接合している(接合-33)。3・4とも粗粒安山岩を使用。

台石(第29図5・6 PL74)

2点が東側集中地点から隣接して出土している。2点とも粗粒安山岩を使用している。

5は三角形の断面形状を呈し、平坦な鏝面を上に出土した。6は表裏両面に平坦な鏝面を持ち、一部を欠損している。表面は顕著に摩耗しており、また、打痕も存在することから台石と判断した。周辺から出土した9点が接合しているほかにも、同様な破片が周辺から出土している。割れ面の状態は、通常、粗粒安山岩を使用した鏝群を構成する鏝の割れ面の状態とは違い、周辺が剥落したように見える。石器が破損した背景は不明だが、割れ面の状態は急激な冷却作用で破損した可能性を示している。

f-1 接合資料

出土石器には34例119点(鏝の接合2例13点を含む)が確認され、全体の約36%が接合した。接合資料は打製石斧や石槍の調整段階を示す事例が多く、剥片の作出を目的にするような接合資料は存在しない。全体に石器製作総体の一部を反映しているのにすぎない。また、数点の剥片からなる接合資料(20例程度)も多く、接合資料だけでは断定してその性格を判断できない場合も多い。ただ、剥片形状や打面の形状など、掲載した接合資料に類似しており、石器群を評価する上で一応の判断材料と考えた。ここでは、接合点数の多い資料に限定して実測図を掲載した。

接合資料-2(第30図 PL75)

1→2→3→4→5

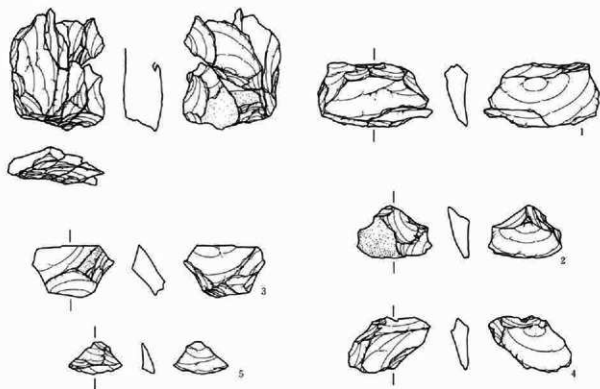
横長剥片6点が接合している。接合した状態での平面形態および調整状態は同一の層位から出土した打製石斧(第28図1)に類似しており、特に接合資料の下端と左側縁が類似している。剥離の手順は接合資料の側縁(1)から下端(2・3・4)へと進行し、再び、側縁から5を剥離している。このことから、接合した剥片は総て打製石斧の調整剥片と判断されよう。なお、点状打面を呈す剥片1点(5)を除く他の剥片4点は広い平坦打面を持ち、整形最終段階の剥片とは相違することから、打製石斧の大幅な再生段階を想定しておきたい。細粒安山岩。

接合資料-3(第30図 PL75)

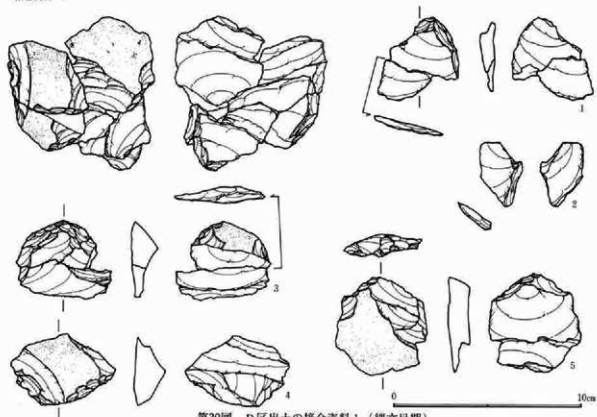
1→2→3→0→4→5

横長剥片7点が接合している。接合状態での平面形態および調整加工は、接合資料-2と同様に打製石斧(第28図1)に類似している。また、使用石材も接合資料-2に類似した細粒安山岩で、この点でも両者には強い類似性がある。剥離の手順は接合資料の下端から1-3の剥片を剥離し、なお数枚の剥片を同一打面から剥離した後に、打面を転じ、鏝面を剥離している。再び、打面を転じ4・5の剥片2枚

接合資料-2

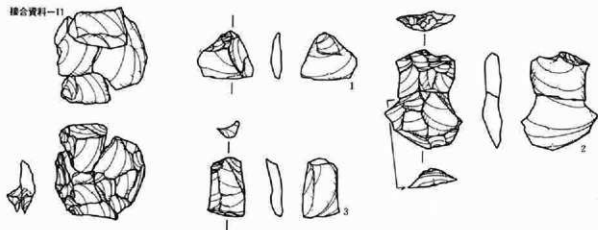


接合資料-3

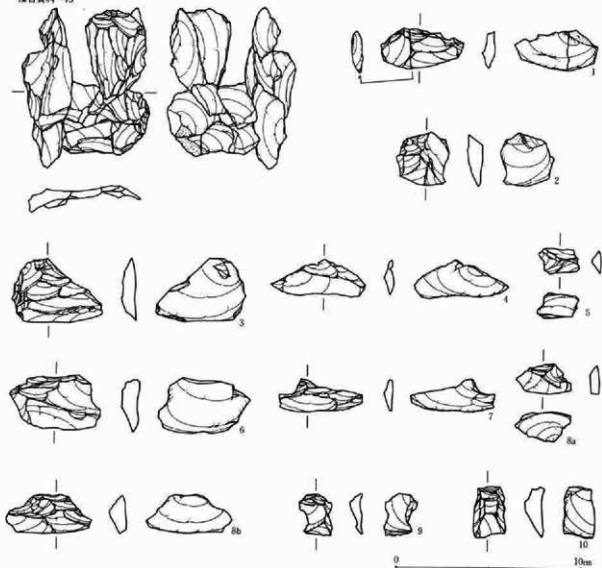


第30図 D区出土の接合資料1 (縄文早期)

接合資料-11

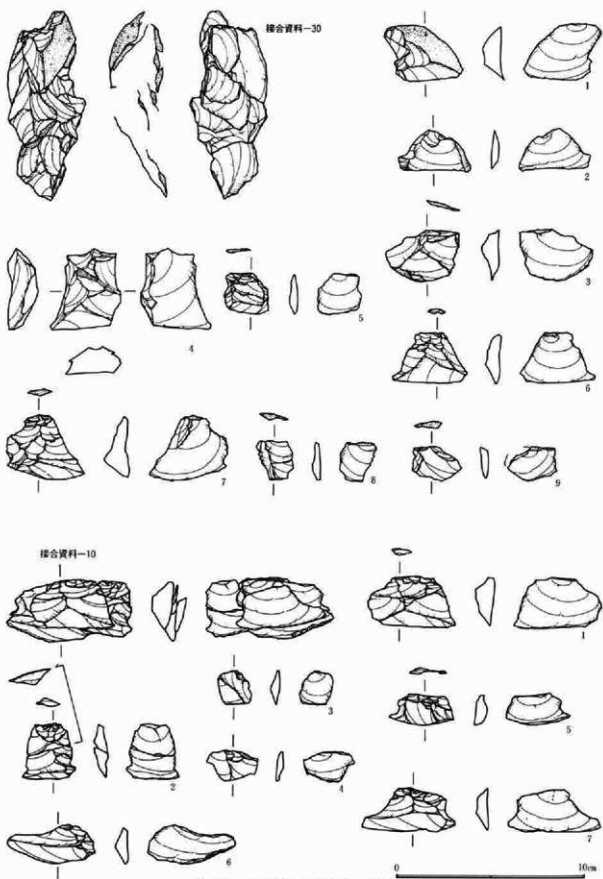


接合資料-15



0 10cm

第31図 D区出土の接合資料2 (縄文早期)



第32図 D区出土の接合資料3 (縄文早期)

を剥離する。以上、剥片は総て打製石斧の調整剥片と判断され、接合資料-2と同様に剥片の打面形状から判断して打製石斧を大幅に再生する段階の剥片といえよう。

接合資料-11(第31図 PL75)

1 → 2 → 3

やや幅広の縦長剥片4点が接合している。剥離の手順は、同一打面から打点を横位に移動して剥片を剥離している。最初に剥離した剥片(1)は剥片端部がヒンジ状を呈す。また、2の剥片は横位に、3の剥片は縦位に、それぞれ折断している。剥片の打面形状は、1が点状打面を呈す他は広い剥離面を有し、打角は鈍角である。接合資料が素材剥片の剥離を目的に剥離した剥片なのか、調整段階の剥片なのか、接合資料だけでは不明だが、剥片の背面を構成する剥離の方向は同一の方向を示しており、あながち、素材剥片の剥離を否定することもできないだろう。黒色頁岩を用いている。

接合資料-15(第31図 PL75)

1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 0 → 6 → 7 → 8
→ 0 → 9 → 10

横長剥片12点が接合している。接合状態での平面形態および調整加工は接合資料-2・3に類似する。剥離の手順は、接合資料の下端から1・2の剥片を剥離し、徐々に打点を右側縁に移動して3・4の剥片を、そしてさらに、左側縁の剥離を行い、6・7・8の剥片を剥離する。以上の剥離作業が終了した後、再び、打点を接合資料の下端に移動して2枚の剥片(9・10)を剥離する。接合した剥片の打面形状は、点状打面を呈す資料が多く、剥片形状も石器の整形段階を示す典型的なものであることから、接合した剥片は調整剥片と判断されよう。ただ、接合資料-2・3の比較してより「ポイント・フレイク」に近く、直接接合しないものの、隣接して出土した石楯(第26図8)と同一の母岩に分類される可能性もあり、打製石斧だけでなく、遺跡内で石楯を製作

していた可能性を強く指摘しておきたい。黒色頁岩を用いている。

接合資料-30(第32図 PL75)

1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9

横長剥片9点が接合している。接合状態での平面形態や礫面の遺存状態から判断するならば、打製石斧の調整剥片の可能性が高い。剥離の手順は正面から見て、左側の礫面を石器表面に残す剥片(1)が剥離され、徐々に右側へ打点を移動していき、再び、左側へ打点を移動して剥片(3~9)を剥離して、剥離作業が終了する。1・2・4・7の剥片端部には、広い平坦面を有し、厚さ2.5cm程度の板状石核を素材に用いている。黒色頁岩。

接合資料-10(第32図 PL75)

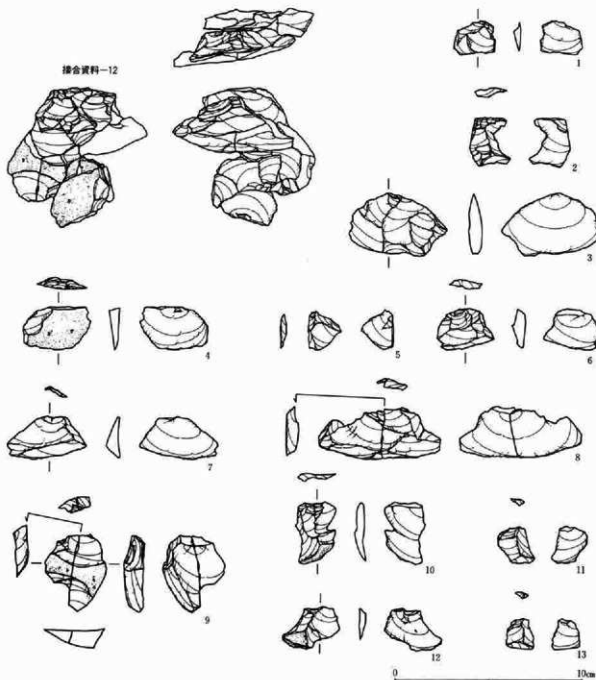
1 → 2 → 3 → 4 → 5 + 6 → 7

横長剥片8点が接合している。8点とも同一打面より剥離しており、打点を左右に移動させ、徐々に剥離作業が進行する。打点の振幅は狭い。1・2・(5+6)の剥片端部には広い平坦面を共有し、厚さ2cm程度の板状石核を素材に用いている。接合した剥片形状は幅広で、打面形状は点状の打面に近い。黒色頁岩を用いている。

接合資料-12(第33図 PL75)

1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9
→ 10 → 11 → 12 → 13

大小様々な形状の剥片15点が接合している。一方に礫面を持つ厚さ3cm程度の板状剥片を素材に剥離作業が展開している。剥離手順は、まず上端(図示した状態)から打点を左右に振り、3枚の剥片(1・2・3)を剥離する。この段階での打点の移動は小さく、打面形状は点状打面に近い。次いで、打面を下端に移動して2枚の剥片を剥離する。打面形状は4が調整打面で、5が点状打面で、打点の移動の振幅は狭い。以上の剥離作業が終了してから、再び、打面を接合資料上端に移動して、作業面を裏面



第33図 D区出土の接合資料4（縄文早期）

側に移し、剥離を行う。この段階では平坦な剥離面を打面に3枚の剥片(6-8)を剥離している。以上の剥離で石核素材の幅が減少、限定され、これ以後の剥片は概して小さく、加工段階の相違を示している。剥離段階で破損した剥片(9)を接合資料の上端から剥離した後、下端から小形の剥片(10)を剥離し、

再び、9と同一打面に移動している。以上が剥片剥離の実態で、剥離作業が進行するのにもない剥片が徐々に小形化し、裏面に接合する剥片の接合状態を考慮するなら、本資料は石楯の調整段階の一端を示す可能性が強い。

1-2 接合資料と同一母岩の分布

出土資料を検討した結果、34例の接合資料(礫の接合資料2例を含む)を確認した。接合資料は東側の分布域に多く存在しており、しかも、複数の集中地点を跨ぎ、接合する傾向が強い。西側では、接合資料は単一の集中地点に分布しており、他の地点と接合関係にはなく、対照的な在り方を示す。東西の分布域で接合する資料は1例(接合資料-25)を除き確認されていない。

一方、出土石器には類似する石材が多く、また、接合資料には原石の状態、ないし、素材剥片の状態まで復元されるものがないため、確実性を持つ母岩の分類は困難なのか実態であり、不明な点も多い。このため、ここでは接合資料の分布状態を示し、遺跡の構造や石器製作の実態を分析考察するうえでのデータとなるように意図して図化した。

まず、接合資料の分布状態をみていくと、複数の地点に分布する接合資料の場合、その接合主体は一定の範囲に分布する一方で、数点が他の集中地点に分布するようである。また、その周辺には接合資料と同一の母岩に分類される可能性の強い剥片も分布しており、特に接合資料-1・11・12・13・14(同一母岩に近い)、接合資料-20・21・22・23(同一母岩?)、接合資料-26・27(同一の母岩?)、接合資料-30・31(同一母岩?)の資料には、そうした傾向を指摘することができる。また、約50mの距離を隔て接合した接合資料-25もNo. 8の地点に類似した剥片が多量に存在している。以上の傾向を総合して判断するなら、接合資料に類似する剥片が集中出土することから、石器製作を中心とするような場の在り方が想定されよう。

黒色頁岩の分布(第34図) 類似する石材が多く、母岩の分類は困難だが、10種類程度の母岩を想定することができる。複数の集中地点で接合する資料も多く、製作過程で作出した剥片が石器素材に採用され、移動している(接合-10・15)可能性もあり、また、二次的要因で移動した可能性も考慮すべきだろ

う。ただ、接合資料(接合-2・3・11・12・30など)の分布状態から推定するなら、接合資料が集中する地点で石器を製作した可能性が高い。

接合資料-11の分布(第35図) 接合資料(第31図)は4点からなり、集中地点No. 1(第31図3)・No. 2(2)・No. 4(1)・No. 5(2)に1点ずつ分布している。類似する母岩はNo. 3を中心に多く存在し、また、資料の性格から判断してこの地点で剥離しているのは確実だが、剥離作業の地点は特定できない。

接合資料-15の分布(第35図) 接合資料(第31図)は12点からなり、集中地点No. 1を主体に分布している。このほかにも、集中地点No. 1の周辺に2点の剥片が、No. 3やNo. 6の周辺にも各1点が出土する。前者の2点は小形剥片で、分布の主体から遠い後者の2点が比較的大形で、使用痕のある剥片1点(第31図3)を含んでおり、この点では石器が移動するのに十分な必然性をもつ。

接合資料-30の分布(第35図) 接合資料(第32図)は9点からなり、集中地点No. 3を主体に分布している。このほかにも、Du-08G・Dw-06Gに各1点が出土しており、その2点とも剥離の初期段階に剥離している。No. 3の地点には同一母岩も多く分布しており、この地点で剥離した可能性が高い。

接合資料-10の分布(第35図) 接合資料(第32図)は8点からなり、集中地点No. 3・No. 4に分布している。第32図2~4・6がNo. 3に、第32図1・5・7がNo. 4に、それぞれ分布している(5・6は横位に折断しており、接合する)。No. 3に出土した剥片よりNo. 4に出土した剥片の方が、より大形で、かつ剥片形状も良好で、石器素材に使用可能ともいえるだろう。

接合資料-12の分布(第35図) 接合資料(第33図)は15点からなり、集中地点No. 3・No. 4に分布して

いる。第33図6を除き、総てNo. 3から出土している。No. 4の地点に1点だけ剥片が出土した理由は不明だが、接合資料の分布状態から判断して、No. 3の地点で石器を製作したと推察されよう。

細粒安山岩の分布(第36図) 細粒安山岩には3個体の母岩が存在している。細粒安山岩-1(第28図1)が集中地点No. 1に、細粒安山岩-2(接合資料-2)がNo. 3を中心に、細粒安山岩-3(接合資料-3)がNo. 8に分布している。母岩の1-3は、剥片形状や接合状態などから判断して、打製石斧関連の資料である可能性が高い。

接合資料-2の分布(第36図) 接合資料(第30図)は6点からなり、集中地点No. 3を分布の主体に、集中地点No. 2に1点(第30図1)が分布している。No. 3の地点で集中性が高く、この地点で剥離した可能性が指摘されよう。

接合資料-3の分布(第36図) 接合資料(第30図)は7点からなり、集中地点No. 8に分布している。直接接合しないものの、周辺には同一の母岩(細粒安山岩-3)が出土しており、この地点で石器を製作した可能性が高い。なお、No. 3の地点に出土した数点の剥片も同一の母岩の可能性があり、石器群の同時存在を検討するうえで、留意すべきである。

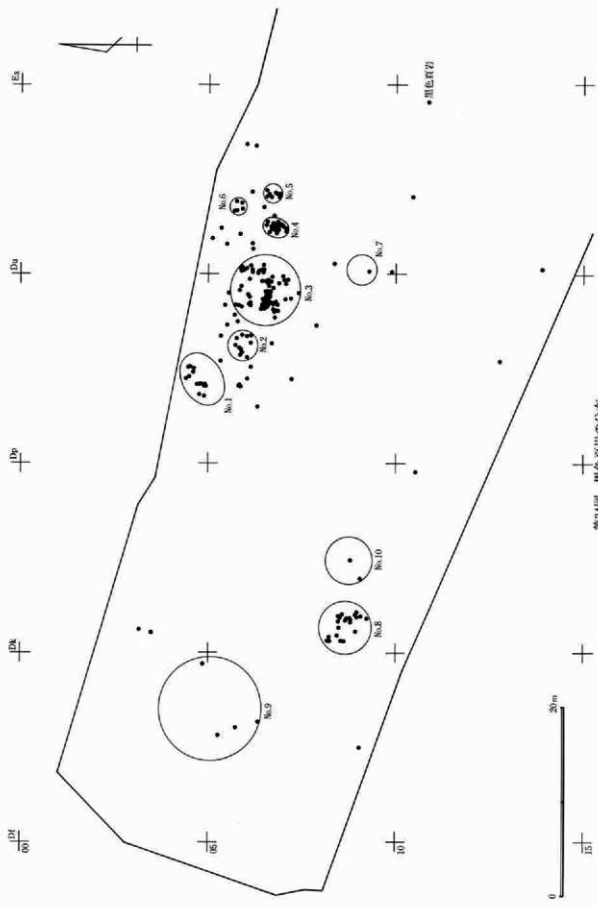
砂岩の分布(第36図) 母岩2個を確認した。うち、1個(砂岩-1)は集中地点No. 4に剥片5点が、No. 5に剥片1点が出土しており、No. 4が石器の製作地点であることを示している。剥片形状や使用石材から打製石斧関連の資料である可能性が高い。他の1個(砂岩-2)は剥片1個がNo. 4に出土しただけである。砂岩-1のみ図示した。

変質玄武岩の分布(第36図) 3ヶ所(集中地点No. 3・7・8)に総計8点が分布している。8点とも礫面を残す横長剥片で、同一母岩である可能性が高い。

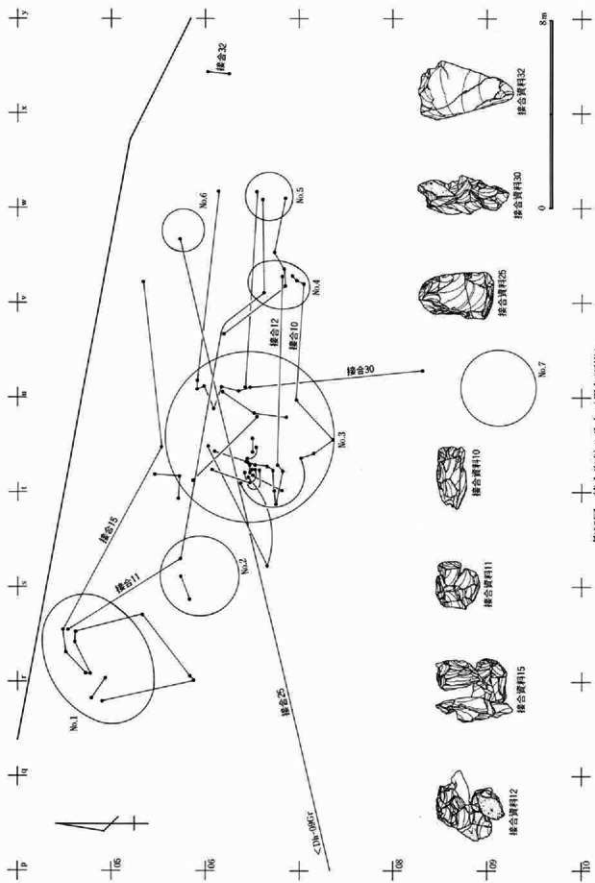
い。No. 3の2点は、もともと1枚の剥片(接合資料-7)で、横位に切断してから石器に使用している。No. 7では横長剥片2点が接合(接合資料-8)する。No. 8には4点の剥片が出土しており、打面や表面に礫面を残す。このうち、2点が接合(接合資料-9)する。出土点数や分布状況から判断して、調査区内での剥離地点の特定は困難である。ただ、No. 3地点の石器は他の地点から搬入した剥片を素材に用いており、剥離地点とは違う。なおこの種の石材は、石斧に使用されることが圧倒的であるものの、剥離の初期段階に作出する剥片が多く、剥片形状から積極的に打製石斧の調整剥片ともいえない。

粗粒安山岩・石英閃緑岩の分布(第37図) それぞれ単独で使用しているため、個数自体少ない。粗粒安山岩には接合資料2個(接合資料-33・34)を含む6個体を確認している。東側分布域に多く分布する傾向を示し、台石や磨石など焼土の周辺に分布する場合が多い。図示した以外は破損礫や小破片が多い。

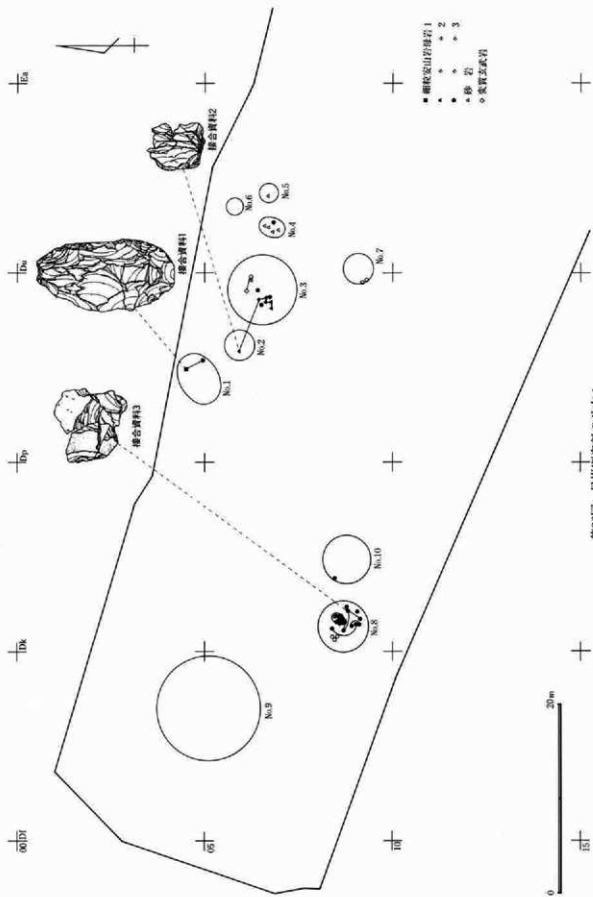
その他の石材分布(第38図) このほかにも、単独に近い状態で黒曜石や黒色安山岩などが出土している。単独に近い状態で出土した石器には、石鏃(第26図1-3・5・6)が多く、集中地点に分布するものより、周辺から出土する傾向が指摘されよう。1-3は黒曜石を、5は黒色安山岩を、6はチャートを素材に用いている。このほかにも加工痕のある剥片(第26図9・第27図4)や使用痕のある剥片(第27図6)がNo. 9の地点を中心に出土している。以上は、他の地点から完成した状態で搬入して使用した石器と判断できよう。一方、これまで数点だが、同一の母岩に分類される可能性の高い石材2種を確認している。黒色安山岩でNo. 5の地点を中心に2点の剥片が出土しているのに対し、チャートはNo. 1やNo. 3の地点に各1点が出土し、遺存理由は不明確である。

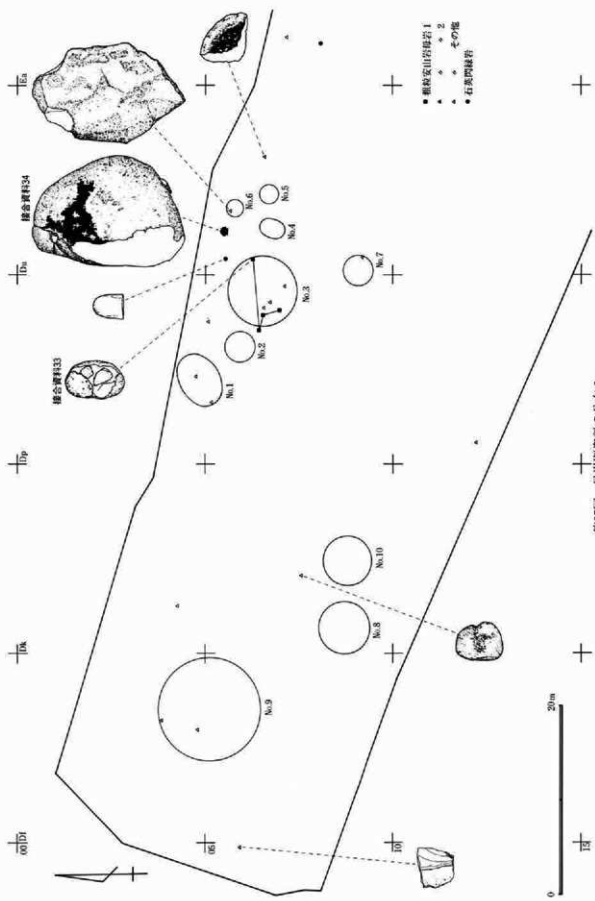


第34圖 黒色頁岩の分布



第35図 接合資料の分布 (黒色頁岩)





第37図 砕岩別資料の分布 2

(2) 前期

a 分布

遺跡を厚く覆う砂壤土は台地中央にも及んでいた。その堆積時期は縄文時代早期以降、中期後半以前の堆積だが、A区・B区の調査所見から、この砂壤土は黒色土を挟み、上下二層に堆積するということを確認した。前期遺構・遺物は、この黒色土から検出出土したのである。A区・B区の境界付近には調査段階で旧河川が確認され、旧河川東側に前期後半の遺物包含層が、西側に中期前半の遺物包含層が埋没していた。

この前期の遺物包含層は一様に確認されたものではなく、基本的に旧河川の東側に分布は限定されるようである。

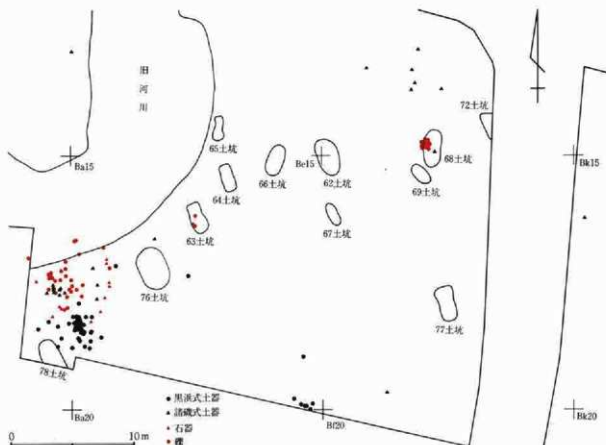
土器の分布 台地縁辺に近いAy・By-17・18G、台地中央に近いBh・Bj-13Gに分布する。台地縁辺には黒浜式・諸磯式の土器が、台地中央には諸磯式

の土器が分布している。

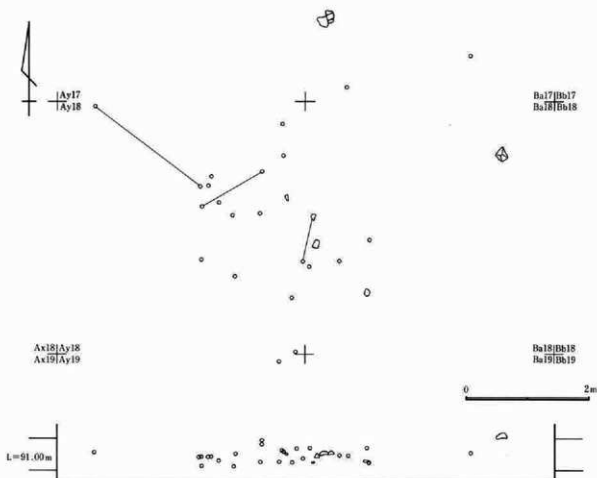
礫の分布 台地縁辺に近いAy・Ba-18Gを中心に分布していた(第40・41図)。34点(接合資料3例を含む)の礫からなり、一部で土器や石器の分布に重複している。散漫な分布状態を示す一方、割れ面も打割した状態にはない。

4 m×4 mの範囲に散漫な状態に分布している。黒色土(第Ⅳ層、河川性堆積物である砂壤土が上層と下層に堆積している)から出土しており、土器の出土状態に一致する。円礫は5点で、破損している礫が多い。50 g以下の破損礫が圧倒的に多く、101 g~200 g、201 g~300 g程度の礫や500 g以上の礫が各5例である。完形礫は60 g~80 gが多く、最大でも250 gである。粗粒安山岩を素材に用いている。

石器の分布 台地縁辺に近いAy・Ba-17Gを中心に分布しており、諸磯の土器分布に一致する。石器は4 m×6 mの範囲に分布しており、全体に散漫



第39図 土坑と遺物の分布(前期後半段階)



第40図 礎分布 (前前後半)

な分布傾向を示す。上述した礎と同様に、石器は上層の砂壤土(第Ⅴ層)の下層に出土している。

総計12点の石器が出土しており、石鏃1点(第43図13)・削器(同11)1点・石核1点の他に、剥片(7点)や砕片(2点)を主体に組成する。

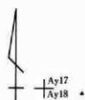
b 出土遺物 (第43図1～13 PL 59・60)

1・6・8・9・11・13は包含層出土、7・10・12は63号土坑の出土遺物である。

1～4は繊維土器で黒浜式期に位置づけられる。1は頸部の括れる深鉢で、口縁は水平ではなく不規則な起伏がある。器面には縄文を全面に施す。RL、LRの原体を用い菱形構成を示すが施文は不規則である。2・3は口縁部片で連続爪形文を2条加え、

縄文はLR¹横位が施される。2と3は同一個体か。4は列点刺突文を施すが、文様構成は不明である。5～7は浮線文土器で諸磯b式土器に位置づけられる。いずれも浮線文は扁平で矢羽根状の刻目が加えられる。8は平行線文上にボタン状貼付文を付すもので諸磯c式土器とみられる。9は平行線文が横位に施される銅部片で、縄文は認められない。

10・11は中広の横長剥片を用いた削器である。10は打面側に、11は打面・剥片端部の両端に刃部を作出している。12は縦長剥片を用い、左側縁に粗い加工を施す石器で、右側縁には使用痕がある。13は凹基無茎器で、やや深い挟りをもつ。Ba-17Gより出土した。



Ba17 | Bb17
Ba18 | Bb18

Ax18 | Ay18
Ax19 | Ay19

- | | | |
|---|---|---------------------|
| ● | ○ | 0 g 以上 ~ 50 g 未満 |
| ● | △ | 50 g 以上 ~ 100 g 未満 |
| ● | △ | 100 g 以上 ~ 250 g 未満 |
| ● | △ | 250 g 以上 ~ 500 g 未満 |
| ● | ▲ | 500 g 以上 |

0 2m

第41図 礫分布 (重量別)



Ba17 | Bb17
Ba18 | Bb18

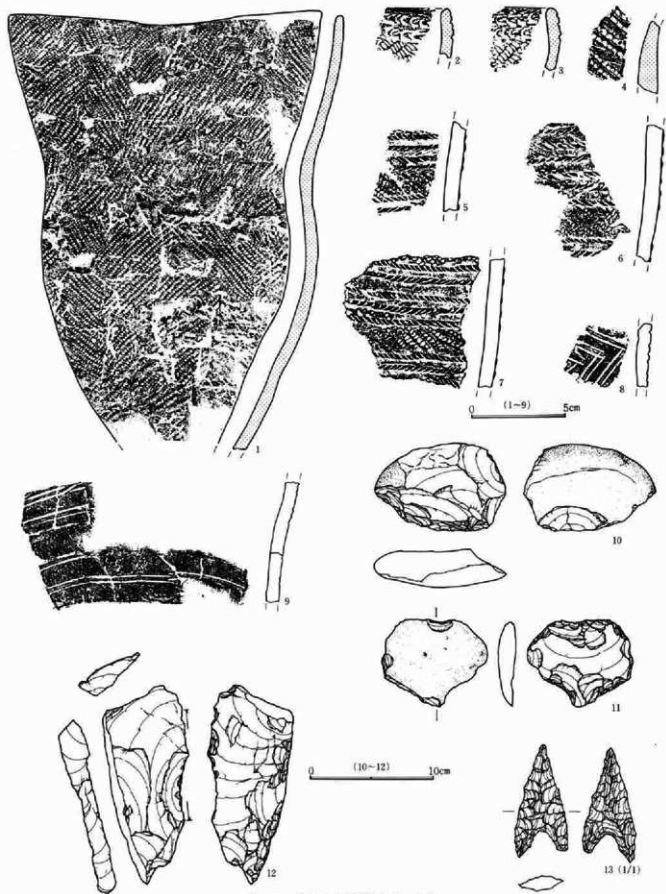
Ax17 | Ay17
Ax18 | Ay18

- | | |
|---|-----|
| ▲ | 石 鏃 |
| ■ | 削 器 |
| ● | 剥 片 |
| ○ | 碎 片 |

L=91.00m

0 2m

第42図 石器の分布 (前期後半)



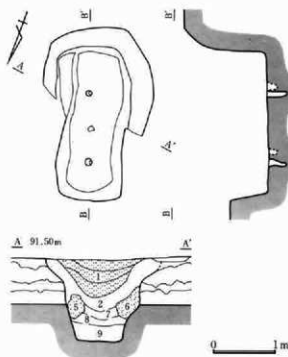
第43図 縄文時代前期包含層の遺物

○ 土 坑

出土遺物より判断して、諸磯段階の土器が出土した63号土坑・68号土坑が前期後半の土坑に帰属する可能性が最も強い。

63号土坑(第44図 PL16)

63号土坑は台地縁辺に近いBc-16Gに位置する。上面での平面形態は楕円形状を呈し、土坑の規模は推定で長軸2.88m・短軸1.77m・深さ1.28mを測る。坑底には4ヶ所にピットを検出している。ピットは20cmを越す深いものと10cm程の浅いピットからなり、その規模から判断して、土坑を継続使用している可能性も強い。埋没土層は黒色土を主体に自然堆積状態を示し、上面では砂壤土がレンズ状に堆積している。出土遺物は土器片(第43図7)や使用痕のある銅

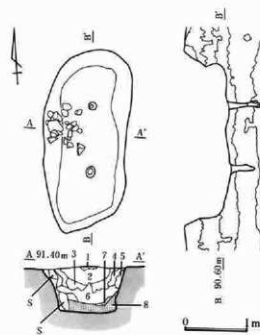


- 1 砂壤土 色調の明暗で1a-1cに分類。(基本土層の第VI層に一致)
- 2 暗茶褐色土 パミス少量混入する。
- 5 砂壤土(第I層)の崩落土。
- 6 * (第I層)の*。
- 7 暗茶褐色土 砂質土。パミス混入する(土器片が出土)。
- 8 * 7層に比べ、砂質土の混入量が少ない。
- 9 暗茶褐色土 白色パミス混入し、粘性に富む。

第44図 63号土坑

片(同10)1点が坑底から40cm浮いて出土している。
68号土坑(第45図 PL19)

68号土坑は台地縁辺から20mほど内側のAh-14・15Gに位置する。63号土坑とは20mほど離れている。下位の砂壤土を除去した段階で確認したため、現状では、その平面形態は長方形状だが、63号土坑に近い楕円形状の平面形態を示していた可能性が強い。現状で、土坑の規模は長軸2.90m・短軸1.30m・深さ0.70mを測る。坑底には、2ヶ所にピットを検出しており、上面では15cm前後、深さ40cm~50cmを測る。埋没土層は自然堆積状態を示し、上面に砂壤土が堆積していた。埋没土層より諸磯段階の土器が出土した。小片で図示できない。壁際に礫が多量に出土したほか、片刃石器(第43図12)が出土している。



- 1 砂壤土
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子を少量混入。
- 3 * 2層よりやや暗い色調を呈す。
- 4 青色灰褐色土 青味の強い色調を呈す。粘性に乏しく締まりはある。
- 5 茶褐色土 ローム粒子を多く混入。
- 6 灰褐色土 黄色パミス混入する。締まりあり。
- 7 茶褐色土 5層に近い色調を呈す。ローム粒子を少量混入する。
- 8 暗茶褐色土 ローム粒子を多く混入。締まりが強い。
- 9 褐色土 ロームを混入。締まりは弱い。下分に鉄分の沈殿が見られるピット境界部。

第45図 68号土坑

(3) 中期前半

a 遺物分布 (第46図)

A区砂壤土層下の黒色土層を文化面とする。土器の分布範囲はA_gラインからBaライン付近に存在する旧河川西岸におよぶ比較的広範囲に認められる。標高は90.50mから91.80mで、旧河川西側の台地縁辺平坦部に主として分布する。

土器は小片が大半を占めるが、型式の判別できる資料をみると、ほとんどが中期前半阿玉台1b式土器に位置づけられる。

分布域は標高91.70mから91.50mの平坦部を集中域とし、北側未調査区へ広がっている。また、旧河川西岸部にも分布するが、この部分には焼土痕も1ヶ所認められている。同時にこの河川に接する部分には阿玉台式土器の他に加曾利E式土器も少数ながら混在する状況も認められた。このような混在状況は、台地部分における土器分布には認められていないことから、河川に接する部分の現象といえよう。

土器は小片が大半であり、接合資料も少ない。接合例をみると3グリッドから5グリッド程度距離をもって接合する例が目立つ。器形の復元し得た第54図17についてもAt₁-v-10Gの3グリッドに散布した状態であった。

出土する土器片は前述の通り阿玉台式期に位置づけられるもので、ある程度限定された時期の資料といえる。これらの土器類は砂壤土層下黒色土層面に散布しており、特に層位差はもっていない。さらにこの面は砂壤土により一様に埋没され後世の擾乱はほとんど受けていないことから、中期前半という特定できる時期の文化層であると考えられる。

この面で検出されたものは、これら土器類のほか、石器等の遺物類、集石が数基存在する。また、出土遺物から土坑(陥穴)2基も同時期に推定できる遺構である。この他、住居等の遺構は確認されていない。

このような中期前半の包含層はA区における本例のみであり、他の調査区では確認されていない。

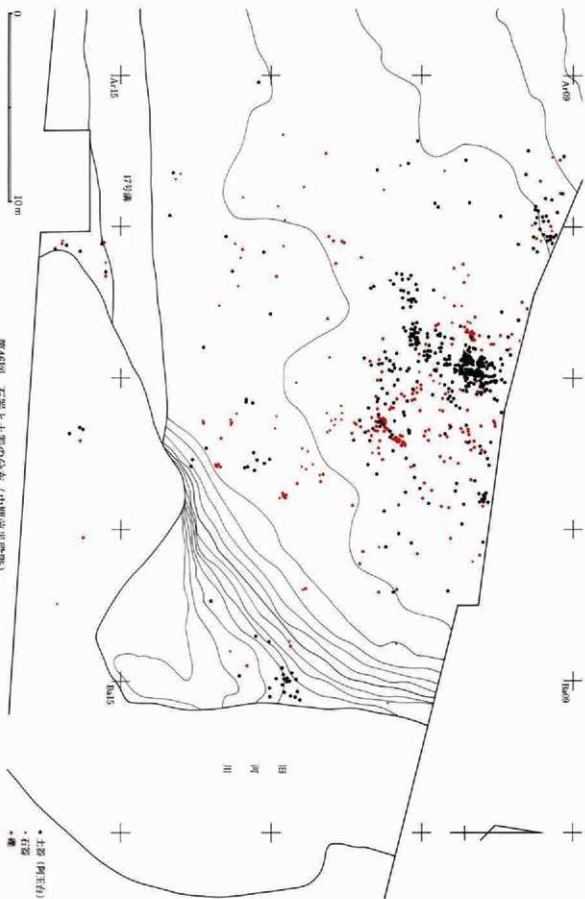
礫の分布 砂壤土を除去した段階で検出した旧河川西側の台地に分布している。Au・Av・Aw-10・11・12G付近に多く分布するほか、調査範囲全体に散漫な状態で分布している。5基の集石が確認され、中期前半の土器の分布と重複している。5基の集石は10個~30個の礫で構成され、欠損礫より完形礫が多く出土している。

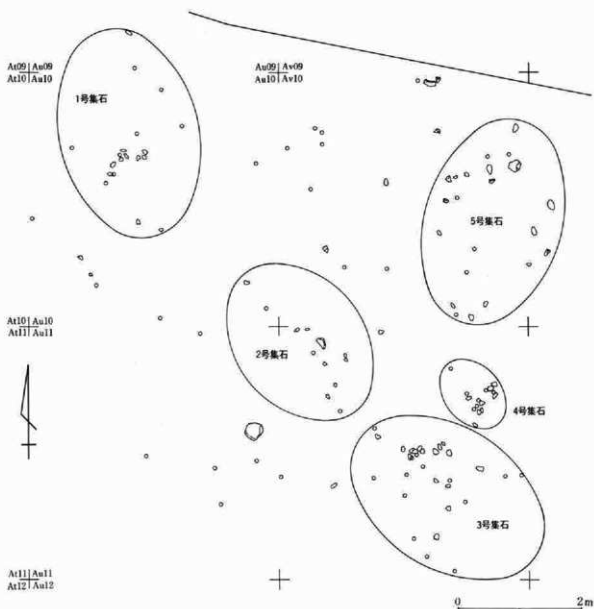
出土した約200点の礫はV層(黒色土)中に多く出土しており、路線の北側に近い1号・2号・5号集石は91.40m付近に、南側の3号・4号集石は91.20m付近に、安定した状態で出土している。比較的小規模な4号集石を除き、長径3m・短径2mの範囲に分布する集石が多い。石材は、遺跡周辺で採集可能な粗粒安山岩を用い、このほかには1点の珪質変質岩が出土している。やや大形の礫に角礫を選択する傾向を示す。破損礫が多い割に、接合率が低く、3例の接合資料を確認したのにとどまる。

集石は土器の出土状態に一致しており、ほぼその分布域も一致する。だが、厳密には土器の分布域と集石の分布域は一致せず、相互に分布域を避け分布しているといえよう。

石器の分布 礫の分布範囲に一致して分布している。総計86点の石器が出土しており、集石の分布範囲の外側に分布する傾向が指摘されよう。全体に散漫な分布状態を示し、3号集石の南側のAv・Aw-12G付近に石器が集中(集中地点No.1・No.2)するのにすぎない。出土した石器には削器や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片を主体に石礫(3点)・打製石斧(1点)・磨石(1点)・敲石(2点)を組成しており、ほぼ完全な石器組成を示している。一方、剥片(26点)や砕片(21点)は組成率も低い。石器石材は黒色頁岩を主体に、頁岩・黒曜石・黒色安山岩など多種多様な石材を使用している。接合資料は2例(第57図14・第58図13)を確認したのにすぎない。集中地点には類似する母岩も存在しており、また、削器や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片は黒色頁岩を多用し、剥片や砕片の石材に一致することから、一部では石器を製作している可能性が強い。

第16図 石器と土器の分布 (中瀬川平野部)





第47図 集石の分布

b 集石

1号集石(第48図)

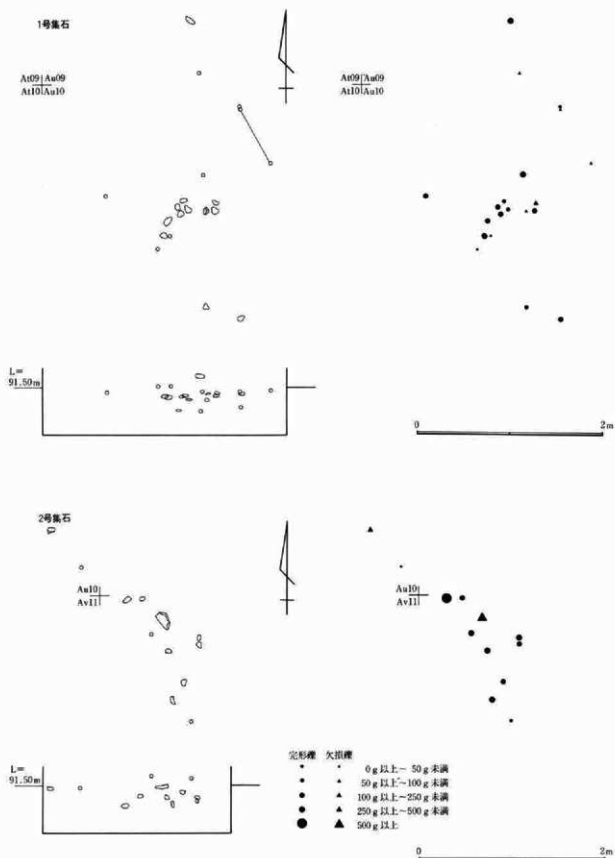
台地縁辺から15mほど内側の地点(Au-10G)に検出され、確認した5基の集石の中で最も西側に位置している。

集石は、長径3.3m・短径2.2mの範囲に分布しており、周辺ではより散漫な分布状態を呈す。総計20点の礫で構成され、100g～300gの粗粒安山岩を使用している。このうち、13点が完形礫・7点が破損礫で、熱で赤化した可能性の強い礫も出土している。

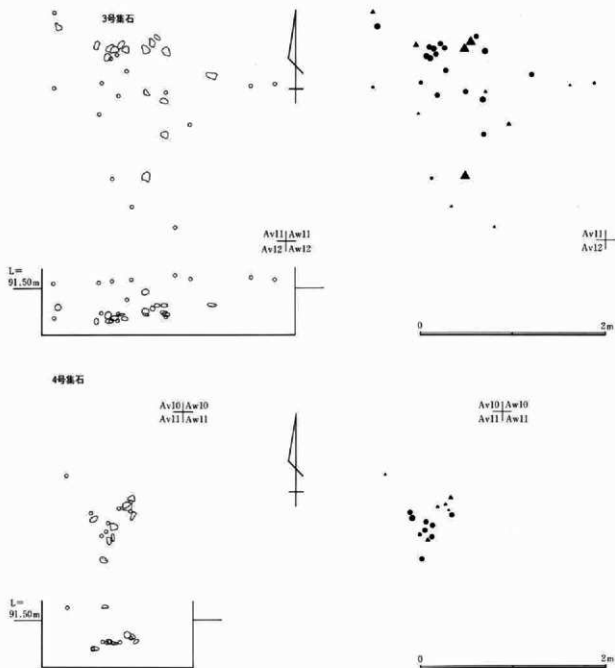
2号集石(第48図)

1号集石と3号集石に隣接した地点(Au-10・Av-11G)に位置する。

集石は、長径2.8m・短径2.0mの範囲に分布しており、明確な集中部を形成することなく散漫な分布状態を示す。上面と下面の礫には約20cmの高低差があり、安定した状態で出土しているとはいえない。総計12点の礫で構成され、200g～400gの粗粒安山岩を使用する。3点を除き全て完形礫で、このうち1点には煤が付着している。礫の接合は確認できない。



第48图 1・2号集石



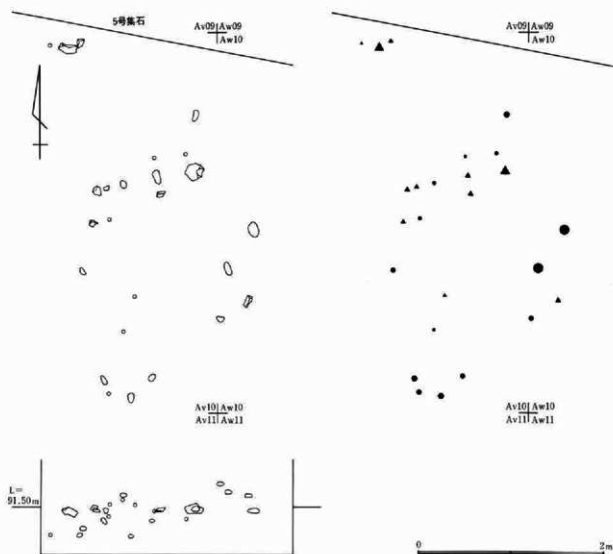
第49図 3・4号集石

3号集石(第49図)

集石5基の中で、最も南側に位置する(Av-11G)。石器集中地点No.1・No.2に隣接している。

集石は、長径3.3m・短径2.2mの範囲に分布している。100g～300g・500g～700gの礫が集中して出土しているほか、周辺では散漫な分布状態を示す。礫は91.20m付近に安定して出土するほか、50g以

下の小礫の場合には、これより上層にも出土する傾向が指摘されよう。集石は総計32点(接合資料1例を含む)の礫で構成され、100g～300gの礫(粗粒安山岩)を多く選択している。このうち、19点が完形礫・12点が破損礫である。完形礫に比較して、破損礫は大形の礫を選択しており、500gを越す破損礫も多い。熱を受け、ヒビの入る円礫1点が出土している。



第50図 5号集石

4号集石(第49図)

台地縁辺に近いAv-11Gに位置している。3号集石の北側に隣接した地点で検出した。

集石は、長径1.2m・短径0.9mの範囲に分布しており、集石5基の中で最も小規模であり、最も礫が集中している。礫は91.20m付近に安定した状態で出土している。集石は総計15点の礫からなり、このうち、9点が完形礫・6点が破損礫である。100g～200gの礫(粗粒安山岩)を多く使用している。4点の礫が接合しており、割れ面の状態から判断して、熱で破損した可能性が強い。

5号集石(第50図)

台地縁辺に最も近いAv・Aw-10Gに位置している。4号集石とは約1mの距離を隔て隣接している。

集石は、長径3.3m・短径2.2mの範囲に分布しており、明確な集中部を形成することなく、散漫な状態に分布している。礫は91.50m付近に多出する傾向を示す一方で、上面と下面の礫は約50cmの高低差があり、安定した状態で出土しているとはいえない。集石は22点の礫(粗粒安山岩)からなる。このうち、14点が完形礫・8点が破損礫で、100g～300gの礫を多く使用している。

c 石器の集中地点

集中地点No. 1 (第51図)

Av-12Gに位置する。3号集石の南側、約2mの地点に検出され、長径1.8m・短径0.9mの範囲に分布している。石器は密集して分布しており、集石と同様に、91.50m付近に安定した状態で出土している。

集中地点No. 1には総計9点の石器が出土しており、使用痕のある剥片1点(第58図7)・剥片1点・砕片7点が組成する。石器石材は黒色頁岩(剥片1点・砕片1点)と頁岩(砕片6点)を使用しており、一連の石器製作を示す状況にはない。

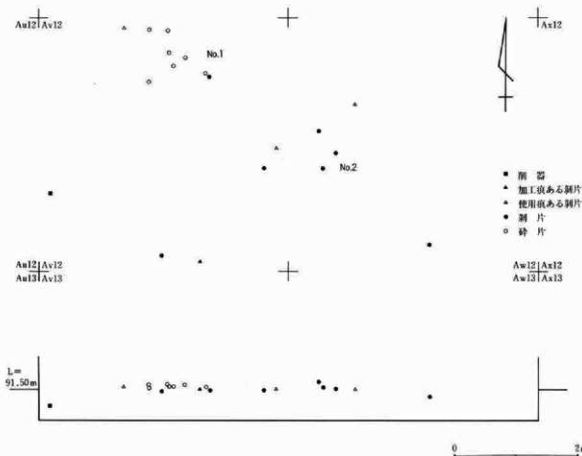
集中地点No. 2 (第51図)

Av・Aw-12Gに位置している。集中地点No. 1に

隣接して検出され、長径1.8m・短径0.6mの範囲に分布している。No. 1と同様に91.50m付近に安定した状態で出土している。

集中地点No. 2点には、総計6点の石器が出土しており、使用痕のある剥片2点(第51図9・13a)・剥片4点が組成する。石器石材は総て黒色頁岩を使用している。接合資料1例(第51図13)は、Av-13Gに出土した剥片と接合する。出土した石器は使用可能な剥片が主体で、石器製作の場を示す砕片は全く確認できない。

なお、この周辺には散漫に石器が分布しており、削器や加工痕のある剥片などが出土している。このうち、Av-12Gに出土した削器はAt-12Gに出土した石器と接合(第57図14)する。



第51図 石器の分布

d 土 坑

この段階の土坑全部の特定は困難だが、出土遺物より判断して、阿玉台1b段階の土器が出土した61号土坑および76号土坑が中期前半の土坑に帰属する可能性が最も強い。

61号土坑(第52図 PL18)

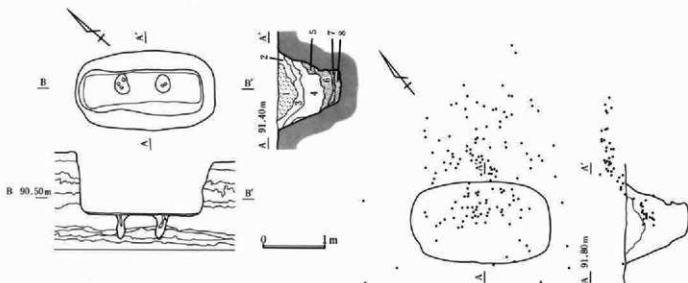
台地縁辺から15mほど内側の地点(Au-10G)に位置している。上面での平面形態は長方形を呈し、土坑の規模は長軸2.20m・短軸1.20m・深さ0.90mを測る。坑底には2ヶ所にビットを検出しており、規模は直径20cm程度、深さ40cmを越す。2基のビットは、坑底を三分割した位置に構築している。埋没土層は黒色土を主体に自然堆積状態を示し、上面には砂壤土がレンズ状に堆積していた。

61号土坑の埋没土中には、中期前半段階の土器が少量出土している。出土状態は土坑の北側に多く、

南側にはほとんど出土せず、北側から流れ込んだかのようにみえる(第52図参照)。出土した土器は周辺から出土した土器とも接合しており、1個の土器(第54図17)に復元することができた。

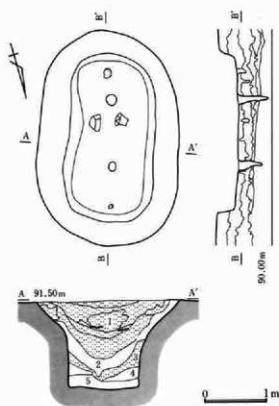
76号土坑(第53図 PL14)

Bb-16・17Gに位置している。旧河川の西側の台地に61号土坑が位置するのに対し、76号土坑は東側の台地斜面に検出され、土坑が群を形成して分布することから想定するなら、東側の台地にもこの段階の土坑の存在が想定されよう。上面での平面形態は楕円形状を呈し、その規模は長軸3.30m・短軸2.20m・深さ1.40mを測る。坑底には2ヶ所にビットを検出し、規模は直径10cm~15cm、深さ30cm~50cmを測る。埋没土層は、土坑の使用を放棄してから余り埋没が進行していない段階で砂壤土が堆積している。出土遺物は、砂壤土中に混入した状態で土器(第56図1)・使用痕ある剥片2点(同2・3)がある。



- 1 砂壤土 基本土層の第VI層に一致する。
- 2 黒褐色土 白色パミスを多く混入。粘性に富む。
- 3 ○ 2層よりやや暗い色調を呈す。白色パミス混入。
- 4 > 締まりは強い。黒味が強く、白色パミスは混入しない。
- 5 暗褐色土 ローム粒子混入。締まりは強い。
- 6 ○ ロームを多く混入。崩落土層。
- 7 ○ ローム粒子を少量混入する。
- 8 黒色土とロームの混土層。

第52図 61号土坑



- | | |
|----------|-------------------------|
| 1 砂壤土 | 基本土層の冒層に一致する。 |
| 2 黒色土 | 砂質土が少量混在する。粘性に乏しい。 |
| 3 灰褐色砂質土 | 砂壤土（基本土層層）の崩落層。 |
| 4 暗褐色土 | 砂壤土を混入。 |
| 5 暗褐色砂質土 | 早期包含層（瓦層）に類似している。粘性に富む。 |

第53図 76号土坑

● 土器 (第54・55・56図1 PL60~62)

76号土坑から出土した第56図1の浅鉢形土器のほかはいずれも包含層出土資料である。

旧河川西側台地部出土土器

第54図1~4・15・16・18は縄文の施される土器である。1・2・18は同様の器形を示す口縁部片で頸部が括れ、口縁はやや内湾きみで口唇部は内側に面をもつ。整形は良好で特に器内面は滑沢な面を形成する。縄文は細目の原体が用いられ、RL横位が施される。1・18には口縁部に突起が付されている。3は口唇部に刻目が増えられる口縁部片で、縄文は不明瞭だがRL横位が施される。4・16は胴部片で

あるが、16は整形が良好で1もしくは18の胴部とみられる。15は口縁部片であり、沈線文により文様構成され縄文はRL、LR横位による羽状縄文が施される。5は口縁付近であり、太沈線による区画文内に縦位の沈線が増えられる。整形は良好だが、内面剥落している。6~14は横位の押印文が連続して加えられる一群である。この分布域における量的主体を占める文様である。17は器形の復元し得た水平口縁の深鉢形土器である。文様は口縁部に隆線による区画文が施され、その間には円形貼付文が配される。この部分から胴部にかけてY字状隆線文が垂下し、他の部分は無文である。19は水平口縁で1列の角押印文と扇状沈線で文様が構成される。

旧河川東岸部出土土器

第55図1~7は1列の角押印文を主に文様構成される。いずれの資料も類似しているが接合関係はない。

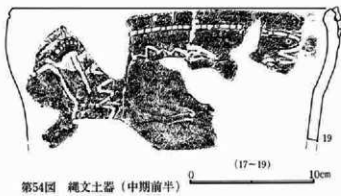
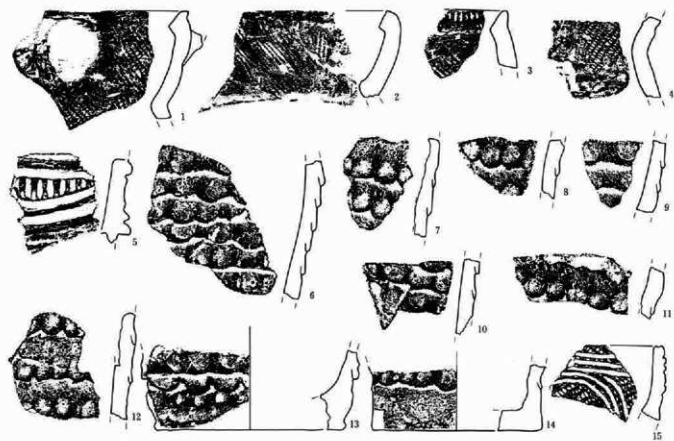
旧河川東岸部出土土器

第55図8は眼鏡状突起部。9・10・11は隆帯上に刻目を加え両側に1列の角押印文を施し、沈線間には刺突文を充填する。

76号土坑出土土器 (第56図1)

76号土坑が埋没する過程で流入した土器である。大型の浅鉢形土器で整形は良好で器内外面とも平滑面をもつ。無文である。

各種土器は阿玉台1b式期に位置づけられよう。

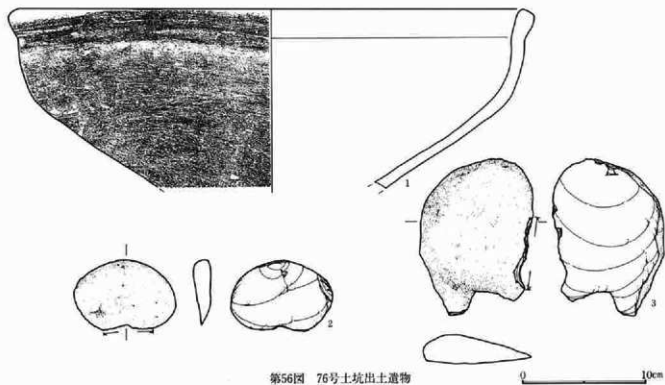


第54图 縄文土器 (中期前半)



第55图 縄文土器(中期前半)

0 5cm



第56图 76号土坑出土遺物

0 10cm

f 石器

この段階の石器は、A区とB区の境界付近に出土した旧河道の西側台地に分布していた。石器に伴出した土器や集石が調査区内の北側に分布するのに対し、石器は調査区内の中央付近(Av・Aw-12G)や土器や集石の周辺に分布する。

出土した石器は総計86点で、刮器などの加工具を主体に、打製石斧(1点)・石鎌(3点)や磨石・敲石が出土している。全体の6割が剥片類である一方、大形の剥片が多く、打製石斧や石鎌の調整剥片は少量で、石器製作の主体は調査区内にはない。また、剥片が集中出土したAv・Aw-12Gでも少量の同一の母岩が検出されただけで、他の地点で剥離してから搬入している可能性が高い。全般に石器製作は低調で、使用可能な石器も多出していることから、この地点では、若干の剥片石器の製作と石器素材の搬

石器組成 (278点)

①	剥片 9.4%	砕片 7.6%	礫・礫片 69.1%
---	------------	------------	---------------

- ①
- ・石 鎌 1.1%
 - ・打製石斧 0.4%
 - ・刮 器 4.0%
 - ・加工痕ある剥片 2.5%
 - ・使用痕ある剥片 4.0%
 - ・石 核 0.4%
- ②
- ・敲 石 0.7%
 - ・磨 石 0.4%
 - ・台 石 0.4%

石材組成

粗粒安山岩 67.3%	黒色頁岩 20.9%	③
----------------	---------------	---

- ①
- ・頁 岩 2.5%
- ②
- ・黒色安山岩 1.8%
 - ・チャート ・軽 石 各 1.3%
 - ・珪質頁岩 ・細粒安山岩 ・ホルンフェルス 各 0.7%
 - ・黒 曜 石 ・灰色安山岩 ・実質安山岩
 - ・石 英 ・珪 岩 ・珪質安山岩 各 0.4%

第7表 石器と石材

入を想定することができるだろう。使用している石材は黒色頁岩が圧倒的に多く、このほかには黒色安山岩や灰色安山岩、珪質頁岩を使用している。

石鎌(第57図1～3 PL76)

石鎌は凹基無茎鎌2点・平基鎌1点の3点が出土している。集石の集中する周辺から出土しており、3点とも完形品である。石材は黒曜石・珪質頁岩・黒色安山岩を使用している。1・2は「挟り」が浅く、「返し」が左右対称にはならない。調整加工も粗雑で、1の断面形態は厚いレンズ状を呈す。3は横長剥片の周辺を調整して作出しており、平緑な基部形態を示す。

打製石斧(第57図4 PL76)

打製石斧は、集石の周辺から1点(4)が出土して

石 鎌 (3点)

黒 曜 石 33.3%	黒色安山岩 33.3%	珪 質 頁 岩 33.3%
----------------	----------------	------------------

打製石斧 (1点)

頁 岩 100%

刮 器 (11点)

黒色頁岩 82.0%	①	②
---------------	---	---

- ①・細粒安山岩 9.0%
- ②・実質玄武岩 9.0%

加工痕ある剥片 (7点)

黒色頁岩 100%

使用痕ある剥片 (7点)

黒色頁岩 83.4%	①	②
---------------	---	---

- ①・黒色安山岩 8.3%
- ②・頁 岩 8.3%

第8表 種別石材組成(1)

石 槌 (1点)

黒色頁岩 100%

剥 片 (26点)

黒色頁岩 84.8%	①
---------------	---

- ①・黒色安山岩 ・粗粒安山岩
②・実質安山岩 ・灰色安山岩 各 3.8%

砕 片 (21点)

黒色頁岩 42.8%	頁 23.8%	①	②	③
---------------	---------	---	---	---

- ①・黒色安山岩 9.5%
②・ホルンフェルス 9.5%
③・チャート ・珪質頁岩 ・石 英 各 4.8%

磨 石 (2点)

粗粒安山岩 100%

磨 石 (2点)

粗粒安山岩 100%

台 石 (1点)

粗粒安山岩 100%

礫 (完形礫) (114点)

粗粒安山岩 97.4%	①
----------------	---

- ①・軽 石 2.6%

礫 (欠損礫) (78点)

粗粒安山岩 91.0%	②
----------------	---

- ①・チャート 3.8%
②・黒色頁岩 ・軽 石 ・輝 石
・珪質安山岩 各 1.3%

第9表 種別石材構成(2)

いる。横長剥片を用い、左右の側縁を加工して作出しており、石器の形状は短冊状を呈す。刃部は摩耗している。器体の上半を欠損する。

割器(第57図5-14 PL76)

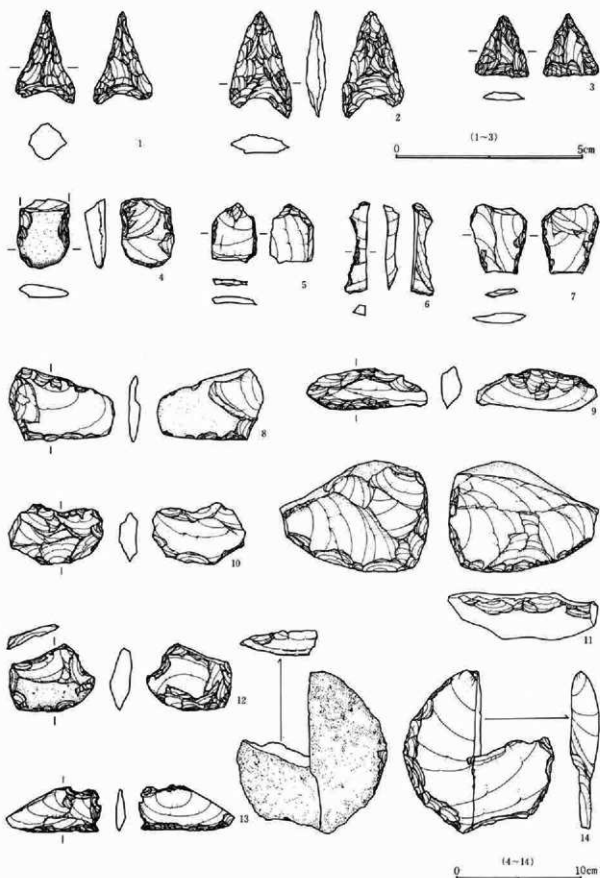
接合資料1例(14)を含む11が、1点(13)を除き集石の周辺から出土している。横長の剥片を素材に、剥片端部に刃部を作出する資料が多い。石器石材は黒色頁岩を使用する場合が圧倒的に多く、このほかには細粒安山岩や実質玄武岩を使用している。

5・6は小形の縦長剥片を、11・14は大形の縦長剥片を用い、左右の側縁に連続する丁寧な調整加工で刃部を作出している。7・8は台形に近い形態の素材剥片の端部に表裏両面から丁寧な調整加工を施し、刃部を作出している。9は横長の剥片を用い、剥片端部に浅い調整加工を加え刃部を作出している。打面を調整加工で除去している。10は横長の剥片を用い、この剥片の上下両端に刃部を作出している。上端の刃部はノッチ状を、下端は弧状を呈す。両者とも刃部の作出は明瞭ではない。12は横長の剥片を用い、剥片端部を除く各辺に刃部を作出している。表裏両面に粗い調整加工を施す。

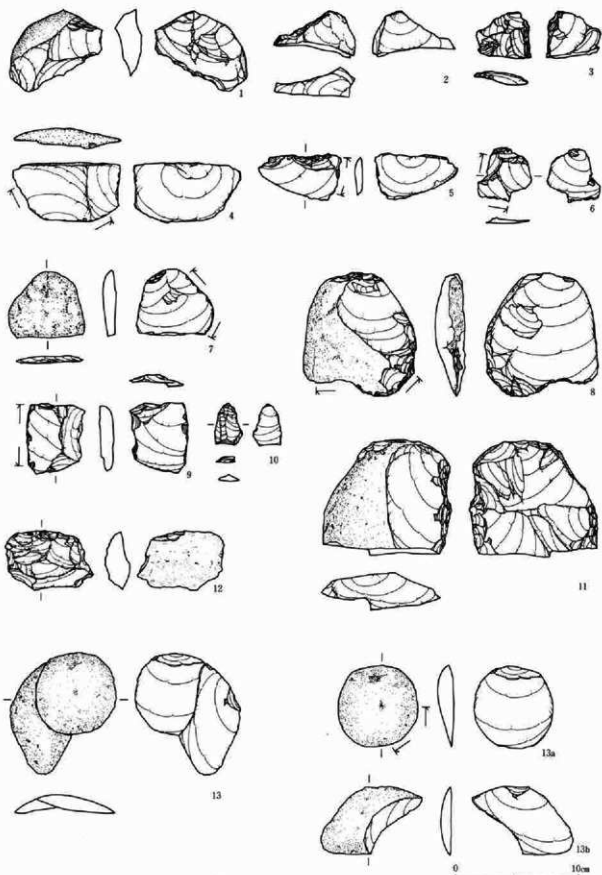
加工痕ある剥片(第58図1-3・11 PL76-77)

5点が集石の周辺から出土検出している。素材に使用する剥片の形状は横長剥片が多く、刃部は縦長剥片の場合には左右の側縁に、横長剥片の場合には剥片端部に作出されることが多い。石器石材は黒色頁岩を使用している。

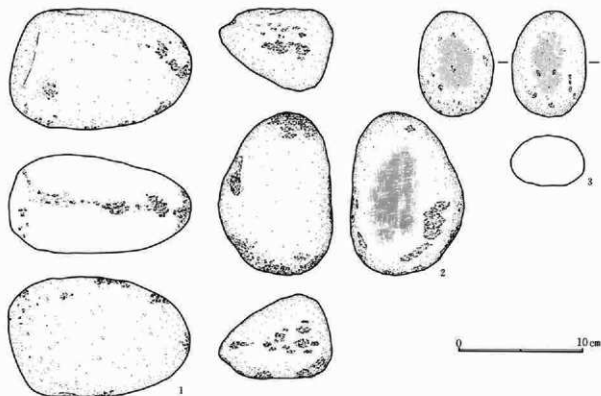
1は台形に近い横長の剥片を用い、剥片端部に粗く加工して刃部を作出している。2は遺存する部分の形状から推定するなら、台形に近い形状の剥片を用い、側縁に粗く浅い調整加工を施し、刃部を作出するのではなかろうか。欠損が製作段階なのか使用段階なのか不明である。3も遺存部分から推定するなら、台形に近い横長の剥片を使用して側縁に粗い調整加工を加え、刃部が作出される石器である。器体の下半を欠損する。11は大形の剥片を素材に用い、



第57図 A区出土の石器1(中期前半)



第58図 A区出土の石器2(中期前半)



第59図 A区出土の石器3 (中期前半)

側縁に刃部を作出している。刃部の作出は丁家で、連続性を有す。器体の長軸方向に直交する剥離面が表面側に存在しており、板状石核を転用した可能性が強い。

使用痕ある剥片(第58図4～9 PL76・77)

7点が集石の周辺から多く出土している。縦長の剥片の場合には側縁を、横長の剥片の場合には剥片端部を刃部に使用する場合が多い。使用石材は黒色頁岩が多い。

4は長方形の、5は三角形の横長剥片を用い、それぞれ剥片端部を刃部に使用している。6は横長剥片を用い、左側縁に使用痕が存在する。7は礫面を残す剥離の初期段階の剥片を用いている。左側縁に使用痕が存在する。剥片端部を欠損している。8は表面と側縁に礫面を残す大形の縦長剥片を用いている。使用痕は右側縁および剥片端部に存在する。9は上半を欠損する縦長剥片を用い、左側の側縁を刃部に使用している。

石核(第58図12 PL77)

1点が旧河道に近いAx-12Gから出土している。表面は礫面からなり、この礫面を打面に小形横長の剥片を剥離している。石核の形態は板状を呈す。

他の石器(第58図10・13 PL77)

以上の他にも、珪質頁岩を使用した左右の側縁が平行する剥片(10)や使用痕のある剥片を含む1例の接合資料(13)が出土している。

磨石・敲石(第59図1～3 PL77)

磨石(3)は1号集石付近から、敲石(1・2)は集石の存在した地点の周辺から出土している。石器に使用した石材は粗粒安山岩である。

敲石は2点が出土している。両者とも礫の側縁や小口部分に打痕を残している。磨石は1点が出土している。小形の礫を用い、石器の表裏両面は顕著に摩耗している。

(4) 中期後半以降

a 概要

ここでは中期後半以降の遺物・遺構を主として報告する。遺跡の概要に示したように本遺跡は砂壤土性台地およびローム台地上に立地し、さらに砂壤土は縄文時代早期・前期・中期前半と時間差をもって堆積していることが認められている。

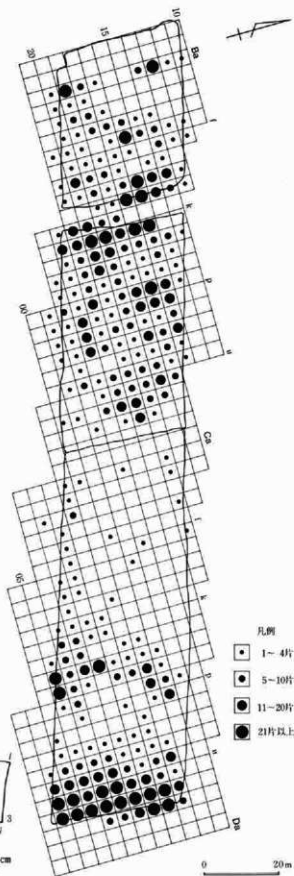
ここに報告する遺物・遺構は砂壤土最上位面(A・B・C・D・E区)およびローム台地ローム層上面(B区)から出土したものを一括しており、その主体は中期後半が占める。このことは、砂壤土層が最終的には中期後半にはほぼ堆積が終了していたことを示すものといえる。ただ、砂壤土層の堆積が認められていないB区の一部にあたるローム台地には中期後半以降の遺物類が多いものの、燃糸文系土器、および諸磯式土器などが少数ながら混在している。中期後半以降の土器分布は第61図に示す通りである。

第60図1～3は、B区ローム台地上から出土した草創期後半の燃糸文系土器である。この時期の土器は計5点検出されている。この面(層位)以外ではD区砂壤土下から口縁部片が1点(第19図1)出土している。

1はBp-22G出土で単軸絡条体第Ⅰ類、Rが密集して巻かれる。外面は平滑であるが内面はやや荒れている。胎土は緻密で夾雑物は少なく赤褐色を示す。2はやや肉厚で内外面とも整形は良好である。単軸絡条体第Ⅰ類でRが丁字に巻かれ、条間隔は一定している。胎土は緻密で橙色を呈す。3は胎土、色調および施文等が2と類似する点が多く、同一個体の可能性が高い。



第60図 燃糸文系土器

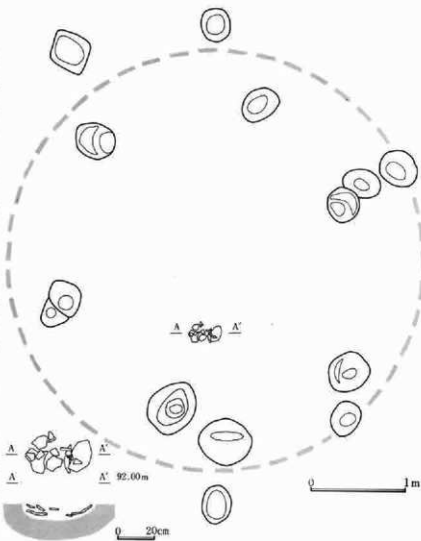


第61図 縄文時代中期後半(加曾利E3・4式)土器分布図

b 遺構

B区において中期後半加曾利E3式土器の集中分布および埋設状の大型破片が存在する地点が2ヶ所認められた。いずれについても住居の可能性が高いものと考えられたため壁・床・炉・柱穴等の確認に努めたが住居施設としての遺構形態は把握できなかった。土層の堆積状態からみて攪乱によりその形態が失われた可能性は低いと判断される。そのため、調査の段階では住居とせず遺物集中域として進め、Bd-19G周辺についてを1号縄文遺構、Bi-15G周辺を2号縄文遺構と呼称している。

砂埃土層上位面で確認された縄文時代中期後半に該当する遺構は、この2ヶ所の遺物集中部（1号・2号縄文遺構）と53号土坑（陥穴）がある。



1号縄文遺構（第62図 PL62）

遺物の量的分布は少ない。径40cm前後の小穴が規則的に並び、この状態からみると半径2.2m程度の円形プランが想定できる。この想定プラン西側に加曾利E3式土器の大型破片が集中して認められる。床面、掘り込み等は確認できない。かについても不明であり、大型破片出土部分に可能性は残すものの確定できない。土器（第62図1）は波状口縁の深鉢で、残存は口縁部1/2程度である。

第62図1・2はいずれも隆帯



第62図 1号縄文遺構と出土遺物

文土器であるが、胎土、色調とも異なり別個体とみられる。1は4単位の波状口縁をなし、口唇部は内側に傾斜し面をもつ。区画文内には縄文が施されるが口縁付近はRL横位、以下は縦位施文となる。2は胴部片で、縄文はRL縦位が施される。

2号縄文遺構（第63図 PL10・62・63・64）

Bi-15Gを中心とする半径2.5m程の範囲に、土器片の集中分布が認められた。この分布は、未調査の東側農道下にもおよんでいる。出土する土器は大形破片が多く、接合率も高い。第63図に示した4個体はその主なものである。出土層位は、第Ⅳ層黒色土層から第Ⅴ層砂壤土層上面に集中して認められ、4個体の土器はほぼ同一レベルで検出された。

これらの土器出土レベルから20cm程下位で、埋設土器が検出されたため、住居の可能性を考え、竈・床・柱穴等の検出に努めたが、明瞭な手がかりは得られなかった。

埋設土器（第67図1）は4単位の波状口縁をもつ隆帯文土器で、底部を欠く他は完形であり、口縁を上にし、やや傾斜した状態で出土している。この部分について平面および半截し掘り方の検出を試みたがその形状は把握できていない。砂壤土層中に存在することから掘り方を不明瞭にしていることが考えられるが、このような埋設状態の不明瞭さも遺物集中部である2号縄文遺構の性格をより不明確にしている。また、埋設土器北東60cmには大型胴部片（第69図6）が出土している。遺存は悪いが埋置されたような状態が看取された。

これらの埋設土器が³としての機能をもつかどうかについてはその痕跡が認められていない。

第67図1（第68図）は4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器で底部を欠損する。波状口縁下に隆帯による渦巻文が施されるが3単位が「の」字状であり、1単位のみ「の」形となる。縄文はRLが用いられるが、口縁付近が横位、以下縦位とし羽状の構成が認められる。第69図6は異東状のRL横位が施される。第69図1は寛形土器の口縁部で橋状把手が付される。

口縁は無文帯で頸部にRL横位が施され、胴部には縦位の条線文が加えられる。第69図3は深鉢形土器の胴部で、縄文はRLが用いられるが施文方位は不規則で条走向が一定しない。第70図1・2は口径45cm～50cm（推定）を測る大型の深鉢形土器で、ゆるやかな波状口縁をなす。口縁部は栴円区画文が施され、以下沈線による懸垂文が加えられる。縄文はいずれもRLが用いられる。

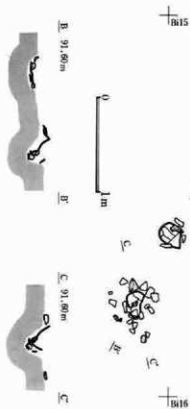
出土土器はここに示した土器をはじめとしてほとんどが加曾利E3式でも新しい段階に位置づけられる。この他に蛇紋岩製の垂飾（第67図2）が1点出土している。



第69图



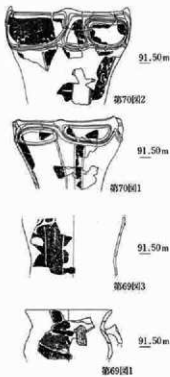
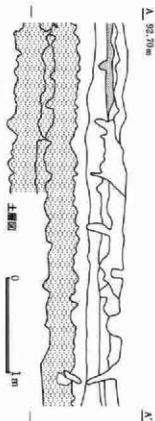
第71图



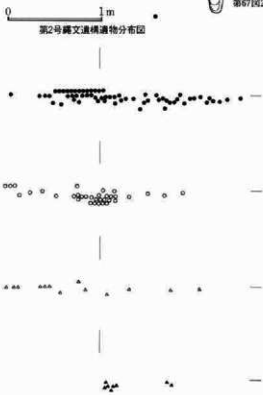
2号縄文遺構埋設土器出土状態



第2号縄文遺構遺物分布図



第63图 2号縄文遺構



出土土器垂直分布

土 坑

検出状況から判断して、53号土坑（第64図）は中期後半の土坑に該当する可能性が強い。土坑検出段階から、「陥し穴」の可能性が想定され、土坑を縦位にスライスしていく調査方法を採用した。

ここでは、以下の理由と目的から土坑を解釈するのに、より有効だと思つた上記の方法を採用して土坑を調査した。

まず、深さ30cmを越す細いピットの形状を正確に把握するには、従来の調査方法では十分に目的を達成できないこと、また、連続使用の有無を分析するには埋没土層と下部構造を連続した状態で観察する必要性があり、これまた、従来の調査方法では目的を達成できないこと、など調査の限界に加え、県内では、村主遺跡や戸神調訪遺跡などで実践例があるだけで、データの蓄積は充分と言ひ難く、同種同様な資料を蓄積する必要を感じていたからでもある。そしてさらに、狩猟体系全般を問う中で「陥し穴」を評価する場合とは違い、「陥し穴」の使用状況や下部構造（施設）を問う場合には上記二点の観察（分析）可能なスライス調査の方が、効力を発揮するといえるだろう。

調査は、通例に従い「陥し穴」の長軸に平行して5cm毎に全体を垂直にスライスしていき、その都度、

図化と写真撮影を繰り返した。33面の土層図が作成され、この土層図を元に平面図を復元した。

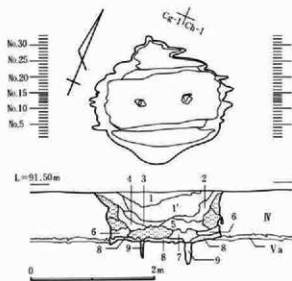
53号土坑（第64～66図 PL20～23）

検出状況 C区中央付近を中心に遺存していた中期後半以後の包含層を調査する過程で検出した。楕円形を呈す平面形態から、この段階で「陥し穴」の可能性が推定され、調査の方法を検討した。

形状と規模 上面では円形を呈し、長軸2.20m・短軸2.00m・深さ0.80mを測る。壁の崩落で本来の形状と違い、若干変形している。下面では長方形を呈し、長軸1.80m・短軸0.80mを測る。

下部構造 坑底を三分割した位置、2ヶ所に10cm～20cmの小ピットを検出した。2基とも坑底より30cm付近でピットの径が半減する。その先端の形状は尖り、棒状の杭を差し込んだ痕跡が残る。

埋没土層 上層には黒色土をベースに砂壤土を若干混入する土層が堆積している。その下層では、より多く砂壤土を混入し、自然埋没状態を示していた。これより下層と壁際には、純層に近い砂壤土が堆積しており、層厚10cm～30cmを測る。壁際で厚く、中央で薄く堆積しており、崩落土と判断されよう。坑



- 1 黒褐色土 暗灰褐色の斑点が多い。
 - 1' 黒褐色土 1層より暗い色調を呈す。
 - 2 黒褐色土 砂壤土を混入。
 - 3 黒褐色土 灰褐色砂壤土を混入。
 - 4 灰褐色土 灰褐色砂壤土を多く混入。
 - 5 灰褐色土 灰褐色砂壤土を4層より多く混入。
 - 6 灰褐色土 灰褐色砂壤土を多量に混入。
 - 7 灰褐色土 灰褐色砂壤土を混入。
 - 8 黒褐色土 灰褐色砂壤土を含む。粘性に富み、締まり有り。
 - 9 黒褐色土
- 網点は砂壤土の崩落土。

- IV 砂壤土 基本土層第5回参照。
Va 黒色土 粘性に富み、縄文早期遺物包含層。

第64図 53号土坑

底の直上に堆積しているⅧ層は、No. 5～20の土層断面に安定して堆積しており、人為的な堆積状態を示していた。2ヶ所のピットの下部には、棒状の杭が腐食したボンボンの黒色土が観察され、その上部には砂壤土を多く含む褐色土が堆積していた。また、土坑壁面には「木の根」の攪乱が無数に観察され、攪乱は壁面の上部ほど多い傾向を示していた。土坑を覆う施設や機能の充実を意図した施設とはいえない状況を、この土坑は示していた。

なお、No. 6～10には、坑底よりピット状に落ち込む黒色土が観察され、下部構造の一部とも推定されよう。調査当時、先入観から意図的に分層している。写真から判断するなら、南側壁面の手前から、この「落ち込み」は存在しており、坑底のピットとは違う、と現在判断している。

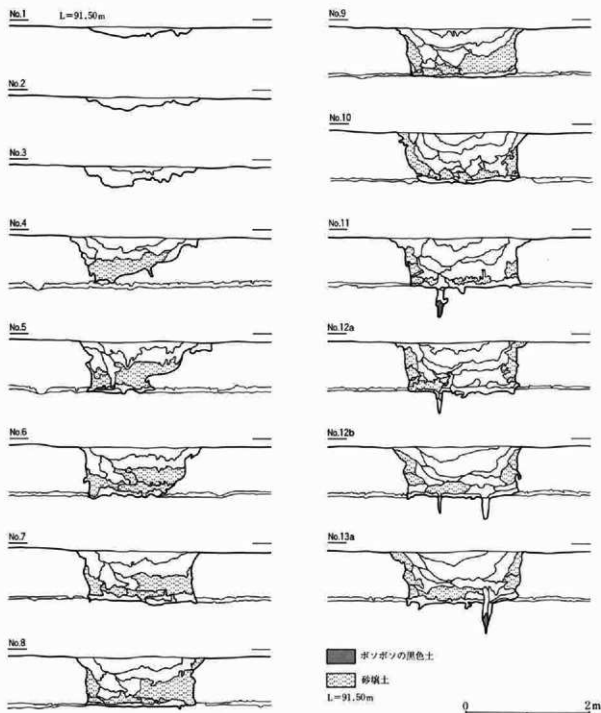
所見 53号土坑から出土した遺物は皆無だが、以下の理由から、ある程度正確な土坑の構築時期を推定することができる。まず、一部の調査地点を除き、調査区内には黒色土と砂壤土が交互に堆積しており、ほぼ同様な堆積状態を示していた。そしてさらに、D区では、下位の砂壤土(Ⅶ)の下層に堆積している黒色土(第Ⅴ層)から早期段階の遺物が、A区やB区では上位の砂壤土(Ⅵ)の下層に堆積している黒色土(第Ⅴ層)から前期後半段階と中期前半段階の遺物が出土したほか、A区～D区の全域で、砂壤土(Ⅵ)の上位部分には中期後半段階の遺物が出土しており、それぞれ黒色土や砂壤土の堆積時期を暗示している。一方、53号土坑は、上層の砂壤土を掘り込み構築しており、砂壤土(Ⅵ)の堆積以後の所産であることが確実で、中期後半以後の包含層を調査する過程で、土坑が位置する周辺からこの中期後半段階の遺物が出土していることから、土坑は中期前半から中期後半に構築され、中期後半の段階には既に埋没していたものと推定される。

このほかにも、「陥し穴」の使用状況や構築理由など、調査を通じ得た所見を指摘しておきたい。「陥し穴」には、ピットの掘り込み面の相違を根拠に、杭の腐食や破損に起因する「差し替え」、「繰り返し

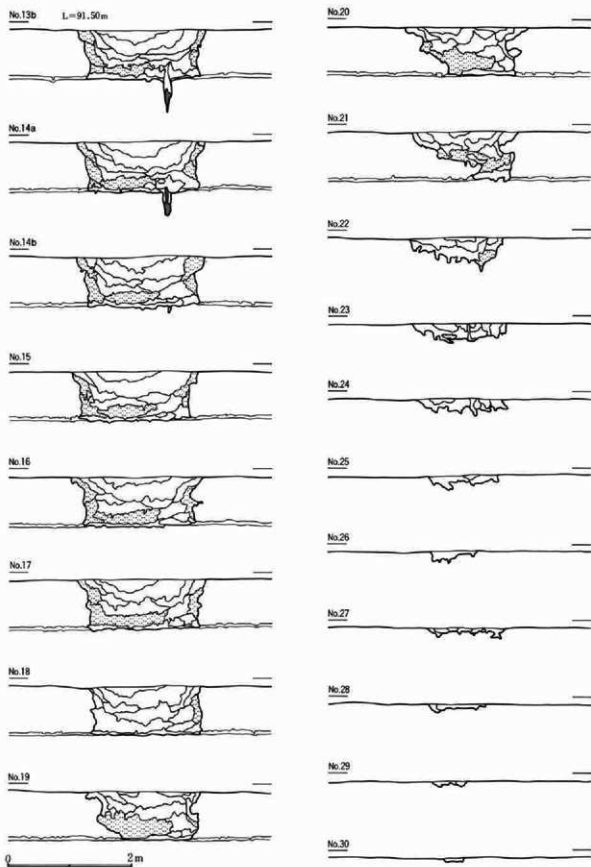
使用」が指摘され(菊地、1987)、さらに、黒色土とロームの交互堆積から「陥し穴」の使用期間まで推定されつつある。調査所見では、そうした「陥し穴」の使用状況や期間を想定させるようなデータはない。次に、「陥し穴」を繰り返し使用する場合、坑底から上の杭は、どの程度まで露出していてその機能を果たすのか、という問題である。53号土坑の場合には、崩落土は中央で薄く、壁際では厚く堆積していた。余り厚く崩落土が堆積してしまえば、機能低下を招き、繰り返し使用する場合、崩落土の除去、面的に均す作業が必要かと思う。村主道跡で検出した8号土坑には、黒色土を挟む3層のロームの崩落土が堆積していた(菊地、1987)。最上層の崩落土は中央で薄く、壁際で厚く堆積する一方、他の2層は均質な層厚を保ち、杭の「差し替え」位置を想定した層位にも一致する。繰り返し使用を想定する場合にも、崩落土が面的に均質なかどうかという点も対象とし、考察すべきだろう。さて、53号土坑の立地理由だが、C区には同様な形態の土坑は未検出であり、一見、台地の中央に単独で位置するようにもみえよう。53号土坑は、この中期後半以後を対象に調査する過程で検出した。と同時に、土坑の東側のCnライン・Coラインには溝状の凹地を検出したのである。この溝状の凹地は北側で深さ40cm・南側で深さ50cmと、南側に緩く傾斜していた。幅は上端で1.5mから2.0mを測る。底面には凹凸が有り、流痕を示す黄褐色の砂質土が堆積して蛇行しており、人為的な所産とはいえない状況を示していた。恒常的に流水していた可能性が強い。53号土坑は、そうした雨の多い時期に集まる動物を捕獲するための構築した可能性が指摘されよう。また、53号土坑は、上述した特徴をもつ溝状の凹地の東側に位置しており、土坑の長軸は等高線に平行して位置する。通常、「陥し穴」は群在、ないし、列状に配置されることが多い。この土坑の場合にも単独で構築したとは思われないのである。調査区内の南側に同種同様の「陥し穴」の存在が予想される所以である。

以上、調査を通じ得た所見を記述した。その結果、スライス調査の有効性を再認識したところである。県内では、「陥し穴」の組織的、体系的な調査事例に窮している。また、赤城南麓では、埋没土層が地山に類似しているため、識別困難な場合が多い。その

ため、資料蓄積も充分ではない。同じ丘陵性の台地でも、比高差のある台地と比高差のない台地と相違しており、そうした地形の相違と土坑の構築時期や形態に差異が指摘されるのかどうか、問題点として是非とも認識しておくべきだろう。



第65図 土層の堆積状態1 (53号土坑)



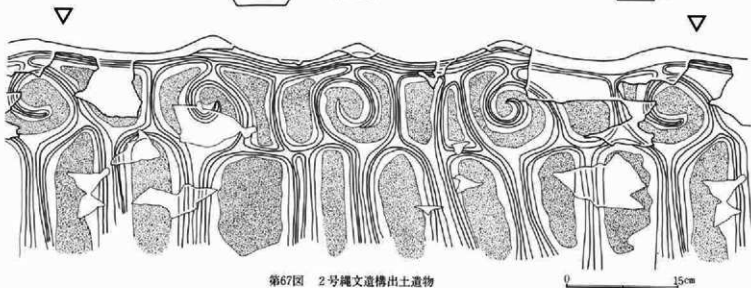
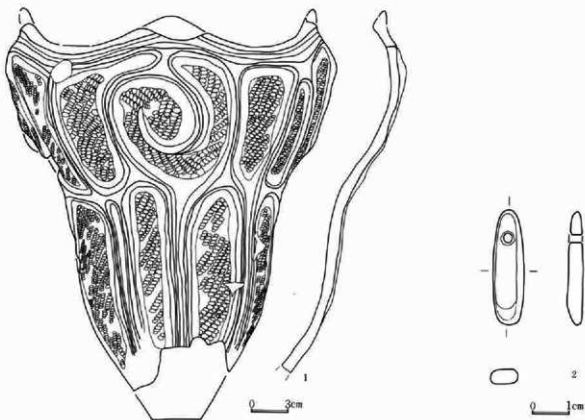
第66図 土層の堆積状態 2 (53号土坑)

c 土器 (第71-78図 PL64-72)

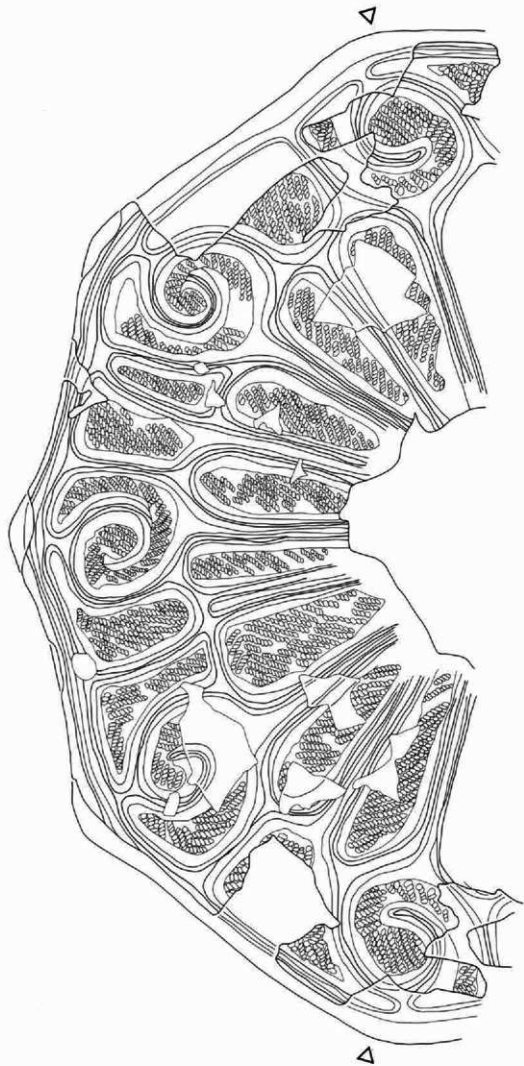
ここには、砂壤土層最上位面およびローム台地上の包含層出土の土器類を一括して報告する。B区のローム台地部には燃糸文系土器、渦磯式土器等も多少混在するが、砂壤土層最上位面はすでに報告してあるように中期前半を埋没し、中期後半以降の生活面もしくは包含層と考えられる。出土する土器は加曾利E3式土器を主としている。その出土の概況は

第61図に示してある。調査区のはほぼ全域に分布は認められ、特にB区およびC区東側に集中する傾向がある。それは両集中部間の希薄となる部分は低位部にあたる関係とみられる。

第71図11・72図・73図はB区、第71図1・3・4・8・10・74図・75図はC区、第71図2・5・6・7・9・76図・77図・78図はD区出土である。



第67図 2号縄文遺構出土遺物



加曾利 E 3 式土器以外では、加曾利 E 4 式土器(第72図10・第78図30)および後期加曾利 B 2 式土器(第71図11・第75図14・第77図15)が出土しているが、いずれも少量の出土である。個々については土器観察表を参照していただきたい。

加曾利 E 3 式土器は大半が新しい段階のもので、数タイプのものが認められる。主体となるのは口縁部文様帯をもつ深鉢で、口縁部に隆帯と沈線で渦巻文と楕円区画文を構成し、胴部には幅広の無文帯を垂下させている。口縁部の隆帯は低平となり、その内側をなぞる太沈線が卓越している。渦巻文は楕円化し、楕円区画文と一体化して描かれるものも多い。口縁部は平縁の他に、山形状の突起が付くものも見られる。胴部無文帯は幅の狭いものも認められるが、無文帯の形成はいずれも充墳手法によっている。また、縄文施文部に蛇行沈線を垂下させるもの(第71図9・第74図12)や、上端がアーチ状に区画されるもの(第71図5)も見られる。

次いで隆帯で大柄の渦巻文を施す深鉢があり、第72図3・4、第73図1・2・10・17がそれにあたる。液状口縁のものも多く、器形は湾曲が強い。口縁部文様帯は消失し、胴部上半に1~2本の隆帯で大柄な渦巻文を構成し、下半には上端がアーチ状に区画された懸垂文を施す。隆帯の両側は太沈線でなぞられ、断面三角形を呈するものもある。2号縄文遺構の埋設土器(第67図1)は、このタイプの好例である。なお、第73図5は隆帯表現を消失した同タイプの土器である。

この他に、口縁部文様帯を消失した新しいタイプの一群がある。第73図4・6・7・9、第77図4・5がそれで、胴部上半に波状文を描き、下半に上端がアーチ状に区画された懸垂文を施して文様を構成する。第73図4・7では、上半の波状文に懸垂文が入り込んで一体化している。口唇部下に沈線をめぐらすものとなないものがあるが、いずれも縄文施文は口唇部下一帯のみを横位に、以下を縦位に施文し、波状を構成する特徴をもっている。

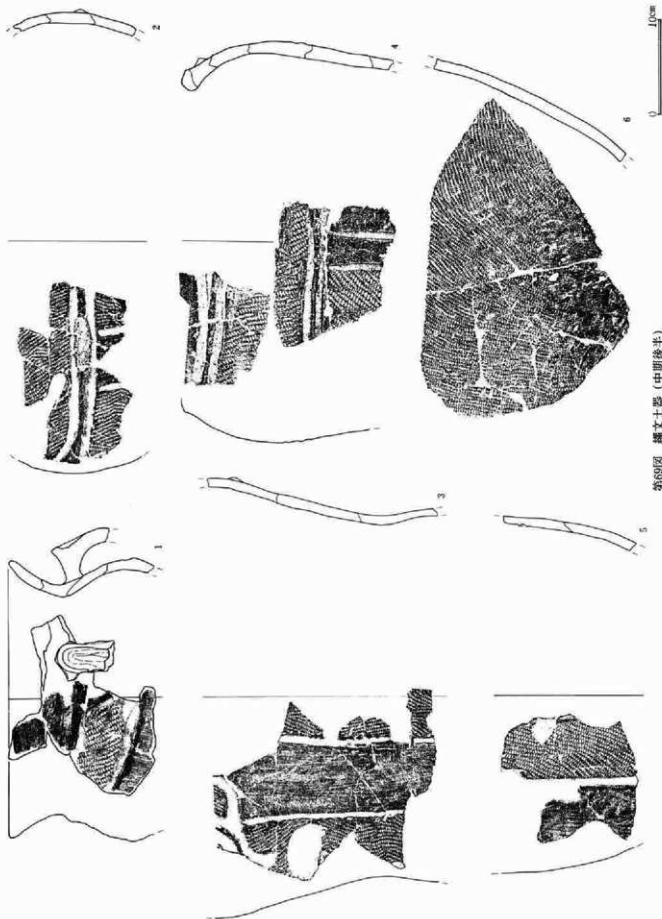
いずれのタイプも地文は単節縄文を主体とする

が、その他に無節・複節・0段3条・前々段反巻などのバラエティも含んでおり、他に条線を施すものもある。なお、第71図8は浅鉢・第74図11・第77図3は鉢形の土器であろう。

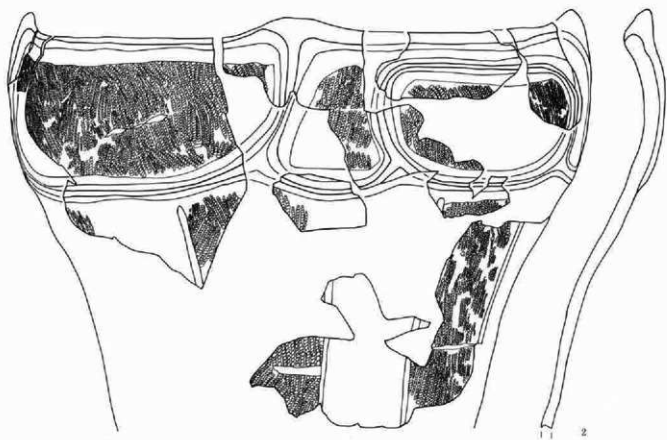
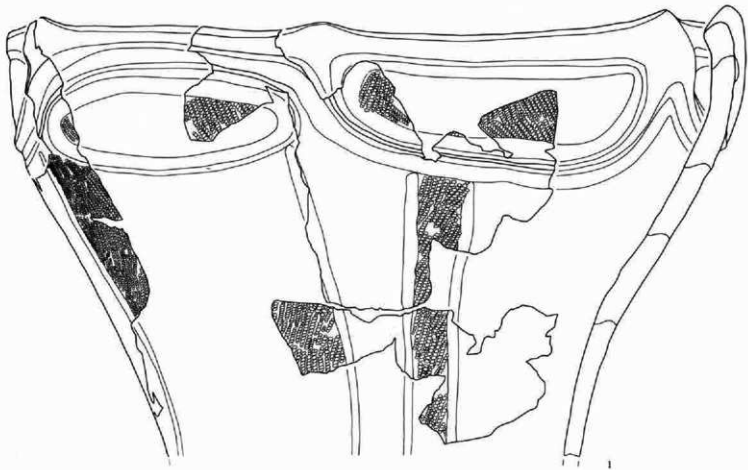
第72図10・第78図30は加曾利 E 4 式土器である。いずれも断面三角形の微隆帯で文様構成される。10は平行する2本の微隆帯で区画文を構成し、区画内に縄文を充填している。30は小さな円文を施しており、微隆帯には刻目が付されている。

第71図11・第75図14・第77図15は加曾利 B 2 式土器である。11は口縁部が強く内湾する壺状の小型土器で、胴部上半に扇状の突出部を伴う縄文帯を施している。14は山形状の突起が付く土器で、口唇部下に刻目を伴う2条の平行沈線を施している。15は角頭状を呈する口唇部の上面と内面に沈線が施され、無文の口唇部下に円形の刺突を伴う隆帯をめぐらし、以下に縄文を施している。

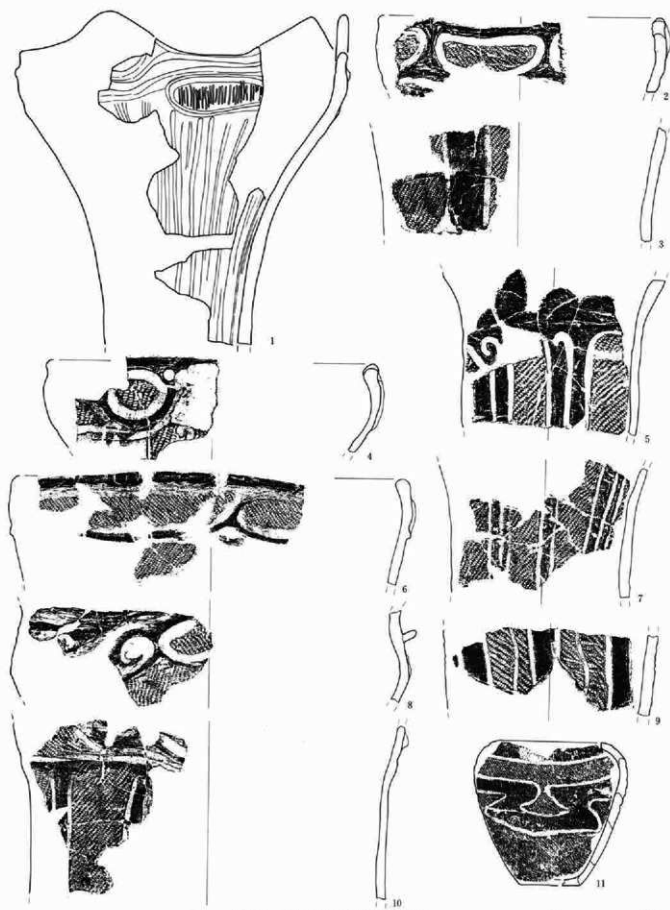
なお、この他に所属時期の不明のものが数点ある。第74図16・17は木目状の沈線を施す土器で、後期に含まれる可能性が強い。18は土器片を楕円形状に加工した土製品で、一端を欠損している。胎土、器厚からみて、加曾利 E 式には含まれない。



第69図 縄文土器 (中期後半)

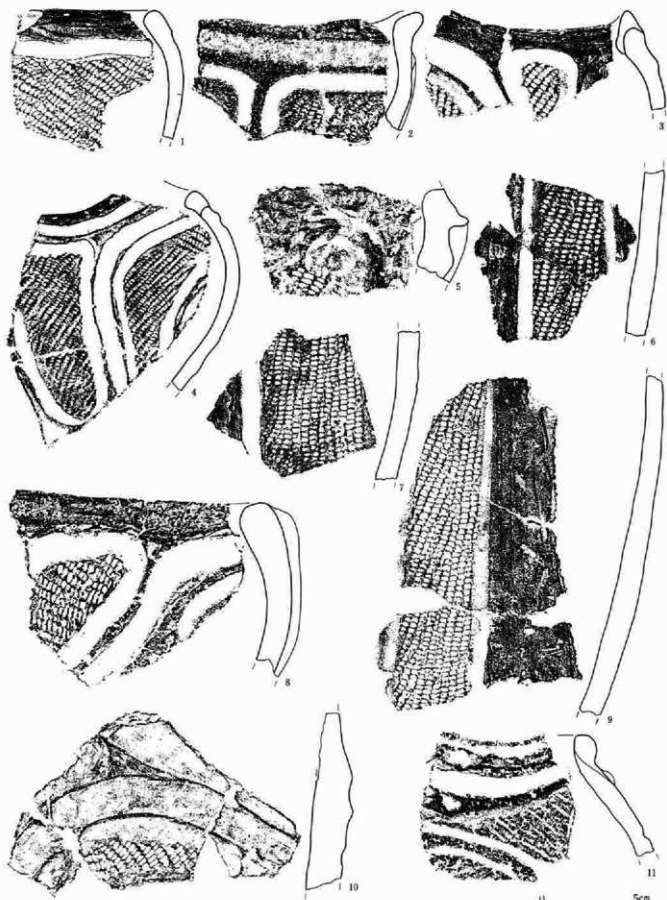


第70回 縄文土器 (中期後半)

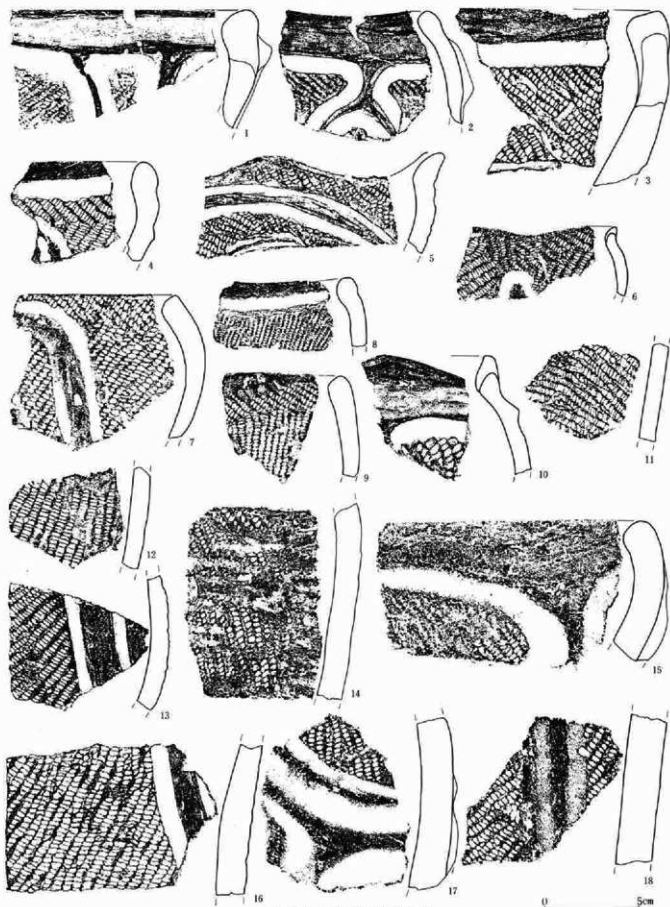


第71図 縄文土器 (中期後半～後期)

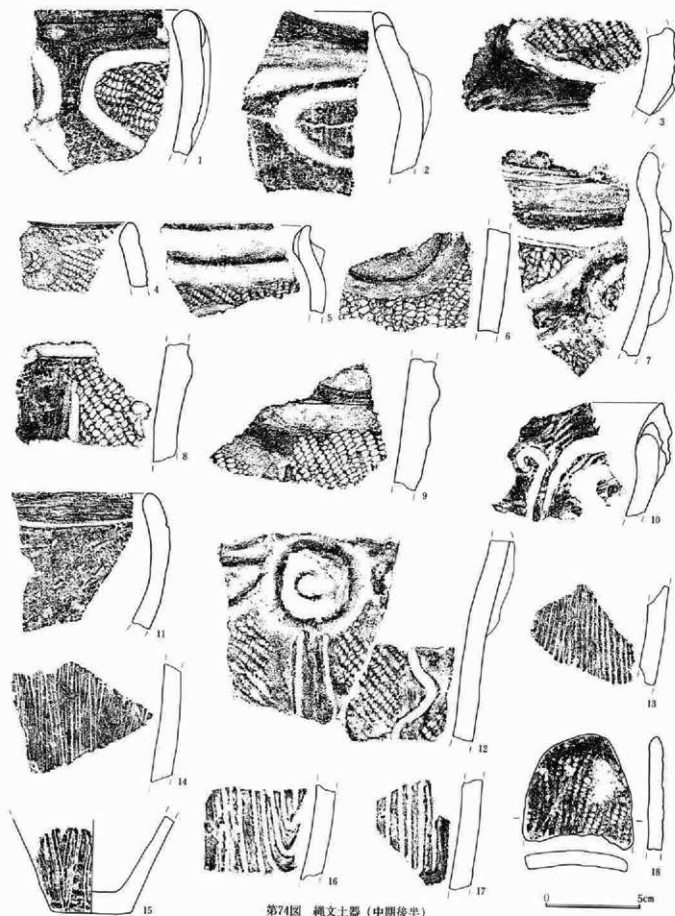
0 10cm



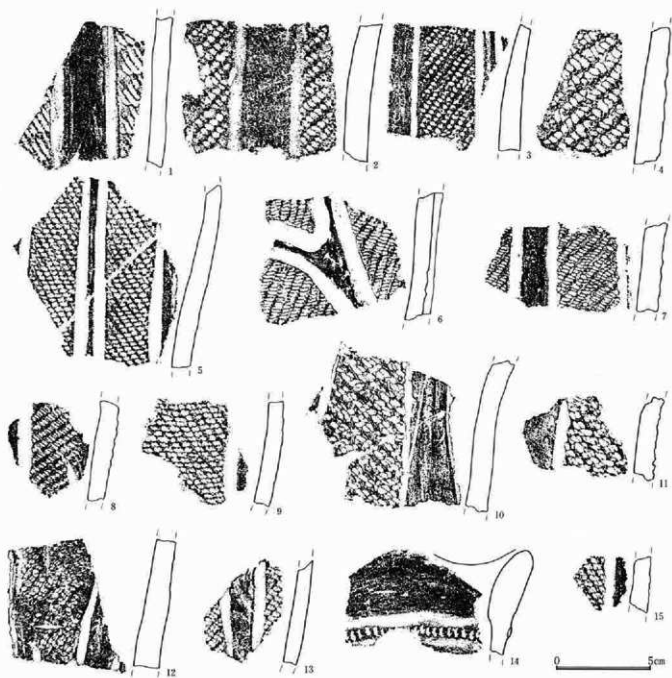
第72圖 織文土器 (中期後半)



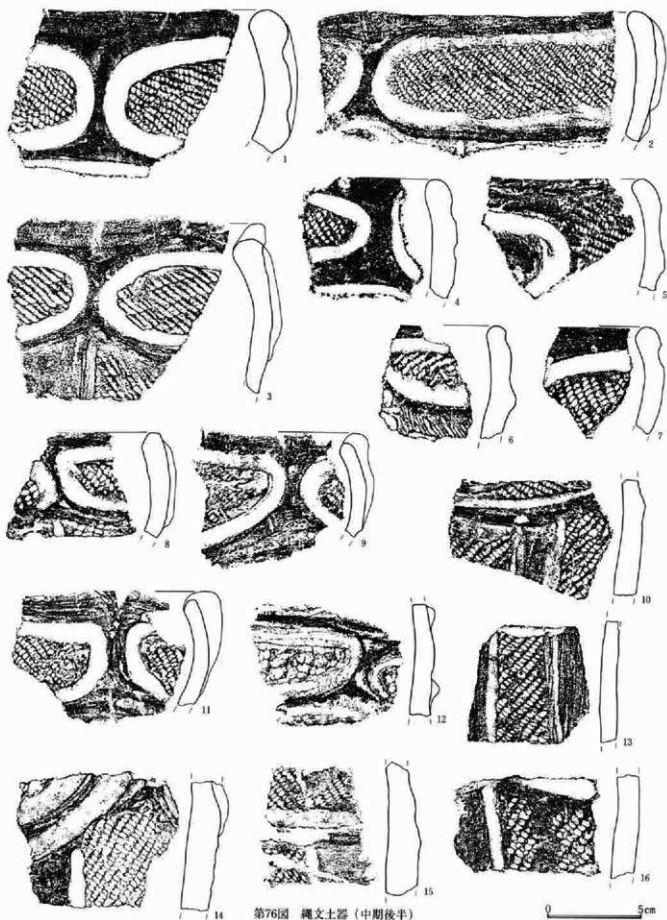
第73図 縄文土器 (中期後半)



第74图 縄文土器 (中期後半)

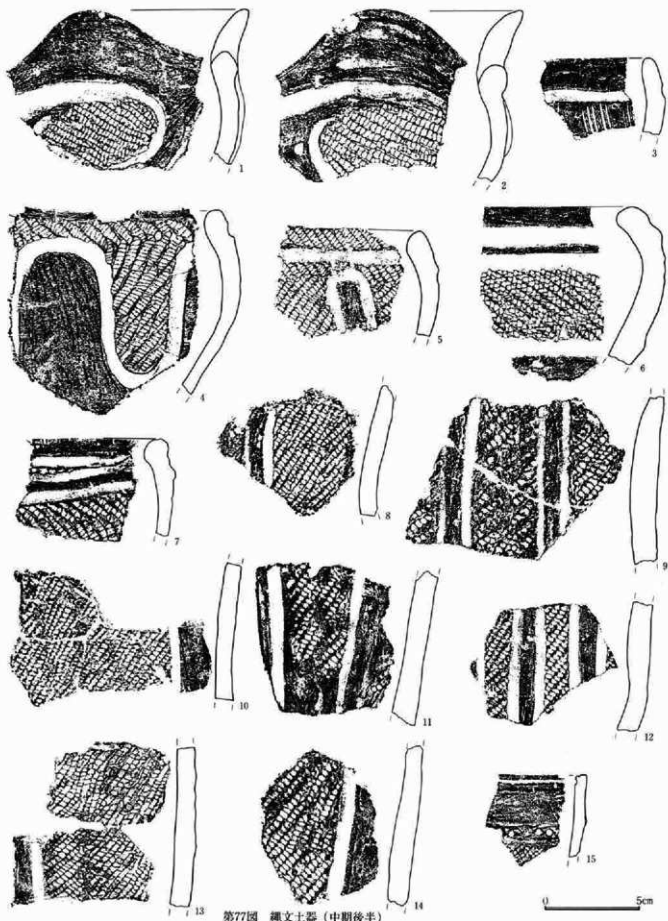


第75圖 縄文土器（中期後半）

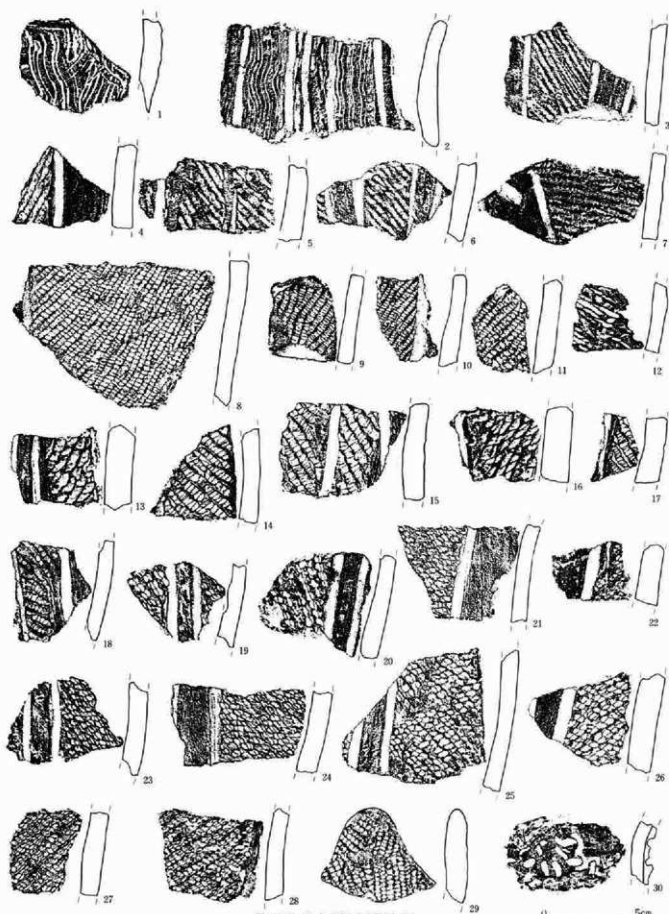


第76圖 繩文土器（中期後半）

0 5cm



第77圖 繩文土器 (中期後半)



第78圖 繩文土器 (中期後半)

0 5cm

d 石器

調査区内にはB区の一部を除き、広範囲に砂壤土が堆積していた。砂壤土は黒色土を挟んで堆積しており、上下2層を確認している。上層の砂壤土の上半は同時に中期後半から後期の包含層であり、この段階の土器と共に石器も数多く出土したのである。

ここでは、こうした理由から砂壤土の上半部から出土した石器を中期後半から後期の石器と認定し、図示した。

なお、B区ではBxラインからBxライン付近まで、砂壤土の堆積が不明確であり、この地点には前期の後半段階の土器や後期の土器も出土しているなど、各段階の石器群が混在している可能性も強い。

出土した石器は総計878点である。その内訳はA区で30点・B区で448点・C区で330点・D区で69点・E区で1点で、B区とC区に多く出土している。石器の組成は区毎に多少の相違が指摘されるものの、打製石斧や石鏃、削器や凹石など加工具が満遍なく存在する。また、D区を除く各区には50%を越す割合で礫が組成するという点も特徴的である。石器石材は黒色頁岩を多く使用する点では周辺の遺跡とも類似する。また、磨石などには在地系石材である輝石安山岩を使用する点も類似している。

石器の分布も特徴的であり、石鏃はB区に、磨石・凹石・敲石など礫類はC区に、偏在する傾向を指摘することができる。一方、打製石斧や削器はB-D区に満遍なく出土している。Bi-15Gの埋設土器を除き、この段階の明確な遺構は未検出である。また、C区には調査区内を南北に蛇行して走る溝状の凹地(PL11)が検出され、こうした地点に多数の土器や石器、礫が出土する傾向が指摘できよう。

石鏃(第79図1-17 第80図1・2・4-6 PL77-78)

石鏃は40点が出土している。形態の内訳は、凹基無茎鏃34点・凸基有茎鏃5点・分類が不能な石鏃1点である。このうち、20点は欠損しており、先端部分を欠損する事例が11点と多い。石器石材は黒色安山岩や黒色頁岩、チャートを使用する場合が多く、

全体の8割を越す。第79図1-12・15、および、第80図1は、やや「抉り」の深い凹基無茎鏃であり、第79図13・14・16・17の4点は、「抉り」の浅い平基鏃に近い形態を示す。第80図2・4-6は凸基有茎鏃であり、この形態の石鏃には黒色頁岩を使用している点で特徴を持つ。

石槍(第80図3・7 PL78)

石槍は2点が出土している。1点(3)は木葉形状を呈し、器体の下半を欠損している。調整加工は平坦な剝離を器体の周辺から施し、部分的に階段状の剝離が存在する。復元するなら、10cmを越す草創期に特徴的な石槍とも推定されよう。1点(7)は柳葉形状を呈し、器体の下半を欠損している。調整加工は粗雑で、一部には第一次剝離面を残す。3は黒色頁岩を、7は珪質頁岩を使用している。

石匙(第80図8-11 PL78)

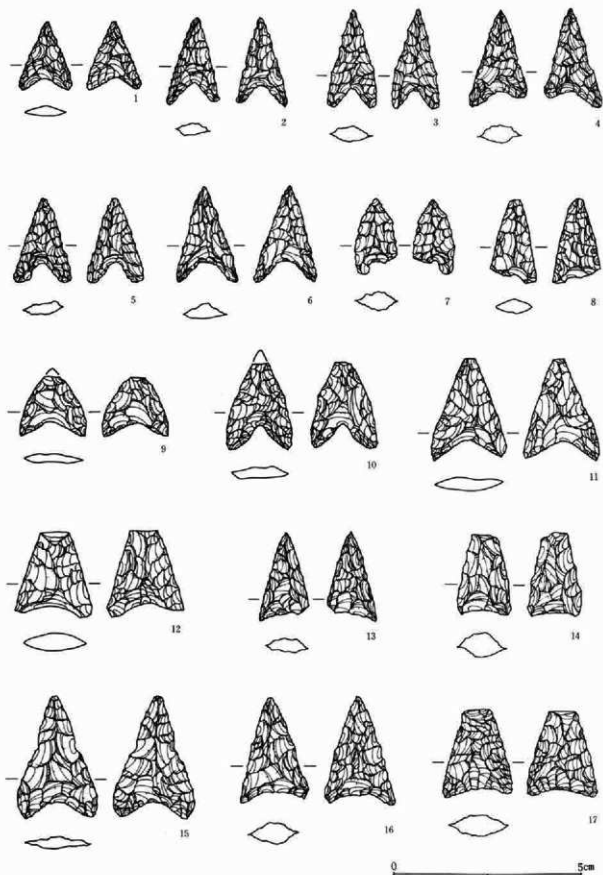
石匙は4点が出土している。素材剥片の周辺に粗く調整を加え機能部を作出する場合が多い。一方、10の石匙は他の石匙と違い、黒曜石を用い、器体の全面に調整加工を施し、石器を作出している。他の3点は周辺加工の粗製石匙ともいえ、黒色頁岩を多用する点で、10の石匙と対比的である。こうした在り方は赤城西麓の遺跡から出土する石匙と類似する。

楔形石器(第80図12 PL78)

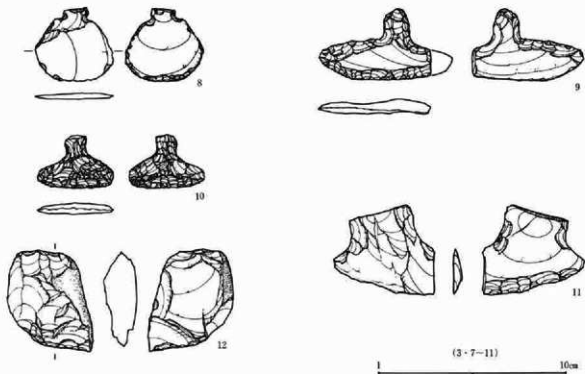
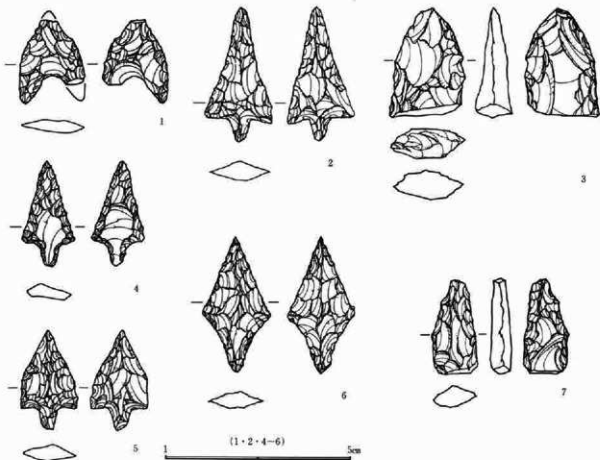
楔形石器は1点が出土している。素材剥片の形状は方形に近く、左右の側縁には礫面を残す。剥片の上下両端の表裏両面には対向する剝離が存在し、上端の縁辺は潰れている。石器の断面形状は紡錘形状を呈す。

磨製石斧(第81図1 PL78)

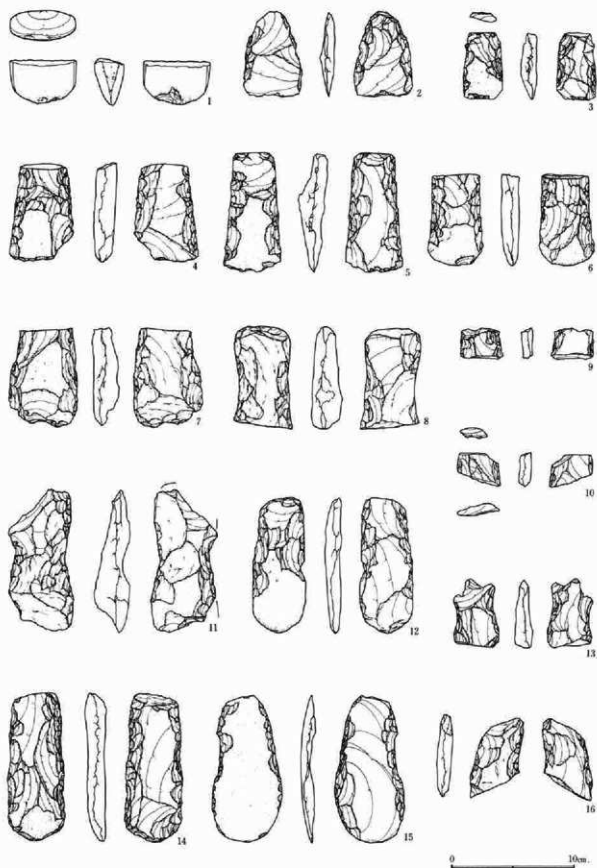
磨製石斧は1点が出土している。器体の全面が丁寧に研磨され、刃部形態は片刃・円刃を呈す。刃部の表裏両面とも、器体の長軸に平行する縁状稜が顕著である。石器の断面は四角形状を呈す。刃部破片。



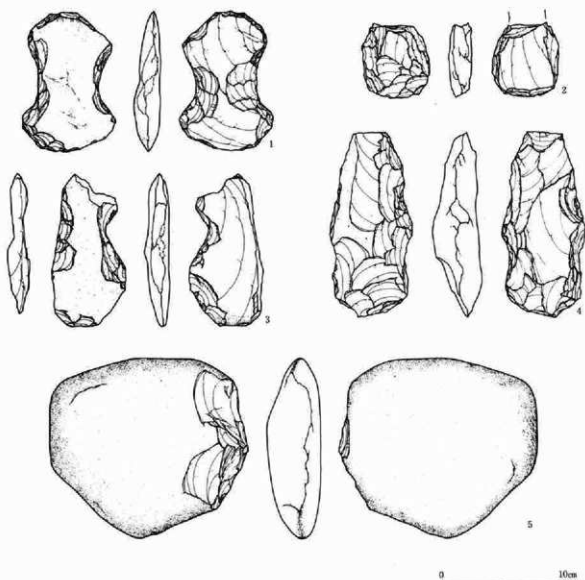
第79図 包含層出土の石器 1



第80図 包含層出土の石器 2



第81図 包含層出土の石器 3



第82図 包含層出土の石器 4

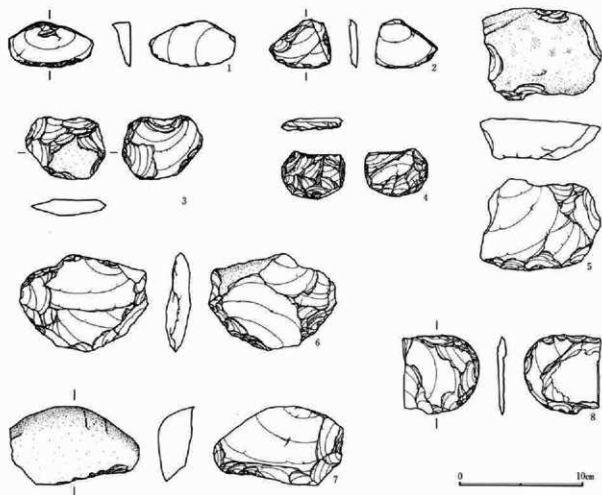
はんれい岩を使用。

打製石斧(第81図 2～16 第82図 1～4 PL.79)

打製石斧は44点が出土している。その分布状況はB区から15点・C区から15点・D区から13点・E区から1点で、C区では調査区の東側に、D区では調査区の南側に分布する傾向を指摘することができる。また、C・D区では古墳時代以後の住居や溝の埋没土層中から出土した打製石斧も多い。石器石材は黒色頁岩を使用する場合が圧倒的に多く、このほか、

黒色安山岩や細粒安山岩を使用している。出土した打製石斧を形態の特徴で分類するなら、短冊形が38点と圧倒的に多く、楔形の石斧(?)は1点、分銅形の石斧は4点出土したのにすぎない。

器体の形状が短冊形状を呈す石斧(第81図 3～16、第82図 4)には、楔形に近い側縁形状を示す資料(第81図 4・5)や側縁が内湾する資料(第81図 6・8・11・13・15)が存在しており、若干形態が相違する。刃部形態は円刃が主体で、直刃も少量だが存在する(第81図 4・5)。素材剥片の形状は礫面を刃部付近



第83図 包含層出土の石器5

に取り込む横長の剥片を多く使用し、こうした剥片の周辺を粗く加工して石器を製作している。全般に欠損する資料が多く、38点中33点が欠損している。

第81図4・6・12・14の刃部は顕著に摩耗している。

器体の形状が楕状を呈す石斧は1点(第81図2)が出土しているのにすぎない。この石器は縦長の剥片を用い、打面付近の表裏両面に調整加工を施し、石器を作出している。刃部形態は直刃で、浅く粗い剝離を表面側から施している。縄文前期の遺跡で良くみかける石器で、いわゆる「片刃石斧」の範疇に属す。側縁の「潰れ」は認定されない。黒色頁岩を使用する。

器体の形状が分銅形状を呈す石斧(第82図1～3)は4点が出土している。素材剥片には横長の剥片を用い、剥片の周辺に加工を施し、石器を作出する。3は、器体の中央で欠損してから加工して、再び、石器に使用している。石器石材も黒色頁岩を多く使

用しており、石器製作や石材使用の在り方は、他の打製石斧に一致している。

片刃石器(第82図5 PL79)

片刃石器は1点が出土している。5は大形で偏平な礫を素材に、小口部分に機能部を作出している。表面側から表面側に向け、粗く加工を施す。加工は左右の側縁に近い部分で深い。黒色頁岩を使用。

削器(第83図1～8 PL80)

削器は、B区から10点・C区から3点・D区から3点と、総計16点が出土している。素材剥片の形状は多種多様で、形状の良好な剥片を石器素材に使用している。刃部の位置は剥片形状に規定され、縦長剥片の場合は側縁に、横長剥片の場合は剥片端部に作出されることが多い。石器石材は黒色頁岩を使用

する場合が多い。このほか黒色安山岩や縞紋安山岩を使用する場合も多少ある。こうした傾向は石斧の使用石材と同様で、周辺地域に多出する剥片石器の製作実態を暗示する可能性があるのかもしれない。

1-4は横長の剥片を石器素材に使用し、剥片の端部に刃部を作出している。刃部は表面から裏面への加工で作出している。5・7は礫面を全面に残す横長の剥片を素材に使用している。刃部を剥片端部に作出している。6は横長の剥片を素材に用い、剥片の端部に表裏両面から粗い加工で刃部を作出している。8は横長の剥片を素材に用い、剥片端部だけではなく、石器の縁辺全体に刃部を作出している。表面全般が剥落している。

加工痕ある剥片(第84図1-12 PL80)

加工痕ある剥片は、B区から13点・C区から7点・D区から3点と、総計23点が出土している。素材に使用する剥片の形態は横長の剥片が多く、削器と同様な傾向を示す。また、刃部も削器の場合と同様に、縦長剥片の場合には側縁に、横長の剥片の場合には剥片端部に作出されることが多い。石器石材は黒色頁岩を使用する場合は圧倒的に多く、黒色安山岩は数点が存在するのにすぎない。加工痕ある剥片には、削器に類似する資料や他の器種から転用した資料、また、製作の目的や意図の不明な資料も多い。ここでは、こうした資料を一括して掲載しており、特に、削器に類似した機能を持つ資料や他の器種から転用した石器を中心に説明していきたい。

2は器体全面に剥離を施す。石器の上下両端(図示した状態)の形状は石槍の側縁に類似しており、石器製作段階での欠損と推察されよう。欠損した後に、右側縁で丁寧に、左側縁で粗く加工している。3は横長剥片を素材に、左右の側縁を粗く打ち欠き、台形に近い形態の石器を作出し、刃部を剥片端部に設定して使用している。6は器体の下半を欠損しており、石器の形状は不明確である。ただ、遺存部分の形状から推定するなら、表面に礫面の一部を残す打製石斧の頭部破片である可能性が高い。また、同

様に、12も打製石斧から転用した石器である可能性が高い。12の上端(図示した状態)には、打製石斧に特有な側縁の「潰れ」が存在しており、最終調整段階で欠損し、その剥片の端部に粗く加工して刃部を作出した可能性が高い。そのほか、5・7・9は長方形の剥片や台形に近い形状の剥片を用い、剥片の端部に刃部を作出し、削器に類似した機能を持つ石器とした可能性が高い。

使用痕ある剥片(第84図13-22 PL80・81)

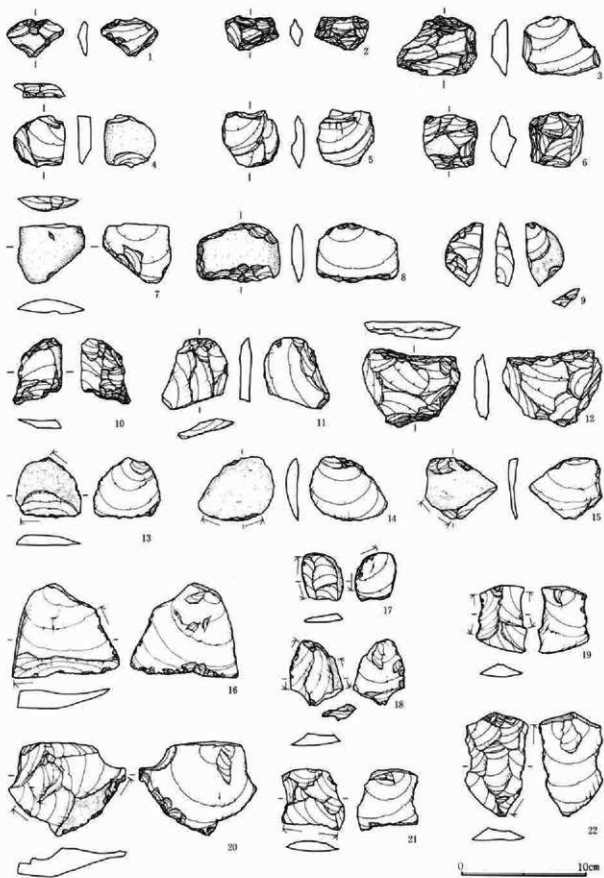
使用痕ある剥片は、B区から14点・C区から7点・D区から4点と、総計25点が出土している。素材に使用する剥片の形状は、横長の剥片を使用するもの16点で、縦長剥片の使用頻度の倍に近い。また、刃部も横長剥片の場合は剥片端部に、縦長剥片の場合は左右の側縁に設定されることが多い。石器石材は黒色頁岩を使用する 경우가多く、黒色安山岩の使用頻度は概して少ない。

13-16は、台形に近い横長剥片を用い、剥片端部を刃部を使用している。13・16の刃部は直線状を、14の刃部は弧状を呈す。13-15は表面に礫面を残し、剥離工程の初期段階に作出した剥片を石器の素材に用いている。17-19・22は、縦長剥片の側縁を刃部に使用している。背面を構成する剥離の方向は剥片を剥離する方向に一致する。20・21は、横長剥片の剥片端部を刃部とし、形状の整う部分を選択して刃部に使用している。

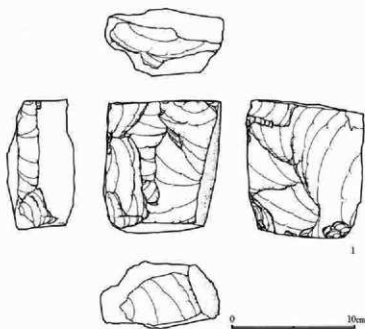
石核(第85図1 PL81)

石核は7点が出土している。全体に大形の剥片を石核素材に使用する板状石核や打面を固定することなく剥片を剥離していく大形の石核が多い。板状の石核の場合、剥片の剥離枚数は概して少なく、2枚前後の剥片を剥離した段階で放棄してしまうことが多い。

1は側面に礫面を残す大形石核で、表面で4枚の剥片を、裏面で2枚程度剥片を剥離している。どの部分でも連続して剥片は剥離されない。



第84図 包含層出土の石器 6



第85図 包含層出土の石器7

磨石(第86図1・2 PL81)

磨石はB区から1点・C区から1点、総計2点が出土している。この段階の石器組成の在り方から推察するなら、出土量は概して少ない。住居や土坑が検出されない、ということに関連する可能性があるのかもしれない。1は、大人の掌に入る程度の礫を使用する。左右の側縁は敲打で抉れ、掘り易い。礫の表裏両面は顕著に摩耗している。また、礫の小口部分や側縁には打痕が著しい。輝石安山岩製。2は、楕円形に近い礫を用いている。石器の表裏両面とも顕著に摩耗しているほか、礫の小口部分や礫の表裏両面には打痕が著しい。欠損部分の観察から、石器は熱で破損した可能性が高い。

石皿(第86図3 PL81)

石皿は、B区から1点が出土したのにすぎない。石器は偏平な礫を用い、表裏両面とも摩耗している。凹部も顕著ではなく、典型的・定形的な石皿とは違い、また、重量は別にサイズの面で器種認定の問題が残る、判断には窮した。ここでは、摩耗していること、表面に僅か凹部を形成していることから石皿と認定した。なお、側縁には僅かな打痕が確認され、

第87図5に類似する可能性がある。

凹石(第86図4 第87図1・2・4 PL81)

凹石はB区から4点・C区から8点・D区から1点が出土している。凹部が顕著でV字状を呈す資料3点、凹部が顕著ではなく、打痕が集中する資料が10点で、後者が圧倒的に多い。サイズは掌に入る程度である。粗粒安山岩を多用する。4は表面側に1ヶ所、裏面側に2ヶ所のV字状の凹部を持つ。第87図1は表裏両面と左右の側縁に1ヶ所のV字状の凹部を持つ他、礫の小口部分にも凹部を持つ。2は表裏両面とも石器の上端に近い位置に集合打痕が存在している。4は表面に2ヶ所と礫の小口部分に集合打痕を持ち、同時に、表裏両面とも摩耗している。

敲石(第87図3・5 第88図1・3 PL81)

敲石は、B区から2点・C区から5点・D区から1点が出土している。3は楕円形に近い形状の偏平礫を用いている。礫の小口および側縁に打痕が観察され、使用した結果、小口部分は剥離している。また、表裏両面は顕著に摩耗しており、磨石にも使用している。使用して欠損したのか否か不明だが、器体の下半を欠損する。閃緑岩。5は楕円形に近い形状の偏平礫を使用しており、その側縁には顕著な集合打痕が存在している。また、石器表面全体が摩耗しており、磨石にも使用している。粗粒安山岩。第88図1は円礫を用い、礫の表面や側縁に打痕が存在する。器体の右半を欠損する。3は粗粒安山岩を使用した敲石で、礫の小口部分に打痕が存在するほか、使用した結果、側縁の一部は剥落している。

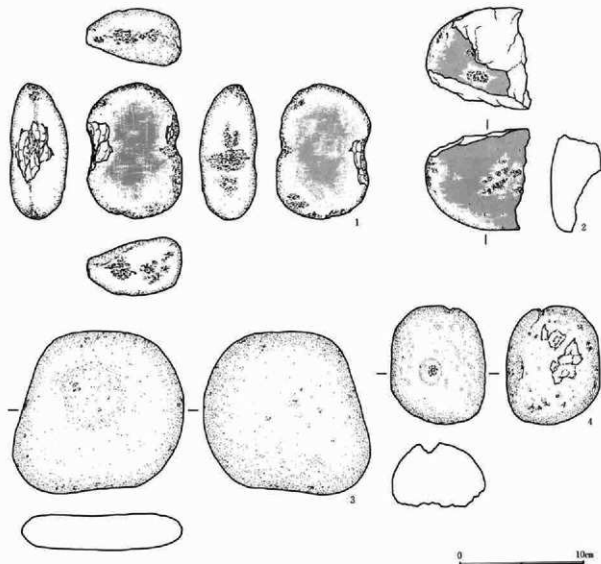
多孔石(第88図2・4 PL81)

多孔石はB区から1点・C区から1点が出土して

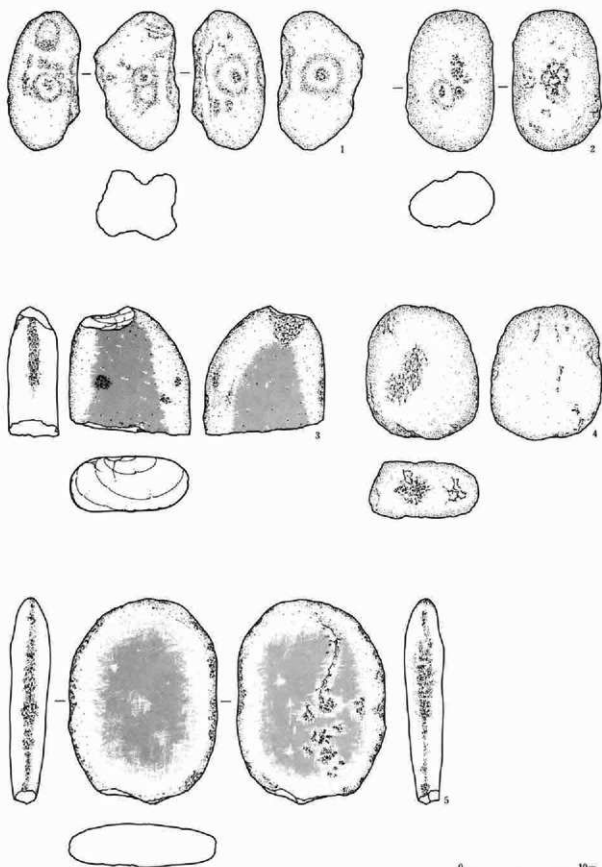
いる。C区から出土した1点(2)は、掌に入る程度の小礫を素材に、表面側に3ヶ所・裏面側に5ヶ所・左側面に3ヶ所のV字状の凹を形成している。粗粒安山岩。B区から出土した1点(4)は、大形礫を素材に、表面側に10ヶ所・左側面に8ヶ所のV字状の凹を形成している。全体に摩耗しており、欠損の有無は確定できない。ただ、凹部の位置関係から推定するなら、右半部、および、下半部には凹部が存在していないなど不自然であり、この部分を欠損している可能性もある。粗粒安山岩。

砥石(第88図5 PL81)

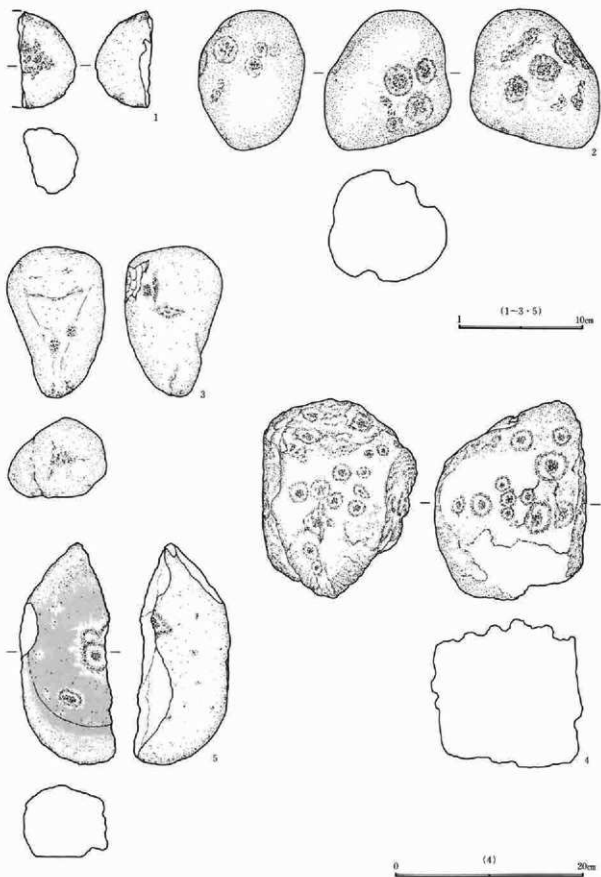
砥石は、D区から1点が出土したのにすぎない。石器表面には広く平坦な研ぎ面が形成され、この部分は顕著に摩耗しているほか、裏面も若干摩耗している。表面は直線的な、裏面は弧状に近い断面形状を示す。石器右半が欠損しているため、全体形状は明確ではない。なお、石器の表裏両面には凹部が存在しており、意識したものなのかどうか明確ではなく、また、石器の帰属時期も不明確である。D区には奈良・平安段階の遺構も多く、この段階の砥石である可能性も否定できない。粗粒安山岩。



第86図 包含層出土の石器8



第87図 包含層出土の石器9



第88図 包含層出土の石器10

A区 石器組成 (30点)

①	割片 23.3%	②	礫・礫片 66.7%
---	-------------	---	---------------

①

- ①・石 鏝 3.3%
- ②・砕 片 6.7%

石 材

粗粒安山岩 63.4%	黒色頁岩 13.4%	①	②
----------------	---------------	---	---

- ①・細粒安山岩 6.7%
- ②・チャート・黒色安山岩・砂 岩
・珪 岩・文象斑岩 各 3.3%

B区 石器組成 (448点)

①	②	割片 11.1%	砕片 11.1%	③	礫・礫片 55.8%
---	---	-------------	-------------	---	---------------

- ①・石 鏝 6.4%
- ②・石 鏝 0.2%
- ③・楔形石器 0.2%
- ・片刃石器 0.2%
- ・加工痕ある割片 2.9%
- ・石 核 0.5%
- ④・礫 石 0.5%
- ・石 皿 0.2%
- ・多 孔 石 0.2%
- ・石 匙 0.7%
- ・打製石斧 3.3%
- ・削 器 2.5%
- ・使用痕ある割片 3.1%
- ・磨 石 0.2%
- ・門 石 0.9%

石 材

粗粒安山岩 53.4%	黒色頁岩 24.2%	①	④
----------------	---------------	---	---

- ①・黒色安山岩 5.6%
- ②・頁 岩 3.1%
- ③・チャート 2.2%
- ④・細粒安山岩 1.3%
- ・黒 曜 石 1.1%
- ・珪質頁岩・はんれい岩 各 1.0%
- ・砂 岩・石英閃緑岩・珪 岩
- ・実質安山岩・輝 緑 岩・雲母石英片岩
- ・珪質実質岩 各 0.7%
- ・実質玄武岩・ホルンフェルス・文象斑岩
- ・点紋頁岩・流 紋 岩・閃 緑 岩
- ・溶結凝灰岩 各 0.2%

C区 石器組成 (330点)

①	割片 12.1%	②	礫・礫片 63.3%
---	-------------	---	---------------

③

- ①・石 鏝 1.5%
- ・石 匙 0.3%
- ・打製石斧 4.5%
- ・加工痕ある割片 2.2%
- ・石 核 0.6%
- ②・砕 片 7.3%
- ③・礫 石 1.5%
- ・門 石 2.4%
- ・石 皿 0.3%
- ・磨製石斧 0.3%
- ・削 器 0.9%
- ・使用痕ある割片 2.2%
- ・磨 石 0.3%
- ・多 孔 石 0.3%

石 材

粗粒安山岩 67.3%	黒色頁岩 16.4%	①	④
----------------	---------------	---	---

- ①・頁 岩 4.9%
- ②・黒色安山岩 3.0%
- ③・チャート 2.7%
- ④・珪質頁岩・はんれい岩・実質玄武岩
・砂 岩・石英閃緑岩・閃 緑 岩 各 0.6%
- ・黒 曜 石・灰色安山岩・細粒安山岩
・ホルンフェルス・輝緑凝灰岩
・珪 岩・輝 緑 岩 各 0.3%

D区 石器組成 (69点)

①	打製石斧 19.0%	②	割 片 30.5%	砕 片 13.1%	③
---	---------------	---	--------------	--------------	---

- ①・石 鏝 8.7%
- ②・削 器 4.3%
- ③・礫 石 1.4%
- ・打製石斧調整割片 5.8%
- ・加工痕ある割片 4.3%
- ・使用痕ある割片 5.8%
- ・石 核 4.3%
- ・門 石 1.4%
- ・砥 石 1.4%

石 材

黒色頁岩 55.2%	黒色安山岩 11.6%	①	②
---------------	----------------	---	---

- ①・灰色安山岩・細粒安山岩・頁 岩
- ②・粗粒安山岩
- ③・チャート・砂 岩
- ・玄武岩 1.4%
- 各 5.8%
- 各 4.3%

第10表 石器の器種・石材組成表(包含層)

(5) 陥穴

この土坑は楕円形の平面形を示し、坑底部に下部施設をもつ形態的特徴をもち、陥穴としての機能が与えられている一群である。

また、調査法についても、土坑の埋没状況、下部施設の構造等を分析する目的のもとにスライス法も採用され、その成果も公表されている。

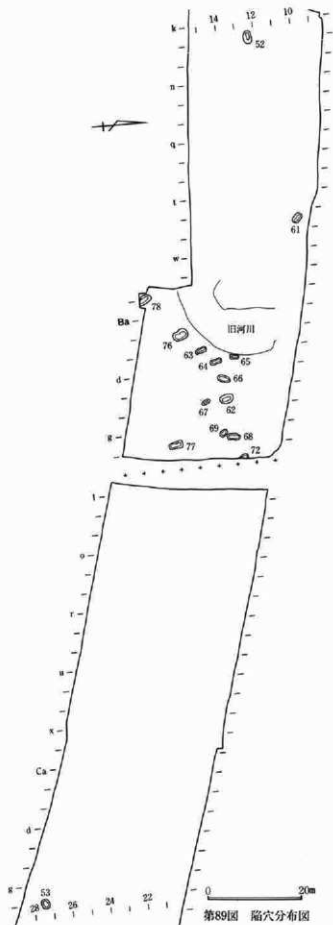
今回の発掘調査によって、計15基の陥穴が確認されたが、調査については次のような方法をとるものとした。

遺構平面プランの確認後、単軸方向を半載し埋没土層を記録後、全掘する。坑底面の精査を行い、棒状痕もしくは小穴の存在を確認し、その延長線土坑長軸方向に沿って陥穴全体を半載する。この段階で下部施設の再確認および断面記録を行う。これは、坑底下における下部施設の調査に主眼をおくもので、これまでの調査例や今回の例によっても明らかのように残される棒状痕、小穴が細く、深いため底面上での確認、掘り上げという方法では遺構本来の形態が把握できないという判断による。

本来的には陥穴の使用状態、構造等を明らかにするためには、スライス法による遺構観察を行うべきと考える。今回の調査に際しても全ての陥穴とみられる土坑について実施したかったが、主として調査工程上の問題からこれを断念せざるを得ず、ここに示す調査法となった。ただ、C区に1基確認した53号土坑のみについてスライスによる調査を実施している。その目的、方法、得られた成果については74～77ページに報告している。

陥穴はその使用時期について有効な情報を通常もっていない。この遺跡の場合は砂壤土性台地に立地することから、特徴的な埋没状況を示し複数の文化層を含んでいる。A・B区旧流路縁辺に集中する陥穴群については、この砂壤土層との関係から前期後半から中期前半にその時期が推定される。

なお、出土土器等により時期が限定できる陥穴については、それぞれの時期に伴うものとして報告しており重複するが、ここでは陥穴群として一括する。



第89図 陥穴分布図

67号土坑 (第90図 PL13)

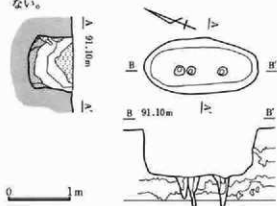
位置 Bf-16G

規模 開口部 1.9×0.9m, 底部 1.6×0.6m

深さ 0.7m, 底部面積 0.8m²

埋土 土坑下半は砂壤土、ロームを含む崩落土が認められ、上半に灰褐色土、砂壤土混入土がレンズ状堆積する。

下部施設 坑底面には小さな凹みが多数みられる。一見棒状痕に類似するが、土坑掘削に伴う痕跡であり、棒状痕は長軸に沿って3ヶ所確認できた。内2ヶ所は接した位置にあり、もう1ヶ所との間隔は60cmである。3ヶ所とも小穴をもち、径20cm程度、深さは北側小穴で35cmとやや浅く、他2ヶ所は50cmの規模をもつ。棒状痕はやや不明瞭ながら各小穴に1本ずつ観察される。土層断面からは、小穴内に棒状埋設物が設置され、その周囲にロームを主とした土を埋め固定した状態が看取された。しかし、棒状痕とみられる痕跡が不明瞭のため、形状、大きさ等確定しにくい。ただ、深さ50cmをもつ小穴2ヶ所では、小穴底部にまで棒状痕とみられる痕跡が達していないように観察されたが、この状態は南側小穴においてより明瞭であった。この部分で観察すると棒状痕は径10cm、長さ30cmと計測される。北側の浅い小穴は断面観察では接する小穴と重複関係をもつとみられたが、埋土を除去すると両穴壁面が残っており直接切り合うものではないことが確認された。この2小穴が同時に存在したのか、時間的前後関係をもつものかという点は調査所見では検証できていない。



第90図 67号土坑

69号土坑 (第91図 PL13)

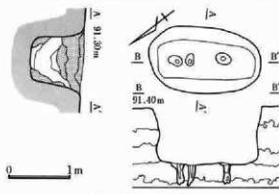
位置 Bg・h-15G

規模 開口部 1.8×1.0m, 底部 1.6×0.6m

深さ 0.9m, 底部面積 0.9m²

埋土 崩落土、流入土ともローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土により埋没する。砂壤土の堆積は認められない。

下部施設 坑底面の精査により、小穴が3ヶ所確認できた。南側に1ヶ所、北側に接して2ヶ所存在する。最も北側の小穴と南側小穴との間隔は80cm、北側の2穴接する小穴は15cm程度の間隔がある。坑底部の断面調査により、3ヶ所とも小穴を掘った後、棒状埋設物を設置し、ロームを主とする埋め戻しが行われ埋設物を固定した状態が観察されている。掘り方となる小穴は径10cm程度、深さは35cmと3ヶ所ともほぼ同様の規模をもっている。棒状痕はそれぞれ小穴中央付近に認められるが、棒状埋設物自体は残存せず、この部分に土粒の極めて粗い、軟弱な暗褐色土が明瞭に観察されている。坑底部1面のみの断面観察であるため、棒状埋設物の大きさおよび小穴内における状態は確定できないが、この面では径4cm程度で、埋設深は小穴下部に達するようにみられる。先端部の形状は不明である。3ヶ所認められた各小穴が、この陥穴において同時に使用されていたか、もしくは時間的前後関係をもつかについては、有効な情報が調査所見からは得られていない。ただ、今回の調査例では、2ヶ所が主体であり、3ヶ所の施設をもつ例は確認されず、各陥穴とも一定の規格性が看取される点からみれば、この陥穴で確認され



第91図 69号土坑

た北側に接して存在する2小穴にも前後関係があるように考えられる。さらに、小穴規模の類似性は、連続的に設定、使用されたことを示している可能性も考えられる。

76号土坑 (第92図 PL14)

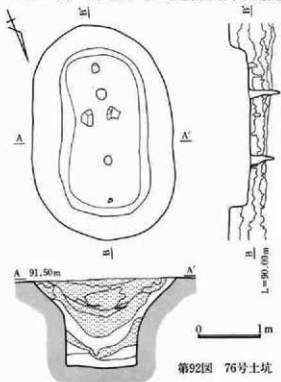
位置 Bb-16・17G

規模 開口部 3.4×2.3m, 底部 2.4×1.1m

深さ 1.4m, 底部面積 2.5m²

埋土 下層には暗褐色粘質土が堆積し、その上層は砂壤土を主とした崩落土および流入土が埋没する。浅鉢形土器 (第56図-1) は、第Ⅳ層の砂壤土の流入土中に含まれている。

下部施設 坑底面の精査により棒状痕が2ヶ所確認できた。間隔は約100cmである。断面観察により、両者とも掘り方である小穴は認められず、棒状埋設物が直接坑底部に打ち込まれたような状態を示していた。北側棒状痕は、径10cm前後、坑底下埋設深40cmで、下部先端が尖っている状態が認められる。南側棒状痕は、径5cm前後、埋設深は55cmと北側部と比較すると細く、深い。下部先端は細くなり、やはり尖っている状態がみられる。2ヶ所とも棒状埋設物自体は残存せず、土粒の粗い黒色土もしくは灰黒色



土が存在し、その形状は明瞭に把握えられる。

52号土坑 (第93図 PL14)

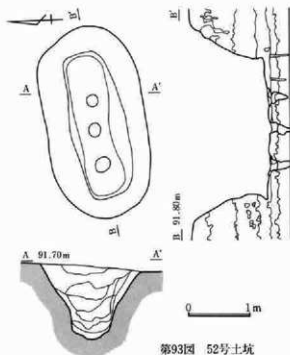
位置 Ak-12G

規模 開口部 3.0×1.6m, 底部 2.2×0.5m

深さ 1.1m, 底部面積 1.2m²

埋土 ローム台地上に位置し、砂壤土の堆積は認められない。ローム粒、ロームブロックを含む黒褐色土、暗褐色土の崩落および流入土が堆積する。

下部施設 坑底面の精査により多数の小穴が認められた。いずれも浅く、形状も不規則なものであり、下部施設に伴う痕跡とは認められなかった。今回調査した陥穴のうち、最初に着手した陥穴であり、坑底部半截前にこのような小穴を坑底面から調査している。その後、坑底部の半截を行なった。断面観察により当初底面として小穴状の凹を調査した面は、本来の坑底面上に堆積する褐色土 (ロームを主として含む) の堆積面であることが確認された。下部施設は3ヶ所存在し、50-60cmの間隔をもつ。痕跡は、ローム層中に明瞭に区別できるが、棒状痕とみられる部分には灰黒色、灰褐色粘質土が堆積し、一部に土粒の粗い軟弱な黒褐色土が観察された。小穴は径15cm、深さ35cm程度である。



77号土坑 (第94図 PL15)

位置 Bh-17・18G

規模 開口部 2.9×1.2m, 底部 2.6×1.1m

深さ 1.2m, 底部面積 2.4m²

埋土 陥穴下層には、ロームブロックもしくは砂壤土を含む崩落土が堆積し、上層にロームを主とする褐色土が覆っている。

下部施設 坑底面の精査により計6ヶ所の下部施設に伴う棒状痕もしくは小穴を確認した。この痕跡は径10cm程度で、陥穴長軸に沿って3ヶ所ずつ、2列に規則的に並ぶように観察された。両列は極めて接近した位置にあるが、上面でみる限り重複はしておらず、いずれの痕跡もほぼ円形の平面形を保っている。また、坑底面は凹凸が著しく、一見すると棒状痕ともみえるような状態を示している。

坑底部の断面調査は、この確認状態に応じて列ごとに実施している。ここでは、調査手順の関係から坑底部西側に並ぶ棒状痕をA列とし、その東に接して並ぶものをB列としている。

A列は、70~80cmの間隔をもって配置されている。棒状埋設物自体は残っていない。土粒の粗い軟弱な土層がほぼ垂直に観察された。ただ、下半部は粘質

の黄白色土が連続して認められており、この部分も含めて棒状痕として理解できるか断定し得ない。調査所見では、掘り方に伴う埋土として理解していたが、上半部の棒状痕とみられる部分は、特に掘り方の痕跡は認められず、棒状埋設物が直接坑底部に埋置された状態を示している。その場合、下半部のみ埋土とすることがあるのだろうか。上半部と下半部の土層差は明瞭であり、自然的要因も関連するかもしれないが、ここでは確定できない。

B列も、70~80cmの間隔をもって配置されている。やはり棒状埋設物自体は残っていない。B列は掘り方である小穴を伴っている。小穴は径15~20cm、深さ60cmの規模をもち、粘質黄白色土が埋土されている。この埋土は、A列の下半部に認められた土と同種と観察された。棒状痕は、この小穴中央部に認められ、やはりA列上半部の土粒の粗い土と類似する。棒状痕は、径5cm前後、55cm程度の埋設深をもち、小穴下部にまで達していない。

棒状埋設物の下部の形状は明瞭でないものの、A列南端部については、断面観察により尖ったものであることが認められている。

また、A列・B列とも小穴下端において地層のずれによる切断が断面により観察されている。標高でみると90.15m付近、暗色帯相当層中に認められる。B列では、さらに明瞭に端部が切断され、約10cm程度ずれを生じている。なおA列北端部小穴については深度が差しておらず、ずれは生じていない。

他の陥穴例については認められていない。

72号土坑 (第95図 PL19)

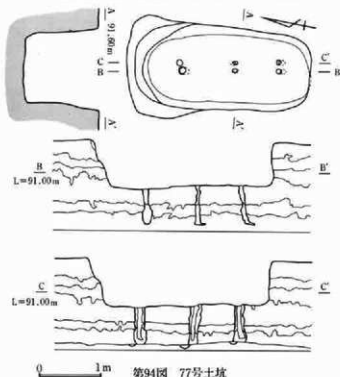
位置 Bj-14G

規模 開口部 2.2×1.0m, 底部 2.0×0.8m

深さ 2.8m, 底部面積 1.0m²

埋土 土坑の下半は、ロームブロック、ローム粒を含む暗褐色土が堆積し、その土層を砂壤土が覆っている。断面観察から、この陥穴の掘り込み面は、上面を覆う砂壤土下の灰褐色土層中とみられる。

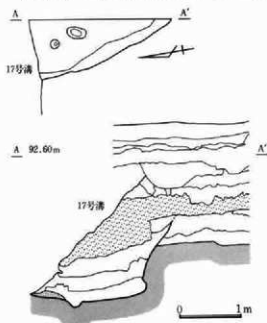
下部施設 陥穴北半部は17号溝により切れ、さらに東半部は農道下にあたり未調査となっている。陥



第94図 77号土坑

穴のおよそ4分の1程度を検出したにとどまったことになり、下部施設を含め全容は不明である。坑底面の精査により小穴を2ヶ所確認した。南側の小穴は径30×20cm、深さ8cmで楕円状断面を示す。北側の小穴は径15cm、深さ20cmで円筒状断面を示す。この陥穴については、農道に接しているため、坑底部の半截調査は実施できなかった。そのため、各小穴は平面確認の後、上面から調査している。両小穴には黒褐色土が埋没しており、平面形は明瞭に確認し得ている。しかし、断面観察を行っていないため下部施設に伴う性格のものであるかは確定できない。特に南側に位置する楕円形の小穴は深さ8cmと浅く、他例に比べれば極端な相違がある。また、2穴の間隔も40cmと近接し、この位置関係から見る限り陥穴の規模に比較し両者が下部施設として同時に存在することは考えにくい。推定の域を出ないものの、どちらか1穴が本坑に伴う施設と考えられる。同様な規模をもつとみられる陥穴と比較すると、北側の小穴が位置から見て、この陥穴に伴うことが推定できる。

この陥穴が台地縁辺に集中する陥穴群の東端に位置する。農道を挟み東側調査区である台地中央部には陥穴は存在しない。当然農道下には予想されるが台地縁辺における分布域は限定されるだろう。



第95図 72号土坑

62号土坑 (第96図 PL16)

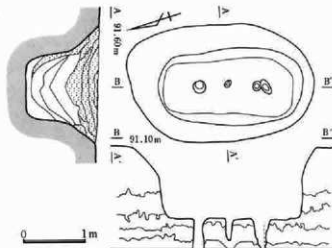
位置 Be・F-14・15G

規模 開口部 3.0×1.8m, 底部 2.0×0.8m

深さ 1.1m, 底部面積 1.6㎡

埋土 最下部はローム粒を含む暗褐色土が堆積し、その上層に砂壤土崩落土、最上層に砂壤土がレンズ状堆積する。

下部施設 坑底面の精査により2ヶ所棒状痕が確認できた。両者は100cmの間隔をもつ。南側小穴については複数の小穴が重複する状態が観察されている。このことは坑底部半截断面から2穴存在することが認められ、さらに両穴は規模に大小の差があると共に、時間差をもつことも把握されている。また、断面観察により、当初確認できた小穴間にもう1ヶ所棒状痕が存在することも明らかとなり、計4ヶ所存在することになる。南側に存在する下部施設は径20cm、深さ50cmの小穴が新しく、これより小規模の深さ30cm程度の方が時間的に古い。また、中央部に存在する径6cm、坑底下長35cmの棒状痕についても、坑底面精査の際確認できなかった点を考えるとより古い可能性もあり得る。このように仮定すると、径20cm、深さ50cm程度の小穴がこの陥穴に伴う下部施設と考えられ、より小さい棒状痕については古い段階での下部施設とみられる。さらに、小規模の棒状痕の陥穴内における位置をみると、この陥穴に伴う施設としては偏在しており、陥穴の形態も小規模なものが想定できる。陥穴の作り替えであろうか。



第96図 62号土坑

63号土坑 (第97図 PL16)

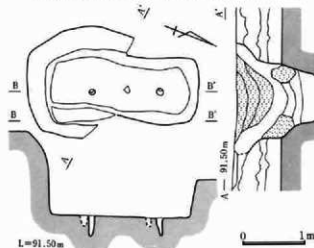
位置 Bc-15・16G

規模 開口部 2.7×1.8m, 底部 2.2×0.6m

深さ 1.3m, 底部面積 1.5㎡

埋土 土坑下半は黒色土、砂壤土等の崩落土で埋没し、上半は流入土のレンズ状堆積がみられ、上部は砂壤土が堆積する。

下部施設 坑底面の精査により棒状痕が2ヶ所確認された。この土坑については、調査区内に存在する農道に接しており、すでに掘削深も深くなっていたことから坑底部の半載調査は安全性の面から断念するつもりでいた。そのため、棒状痕を確認した段階で上からその痕跡を調査することにした。その際、他土坑の状態からみても明らかなように棒状痕および小穴とも深く細いことから、プラン確認も含めて坑底面を10cm程度削り込んでいる。結果としてこの段階で確認した棒状痕は誤認であった。(第97図破線部) このことは調査経過時にも認識されつつあったため、周辺整備の上、新たためて坑底面を半載することにより2ヶ所の棒状痕を確認した。断面観察では掘り方である小穴は認められない。棒状痕とみられる痕跡は直接ローム層中に存在する。径8cm前後、坑底下約30cmの長さをもつ。当初下部施設に伴う小穴としたものは断面観察によっても棒状痕との所見は得られていない。検証できていないが、可能性としては土坑構築時の掘削痕が考えられる。諸磯b式土器片は土坑下半部の流入土中に含まれる。



第97図 63号土坑

61号土坑 (第98図 PL18)

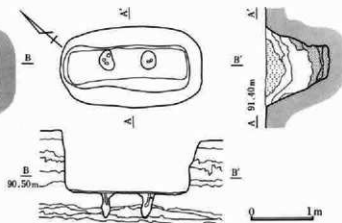
位置 Au-10G

規模 開口部 2.2×1.3m, 底部 1.9×0.5m

深さ 1.0m, 底部面積 0.9㎡

埋土 陥穴下層には、ローム粒、ロームブロックを含む暗褐色土が堆積し、その上位に黒褐色土が流入する。この層の上面に阿玉台式土器片が流入し、さらにその上層を砂壤土が堆積する。

下部施設 陥穴を全掘した段階では湧水が著しく、坑底面の精査が不能であったため、半載し下部施設の存在を確認した。坑底面には白色粘質土が4cm程度の層厚をもち面的に認められ、さらに下部施設に伴う小穴内にも充墳しており、人為的なものと考えられた。小穴は2ヶ所存在し、約65cmの間隔をもつ。北側の小穴は径10cm、深さ43cm、南側のものは径15cm、深さ42cmの規模をもつ。坑底部を当初半載した際は、底面の状態が不明確であったため断面が小穴端部にあたり、棒状痕の存在は確認できなかった。さらに、底面の確認により、小穴内には先のように白色粘質土が充墳し、その中に径4cm前後の棒状痕とみられる黒色土が複数観察できた。北側小穴で3ヶ所、南側小穴で2ヶ所存在し、各々半載し、断面観察を行ったが、上面で確認できた棒状痕とみられる複数の痕跡は、それぞれ断面でも観察され、小穴中央付近から下部まで棒状痕が認められる。複数の棒状痕は、極めて接した位置にあるものの、確認した中では重複していないが、同時に存在したか否かは断定できない。



第98図 61号土坑

65号土坑 (第99図 PL18)

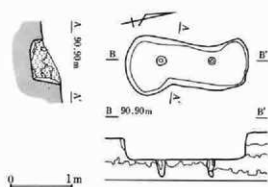
位置 Bc・d-14 G

規模 開口部 2.0×0.7m, 底部 1.9×0.5m

深さ 0.4m, 底部面積 1.1m²

埋土 17号溝と重複し、土坑上半部を欠く。土層は壁に接する部分に暗褐色土が堆積し、大半は砂壤土により埋没する。

下部施設 坑底面の精査により2ヶ所の小穴を確認した。この平面プラン確認の段階で小穴掘り方および棒状痕とみられる痕跡が識別し得た。両小穴の間隔は約80cmである。この確認状態に沿って坑底部の断面調査を実施した。小穴は北側で径15cm、南側のもは10cm程度、深さはいずれも25cmである。この陥穴の下部施設は平面で確認した通り掘り方をもち、その中に棒状埋設物を設置し、小穴内に埋め戻しを行い固定した状態が断面観察によっても看取できた。小穴内の埋め戻し土は、ロームを主体とし、暗褐色土、砂壤土を混入する土が充填されるが、棒状痕と推定される部分には、本来棒状埋設物の腐蝕物もしくはその痕跡が残るものと考えられたが、この部分には砂壤土が堆積していた。埋土中における棒状埋設物の状態を観察していないため確定できないものの、小穴断面をみる限り、陥穴埋設時には棒状埋設物が無かった状態を示しているように考えられる。さらに、細砂壤土の堆積状態からみて、棒状埋設物が除去された後、あまり時間が経過しない段階で砂壤土が堆積したものと思われ、小穴内における棒状痕の形状があまり乱れていないことからうかがえるが、その理由は不明である。



第99図 65号土坑

64号土坑 (第100図 PL17)

位置 Bd・e-15 G

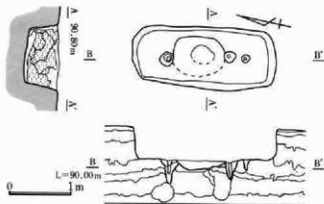
規模 開口部 2.3×1.0m, 底部 2.1×0.8m

深さ 0.5m, 底部面積 1.6m²

埋土 陥穴上半部は確認時に掘削してしまい失なわれている。最下層にしまりの強い灰褐色土が堆積しその上部に砂壤土崩落土が存在する。

下部施設 棒状痕は2ヶ所確認できる。坑底部中央長軸方向に沿って約90cmの間隔で設置される。断面調査により、小穴内に棒状埋設物とみられる痕跡が観察できる。この痕跡からみて埋設物は径5cm程度で、約20～25cmの埋設深をもち、小穴内にはロームを主とする褐色土が埋め戻されている。

南側小穴下にはローム層の標準堆積層とは異なるピット状の落ち込み断面が存在する。土層はやや不安定な白色粘質土を主とし、黒色粘質土も混入している。調査の際も注目したが、この段階では下部施設に伴うものとの判断は得られなかった。この部分のみをみると位置、形状等下部施設に伴う掘り込みとも考えられる。しかし、北側小穴下に存在する円形のブロック状の層についても同じような白色粘質土を主とし、暗褐色土も混入し南側小穴下のものと同種の土層状態が観察され、このブロック状の存在が人為的なものとは考えにくく、その性格が確定できなかったため、南側小穴下についても積極的に掘り込みとは判断できなかったことによる。この他に、坑底面には小穴間に円形の播鉢状断面をもつ掘り込みが確認できた。一旦掘られた後埋め戻されている。下部施設に伴う構造であろうか。



第100図 64号土坑

66号土坑 (第101図 PL17)

位置 Bd・e-14・15G

規模 開口部 2.5×1.3m, 底部 2.3×1.1m

深さ 0.7m, 底部面積 2.2㎡

埋土 土坑下半は砂埃土を主とする崩落土が認められ、上部には砂埃土、灰褐色土がレンズ状堆積する。下部施設 坑底部長軸方向に沿って2ヶ所棒状痕が確認できた。坑底部の精査により確認した段階では暗褐色土の円形オウランが認められたのみで、棒状痕、小穴の区別はできなかった。両者の間隔は100cmである。坑底部の断面観察により、この土坑に設けられる下部施設の棒状埋設物はB2類に属するもので、小穴をもつものと判断される。小穴は径15cm、深さ35cm程度の規模をもち、ほぼ垂直に掘り込まれ棒状痕は小穴内に1本ずつ認められる。北側小穴内には径5cm程度の棒状痕が観察される。この面で観察すると棒状痕は小穴底部にまで達しておらず、10cm程度の間隔をもつ。南側小穴にも棒状痕とみられる状態が観察できたが、その形状は北側小穴のもの比べると不明瞭である。いずれの小穴内にもロームを主とする埋め戻しが認められる。また、北側小穴下には粘土質であるが、しまりの弱い土層が7cm前後の幅で縦位に認められている。明らかに自然堆積とは異質で、何らかの痕跡とみられた。断面観察から小穴に伴うものではなく、より古いものと考えられるが、その性格は不明である。より古い段階での棒状埋設物の痕跡であるのか、動、植物に起因するものか、その他の自然的要因によるものか判

断はついていない。これとはやや異なるが南側小穴下にも粘土性の異質な土層がブロック状に観察された。この部分は漸移的な変化を示し、北側小穴下の明瞭に分解できる状態とは異なる。やはり性格は不明であるが、何らかの自然的要因による可能性が強いようにみられる。

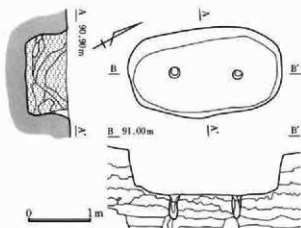
68号土坑 (第102図 PL19)

位置 Bh-14・15G

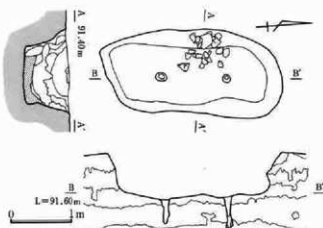
規模 開口部 3.0×1.3m, 底部 2.6×0.9m

深さ 0.7m, 底部面積 2.1㎡

埋土 ローム粒を含む暗褐色土を主として堆積し、上部に砂埃土の流入がみられる。礎は西側から埋没面に沿って流入し、一部坑底面に接するものもある。下部施設 小穴は2ヶ所確認できた。両穴の間隔は約100cmで長軸に沿って配置される。坑底面は起伏をもち小さな凹凸が多数あり、この部分に黒色土が入りあたかも棒状痕のようにみられる。調査に際してこれら凹凸について、下部施設に伴う可能性を観察したが、施設に類するものではなく、陥穴構築に伴う掘削痕と考えられた。ただ、この面に棒状埋設物を固定、補強するために埋め戻しが行われ、結果として構築時には平坦面を形成していたようにみられる。このことは、土坑最下層にロームを多く含みしまりの強い土層が堆積していたことにより、構築時の坑底面との分層が不明瞭であったため検証はできていない。棒状痕は、平面、断面観察においても掘り方である小穴は認められない。棒状埋設物は残っていないもの、直接坑底部に設置された状態



第101図 66号土坑



第102図 68号土坑

が認められる。痕跡からみて、棒状埋設物は坑底部から40～50cm程度の埋設深をもっている。幅は両者とも約10cmで、土粒の極めて粗い軟弱な褐色土が堆積している。下部には、棒状痕に沿って鉄分の沈着層が認められる。

78号土坑 (第103図 PL19)

位置 Ay-18・19 G

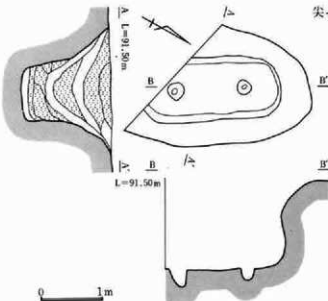
規模 開口部 3.1×1.9m, 底部 2.1×0.8m

深さ 1.4m, 底部面積 1.4㎡

埋土 陥穴最下部には軟弱な黒色土が堆積し、その上に砂壤土崩落土が認められる。上層に堆積する砂壤土の流入は、暗褐色土を間層として2層観察される。この土層からみて、この陥穴は中期前半には埋没しており、使用時期は周辺の状況から前期に相当するように考えられる。

下部施設 調査区南端に位置するため、路線外については一部未調査となった。また、土坑の半載調査も調査区縁辺であることと、掘削深の関係から実施できなかった。つまり、この陥穴の下部施設は、断面による観察によらず坑底部の精査の後下部施設の平面確認を行い、上部からこれを調査している。

下部施設に伴う小穴は2ヶ所確認できた。一部未調査部分があるが、位置からみてさらに増えることはないだろう。平面確認の状態は径25cm程度の小穴中央に、径10cmの棒状痕が観察できた。小穴部には



ロームを主とした埋め戻しが行なわれ、棒状埋設物を固定している状態が看取できる。この小穴は、上部から調査した限り、深さ20～30cmで漏斗状をなしている。断面調査を行っていないため、棒状埋設物の状態は不明である。また、小穴の規模も断面観察による検証を必要とするが、調査所見および今回検出した同様の規模をもつ陥穴の下部施設との比較から、深さについてはここで得られた規模は妥当性が認められる。断面形状については上部からの調査の弊害があり調査用具の形態が反映されたものとみられる。

53号土坑 (第104図 PL20)

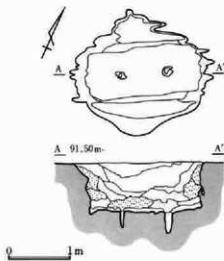
位置 Cg・h-01 G

規模 開口部 2.1×1.9m, 底部 1.9×0.7m

深さ 0.8m, 底部面積 1.4㎡

この陥穴については、当初の目的であった長軸断面のスライス法による調査を実施している。その内容については74～77pの報告に拠りたい。

下部施設については、坑底部に2ヶ所小穴が確認され、それぞれ小穴内に棒状痕とみられる腐蝕土を観察している。この棒状痕は坑底下60cm前後の埋設深をもつ。小穴は棒状痕の深度と一致せず上半部のみ観察される。この状態からみると、深さ30cm程度の小穴が掘られた後、棒状埋設物を埋設し、さらに下部へ打ち込んだものといえる。棒状痕下部部の尖った状態も観察されている。



図版番号	出土位置	器種	長さ	幅	重さ	石材
第26図-1	D f-5	石鏃	1.9	1.4	0.68	黒
	2 D r-11	石鏃 (1.9)	(1.4)	(0.53)	黒	
	3 D a-12	石鏃 (1.5)	(0.9)	(0.17)	黒	
	4 D w-7	石鏃	2.1	1.4	0.87	子
	5 D m-11	石鏃	2.9	1.7	1.60	黒安
	6 D t-14	石鏃	3.3	1.7	1.67	子
	7 D m-8	石鏃	3.8	2.1	1.88	黒頁
	8 D r-5	石鏃	7.8	3.4	34.60	黒頁
	9 D i-4	加刺	1.9	1.5	1.77	珪頁
	第27図-1	D h-9 D v-5	削器	7.9	5.1	71.45
2 D v-7		削器		6.4	7.9	99.27
3 D k-5		削器	2.9	4.8	13.08	黒安
4 D e-5		加刺	7.8	8.8	209.70	椶安
5 D i-6		削器	4.9	7.8	66.73	黒頁
6 D j-5		使刺	3.6	1.6	2.91	子
7 D r-7		削器	5.4	5.6	59.21	黒頁
8 D x-6		石核	10.1	6.5	259.52	黒頁
9 D w-10		使刺	3.9	5.7	26.97	頁
第28図-1		D r-4	打斧	14.8	7.9	421.42
	2 D u-13	片刃	10.1	6.6	431.20	黒頁
第29図-1	3 D k-3	片刃	7.4	11.0	354.70	黒頁
	1 D m-7	敲石	10.4	9.5	820.40	椶安
	2 D u-5	敲石 (5.1)	(4.1)	(92.53)	石閃	
	3 D a-6	磨石	13.2	8.4	601.46	椶安
	4 D i-6					
	4 D x-6	磨石 (10.9)	(10.5)	(511.70)	椶安	
5 D v-5	台石	33.2	21.6	6,800.00	椶安	
6 D v-5	台石	33.2	24.0	12,548.81	椶安	

資料番号	出土位置	器種	長さ	幅	重さ	石材
接合資料-2 (第30図)						
1	D r-5	銅片	3.4	6.1	25.96	椶安
	D i-6					
2	D i-6	銅片	2.7	3.9	9.17	椶安
3	D i-6	銅片	2.7	4.3	15.25	椶安
4	D i-6	加刺	2.9	4.4	9.64	椶安
5	D i-6	銅片	1.7	2.9	1.95	椶安
接合資料-3 (第30図)						
1	D k-8	銅片	4.4	4.3	9.88	椶安
2	D k-8	銅片	3.4	2.3	3.64	椶安
3	D k-8	銅片	4.1	4.9	22.47	椶安
4	D k-9	銅片	3.7	5.6	28.44	椶安
5	D i-8	銅片	5.2	4.9	26.96	椶安
接合資料-11 (第31図)						
1	D v-6	銅片	2.5	3.0	4.44	黒頁
2	D s-5 D w-6	銅片	5.2	4.1	18.53	黒頁
3	D r-4					
接合資料-15 (第31図)						
1	D r-4	銅片	2.1	4.4	5.76	黒頁
2	D r-4	銅片	2.8	2.7	5.60	黒頁
3	D v-5	使刺	3.3	4.8	11.46	黒頁
4	D r-4	銅片	1.9	5.1	3.36	黒頁
5	D q-4	銅片	1.4	2.2	1.00	黒頁
6	D i-5	銅片	2.9	4.9	13.17	黒頁

資料番号	出土位置	器種	長さ	幅	重さ	石材
7	D r-5	銅片	1.8	4.4	2.83	黒頁
8a	D r-5	銅片	1.6	2.9	2.27	黒頁
8b	D r-5	銅片	2.0	4.6	6.15	黒頁
9	D r-4	銅片	2.2	1.8	2.50	黒頁
10	D r-4	銅片	2.7	1.7	4.17	黒頁
接合資料-30 (第32図)						
1	D w-6	銅片	3.0	4.2	11.37	黒頁
2	D u-8	銅片	2.3	3.9	4.00	黒頁
3	D u-6	銅片	2.7	3.9	8.32	黒頁
4	D w-6	銅片	4.3	3.8	19.68	黒頁
5	D u-5	銅片	2.1	2.3	2.95	黒頁
6	D u-5	銅片	2.6	4.0	6.62	黒頁
7	D u-5	銅片	3.4	4.1	12.02	黒頁
8	D u-6	銅片	2.1	2.0	1.43	黒頁
9	D i-6	銅片	1.8	2.6	1.63	黒頁
接合資料-10 (第32図)						
1	D v-6	銅片	2.7	4.7	10.24	黒頁
2	D i-7	銅片	2.9	2.8	4.94	黒頁
3	D i-7	銅片	1.8	1.8	1.12	黒頁
4	D i-6	銅片	1.6	2.7	1.14	黒頁
5	D v-7	銅片	1.6	3.4	3.50	黒頁
6	D i-6	使刺	2.0	4.7	5.35	黒頁
7	D v-6	銅片	2.3	4.8	5.34	黒頁
接合資料-12 (第33図)						
1	D i-6	銅片	1.8	2.3	1.31	黒頁
2	D i-6	銅片	2.6	2.2	1.94	黒頁
3	D i-6	銅片	3.4	5.2	10.69	黒頁
4	D i-6	銅片	2.3	3.6	3.84	黒頁
5	D i-6	銅片	2.1	1.8	1.17	黒頁
6	D v-6	銅片	2.2	3.0	3.82	黒頁
7	D i-6	銅片	2.8	4.2	4.46	黒頁
8	D a-6 D i-6	銅片	2.7	6.5	11.07	黒頁
9	D i-6					
10	D i-6	銅片	4.0	3.3	10.81	黒頁
11	D i-6	銅片	3.3	2.2	3.73	黒頁
11	D i-6	銅片	1.9	1.9	1.13	黒頁
12	D i-6	銅片	2.2	3.0	2.56	黒頁
13	D i-6	銅片	1.6	1.5	0.60	黒頁

図版番号	出土位置	器種	長さ	幅	重さ	石材
第43図-10	B63土坑	使刺	15.5	6.6	247.10	椶安
	11 B a-18	削器	7.0	8.6	92.10	黒頁
	12 B68土坑	片刃	7.2	10.3	215.40	黒頁
第56図-2	13 B a-17	石鏃	3.0	1.4	0.94	黒
	B76土坑	使刺	5.8	8.4	79.20	黒頁
第57図-1	3 B76土坑	使刺	11.5	9.2	251.20	黒頁
	B61土坑	石鏃	2.4	1.6	1.06	珪頁
第57図-2	A r-12	石鏃	3.3	5.6	1.56	椶安
	3 A s-10	石鏃	1.7	1.5	0.40	黒
	4 A i-10	打斧	5(4)	(4.3)	(41.53)	頁
	5 A a-12	削器	5.7	3.6	12.99	黒頁
	6 A i-15	削器	7.2	1.9	9.68	黒頁
	7 A v-11	削器	5.4	4.5	25.08	黒頁
	8 A s-14	削器	5.6	8.6	51.65	椶安
	9 A a-14	削器	3.2	9.5	43.42	黒頁
	10 A i-9	削器	4.7	7.6	52.65	黒頁

第11表 縄文石器計測表(1)

国取番号	出土位置	器種	長さ	幅	重さ	石材
	11	A w-12 削器	8.7	12.0	424.90	黒頁
	12	A t-15 削器	5.3	7.0	70.54	黒頁
	13	A u-10 削器	3.5	7.6	21.72	黒頁
	14	A t-12 削器	12.7	12.2	269.83	榎安
第58国	1	A v-13 加刺	6.3	7.5	75.39	黒頁
	2	A v-10 加刺	3.7	6.5	29.60	黒頁
	3	A v-12 加刺	3.7	4.4	18.77	黒頁
	4	A s-12 使刺	5.7	8.8	58.27	黒頁
	5	A t-13 使刺	3.6	6.8	14.51	黒頁
	6	A v-9 使刺	4.2	4.3	7.37	榎安
	7	A v-12 使刺	5.2	6.2	41.74	頁
	8	A u-9 使刺	9.7	9.2	232.80	黒頁
	9	A w-12 使刺	5.5	4.8	37.17	黒頁
	10	A v-13 刺片	3.2	2.3	3.54	珪頁
	11	A y-12 加刺	9.2	11.0	412.30	黒頁
	12	A x-12 石核	4.9	7.0	72.80	黒頁
	13a	A v-12 使刺	6.4	6.4	57.78	黒頁
	13b	A v-13 使刺	5.4	8.0	29.32	黒頁
第59国	1	A x-12 敲石	14.5	9.7	1,350.10	榎安
	2	A w-13 敲石	13.0	9.2	856.00	榎安
	3	A v-10 磨石	8.2	6.1	196.10	榎安
第79国	1	B e-17 石鏃	1.8	1.5	0.44	珪
	2	B t-17 石鏃	2.4	1.4	0.62	珪頁
	3	B u-21 石鏃	2.6	1.4	0.86	珪
	4	B u-18 石鏃	2.3	1.6	0.99	黒
	5	B q-19 石鏃	2.3	1.5	0.66	黒頁
	6	B p-16 石鏃	2.6	1.7	0.91	黒頁
	7	B b-4 石鏃	(2.0)	(1.12)	(0.77)	榎安
	8	D q-7 石鏃	(2.1)	(1.13)	(1.46)	珪
	9	C区30溝 石鏃	(1.6)	1.8	(0.77)	榎安
	10	C v-5 石鏃	(2.2)	1.8	(1.18)	珪
	11	D区10溝 石鏃	(2.7)	2.0	(0.86)	珪
	12	D区24住 石鏃	(2.3)	(2.1)	(1.67)	黒頁
	13	B区表土 石鏃	(2.4)	(1.4)	(0.94)	珪
	14	B h-20 石鏃	(2.1)	1.5	(1.85)	榎安
	15	B e-17 石鏃	3.3	2.2	1.75	榎安
	16	B d-15 石鏃	2.8	1.9	2.05	珪
	17	B d-16 石鏃	(2.3)	1.9	(1.57)	黒
第80国	1	B r-20 石鏃	(2.1)	(1.9)	(1.13)	榎安
	2	D区6住 石鏃	3.6	1.8	1.67	黒頁
	3	B f-16 石鏃	(5.8)	(3.9)	(33.80)	黒頁
	4	B p-19 石鏃	2.7	1.5	0.95	黒頁
	5	C k-25 石鏃	2.7	1.7	1.17	黒頁
	6	A区覆土 石鏃	3.5	1.9	2.04	黒頁
	7	C g-1 石鏃	(5.0)	(2.5)	(14.50)	黒頁
	8	C区26溝 石鏃	3.8	4.2	5.90	黒頁
	9	B d-15 石鏃	3.8	(5.9)	(12.30)	黒頁
	10	B k-18 石鏃	2.8	(4.1)	(4.60)	黒
	11	B p-20 石鏃	(5.0)	(5.3)	(26.00)	黒頁
	12	B h-15 石鏃	5.3	4.5	47.80	黒頁
第81国	1	C v-1 磨斧	(3.4)	(5.4)	(65.30)	山石
	2	B w-22 打斧	6.8	4.7	41.90	黒頁
	3	C s-23 打斧	(5.3)	3.2	(27.30)	黒頁
	4	C区26溝 打斧	(7.8)	(5.1)	(67.40)	頁
	5	C w-3 打斧	9.6	4.6	100.90	榎安
	6	C s-1 打斧	(7.3)	(4.5)	(67.70)	榎安
	7	D q-10 打斧	(7.9)	(5.5)	(141.10)	灰安

国取番号	出土位置	器種	長さ	幅	重さ	石材
	8	B q-22 打斧	(8.0)	(4.7)	(105.90)	榎安
	9	D r-11 打斧	(2.5)	(3.5)	(8.50)	黒頁
	10	D q-13 打斧	(2.6)	(3.4)	(9.80)	黒頁
	11	C u-6 打斧	(11.1)	(5.3)	(154.70)	黒頁
	12	B g-18 打斧	10.8	4.3	84.60	黒頁
	13	D i-10 打斧	(5.4)	(3.6)	(31.70)	黒頁
	14	D区22住 打斧	11.8	4.7	122.60	砂
	15	B t-19 打斧	11.7	5.7	86.10	黒頁
	16	D b-10 打斧	(6.3)	(4.3)	(28.50)	黒頁
第82国	1	D区2溝 打斧	11.1	7.6	188.20	黒頁
	2	B w-20 打斧	(6.1)	(5.4)	(83.60)	珪
	3	E a-7 打斧	(12.2)	(5.9)	(164.80)	榎安
	4	B r-17 打斧	14.7	6.7	383.10	黒頁
	5	B p-17 片刃	16.0	14.2	1,393.50	灰安
第83国	1	B u-17 削器	3.6	6.9	26.00	黒頁
	2	C i-3 削器	3.8	5.0	14.00	黒頁
	3	B h-17 削器	4.9	6.6	47.50	黒頁
	4	B i-15 削器	3.8	5.3	21.50	榎安
	5	D r-13 削器	7.7	9.5	280.90	黒頁
	6	D j-5 削器	7.9	10.5	156.60	黒頁
	7	B t-17 削器	6.2	10.3	194.20	黒頁
	8	B d-17 削器	(6.2)	(6.3)	(31.10)	黒頁
第84国	1	C t-3 加刺	2.8	4.5	8.40	黒頁
	2	D i-10 加刺	2.7	4.2	12.40	灰安
	3	B q-22 加刺	4.7	6.2	37.50	黒頁
	4	B v-18 加刺	4.2	3.9	23.80	黒頁
	5	C区27溝 加刺	4.4	4.5	21.50	黒頁
	6	C m-2 加刺	4.4	4.3	40.80	黒頁
	7	B q-15 加刺	(4.7)	(5.6)	(30.10)	黒頁
	8	C t-24 加刺	4.6	6.7	40.20	黒頁
	9	B h-15 加刺	(5.0)	2.9	(19.20)	榎安
	10	B h-18 加刺	(5.0)	(4.4)	(17.00)	黒頁
	11	B i-15 加刺	(5.6)	(5.3)	(30.20)	榎安
	12	B p-22 加刺	(6.1)	(7.8)	(73.90)	黒頁
	13	C n-4 使刺	4.7	5.3	24.00	黒頁
	14	D c-2 使刺	4.7	6.4	32.00	黒頁
	15	B o-15 使刺	4.4	5.6	13.90	黒頁
	16	B79土坑 使刺	7.3	8.7	90.10	黒頁
	17	D q-14 使刺	4.1	3.1	8.60	頁
	18	B f-15 使刺	(5.2)	(4.2)	(21.90)	黒頁
	19	C u-3 使刺	5.2	4.0	27.20	黒頁
	20	B d-18 使刺	7.5	9.6	117.30	黒頁
	21	C s-2 使刺	5.1	4.9	22.10	黒頁
	22	B o-19 使刺	8.2	5.1	52.20	黒頁
第85国	1	D p-12 石核	10.7	9.2	864.10	灰安
第86国	1	B d-11 磨石	10.8	7.5	437.80	榎安
	2	C m-1 磨石	(8.3)	(8.2)	(322.80)	榎安
	3	B h-18 磨石	12.5	14.1	695.30	榎安
	4	B o-18 凹石	9.4	7.6	374.80	榎安
第87国	1	C m-1 凹石	10.9	7.2	422.30	榎安
	2	B r-23 凹石	11.9	7.2	402.90	榎安
	3	B g-19 敲石	(10.6)	(9.9)	(726.10)	石岡
	4	D y-14 凹石	11.0	9.1	505.60	榎安
	5	D区表探 敲石	(15.9)	12.4	(1,039.00)	榎安
第88国	1	C m-1 敲石	(7.2)	(5.5)	(166.40)	榎安
	2	C m-1 多孔石	11.2	10.6	1,009.90	榎安
	3	C m-3 敲石	11.7	8.2	633.70	榎安
	4	B p-21 矽石	19.3	15.4	6,450.00	榎安
	5	D区表探 磨石	(17.3)	(7.8)	(627.60)	榎安

第12表 縄文石器計測表(2)

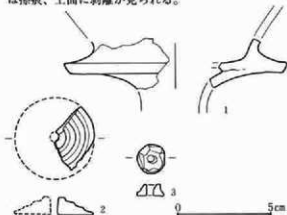
4. 古墳時代

古墳時代の遺構としては住居一軒（1号住居）が確認されている。その他には古墳を含め遺構は認められていない。遺構以外にはグリッド調査時もしくは他時期の遺構埋土内から古墳時代に相当するとみられる遺物が出土している。いずれも断片的な資料であるが、特徴的な遺物も含まれており注目される。

ここでは、これら遺構に伴わない遺物をグリッド出土遺物とし、1号住居とともに報告する。

(1) グリッド出土遺物（第105図 PL 82・83）

1は古墳時代初頭のいわゆる「結合器台」の張出部にあたる。脚部から外反して端部は面取り。内面ナテ、外面は放射状の罫みがあり、胎土に粗粒を含む。焼成は良好で均質。色調は明赤褐色（5YR5/6）。時期は古墳時代初頭。2は紡錘車形石製品の出損品で直径4.2cm、厚さ0.9cmを測る。上面は断面弧状の研磨で3段に作り出す。中央孔は直径4mmで垂直に穿ち、回転痕を残す。石材は暗緑色の変質玄武岩。段状の同心円研磨や穿孔の痕跡からロクロ椀回転工具の使用も考えられる。一般的に「碧玉製紡錘車」と呼ばれるが、前期古墳副葬品の例が多く、又奈良県桜井市メスリ山古墳から鉄製軸芯に管玉状石製品2個と組み合わせた器具ともみられる例が発見されたことから「紡錘車」としての実用は疑わしい。3は頁岩製の白玉で、直径1.5cm、厚さ5mmを測る。中央孔は直径3.5mmで、上方からの回転穿孔。側面は擦痕、上面に剥離が見られる。



第105図 グリッド出土遺物（古墳時代）

(2) 1号住居（第106図 PL 25・26・82）

位置 Dr-12・Dt-13 G

D区砂壤土性台地縁辺にあたり、今回の調査区内では一軒のみ存在する。

平面形 東西5.25m、南北4.9mの規模をもつ長方形平面で、各隅は丸みをもつ。

面積 21.0㎡

壁 ほほ垂直に立ち上る。壁高（確認面から床面までの深さ）は平均25cm程度である。

床面 砂壤土ブロックを含む黒褐色土による貼り床をもつ。床面は多少の凹凸がみられるがほほ水平であり、全面にわたり良好な面が認められる。とくに柱穴4本を結ぶ住居中央付近は硬い面が形成されている。貼り床は5cm前後の厚層をもつ。

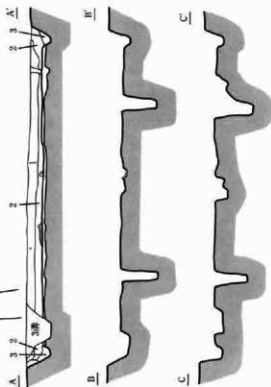
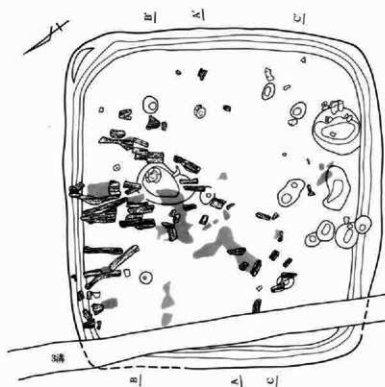
柱穴 4ヶ所確認された。4柱穴とも類似する形状、規模をもち、径20cm、深さ50cm程度であり、掘り方は明瞭である。柱穴もしくは柱自体の存在は確認できなかった。柱穴配置は規格式が認められ、住居対角線上に設定され、住居平面形に相似した長方形の配置となる。柱穴間の規模は東西2.6m、南北2.2mであり、柱穴と壁の距離は1.0m～1.2m程度の間隔をもつ。

炉 北側柱穴間中央部に設定される。径65cm程度のやや不整形円形をなし、深さは約50cm、北側に高杯の杯部（第107図6）が埋設される。

周溝 幅15cm、深さ10cmの小溝が壁下に全周する。

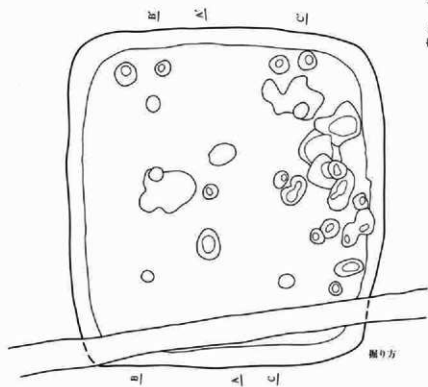
埋土 土層は浅間C軽石を多量に含む黒色土が堆積し、下部には焼土ブロック、炭化材を多く含む。

住居の特徴 火災住居である。埋土下部から床面にかけ多量の炭化材が認められ、床面には火熱を受けた痕跡も残っている。炭化材、焼土は住居北西部に集中する傾向が認められる。埋土下部から床面にかけ、比較的まとまった遺物が得られている。（第107図）



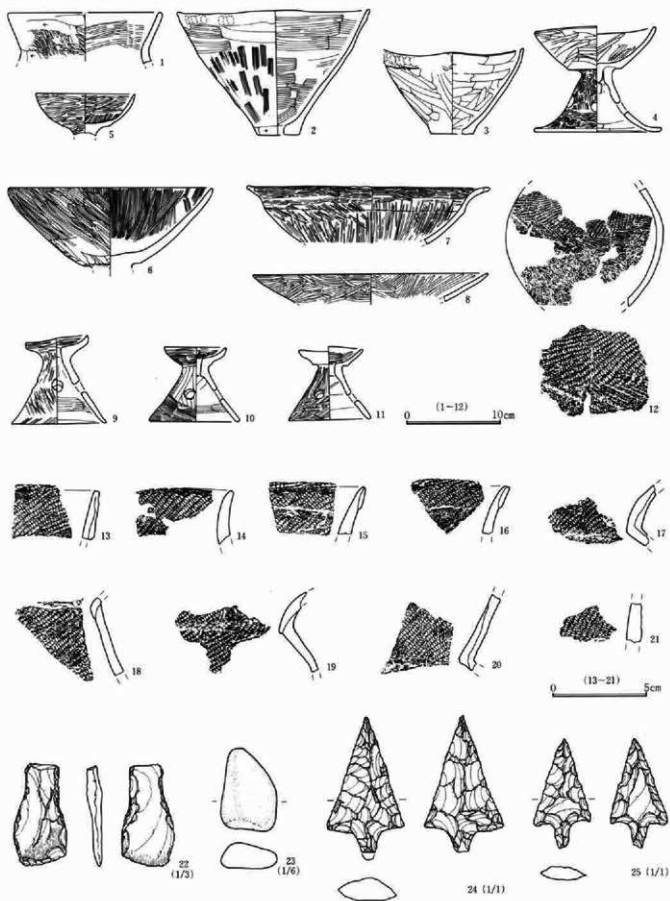
土層説明

- 1層 浅間C軽石を多量に含む他、焼土粒、炭化物粒を混入する黒色土
- 2層 浅間C軽石、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を多く含む暗褐色土
- 3層 ローム粒を多く含む明褐色土
- 掘り方 白色軽石粒を含む黒色土



0 L=91.10m 2m

第106図 1号住居



第107图 1号住居出土遗物

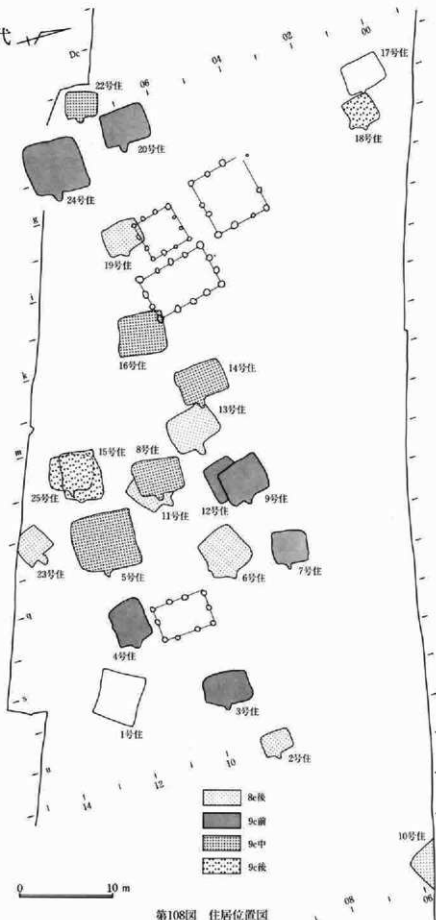
5. 奈良・平安時代

(1) 住居

この時期の竪穴住居は23軒が確認、調査された。これらの住居は調査区東側、台地縁辺にあたるD区に集中し、表土下砂壤土層上面を確認面としている。遺構確認段階で一部床面の露出する住居も存在しており、当時の生活面はすでに失われている。23軒の住居のうち、10軒5例について重複が認められ、他の13軒は単独に存在している。各住居は掘り方をもち、貼り床を構築しているが、4軒については、この貼り床が2面にわたる例が確認されている。この2面の貼り床は10cm程度の間層をもつが、上部貼り床を構築する際は掘り方をもたず、その結果下部貼り床が残ったものといえる。さらに特徴としてこの4軒のうち3軒について主柱穴（4本主柱）をもつことがあげられる。これ以外の住居については認められないか不明なものほとんどである。

カマドは全て東壁部に設けられ、構築に際し袖部、天井部に大型礫、粘土塊もしくは瓦類を用いる例が目立つ。

遺物は、杯・甕など土器類を主体とし、紡錘車・鉄製品（刀子、釘等）が出土している。杯類の中には墨書も目立ち、総数20点が確認されている。この他砥石、磨礪石とみられる棒状礫



第108図 住居位置図

等も含まれる。土器類は住居下面上に比較的豊富に得られており、これらの出土土器から各住居の時期を見ると8世紀後半から9世紀後半に存在したものと考えられる。これら住居以外の遺構としては、時期が確定できないものの掘立柱建物とみられる柱穴のまとまりが4棟認められ、位置はD区、住居群

内に存在する。なお、この4棟以外にも柱穴状の小ピットは多数確認されているが、配置が不規則なため、建物跡としてはこの4棟にとどまった。土坑についてもそのほとんどが時期不明であるが、B区に位置する79号土坑については浅間B磐石に埋没しているため、この項に報告しておくものとする。

第13表 住居・遺物一覧表

住居番号	位置	面積	時期	主軸方位	出土土器(実測図記載以外の土器片を集計している。)	漆器	鉄器	埴団	写真
2号住居	Du 08 Du 09	5.5㎡	8c後	N-93°-E	土師杯 (I114 胴56) 須志壺 (胴4)			109 27 83	
3号住居	Ds 08 Dt 09	10.9㎡	9c前	N-101°-E	土師杯 (I178 胴349) 土師壺 (I119 胴131) 須志杯 (I17 胴22) 須志壺 (胴5) 蓋1	1		110 28 83	
4号住居	Dq 11 Dr 11	13.6㎡	9c前	N-102°-E	土師杯 (I149 胴389) 土師壺 (I139 胴690) 須志杯 (I125 胴23) 須志壺 (胴15) 瓦片3	3		111 29 83 112 84 95	
5号住居	Do 10 Dp 10	30.2㎡	9c中	N-98°-E	土師杯 (I196 胴615) 土師壺 (I179 胴1218) 須志杯 (I175 胴140) 須志壺 (I15 胴44) 瓦3	1		113 30 114 85 95	
6号住居	Dp 08 Dq 08	16.4㎡	8c後	N-83°-E	土師杯 (I1155 胴254) 土師壺 (I142 胴713) 須志杯 (I111 胴17) 須志壺片5			115 31 32 116 85 86	
7号住居	Dp 06 Dq 07	10.6㎡	9c前	N-86°-E	土師杯 (I178 胴352) 土師壺 (I19 胴242) 須志杯 (I116 胴15) 須志壺片9	1		117 33 86 95	
8号住居	Dm 09 Do 10	17.2㎡	9c中	N-92°-E	土師杯 (I1150 胴169) 土師壺 (I136 胴1067) 須志杯 (I141 胴63) 須志壺片17 瓦片1	1		118 34 86 119 95	
9号住居	Dn 07 Do 07	17.2㎡	9c前	N-82°-E	土師杯 (I1155 胴302) 土師壺 (I170 胴952) 須志杯 (I122 胴37) 須志壺 (I1 胴10) 須志壺蓋1	4		120 35 87 121 95 96	
10号住居	Dy 05 Ea 05	-	8c後	N-52°-E	土師杯 (I122 胴57) 土師壺 (I19 胴406) 須志杯5 須志壺1 須志壺蓋1			122 36 123 88	
11号住居	Dn 10 Do 10	11.5㎡	8c後	N-72°-E	土師杯 (I116 胴52) 土師壺 (I122 胴256) 須志杯 (I12 胴5)			124 37 125 88 89	
12号住居	Dn 08 Do 08	-	9c前	N-84°-E	土師杯 (I11 胴29) 土師壺 (I122 胴171) 須志杯 (I11 胴2) 須志壺蓋1			126 38 89	
13号住居	Di 08 Dm 08	18.3㎡	8c後	N-81°-E	土師杯 (I1194 胴308) 土師壺 (I135 胴632) 須志杯 (I115 胴8) 須志壺片1 須志壺片1	1		127 39 89 128 90	
14号住居	Dk 08 Dm 08	16.2㎡	9c中	N-84°-E	土師杯 (I131 胴215) 土師壺 (I136 胴655) 須志杯 (胴15) 須志壺片13 須志壺片49 須志壺蓋5	1		129 40 130 90	
15号住居	Dm 12 Dn 12	20.8㎡	9c後	N-99°-E	土師杯 (I1104 胴281) 土師壺 (I191 胴1895) 須志杯 (I149 胴94) 須志壺 (I12 胴61) 須志壺蓋4	1		131 41 91 132 96	
16号住居	Dj 09 Dk 09	15.7㎡	9c中	-	土師杯 (I115 胴25) 土師壺 (I112 胴120) 須志杯片2 須志壺片2			133 41 91	
17号住居	De 01 Df 01	14.2㎡	18住より古い	N-90°-E	土師壺片11			134 42	
18号住居	Df 01 Dg 01	9.5㎡	9c後	N-86°-E	土師杯 (I11) 土師壺 (I17 胴77) 須志杯片4 瓦片1			135 42 91	
19号住居	Dj 09 Dk 09	10.1㎡	8c	N-89°-E	土師杯 (I147 胴82) 土師壺 (I125 胴381) 須志杯 (I12 胴1)			136 43 137 91 92	
20号住居	Dd 08 De 08	15.6㎡	9c前	N-98°-E	土師杯 (I142 胴59) 土師壺 (I142 胴998) 須志杯 (I15 胴7) 須志壺 (I12 胴11)	2		138 44 139 92 93	
22号住居	Dd 08	8.1㎡	9c中	N-101°-E	土師杯 (I120 胴48) 土師壺 (I142 胴64) 須志杯 (I110 胴3) 須志壺 (胴17)	1		140 45 93 96	
23号住居	Dn 13 Do 12	(8.5㎡)	8c後	N-61°-E				141 46 93	
24号住居	De 10 Df 10	32.0㎡	9c前	N-94°-E	土師杯 (I1156 胴354) 土師壺 (I139 胴1088) 須志杯 (I125 胴26) 須志壺 (I13 胴12) 須志壺蓋2	2	4	142 47 93 144 94 96	
25号住居	Dm 12 Dn 12	14.0㎡	9c後	N-104°-E	土師杯 (I146 胴64) 土師壺 (I138 胴794) 須志杯 (I19 胴25) 須志壺 (I11 胴5)	1	1	145 48 146 94	

2号住居 (第109図 PL27・83)

位置 Du-08・09 Dv-08・09

平面形 横長長方形

規模 3.3m×2.3m

床面積 5.5m²

方位 N-93°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均40cm

床 黄褐色砂壤土をブロック状に含む黒褐色により層厚5cm程度の貼り床を形成する。貼り床は住居全体におよび、硬く良好な面をもっている。面は平坦であるが、わずかに南東側に傾斜する。

柱 穴 認められない。

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。幅50cm、奥行き60cmの規模をもち、天井部に用いられたとみられる礫 (第109図5)が出土している。進道部分是不明。

周溝 幅10cm、深さ5cmの小溝が壁に沿って全周する。

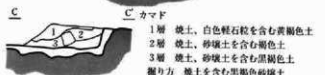
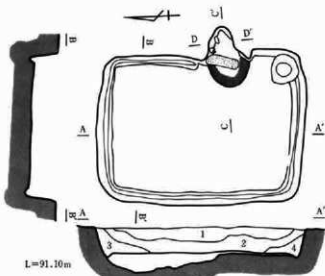
貯蔵穴 カマド南側、南東隅に径45cm、深さ20cmの小穴が確認された。

掘り方 カマド前、住居北西隅周辺に明瞭な掘り方が存在し、そのうえに貼り床を形成する。

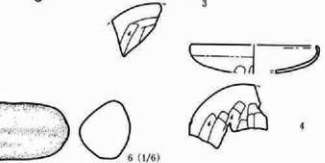
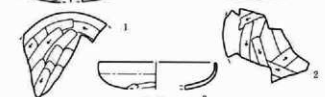
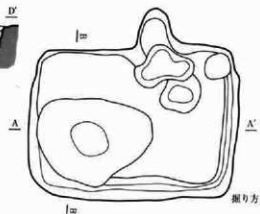
重複 最近の耕作等による擾乱が部分的に認められるが、他遺構との重複関係はない。

土層説明

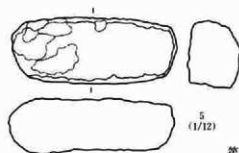
- 1層 白色軽石粒を多く含む黒褐色土
 - 2層 白色軽石粒、焼土粒、ローム粒を含む褐色土
 - 3層 ロームブロック、焼土粒を含む黒褐色土
 - 4層 ほとんど夾雑物を含まない灰褐色土
- 掘り方 褐色土ブロックを含む黒褐色土



- C' カマド
- 1層 焼土、白色軽石粒を含む黄褐色土
 - 2層 焼土、砂壤土を含む褐色土
 - 3層 焼土、砂壤土を含む黒褐色土
- 掘り方 焼土を含む黒褐色砂壤土

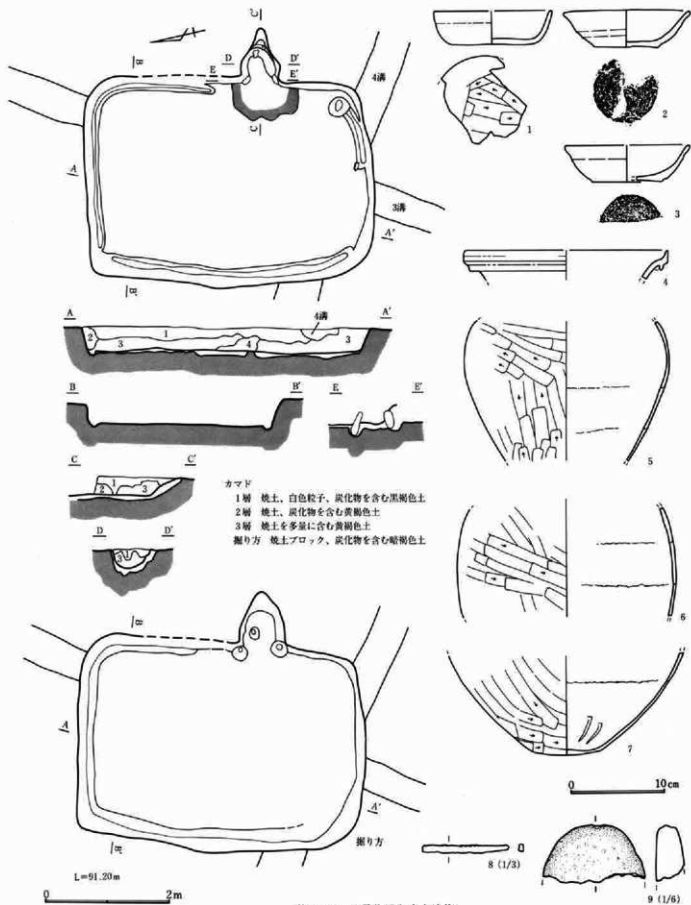


0 2m



第109図 2号住居と出土遺物

0 10cm



第110図 3号住居と出土遺物

3号住居 (第110図 PL28・83)

位置	Ds-08・09・10 Dt-08・09・10
平面形	横長長方形
規模	4.6m×3.3m
床面積	10.9㎡
方位	N-101°-E
壁	ほぼ垂直に立ち上る。確認壁高は30~40cmである。
床	黄褐色砂壤土をブロック状に含む暗褐色土により貼り床を形成するが、部分的に地山を利用する。床面は住居全域にわたり確認され、ほぼ水平で硬く良好な状態である。
柱穴	認められない。
カマド	東壁中央南寄りに設置される。幅60cm、奥行き80cm程度の規模をもつ。袖部には粘土塊が配置される。調査時には砂岩かと見られたが、その後砂粒を多量に含む粘土による工作物であることが確認された。 また、掘り方調査に伴い袖部にはこの粘土塊設置用の小穴も検出され、同時にカマド中央部には支脚設置に設けたとみられる小穴も存在する。なお、支脚自体は検出されていない。
周溝	幅10cm、深さ5cm程度の小溝が壁下に巡る。カマド付近、南西・北西隅付近に途切れる部分があるが、使用時には全周していた可能性も否定できない。
貯蔵穴	カマド南側、南東隅に径35cm、深さ20cmの小穴が認められている。周溝と接しており、貯蔵用施設との調査所見も得られていないが、位置的關係から推定されるにすぎない。
掘り方	床面下は多少の起伏をもつ程度であり、明瞭な掘り方形状は認められない。

3号住居 土層説明

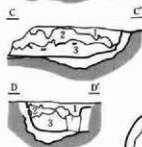
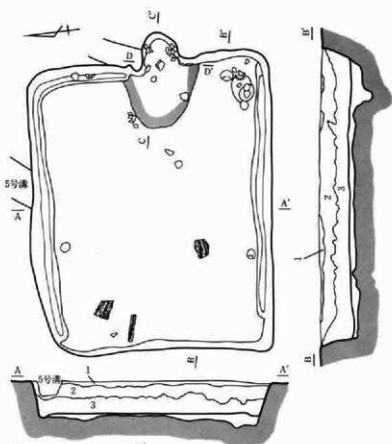
- 1層 白色軽石粒、焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色砂質土
 2層 * * * * 黄褐色土
 3層 焼土粒を多量に含む黄褐色土
 4層 焼土ブロックを含む灰褐色土
 掘り方 砂壤土ブロックを含む暗褐色土

4号住居 (第111・112図 PL29・83・84・95)

位置	Dq-11・12 Dr-11・12
平面形	縦長長方形
規模	3.8m×4.5m
床面積	13.6㎡
方位	N-102°-E
壁	ほぼ垂直に立ち上る。確認壁高は45~55cm程度である。各辺は直線的であるが、各隅は丸みをもつ。
床	砂壤土ブロック、焼土粒を混入する黒褐色土による貼り床を形成する。床面は、住居中央部に主として硬く良好な状態が確認されるが、縁辺部はやや不明瞭となる。面は小さな起伏をもつが、ほぼ水平に構築される。
柱穴	認められない。
カマド	東壁中央部に設置される。幅55cm、奥行き60cmの規模をもつ。袖部は住居内にほとんど張り出さないが、この部分には平瓦(第112図)が設置され、さらに粘土により固定されている。
周溝	幅20cm、深さ2~5cmの小溝が南壁およびカマド北側から北壁にかけ巡る。西壁部には確認されていない。
貯蔵穴	カマド南側、南東隅に径40cm、深さ17cmの小穴が確認されている。この部分には土師器杯などの土器類が集中する傾向がある。
掘り方	住居中央部に地山が残り、縁辺部がやや深めに掘り込まれる。中央部の地山が高く残る部分の床面が硬く良好な面となっている。掘り方埋土は砂壤土を混入する暗褐色土である。
その他	床面近くに炭化材が数点出土しているが、他に火災住居としての痕跡は認められない。

4号住居 土層説明

- 1層 白色軽石、焼土粒を含む暗褐色砂質土
 2層 白色軽石、焼土粒を含む黒褐色土
 3層 炭化物、焼土を含む黒褐色土
 掘り方 砂壤土、ローム粒、焼土粒を混入する

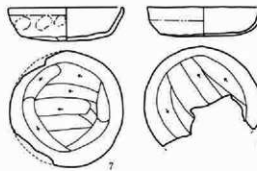
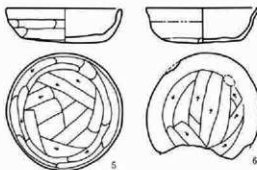
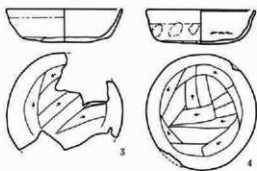
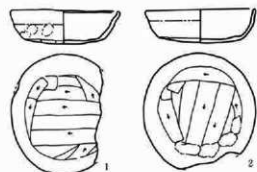
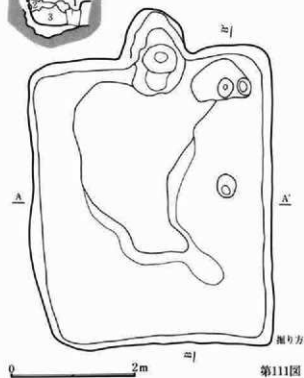


カマド

- 1層 焼土、白色粒を含む灰褐色土
- 2層 粘土ブロックを多く含む黄褐色土
- 3層 焼土ブロック、灰を含む褐色土

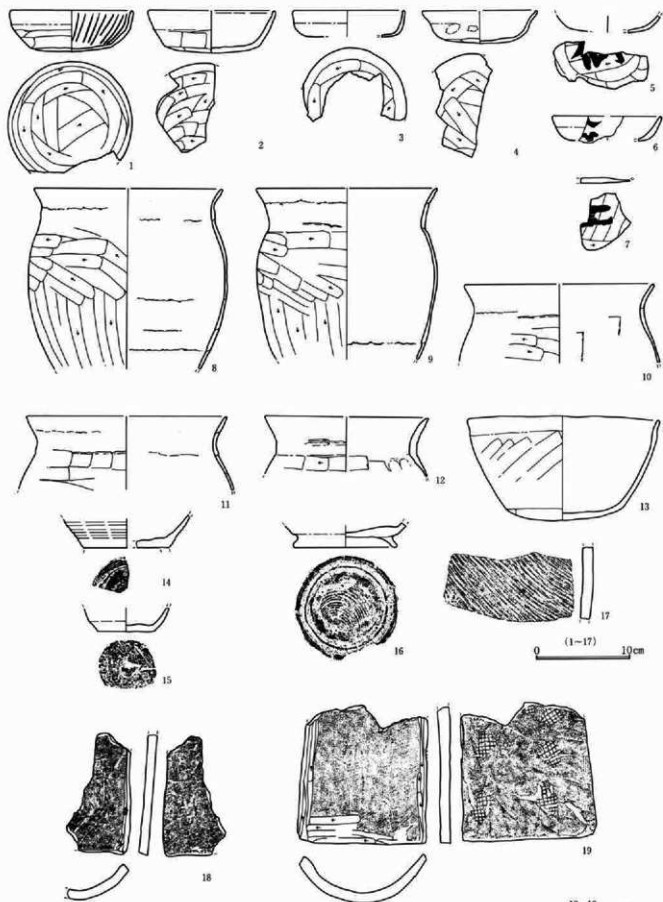
掘り方 焼土、灰、炭化物を含む灰褐色土

L=92.10m

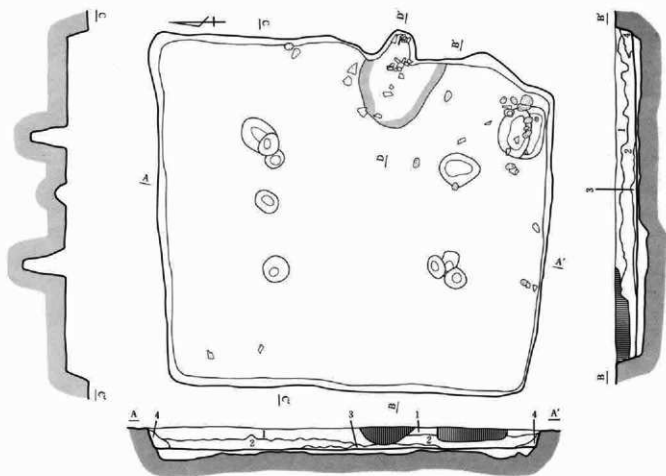


0 10cm

第111図 4号住居と出土遺物



第112图 4号住居出土遗物

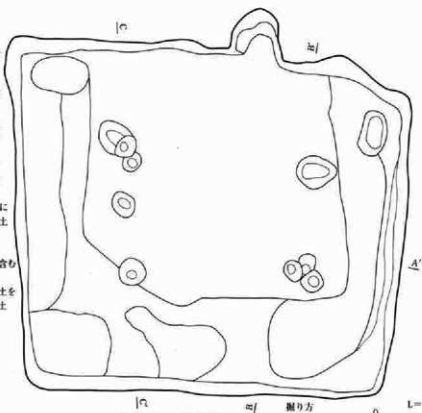


土層説明

- 1層 白色軽石粒、
焼土粒を含む
暗褐色土
- 2層 白色軽石粒、
褐色土を含む
黒褐色土
- 3層 焼土粒、炭化
物粒を含む褐
色土
- 4層 褐色砂質土を
含む黒褐色土
- 掘り方 砂質土を
ブロック状に
含む暗褐色土

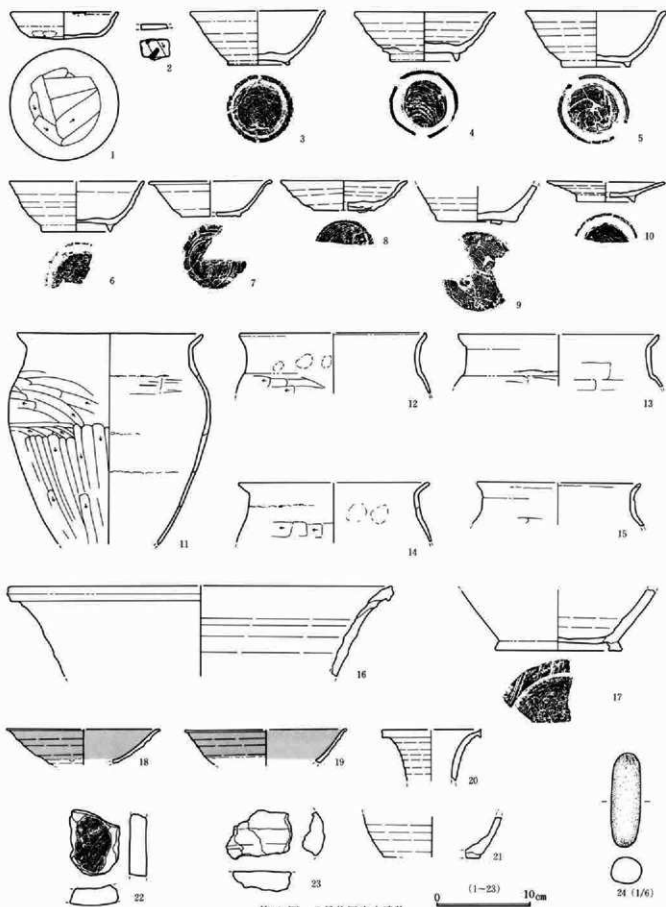
カマド

- 1層 焼土、灰等を含む
黒褐色土
- 掘り方 焼土、粘質土を
含む黄褐色土



第113図 5号住居

0 L=91.40m 2m



第114图 5号住居出土遺物

5号住居 (第113・114図 PL30-85-95)

位置 Do-10・11 Dp-10・11・12
 平面形 不整形
 規模 東辺6m 西・北辺5.5m 南辺5m
 床面積 30.2㎡
 方位 N-98°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は30cm程度である。

床 褐色土を混入する黒褐色土により層厚5cm程度の貼り床を形成する。貼り床は住居全面に及ぶが縁辺部ではやや軟弱となる。

柱穴 住居対角線上に4ヶ所認められる。径30~40cm、深さ50~70cmの規模をもつ。各柱穴間の距離は東西方向で1.8m、南北方向で3mを測る。これら柱穴には各部分とも複数の小穴が認められている。住居には重複の痕跡は認められていないため、これら各小穴が柱穴とすれば継続的使用における建て直しが行われた結果かも知れない。

カマド 東壁中央に設置される。幅70cm、奥行き50cmの規模をもつ。

周溝 認められない。

貯蔵穴 住居南東隅に径80cm×50cm、深さ20cm程度の規模のものが認められ、遺物もこの部分に集中する傾向がある。また、これに接してより古い小穴も存在するが建て直しに伴うものであろうか。

掘り方 住居縁辺部が凹み、中央部の地山が残る形状を示す。この部分には褐色土をブロック状に含む暗褐色土が堆積する。

6号住居 (第115・116図 PL31-32-85-86)

位置 Dp-07・08・09 Dq-07・08・09
 平面形 縦長長方形
 規模 東辺4.7m 西辺4m 南・北辺4.2m
 床面積 16.4㎡
 方位 N-83°-E

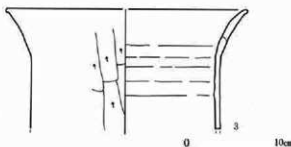
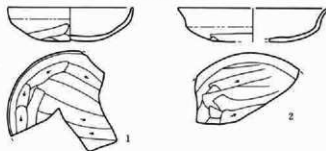
壁 ほぼ垂直に立ち上り確認壁高は40cm程度である。各辺は直線的であるが、隅は丸みを

もつ。

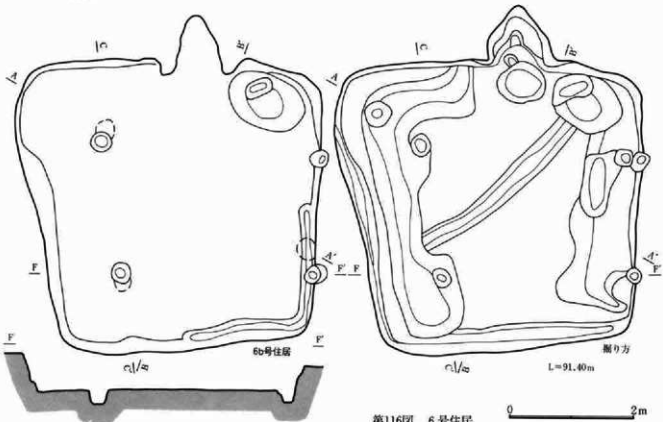
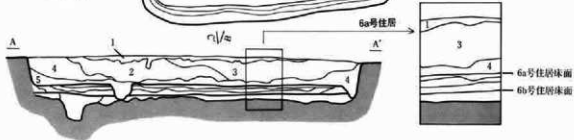
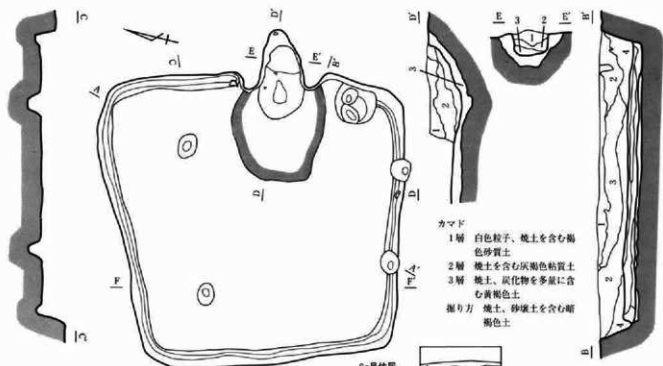
床 15cm程度の比高をもって2層の床面が確認されている。上層の床面は白色粒子、焼土粒を含む黒褐色土による層厚5cm程度の貼り床で、硬く良好な面を形成している。貼り床は住居全域におよび、ほぼ水平な面をもっている(6a号住居)。下層の床面は砂壤土ブロックを含む黒褐色土による貼り床であり、上部からの破壊は少なくやはり住居全域におよぶ(6b号住居)。

この2層の床面は当然時期を異にして形成されたものであろう。住居平面形からは重複の痕跡は認められず、カマドも1ヶ所のみ検出されている。しかし、北側柱穴については接して2穴づつ存在し、時期差をもって柱穴が掘り込まれたことを物語っている。このような点からみれば、平面規模、カマドの位置等を基本的に移動する事なく建て替えもしくは床面の貼り替えがこの住居において行われたことが推定できる。

柱穴 北側2柱穴は住居対角線上に位置、南側は住居南壁部に150cmの間隔で2柱穴並ぶ。下層の床面に伴う住居(6b号住居)についても多少位置がずれるが、ほぼ同様な4柱穴が認められる。各柱穴は径30cm、深さ25cm



第115図 6号住居出土遺物 127



第116図 6号住居

程度の規模をもつ。

カマド 幅75cm、奥行き90cmの規模をもつ。

周溝 6 a号住居は幅15cm、深さ5cmの小溝が壁下に全周し、6 b号住居は同規模の小溝が南西隅部に認められる。

貯蔵穴 住居南東壁に接して径65cm、深さ29cmの規模の穴が認められる。

掘り方 6 a号住居には認められない。6 b号住居には浅い掘り方が存在し砂壤土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。この埋土上面が6 b号住居の床面を形成する。

6号住居 土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色砂質土
- 2層 白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色粘質土
- 3層 白色軽石粒、焼土粒、砂壤土を含む灰褐色土
- 4層 白色軽石粒、焼土粒、砂壤土を含む黒褐色土

7号住居 (第117図 PL33・86・95)

位置 Dp-06・07 Dq-06・07

平面形 横長長方形

規模 3.7m×3.4m

床面積 10.6㎡

方位 N-86°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均35cmである。

床 砂壤土を主体とする貼り床が形成される。全体的にやや軟弱であるが、ほぼ水平な面をもつ。

柱穴 認められない。

カマド 東壁中央やや南寄りに設置され、幅55cm、奥行き60cmの規模をもつ。

周溝 認められない。

貯蔵穴 住居南東隅に径60cm、深さ20cmの規模をもつ穴が認められる。

掘り方 全体的に底面が掘られるが、縁辺部がやや深い傾向がある。砂壤土を主とする埋土が堆積し、上面を床面とする。

重複 住居南壁部に土坑状の攪乱がある。

8号住居 (第118・119図 PL34・86・95)

位置 Dm・Do-09・10 Dn-08・09・10

平面形 横長長方形

規模 4.9m×4.2m

床面積 17.2㎡

方位 N-92°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均25cmである。

床 褐色粘土粒、焼土粒を含む黒褐色土による貼り床が形成される。面はほぼ水平で硬く良好である。

柱穴 認められない。

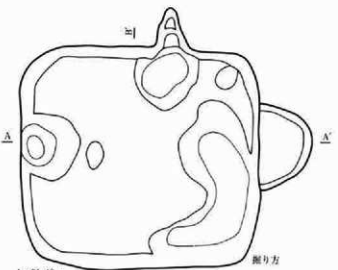
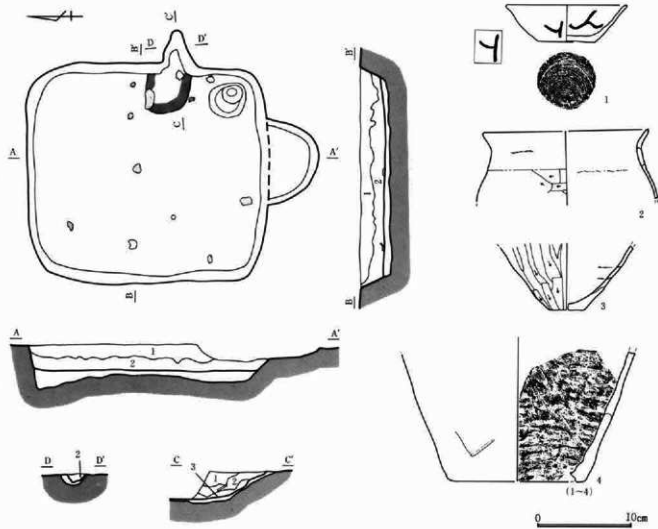
カマド 住居東壁中央部に設置される。幅50cm、奥行き70cm程度の規模をもち、両袖部には礫(粗粒安山岩)が配置される。また、焚口中央部にも支脚として棒状礫(粗粒安山岩)が設置される。

周溝 認められない。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 この住居は2/3程度11号住居と重複している。11号住居を切って構築されているが、掘り方は浅いものとみられ、8号住居床面下約15cm下位に存在する11号住居床面を破壊していない。カマド部についても同様でありカマド使用面下には15cm-20cmの間隔で11号住居の床面が良好な状態で検出されている。11号住居と重複する部分については、掘り方の形状は把握されていない。

しかし、11号住居と重複していない部分である住居北側から西側にかけては掘り方形状が把握されている。この掘り方形状は11号住居重複部と比較すると明瞭であり、偶然の結果とはいえ、住居構築に際し何らかの理由があったのだろうか。



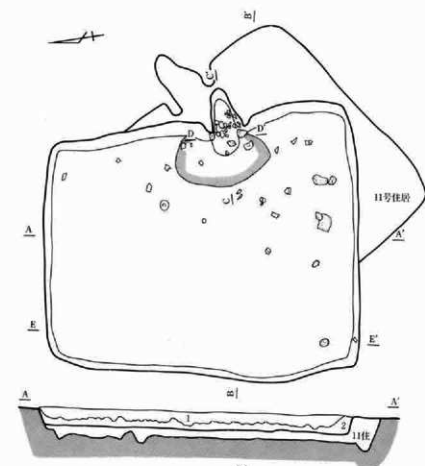
土層説明

- 1層 焼土粒、炭化物粒、白色軽石粒を含む黒褐色土
- 2層 焼土粒、炭化物粒、白色軽石粒の地、ロームブロックを含む暗褐色土
- 掘り方 砂壤土をブロック状に含む明褐色土

カマド

- 1層 焼土粒、白色軽石粒を含む黒褐色土
- 2層 焼土粒を少量含む暗褐色土
- 3層 焼土粒を多量に含む暗褐色土

第117図 7号住居と出土遺物

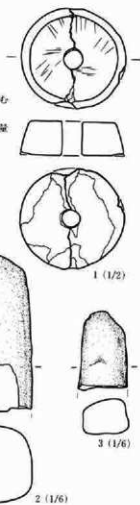
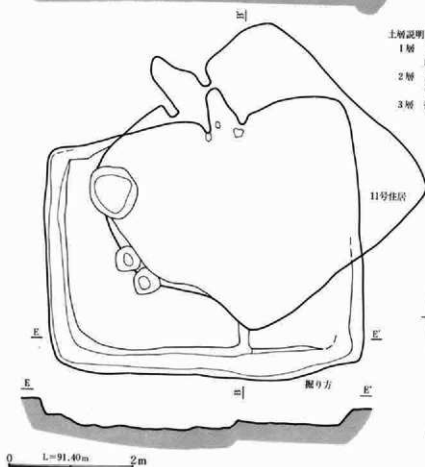


カマド

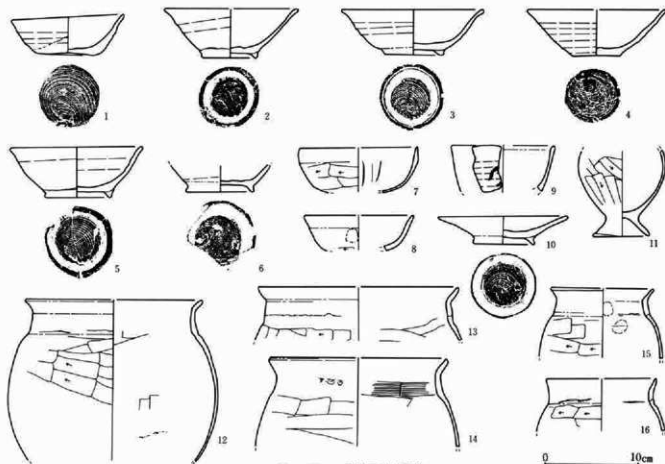
- 1層 焼土、白色粒を含む褐色土
- 2層 焼土、炭化物を含む黒褐色土
- 3層 焼土を多く含む黄褐色粘質土
- 掘り方 焼土、炭化物を含む黄褐色土

土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む暗褐色土
- 2層 白色軽石粒、焼土粒を少量含む黒褐色土
- 3層 褐色砂壤土（崩落土）



第118図 8号住居と出土遺物



第119図 8号住居出土遺物

9号住居 (第120・121図 PL35・87・95・96)

位置 Dn-06・07・08 Do-06・07・08

平面形 横長長方形

規模 5.0m×3.9m

床面積 17.2㎡

方位 N-82°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均30cmであり、南西部分は12号住居埋土を壁面とする。

床 砂炭土ブロックを含む黒褐色土による貼床を形成する。床面は多少起伏をもつがほぼ水平で、住居中央部が特に硬く良好である。

柱穴 認められない。

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。規模は幅50cm、奥行き80cmで軸は張り出さず、この部分には糞(粗粒安山岩)が用いられている。

周溝 認められない。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 掘り方は全体的に深くないが、住居縁辺部がより深くなり、中央部を高く残す傾向が認められる。掘り方内には砂炭土ブロックを含む黒褐色土が主として堆積し、焼土粒および褐色粘質土も部分的に混入する。

遺物 遺物は住居南東部にやや集中する。また住居南壁寄りに第120図2の磨石が置かれたような状態で出土している。

重複 12号住居を掘り込んで構築している。

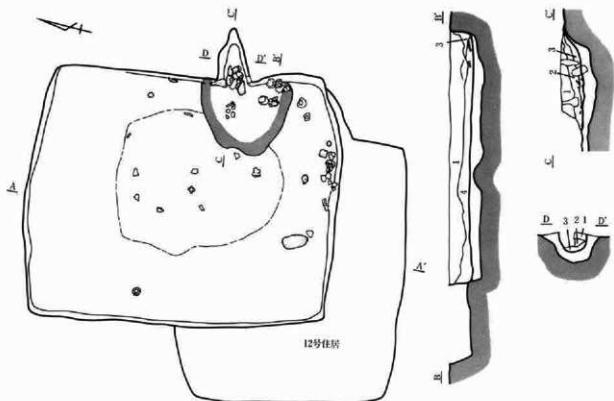
9号住居 土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む灰褐色砂質土
- 2層 焼土粒を多く含む灰褐色土
- 3層 灰褐色砂質土
- 4層 白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色土

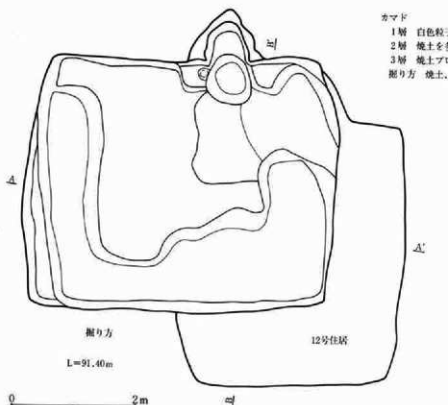
10号住居 (第122・123図 PL36・88)

位置 Dy-04・05 Ea-05

平面形 方形(不整)



12号住居



掘り方

L=91.40m

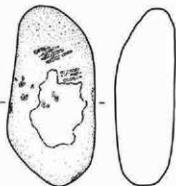
12号住居

カマド

- 1層 白色砂子、焼土を含む灰褐色砂質土
 - 2層 焼土を多量に含む褐色土
 - 3層 焼土ブロック、炭化物を含む黄褐色土
- 掘り方 焼土、灰、炭化物等を含む灰褐色土

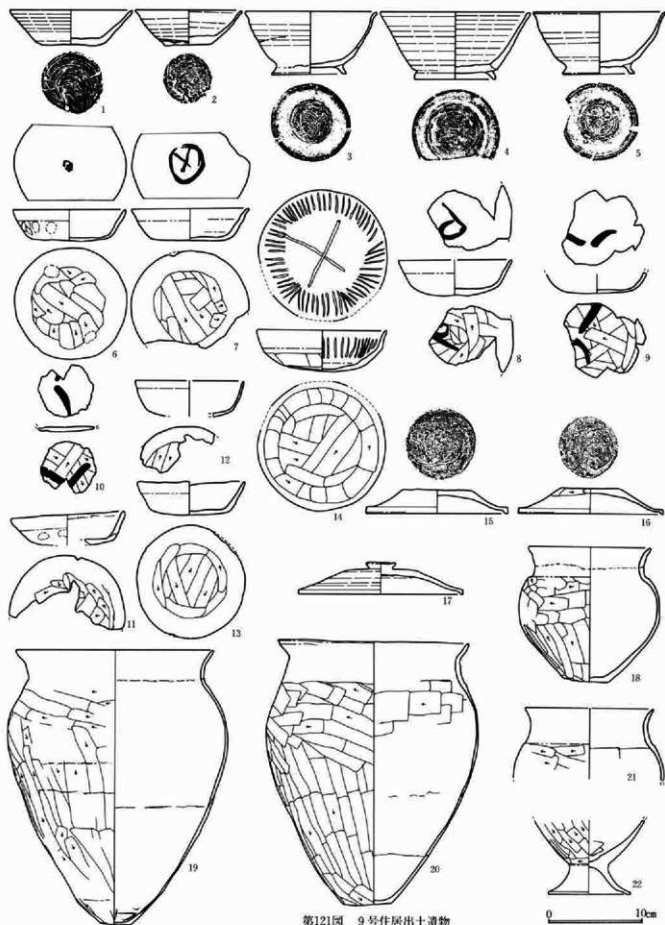


1
(1/6)

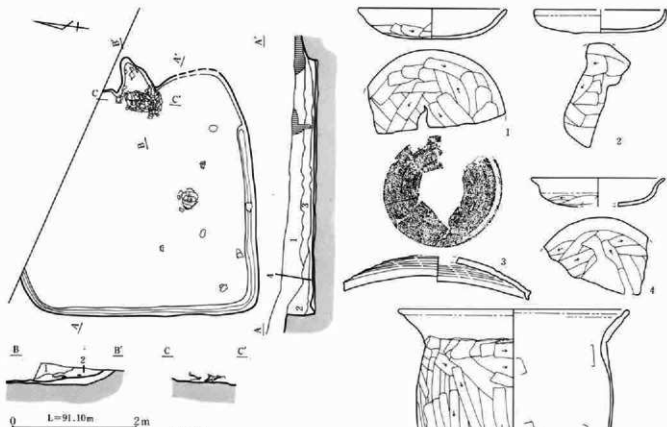


2 (1/8)

第120図 9号住居と出土遺物



第121图 9号住居出土遗物



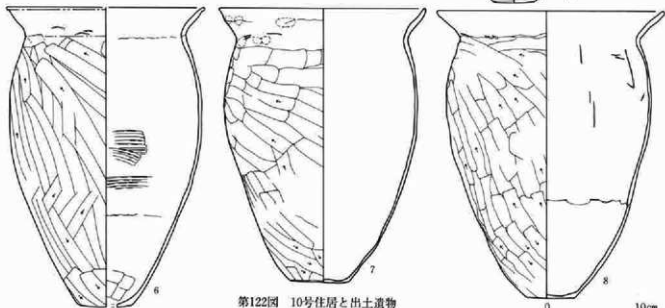
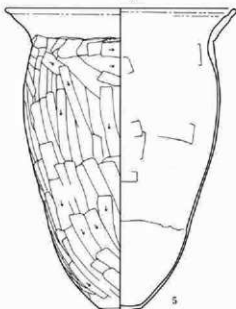
0 L=91.10m 2m

土層説明

- 1層 白色粒子、焼土を含む暗褐色土
- 2層 褐色土を多く混入する黒褐色土
- 3層 白色粒子、焼土を含む黒褐色土
- 4層 褐色土、焼土を多く含む黒褐色土

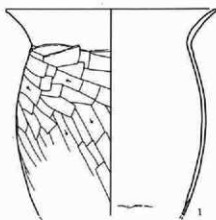
カマド

- 1層 焼土、白色粒を含む褐色土
- 2層 焼土、灰、炭化物を含む黒褐色土
- 掘り方 焼土、炭化物を含む黄褐色土



第122図 10号住居と出土遺物

0 10cm



規模 3.7m×3.7m

床面積 —

方位 N-52°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、西壁で45cm、東壁で15cm程度である。

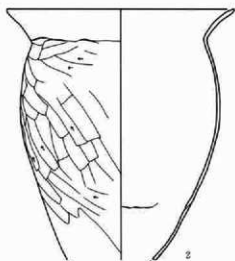
床 砂壤土ブロックを含む黒褐色土による貼り床を形成する。貼り床は層厚5cm程度で、住居全面におよぶ。

住居北東部は調査区外にのびており全体の内容は不明であったが、確認したところ同部分はすでに最近の擾乱を受け損失していることが把握されている。

柱 穴 認められない。

カマド 東壁中央付近に設置される。規模は幅50cm、奥行き70cm程度で、袖部はわずかに張り出す。

カマド突口部には第122図6・7・8の甕が横倒状態で一括出土している。器体は細かい破片となっているが、ほぼ定形を保つ資料である。



周溝 住居検出部分では、北東隅周辺以外について幅15cm、深さ5cmの小溝が壁下に巡っている。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 床面下の調査により掘り方をもつことが確認されたが、極めて浅く床面下5cmの深さで全体が均一に掘り下げられている。

その他 住居中央やや南寄り床上に第122図5の甕が一括出土している。擾乱を受けているに比し、遺物の残存状態は良好である。



11号住居 (第124・125図 PL37・88・89)

位置 Dn-09・10 Do-09・10

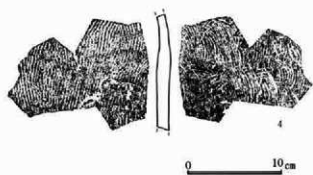
平面形 ほぼ方形

規模 3.7m×3.8m

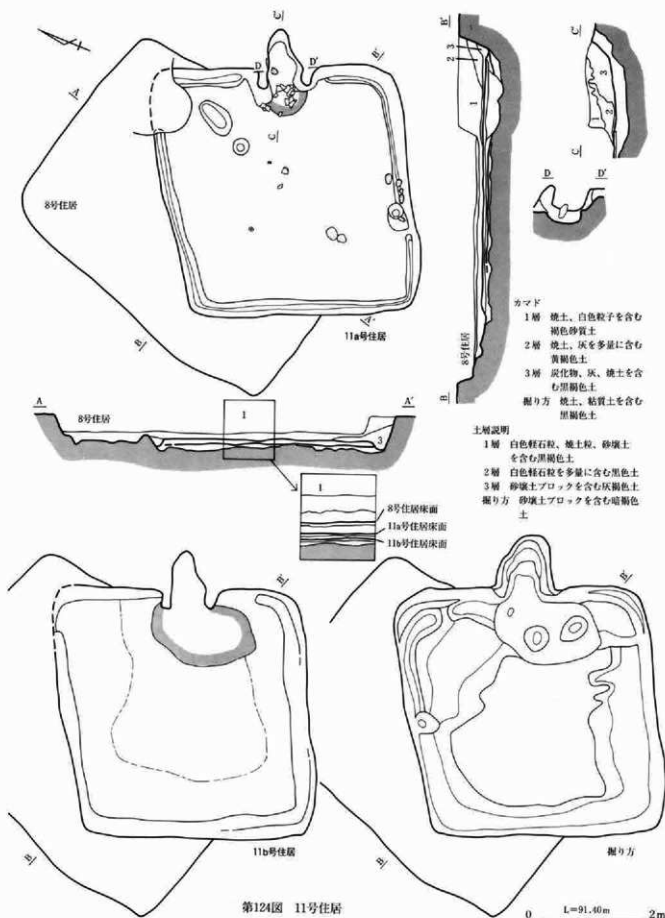
床面積 11.5㎡

方位 N-72°-E

壁 壁はほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は南壁側で40cm程度であるが、北側部は8号住居



第123図 10号住居出土遺物



第124図 11号住居

が掘り込まれていることから10cm程度が残るにすぎない。

床 砂壤土、焼土を混在する黒褐色土により貼り床を形成する。貼り床は全面におよび硬く良好な水平面をもつ。層厚は5cm程度である。8号住居が上位に構築されるが、この床面には影響はない(11a号住居)。

さらにこの貼り床下にはもう一層床面が存在する(11b号住居)。この床は黒褐色土を主とした貼り床であり、確認状況から住居全域におよぶ可能性が高いとの調査所見を得ている。この床面は縁部で11a号住居に伴う掘り方により破壊を受けているが、残存状況は良好である。

この2層の床面は時期を異にして使用されたものであろうが、住居壁面には重複の痕跡は認められず、カマドも1ヶ所のみ存在する。このことからみると、住居自体は継続しつつ、床面のみ貼り替えが行われた結果と考えることができる。このような状態は6号住居における例に類似している。

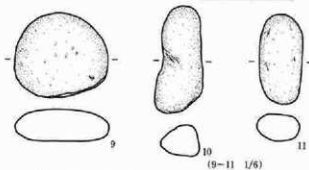
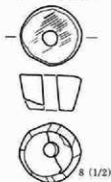
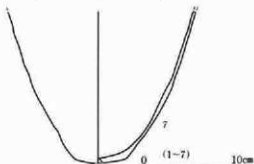
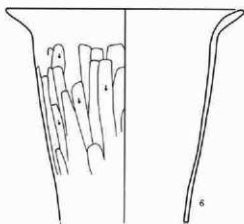
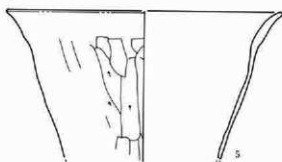
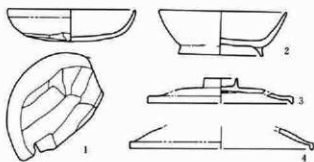
柱 穴 認められない。

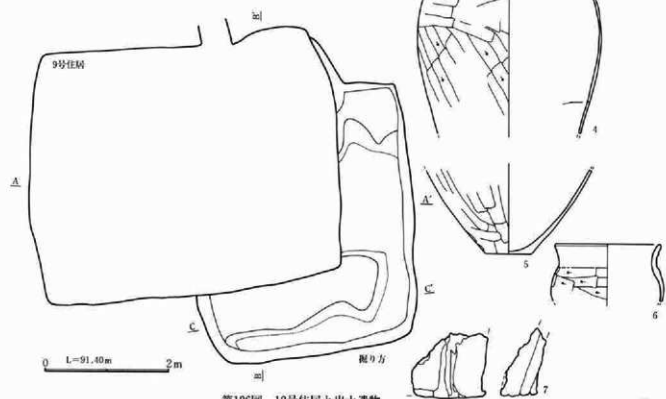
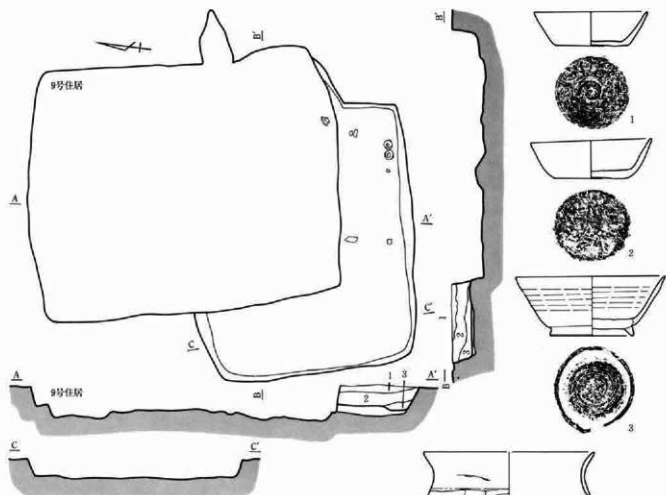
カマド 東壁中央に設置される。袖部は張り出しきみで規模は幅50cm、奥行き100cm程度である。カマドについては2層の床面に伴うような痕跡は認められていない。

周溝 11a号住居では小溝がほぼ全周する。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 掘り方の規模は全般的に小さい。11a号住居はほとんどみられない。11b号住居につ





第126図 12号住居と出土遺物

いても掘り方は浅く、この部分に黒褐色土を埋し、そのまま床面を構築している。

重複 8号住居が掘り込まれ、壁が壊されるが床面には達していない。

12号住居 (第126図 PL38・89)

位置 Dn-07・08 Do-07・08

平面形 縦長長方形

規模 3.4m×4.1m

床面積 9号住居と重複しており計測できない。

方位 N-84°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は35cm程度である。

床 砂壤土ブロックを含む黒褐色土による貼り床を形成する。貼り床は層厚5cm程度であり、硬く良好な面をもっている。住居の半分近くが9号住居と重複することにより失われているため、全域に貼り床がおよぶか否かは不明である。

柱穴 認められない。

カマド 9号住居により北半部を失っている。奥行きは60cm程度とみられる。袖部はほとんど張り出していない。

周溝 認められない。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 掘り方をもつが全体的にやや規模は浅い。埋土は砂壤土ブロックおよび褐色土ブロックを混在する黒褐色土であり、全体的に砂質の土である。また、部分的に焼土粒を少量含んでいる。この上に貼り床が形成されるが、一部では地山を床に併用する所も観察される。

重複 9号住居が建築されることにより、12号住居は北側部を主として半分近くが失われている。

12号住居 土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色砂質土
- 2層 白色軽石粒、焼土ブロックを含む黒褐色土
- 3層 白色軽石粒を含む灰褐色砂壤土

13号住居 (第127・128図 PL39・89・90)

位置 D1-07・08 Dm-07・08・09

平面形 横長長方形

規模 5.4m×4.1m

床面積 18.3㎡

方位 N-81°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均40cmである。各壁は直線的に連続し、各隅は丸みをもっているが、南側壁についてはやや歪みがみられる。

床 褐色土をブロック状に含む黒褐色土による貼り床を形成する。層厚は5cm程度であるが硬く良好な面をもつ。この貼り床は基本的に住居全面におよぶが、特にカマドを中心とした東半中央部に良好な面が認められている。

貼り床面はほぼ水平面となっているが、住居周辺部がやや傾斜する傾向がある。これは床面下掘り方に関連するもので、住居縁辺部がより深く掘り込まれていることにより低下したものと見える。

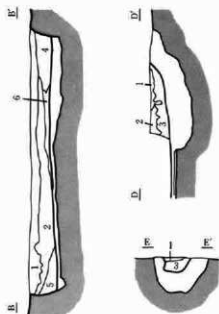
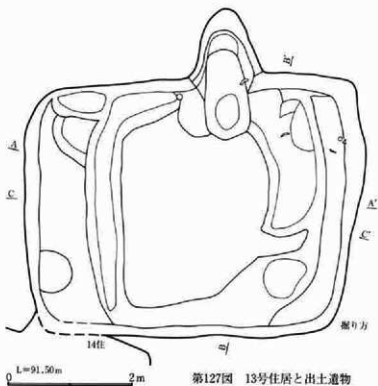
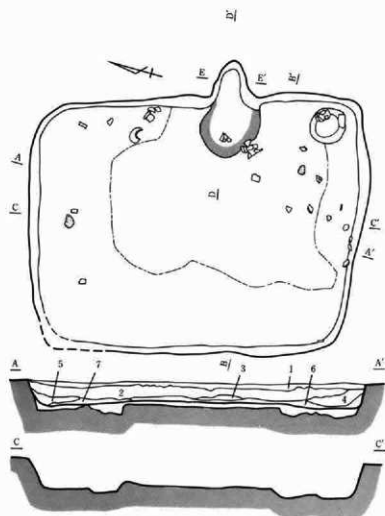
柱穴 認められない。

カマド 東壁中央部に設置される。袖部はほとんど張り出さず幅65cm、奥行き80cm程度の規模をもつ。掘り方はさらに規模が大きく、幅100cm、奥行き120cmで、中央付近にピット状の凹みをもつ。掘り方内には焼土粒、灰等を含む暗褐色土、黄褐色土等が堆積する。

掘り方 中央部がやや高く、縁辺部をより深く掘り込む。埋土は褐色土、砂壤土および焼土粒を含む暗褐色土が堆積する。

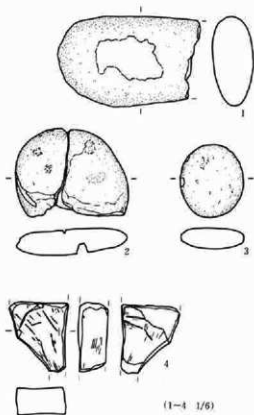
13号住居 土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む灰褐色土
- 2層 焼土粒、黄色粘質土を多く含む褐色土
- 3層 焼土粒、炭化物粒を多く含む黄褐色粘質土
- 4層 焼土粒を含む黒褐色粘質土
- 5層 砂壤土ブロックを含む黒褐色土
- 6層 焼土粒を含む黒褐色土
- 7層 砂壤土および黒褐色土の混土



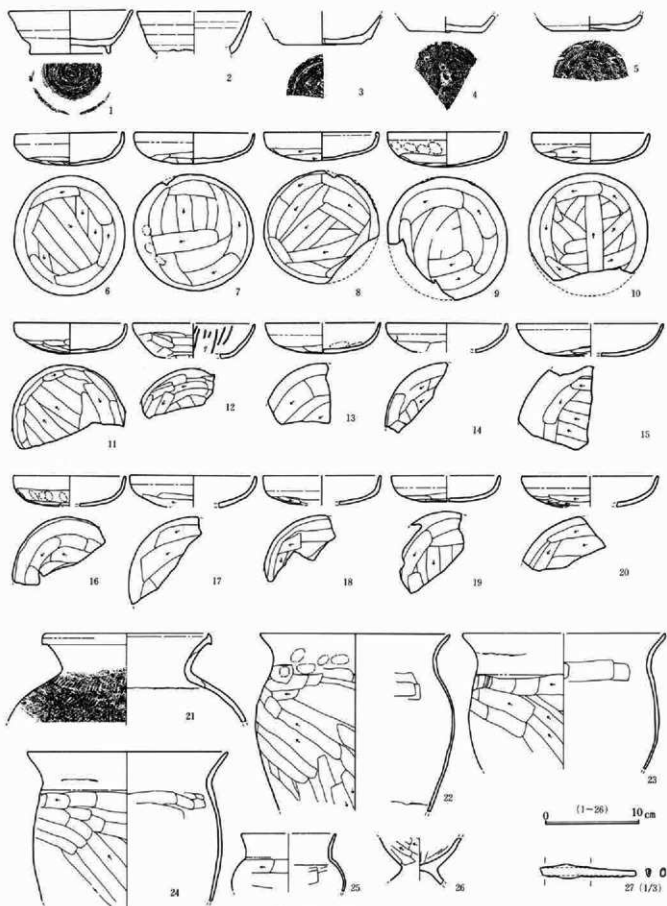
カマド

- 1層 焼土、白色粒を含む暗褐色土
- 2層 焼土、白色粒を含む黒褐色砂焼土
- 3層 焼土ブロックを含む黄褐色土
- 掘り方 焼土、灰等を含む暗褐色土



(1-4 1/6)

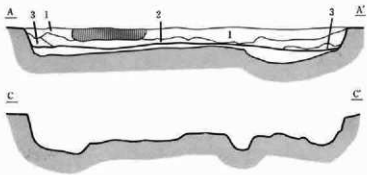
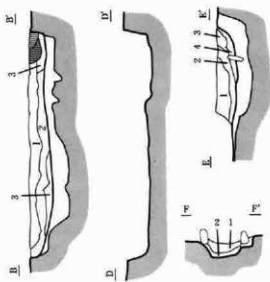
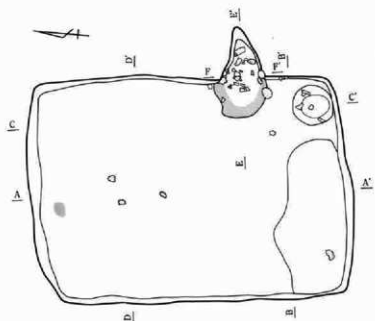
第127図 13号住居と出土遺物



0 (1-26) 10 cm

27 (1/3)

第128图 13号住居出土遺物

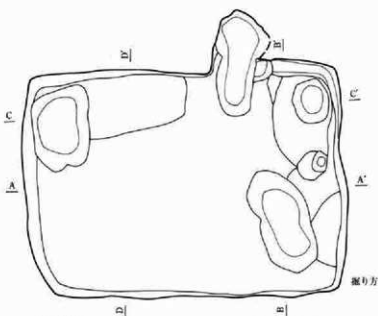


土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色土
- 2層 白色軽石粒、焼土粒を多く含む暗褐色土
- 3層 焼土粒、砂質土を含む褐色土

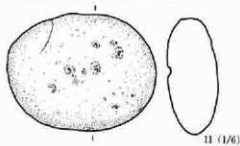
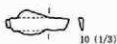
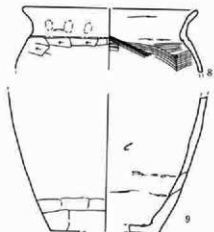
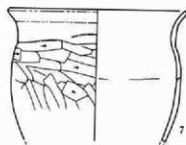
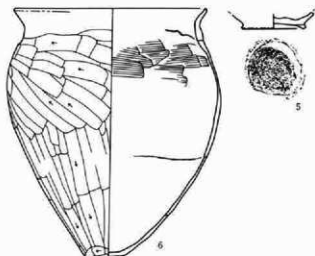
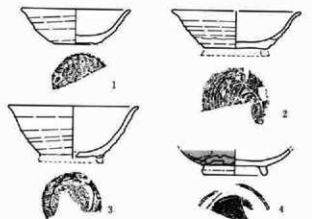
カマド

- 1層 焼土、白色粒子を含む暗褐色土
 - 2層 焼土、炭化物を含む黄褐色土
 - 3層 焼土を多く含む黄褐色土
 - 4層 焼土ブロック、灰を含む暗褐色土
- 掘り方 焼土、灰、炭化物を含む褐色土



0 L=91.60m 2m

第129図 14号住居



14号住居 (第129・130図 PL40-90)

位置 Dk-07・08 D1-07・08 Dm-08

平面形 横長方形

規模 5.0m×3.6m

床面積 16.2㎡

方位 N-84°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均35cm程度である。東、西壁は直線的であるが、南、北壁は湾曲ぎみにやや張り出す。各隅は丸みをもち各辺と連続する。

床 褐色土ブロックを含む黒褐色土により貼り床を形成する。硬く良好な面は部分的に観察されるが、特に住居中央付近に集中する傾向がある。逆に縁辺部では硬質面は検出されず、褐色土を混入する軟弱な黒褐色土が認められている。

また、床面はゆるやかな起伏をもつが、これは掘り方形状に沿って低下したものである。

柱 穴 認められない。

カマド 東壁中央やや南寄りに付設される。袖部張り出しはほとんど認められていないが、この部分には礎の埋置が存在する。幅は60cm奥行き100cm程度の規模をもつ。カマド周辺部には灰および焼土の散布が著しい。掘り方内には焼土、灰を含む黒褐色土、暗褐色土が堆積する。

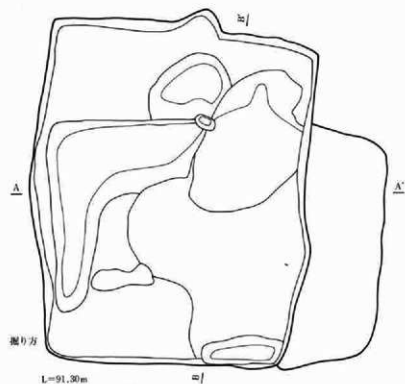
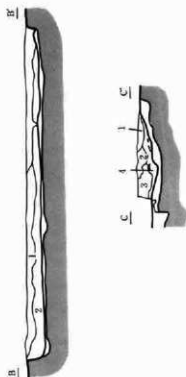
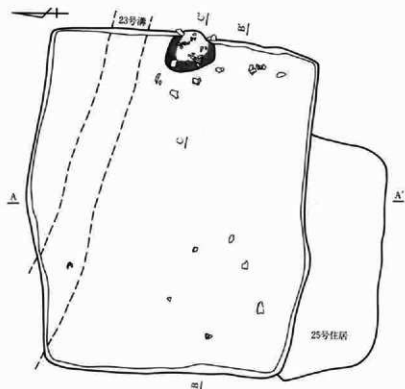
周溝 認められない。

貯蔵穴 住居南東隅に径60cm、深さ25cmの小穴が認められた。

掘り方 住居中央付近は浅く、縁辺部がより深く掘

0 10cm

第130図 14号住居出土遺物



土層説明

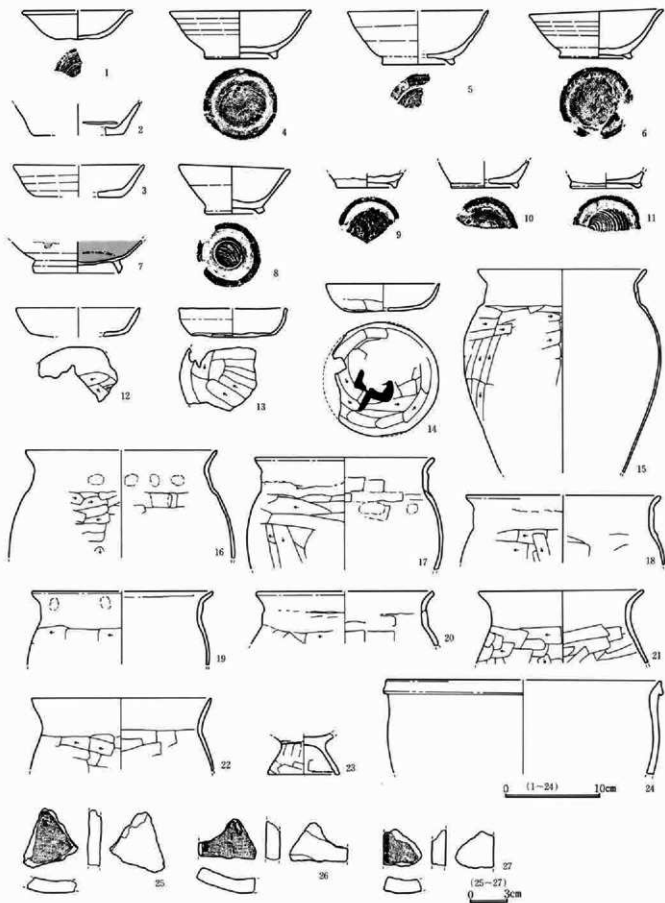
- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む暗褐色土
 - 2層 白色軽石粒、焼土粒および炭化物粒を含む黒褐色土
 - 3層 焼土粒、炭化物および褐色土を多く含む黒褐色土
 - 4層 白色軽石粒を含む軟弱な褐色土
 - 5層 焼土粒、白色軽石粒を少量含む黒褐色土
- 掘り方 焼土粒、白色軽石粒を含む暗褐色土

カマド

- 1層 白色粒、焼土粒を含む黒褐色土
 - 2層 焼土粒を多く含む黒褐色土
 - 3層 焼土ブロックを多く含む黒褐色土
 - 4層 焼土、炭化物、粘土を含む黒色土
- 掘り方 焼土、白色粒、粘土等を混入する暗褐色土

L=91.30m
0 2m

第131図 15号住居

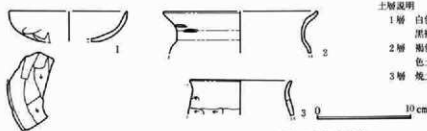
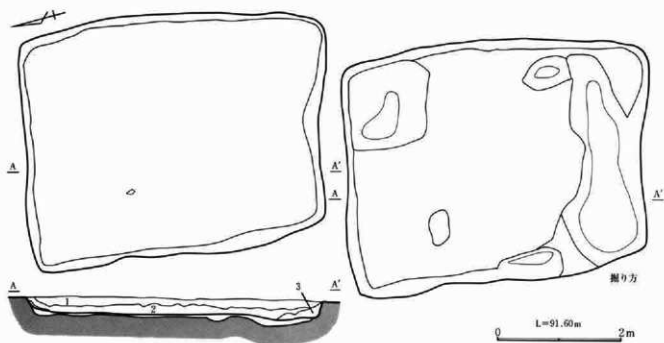


第132图 15号住居出土遺物

	り込まれる。埋土は、砂壤土、焼土等を含む黒褐色土、暗褐色土が堆積する。掘り方は不整形の浅い土坑状をなし、最も深いものでも30cm程度である。
15号住居 (第131・132図 PL41-91・96)	
位置	Dm-11・12 Dn-11・12
平面形	縦長長方形
規模	5.4m×4.4m
床面積	20.8㎡
方位	N-99°-E
壁	ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均25cm程度である。東、西壁は直線的であるが、南、北壁側は歪みが認められる。南壁側は25号住居埋土中に存在するためやや不明瞭であるが、北壁側は歪みが著しい。
床	褐色土ブロックの他焼土粒も混入する黒褐色土により貼り床が形成される。この貼り床は極めて硬質で良好な面をもっている。一部溝状遺構により攪乱を受けているが、硬く良好な貼り床は住居全域におよぶものとみられる。
柱穴	認められない。
カマド	東壁中央部に確認された。検出状態は良好ではなく、カマド主体部の大半は失なわれており、下半部のみ確認であった。このためカマド形状は不明瞭な部分が多い。
周溝	認められない。
貯蔵穴	認められない。
掘り方	掘り方の規模は浅い。住居全体を10cm程度平均的に掘り下げるもので、掘削に伴う小さな起伏は認められるものの、特に小穴状の掘り込みは存在しない。この掘り方内に褐色土ブロックの他、焼土粒、炭化物粒を含む暗褐色土が埋土され、その上位に貼り床が形成されている。
重複	南側で25号住居と重複する。床面レベルが類似しており、新旧関係が判断しにくかったが、断面からみて15号住居が新しい。

16号住居 (第133図 PL41-91)

位置	Dj-08・09 Dk-08・09
平面形	横長長方形
規模	4.9m×3.8m
床面積	15.7㎡
方位	不明
壁	壁はほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均25cm程度である。各壁は直線的に連続するが、やや不安定であり歪みも認められる。
床	基本的に貼り床が形成されるが、全体的に軟弱であり、硬質面は認められない。貼り床層は褐色土ブロックを含む黒褐色土により構成され、住居埋土とは明瞭に区別される。
柱穴	認められない。
カマド	認められないが、遺構構築時から存在しないのか、もしくは攪乱等により失なわれたものであるか確認できない。壁部の確認調査によっても存否についての所見は得られていないため、不明としておかなければならない。
周溝	認められない。
貯蔵穴	認められない。
掘り方	掘り方の規模は浅いが、住居全面におよんでいる。住居南壁付近および北東隅にやや深い不整形の掘り込みがみられ、この部分以外は平均5cm程度掘り下げられている。この部分に褐色土ブロックを含む黒褐色土を埋土し、上面を床としている。
17号住居 (第134図 PL42)	
位置	De-01 Df-01
平面形	横長長方形
規模	3.5m×4.2m
床面積	14.2㎡
方位	N-90°-E
壁	壁部は大半が失なわれており、平面形の検出にとどまる程度である。確認壁高は最大でも10cm程度であり、北、東壁部がやや残



土層説明

- 1層 白色軽石粒を多量に含む他、焼土も少量混入する黒褐色土
- 2層 褐色土ブロック、白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色土
- 3層 焼土粒を含む黒褐色土

第133図 16号住居と出土遺物

存が良い。

床 カマド周辺および南東部で硬く良好な床面が認められた。床は砂壤土を含む暗褐色土による貼り床であり、層厚は5cm程度である。

柱 穴 認められない。

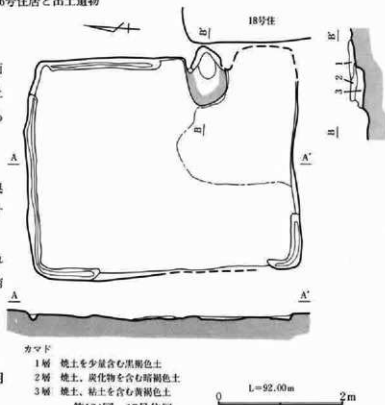
カマド 東壁中央南寄りに付設される。幅50cm、奥行き50cmであるが、カマド部は一部東接する18号住居と重複する。

周溝 幅15cm、深さ5cmの小溝が壁下に認められる。確認されたのは東壁から北壁および南西隅部である。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 浅く不規則な凹みが床面に認められる。

重複 一部18号住居と重複する。遺構が浅く不明瞭だが17号住居が古い。



カマド

- 1層 焼土を少量含む黒褐色土
- 2層 焼土、炭化物を含む暗褐色土
- 3層 焼土、粘土を含む黄褐色土

第134図 17号住居

18号住居 (第135図 PL42-91)

位置 Df-01・02 Dg-01・02

平面形 縦長長方形

規模 3.2m×3.4m

床面積 9.5㎡

方位 N-86°-E

壁 構作による攪乱を受け、全体的に残存状態は悪い。確認壁高は最大で20cmである。

床 カマドを中心とした住居東側で硬く良好な面を確認した。床は砂壤土ブロックを含む黒褐色土による貼り床を形成する。

柱 穴 認められない。

カマド 東壁中央部に設置される。袖部はほとんど張り出さないがこの部分には礎が設置されている。

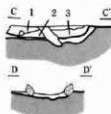
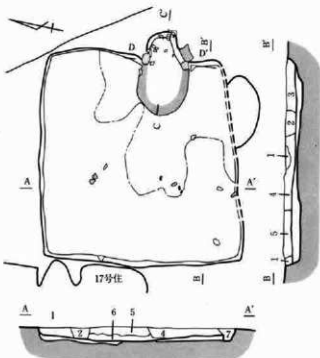
周溝 認められない。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 中央部が高く、周辺部がやや深く掘り込まれる。この部分に砂壤土を含む暗褐色が埋土される。

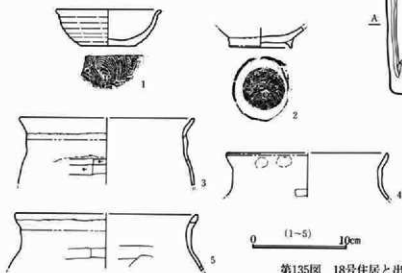
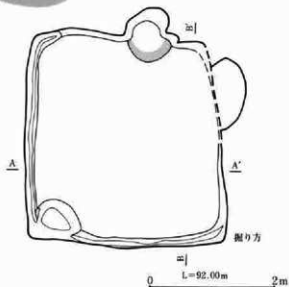
土層説明

- 1層 軽石粒を含む黒褐色土
 - 2層 黄褐色砂壤土をブロック状に含む茶褐色土
 - 3層 黄褐色砂壤土、軽石を含む褐色土
 - 4層 黄褐色砂壤土、軽石粒、焼土粒、炭化物粒を含む褐色土
 - 5層 黄褐色砂壤土、軽石粒を含む褐色土
 - 6層 黄褐色砂壤土をブロック状に含む茶褐色土
 - 7層 焼土粒を多く含む茶褐色土
- 掘り方 砂壤土ブロック、焼土粒を含む黒褐色土

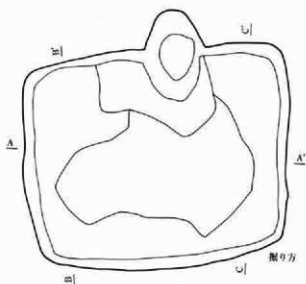
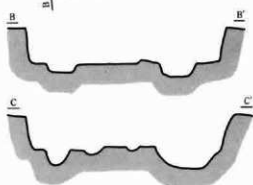
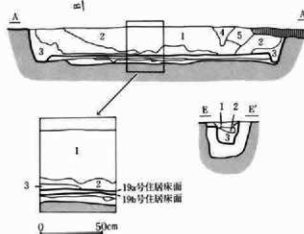
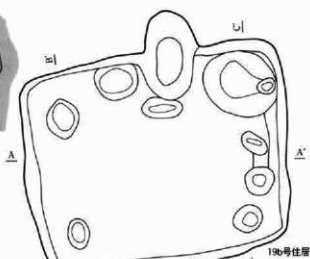
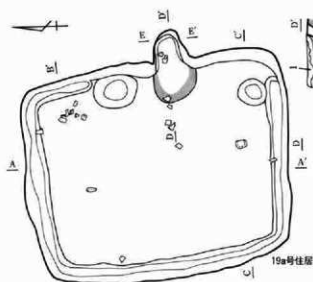


カマド

- 1層 白色粒、焼土を含む黒褐色粘質土
 - 2層 焼土ブロックを含む黄褐色粘質土
 - 3層 焼土粒、粘土粒を多く含む灰褐色土
- 掘り方 焼土粒を含む灰褐色砂壤土



第135図 18号住居と出土遺物



土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む他、12m前後の礫を混入する暗褐色土
 - 2層 褐色土をブロック状に含む他、白色軽石粒、焼土粒を混入する砂質の黒褐色土
 - 3層 砂礫土を含む暗褐色土
 - 4層 白色軽石粒、焼土粒を含む軟弱な暗褐色土
 - 5層 褐色土を多量に含む黒褐色土
- 掘り方 褐色土をブロック状に含む黒褐色土

カマド

- 1層 焼土粒、白色粒子を含む灰褐色土
 - 2層 焼土ブロック、粘土ブロックを含む黄褐色土
 - 3層 焼土粒、粘土を多量に含む黒褐色土
- 掘り方 焼土、白色粒子を含む黒褐色土

19号住居 (第136・137図 PL43・91・92)

位置 Dj-08・09 Dk-08・09

平面形 横長長方形

規模 4.2m×3.4m

床面積 10.1㎡

方位 N-89°-E

第136図 19号住居

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は45cm程度である。

床 褐色土および黒褐色土の混入による層厚4cm前後の貼り床を形成する。床面は硬く良好で全域におよぶ(19a号住居)。

この貼り床直下にもう一層床面が存在する。褐色土ブロックを含む黒褐色土による貼り床を形成し、住居中央付近に硬く良好な面が検出されている(19b号住居)。

この2層の床面は使用時期を異にするものであろうが、壁、カマド等の調査からは重複の痕跡は認められていない。これらの点は6号住居および11号住居における事例と類似しており、本住居についても同一住居における床の貼り替えの可能性が高い。

柱 穴 床面上では確認できていないが、掘り方調査時に住居対角線上に小穴が3ヶ所、大きな凹みが1ヶ所認められ、位置からみて柱穴の可能性がある。

カマド 東壁中央に設置される。幅60cm、奥行き70cmで、袖部はほとんど張り出さない。

周溝 幅20cm、深さ8cmの小溝が壁下に巡る。

掘り方 全体的に掘り方は浅く、平均10-15cm程度で、砂壤土を含む黒褐色土を埋土する。

20号住居 (第138・139図 PL44・92・93)

位置 Dd-07・08 De-07・08

平面形 横長方形

規模 4.9m×4.1m

床面積 15.6m²

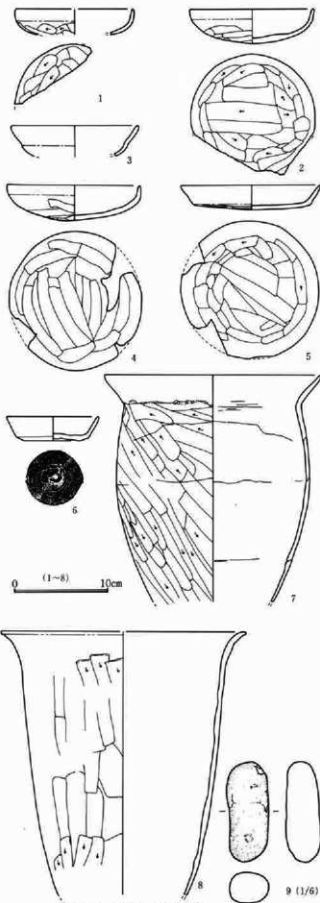
方位 N-98°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均40cm程度である。

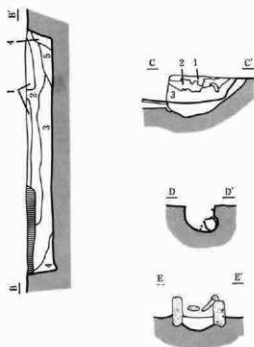
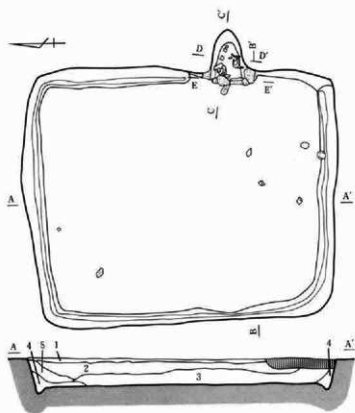
床 暗褐色土による貼り床を形成する。貼り床は住居全体におよび、硬く良好で水平な面をもつ。

柱 穴 認められない。

カマド 東壁中央やや南寄りに設置される。幅60cm、奥行き90cmの規模をもち、袖部には構造物



第137図 19号住居出土遺物

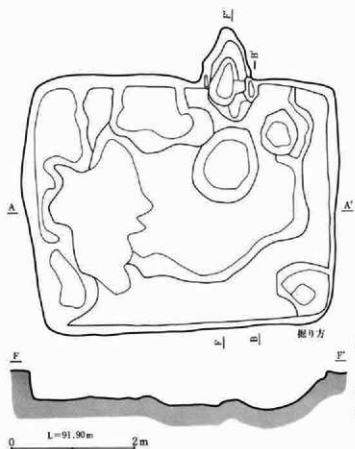


土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む灰黒褐色土
 - 2層 白色軽石粒、焼土粒を含む暗褐色土
 - 3層 褐色土をブロック状に含む黒褐色土
 - 4層 黒褐色土を多く含む軟弱な褐色土
 - 5層 褐色土、白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色土
- 掘り方 褐色砂壤土をブロック状に含む黒褐色土

カマド

- 1層 白色軽石粒を少量含む黒褐色土
 - 2層 焼土ブロックを含む粘質の暗褐色土
 - 3層 焼土粒を少量含む粘性の強い暗褐色土
- 掘り方 焼土、炭化物、灰を含む暗褐色土を主として埋土し、基礎を形成する



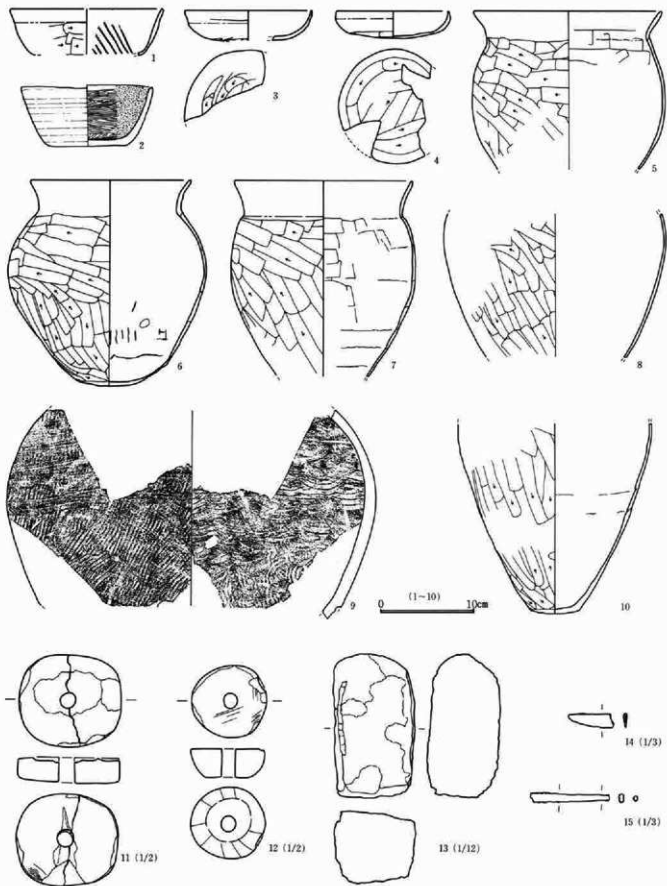
が残存する。当初砂岩が設置されているものとみられたが、調査により粘土塊であることが確認された。

周溝 幅15cm、深さ10cmの小溝がカマド南側以外の壁下に巡る。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 掘り方はカマド部がやや深いが、床面下については浅く、地山に据えて貼り床する部分もみられる。

第138図 20号住居



第139圖 20号住居出土遺物

22号住居 (第140図 PL45-93-96)

位置 Dd-08・09

平面形 横長方形

規模 3.0m×3.4m

床面積 8.1㎡

方位 N-101°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は20cm程度である。

床 褐色砂壤土および暗褐色土の混入により貼り床を形成する。貼り床はほぼ全面におよび極めて硬く良好な面をもっている。

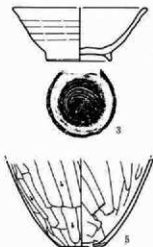
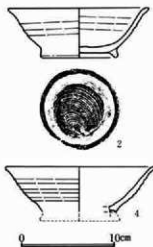
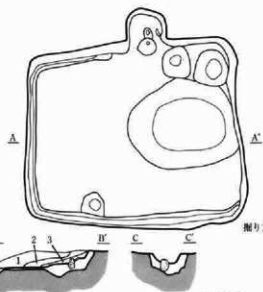
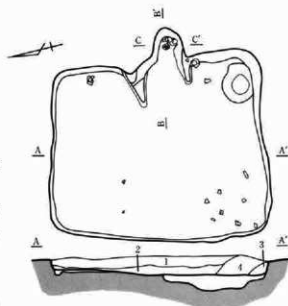
柱穴 認められない。

カマド 東壁中央部に設置される。幅70cm、奥行き95cm程度の規模をもち、両袖部は40~50cm張り出す。袖部張り出しは暗褐色土を再積土したものである。

周溝 認められない。

貯蔵穴 南東隅に接して径50cm、深さ30cmの小穴が認められた。

掘り方 住居南側に径170cm、深さ50cmの土坑状の掘り方が認められ、褐色砂壤土、黒褐色土および褐色粘質土が埋土される。



土層説明

- 1層 白色軽石粒を含む暗褐色土
- 2層 焼土粒を含む暗褐色土
- 3層 砂壤土を含む褐色土
- 4層 白色軽石粒を含む黒褐色土
- 掘り方 砂壤土を多く含む暗褐色土

カマド

- 1層 白色軽石粒、焼土を含む暗褐色土
- 2層 焼土、炭化物を含む暗褐色土
- 3層 炭化物を含む褐色粘質土
- 掘り方 焼土、炭化物を含む暗褐色粘質土

第140図 22号住居と出土遺物

23号住居 (第141図 PL46-93)

位置 Dn-13 Do-12・13

平面形 横長長方形

規模 3.5m×3.0m

床面積 8.5㎡ (推定値)

方位 N-61°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は40cm程度である。南西隅部が調査区域外となるため一部未調査となっている。

床 褐色砂壤土および暗褐色土の混入により貼り床を形成する。貼り床は全域におよぶがカマドを中心とした住居中央部が特に硬く良好な面が認められる。層厚は5cm~10cmであるが、住居掘り方に直接貼り床層が埋土されている。

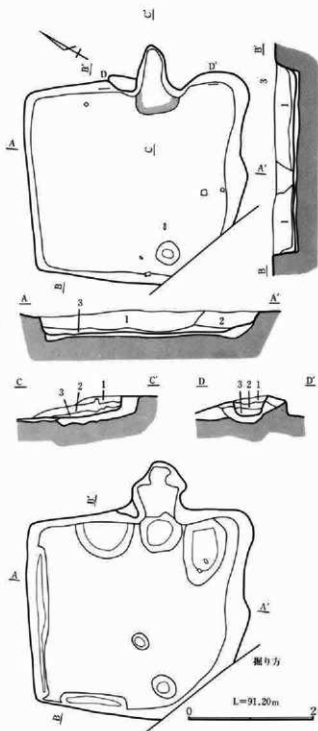
柱 穴 認められない。

カマド 東壁中央部に設置される。幅50cm、奥行き90cmの規模をもち、両袖はわずかに張り出しぎみとなる。

周 溝 認められない。

貯蔵穴 床面調査時には認められていないが、掘り方調査において住居南東隅部分に土坑状の凹みが確認されている。規模は90cm×70cmの楕円形で、深さは20cmである。位置からみて貯蔵穴の可能性がある。

掘り方 掘り方の規模は全体的に浅い。5cm~10cm前後掘り下げられ、カマド前および周辺に土坑状の掘り込みが認められる。砂壤土を含む暗褐色土が埋土され上面は床となる。



土層説明

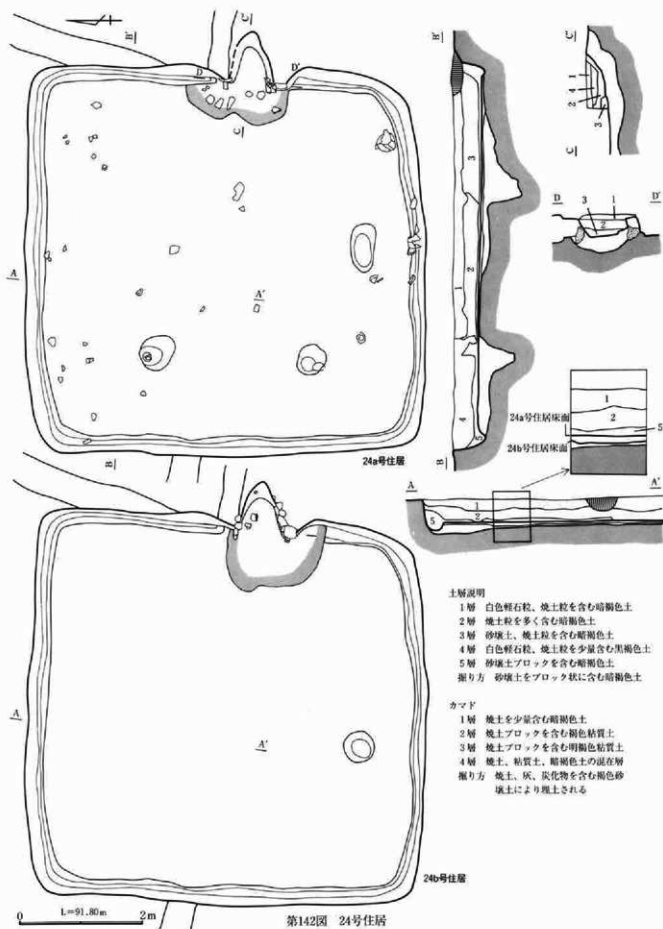
- 1層 白色軽石粒、焼土粒、砂壤土を含む暗褐色土
 - 2層 焼土粒を多く含む暗褐色土
 - 3層 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
- 掘り方 砂壤土を多く含む暗褐色土

カマド

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む暗褐色土
 - 2層 焼土粒を多く含む暗褐色粘質土
 - 3層 焼土、炭化物、灰を含む暗褐色土
- 掘り方 焼土を含む暗褐色粘質土を主として埋土され砂壤土も一部混入する



第141図 23号住居と出土遺物



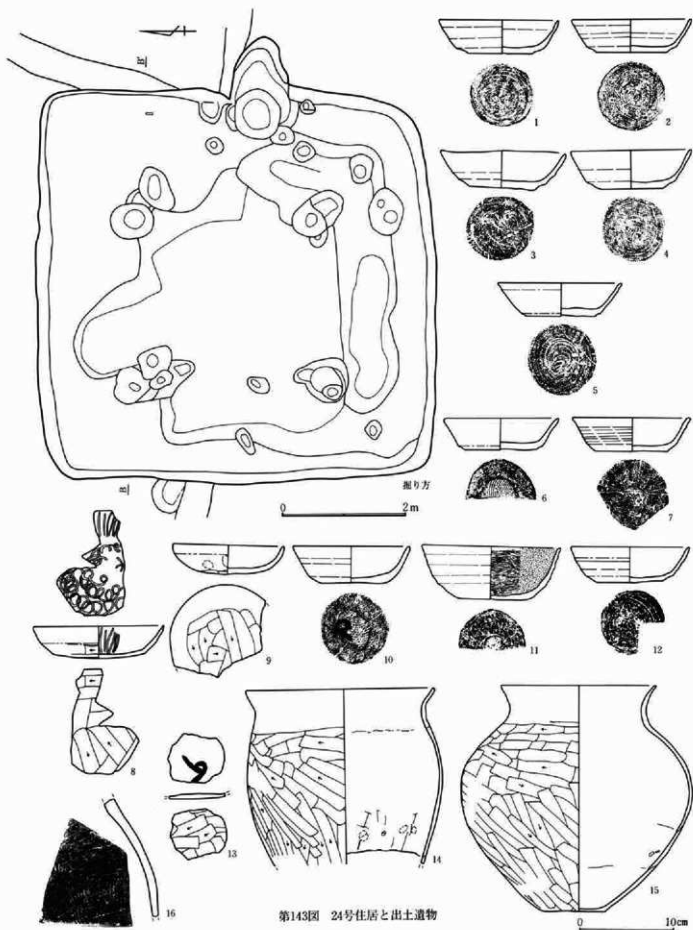
土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む暗褐色土
- 2層 焼土粒を多く含む暗褐色土
- 3層 砂壤土、焼土粒を含む暗褐色土
- 4層 白色軽石粒、焼土粒を少量含む黒褐色土
- 5層 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
- 掘り方 砂壤土をブロック状に含む暗褐色土

カマド

- 1層 焼土を少量含む暗褐色土
- 2層 焼土ブロックを含む暗褐色粘質土
- 3層 焼土ブロックを含む明褐色粘質土
- 4層 焼土、粘質土、暗褐色土の混在層
- 掘り方 焼土、灰、炭化物を含む暗褐色砂壤土により埋土される

第142図 24号住居



第143図 24号住居と出土遺物

24号住居 (第142-144図 PL47-93-94-96)

位置 De-09・10 Df-09・10

平面形 横長長方形

規模 6.5m×6.0m

床面積 32.0㎡

方位 N-94°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上り、確認壁高は平均40cmである。

床 褐色砂壤土ブロックを含む暗褐色土により貼り床が形成される。層厚4cm程度で住居全域におよび、中央部が特に硬く良好な面となっている(24a号住居)。

この貼り床層の直下にさらにもう一面床が存在する。褐色砂壤土ブロックを含む暗褐色土による貼り床を形成する。縁辺部はやや軟弱となるが中央部は硬く良好な面が存在する(24b号住居)。

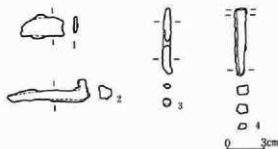
柱穴 床面調査時には部分的確認にとどまったが掘り方調査により存在が把握された。各柱穴は住居対角線上に位置し、2穴ずつ重複した状態で観察される。このことは、2層存在する床面とも一致し、住居の建て直しを示すものとみられる。

カマド 東壁中央部に設置される。幅70cm、奥行き100cmの規模をもち、袖部および主体部には粘土塊を配置し、その間に粘土をつめ構成している。

周溝 24a号住居に周溝が全周する。

貯蔵穴 認められない。

掘り方 中央が浅く、縁辺がより深い形態をもつ。



第144図 24号住居出土遺物

25号住居 (第145・146図 PL48-94)

位置 Dm-11・12 Dn-11・12

平面形 横長長方形

規模 4.0m×(4.5m)

床面積 14.0㎡(推定値)

方位 N-104°-E

壁 15号住居と重複し、北壁部は失われている。確認壁高は南壁部で30cmである。

床 黒褐色土を主とした貼り床が形成される。硬く良好な面は、15号住居による影響もあり部分的に認められるのみで全体的にはやや軟弱な面となっている。

柱穴 認められない。

カマド 東壁に設置される。幅70cm、奥行き80cmの規模で、袖部はわずかに張り出しきみである。また袖部分には掘り方調査時に小穴も認められ、礎等の使用も考えられる。

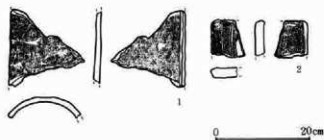
周溝 認められない。

貯蔵穴 認められない。

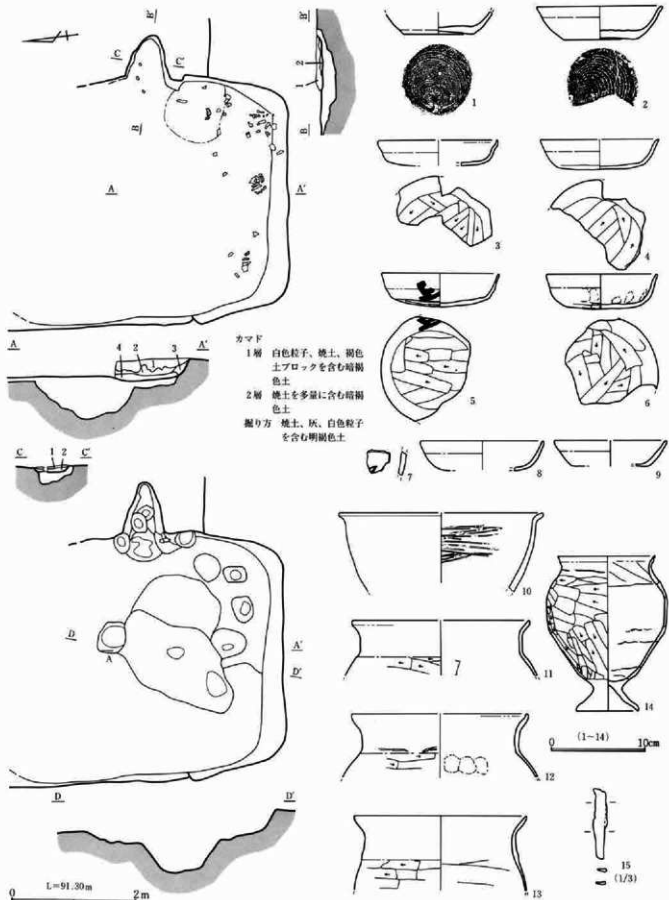
掘り方 本住居は、15号住居調査時に確認された住居で土層観察から25号住居が古いものとみられる。そのため、重複部分である住居北半部については壁、床等はずで失われている。掘り方は、住居中央付近にやや大きめの土坑状の凹みが存在し、その他は不規則な凹凸が認められる。褐色砂壤土を含む暗褐色土が埋土される。

25号住居 土層説明

- 1層 白色軽石粒、焼土粒を含む褐色土
- 2層 白色軽石粒、焼土粒を含む暗褐色土
- 3層 黒褐色土
- 4層 白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色土



第145図 25号住居出土遺物



カマド
 1層 白色粒子、焼土、褐色土ブロックを含む暗褐色土
 2層 焼土を多量に含む暗褐色土
 掘り方 焼土、灰、白色粒子を含む明褐色土

第146図 25号住居と出土遺物

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物は計4棟確認されている。いずれもD区に存在し、古代住居域内に位置している。このうち2棟についてはそれぞれ住居と重複しているが、新旧関係を判断できる所見は得られていない。

柱穴内には土師器片、須恵器片が多く含まれているが、縄文土器片も少量ながら出土している。遺物により掘立柱建物の時期は確定できず、また遺構自体にも時期を特定する情報が乏しい。ただ住居群との位置関係からみて、古代集落に伴う可能性が高いと考えられ、住居域内に設けられる施設と理解しておきたい。

2号掘立柱建物 (第148図 PL49)

位置 Dg・h-07・08

規模 東西4.2m (3間)、南北4.5m (3間)

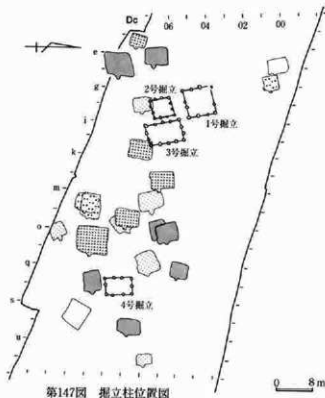
平面形 長方形

面積 18.9㎡

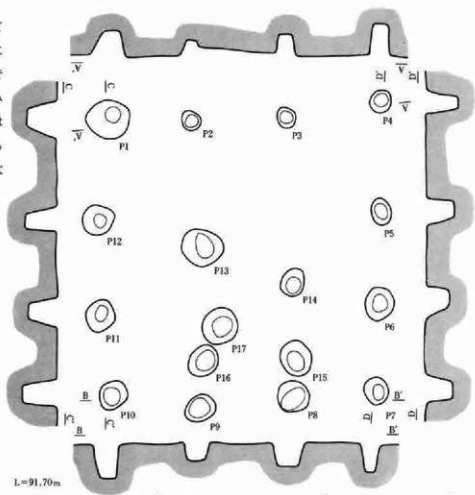
柱穴 計17穴を示してあるが基本的にはp1～p12で構成されるとみられる。柱穴はほぼ均一であるが各隅部の柱穴がより深い。

柱穴計測表 (cm)

柱	径	深
P1	93×84	54
2	42×44	34
3	46×40	46
4	48×45	68
5	58×42	60
6	73×58	48
7	60×52	52
8	70×66	54
9	68×60	42
10	64×60	74
11	70×64	62
12	70×66	54
13	86×86	-
14	63×50	30
15	74×65	-
16	68×64	-
17	82×75	28



第147図 掘立柱位置図



第148図 2号掘立柱建物

1号掘立柱建物 (第149図 PL49)

位置 Df-04 Dg-04・05・06

規模 東西6.0m (3間)、南北7.0m (3間)

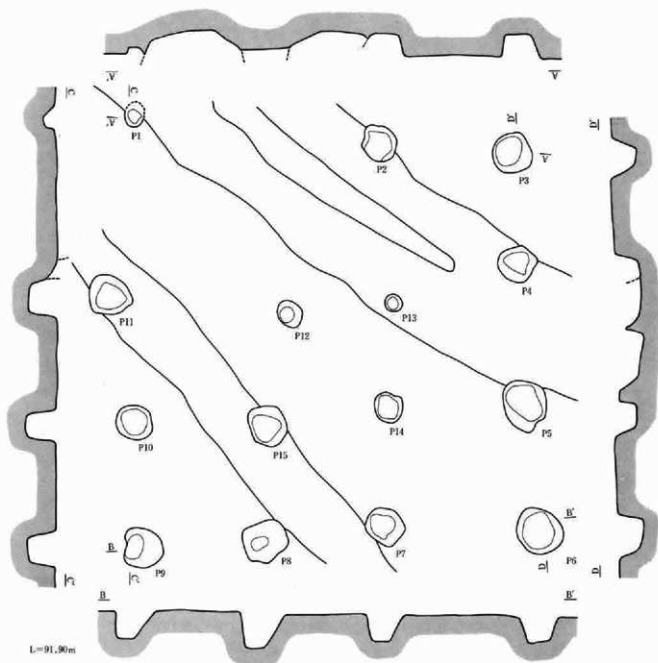
平面形 長方形

面積 39.6m²

柱穴 計13ヶ所認められた。柱穴配置にやや不規則な部分もあるが、総柱の掘立柱建物とみられる。

柱計測表 (cm)

	径	深		径	深
柱 1	86×84	54	柱 8	97×90	30
2	82×78	68	9	80×72	60
3	50×84	70	10	102×94	54
4	106×100	45	11	70×-	50
5	82×82	50	12	64×58	68
6	34×34	38	13	94×84	52
7	60×52	68	14	102×98	80
			15	96×86	58



第149図 1号掘立柱建物

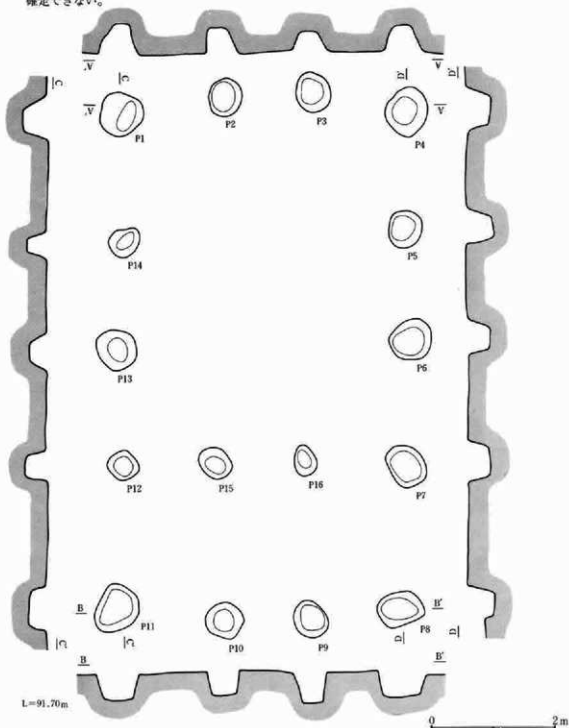
0 2m

3号掘立柱建物 (第150図 PL49)

位置 Dh-06 Di・j-06・07・08
 規模 東西4.5m (3間)、南北7.8m (3間)
 平面形 長方形
 面積 35.0m²
 柱穴 計16ヶ所認められた。3間×3間の建物に
 底を付設するの、総柱の建物であるのか
 確定できない。

穴計測表 (cm)

穴	径	深	穴	径	深
Pit 1	70×64	50	Pit 9	92×86	50
2	92×86	40	10	94×76	50
3	70×62	42	11	94×72	58
4	92×90	68	12	84×72	67
5	80×70	54	13	82×80	50
6	86×75	43	14	102×96	50
7	106×92	57	15	67×50	60
8	76×75	60	16	76×66	34



4号獨立柱建物 (第151図 PL49)

位置 Dq・r-09・10

規模 東西3.4m (2間)、南北5.6m (3間)

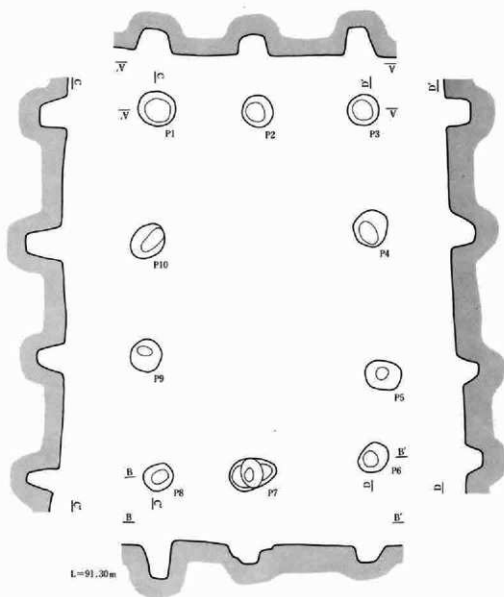
平面形 長方形

面積 19.0㎡

柱穴 計10ヶ所認められた。柱穴掘り方は円形で
径50cm、深さ40~60cmの規模をもつ。柱痕
は確認できていない。

Pit 計測表 (cm)

	径	深		径	深
Pit 1	82×72	54	Pit 6	85×60	90
2	70×68	55	7	80×64	80
3	78×62	52	8	74×70	44
4	70×58	36	9	67×65	62
5	58×48	40	10	68×66	48



第151図 4号獨立柱建物

0 2m

(3) 土坑

調査により土坑は多数検出されたが、縄文時代の陥穴以外時期が確定できるものはほとんど認められない。その中で、この79号土坑については埋土中に浅間B軽石の堆積が確認され、時期は限定できないものの奈良・平安時代に属する可能性は高いものと考えられる。

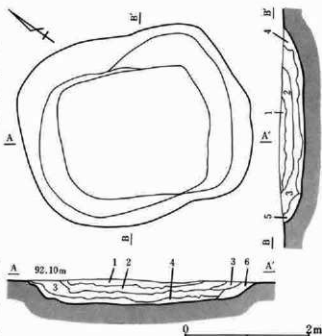
79号土坑 (第152・153図)

位置 Bw-17・18

規模 径3.6m×3.0m、深さ40cm

特徴 隅丸長方形を呈する。壁はなだらかに立ち上り、底面は鍋底状となる。その他この遺構の性格を示すような構造は認められない。出土遺物は、埋土中から縄文土器(中期)小片、剥片が1点づつ出土している。

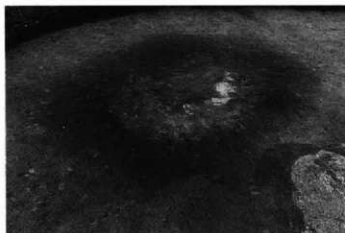
遺構はローム層上で確認されたが、この段階で堆積する軽石層が露出する。また埋土下部には焼土粒が含まれている。



第152図 79号土坑

土層説明

- 1層 浅間B軽石
- 2層 軽石粒を多く含む黒色土
- 3層 軽石粒、褐色土ブロックを含む黒褐色土
- 4層 褐色土ブロックを多く含む暗褐色土
- 5層 褐色土を少量含む黒褐色土
- 6層 褐色土、焼土粒を少量含む暗褐色土



第153図 79号土坑

確認状況	全数
土層断面	



6. 中・近世

(1) 方形区画溝 (第154図 PL50・94)

A区で検出された東西方向にのびる17号溝とB区で検出された南北方向にのびる41号溝はそれぞれ延長部を調査区外とするが、両者の位置関係から方形に連続するものと考えられる (第154図破線部)。

17号溝は、幅4mで調査区内A区からB区にかけて直線的に掘り込まれている。出土遺物はほとんどなく、溝の時期については確定し得ないでいた。しかし、Biライン付近に存在する農道下断面の観察から、浅間B軽石層を切って掘り込まれていることが確認されている。この溝の年代については、軽石層との関係しか発掘調査では把握されていない。

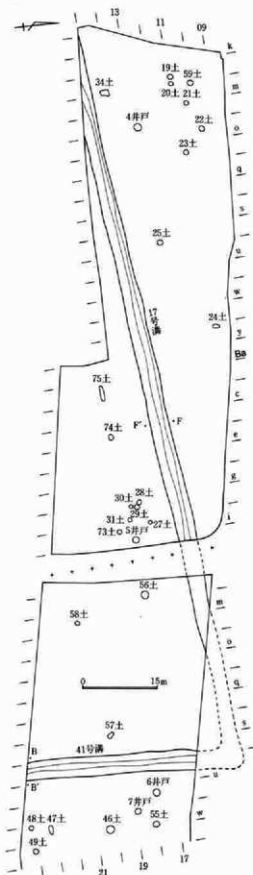
41号溝はBuラインに沿って、ほぼ南北方向に検出された。幅は3.5m～4m程度であり、断面形はいわゆる箱葉研を呈し、底面中央の通水部には砂が堆積している。溝の走向は、やはり17号溝と類似し、直線的である。

深さは両溝とも確認面から1.6m程度である。埋没状態は土層断面から観察すると壁部崩落土および流入土が埋没しており、自然堆積とみられる。なお、溝に伴う盛土の存在は面的には認められておらず、土層断面においても盛土とみられる崩落土は確認されていないため、その存在は不明である。

調査区内では溝は貫通しており、溝としての形状以外の構造物はない。17号溝および41号溝を延長すると調査区外で交差するものとみられる。推定交差部は直角に交わらず80°の角度で連続するが、方形を構成する可能性が高いように考えられる。しかし、この部分以外の形態については不明であり、全体として方形区画を示すか否かは確認がない。

遺物は41号溝底部付近から第155図1・2が出土している。1は瓦質土器底部片。2は瓦片である。

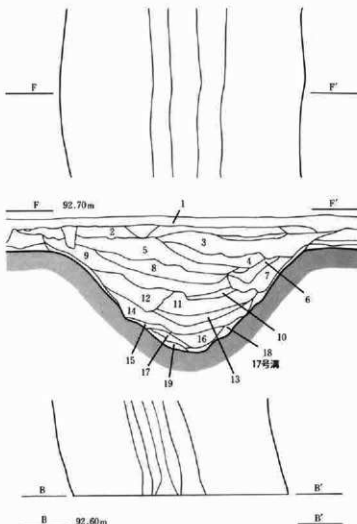
溝の全体図には、各土坑、井戸も位置を示しているが、特に溝との関係は確認されていない。



第154図 方形区画溝 (17・41号溝)

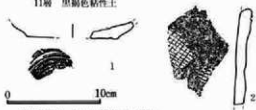
17号溝 土層説明

- 1層 表土（現水田耕土）
- 2層 砂壤土を含む茶褐色土
- 3層 砂壤土を多量に含む軟弱な褐色土
- 4層 砂壤土を含む褐色土
- 5層 砂壤土を多量に含む黒褐色土
- 6層 砂壤土をブロック状に含む灰褐色土
- 7層 砂壤土を多量に含む黄灰褐色土
- 8層 砂壤土を含む暗褐色土
- 9層 砂壤土、砂礫を含む灰褐色土
- 10層 灰褐色砂壤土ブロックを含む灰褐色土
- 11層 細砂を含む黒灰色シルト
- 12層 黒灰色シルトと砂壤土の混土层
- 13層 黄灰色砂壤土を含む灰褐色土
- 14層 黒灰色細砂層
- 15層 灰色砂壤土と褐色土の混土层
- 16層 黄褐色細砂層
- 17層 黒灰色シルト
- 18層 黄灰色砂質土
- 19層 灰色シルト



41号溝 土層説明

- 1層 表土（現水田耕土）
- 2層 砂壤土を少量含む黄褐色土
- 3層 砂壤土を含む暗褐色土
- 4層 砂壤土をブロック状に含む暗褐色土
- 5層 砂壤土、細砂を含む褐色土
- 6層 暗褐色土
- 7層 砂層
- 8層 暗褐色粘性土
- 9層 ロームブロックを含む暗褐色土
- 10層 ロームブロックを多量に含む暗褐色土
- 11層 黒褐色粘性土



第155図 41号溝出土遺物

第156図 17・41号溝土層図

(2) 土坑

調査によって土坑と認められた遺構は計65基である。このうち15基については形態的特徴、確認状況から縄文時代の陥穴としてⅢ-(5)として報告している。ここに示す土坑は陥穴以外のものを一括している。いずれもローム層もしくは砂壌土層上面で確認され、埋土中からは縄文土器片、石器片、土師・須恵器片など多時期の遺物を出土する例も多く、各土坑の時期を限定する情報に乏しい。

これらの土坑は、調査区全域に分布するが、そのあり方をみるとやや散漫ながらも、ある程度まとまりをもっていても認められる。またこのような分布状態とは別に、D区には方形土坑が多くA・B・C区には円形土坑が多いという傾向も認められる。

なお、D区に存在する土坑は、奈良・平安時代住居群と分布域が共通するが、住居との重複例についてはいずれも土坑が時期的に新しい。

これらの土坑は形態上から次のように分類できる。

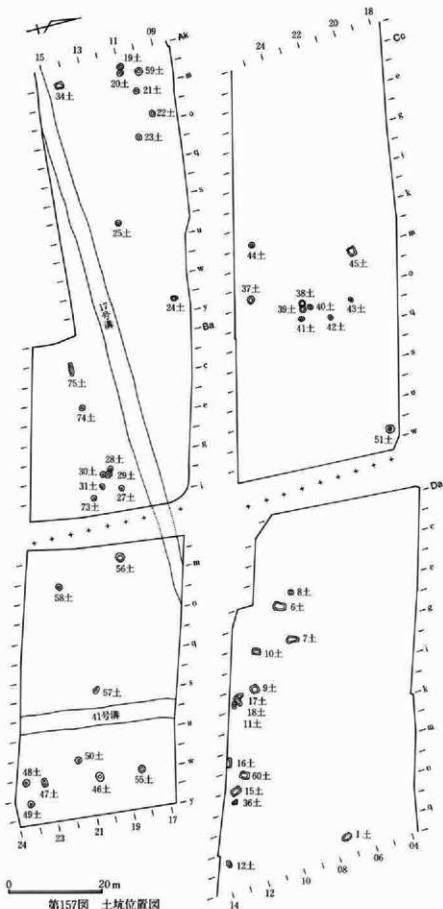
I 円形土坑

(第158図 PL51-54)

平面形が円形を示す土坑で断面形状の差から次のa～cが認められる。

a 鍋底状断面を示すもの

b 円筒形断面を示すもの



第157図 土坑位置図

c 掘鉢状断面を示すもの

示す。

II 方形土坑 (第159図 PL54)

平面形、規模から次の a～d が認められる。

a ほぼ正方形を示す。

c 長方形で長軸：短軸が2：1程度の比率を示す。

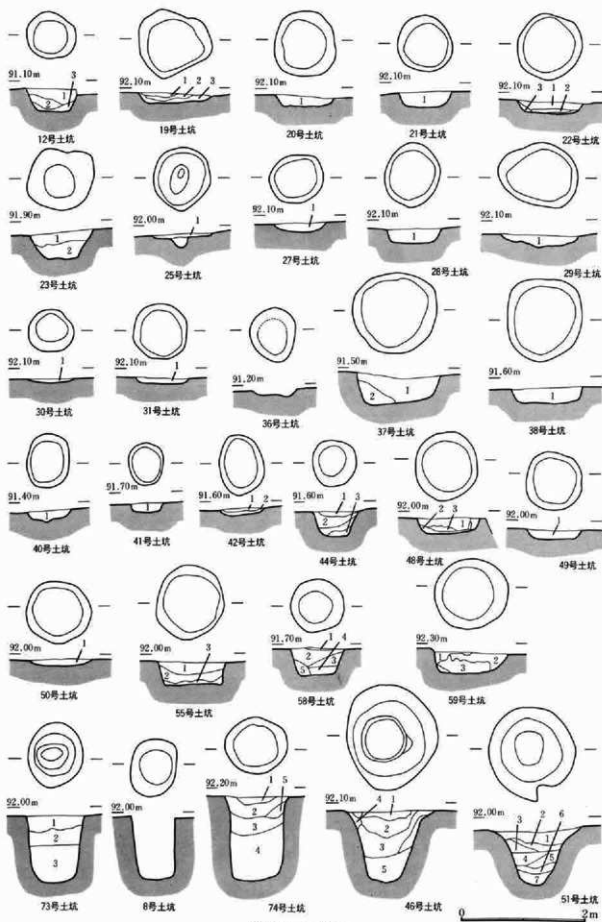
d 長方形を示す。

b 長方形で長軸：短軸が2：1.5程度の比率を

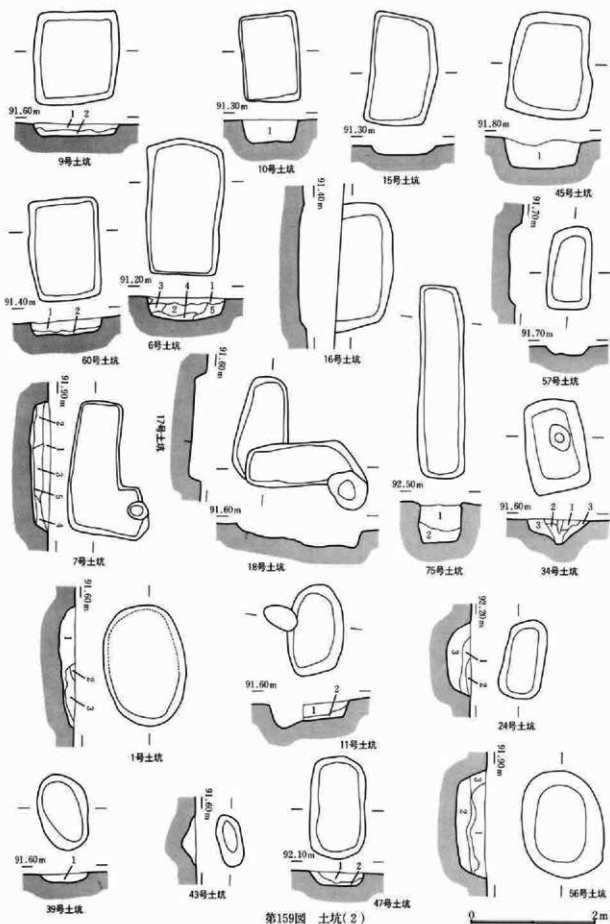
III 楕円形土坑 (第159図 PL54)

第14表 土坑一覽表

土坑番号	分類	位	開口部	深	土 層 説 明
12号土坑	I a	Dp 13	106×97	97	1 白色軽石焼土粒を含む黒褐色土 2 砂壤土を少量含む黒褐色土 3 砂壤土を含む褐色土
19号土坑	I a	Am 10	154×134	22	1 砂粒を含む灰褐色土 2 白色軽石を含む暗褐色土 3 ロームを含む褐色土
20号土坑	I a	Am 19	134×126	23	1 白色軽石粒、砂壤土を含む暗褐色土
21号土坑	I a	Am 09	116×115	31	1 砂壤土、ロームブロックを含む褐色土
22号土坑	I a	An 09	148×137	24	1 砂壤土、ローム粒を含む褐色土 2 ロームを多く含む暗褐色土 3 砂壤土を含む褐色土
23号土坑	I a	Ao 10	137×135	58	1 砂壤土、ローム粒を含む褐色土 2 砂壤土、暗褐色土を混在する
25号土坑	I a	As 12	135×124	26	1 砂壤土を多く含む暗褐色土
27号土坑	I a	Bh 15	113×102	20	1 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
28号土坑	I a	Bg 16	137×114	32	1 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
29号土坑	I a	Bg 16	168×134	26	1 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
30号土坑	I a	Bg 16	98×92	9	1 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
31号土坑	I a	Bg 16	120×116	10	1 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
36号土坑	I a	Dm 12	114×94	16	1 砂壤土ブロックを含む黒褐色土
37号土坑	I a	Dm 03	175×170	64	1 砂壤土ブロックを含む黒褐色土 2 砂壤土ブロックを含む褐色土
38号土坑	I a	Co 01	176×156	34	1 軽石粒、砂壤土ブロックを含む黒褐色土
40号土坑	I a	Co 01	112×92	24	1 白色軽石粒を含む黒褐色土
41号土坑	I a	Co 01	92×74	10	1 白色軽石粒を含む黒褐色土
42号土坑	I a	Co 24	126×94	13	1 白色軽石粒を含む褐色土 2 白色軽石粒、砂壤土を含む茶褐色土
44号土坑	I a	Ch 02	100×95	54	1 黒褐色土 2 砂壤土を含む黒褐色土 3 軽石、砂壤土を含む黒褐色土 4 砂壤土を多く含む褐色土
48号土坑	I a	Bv 24	150×130	34	1 軽石を含む暗褐色砂質土 2 軽石を含む暗褐色土 3 軽石を含む黒褐色土
49号土坑	I a	Bw 24	124×115	20	1 砂壤土を含む暗褐色土
50号土坑	I a	Bu 21	140×134	16	1 ローム粒を含む暗褐色土
55号土坑	I a	Bv 17	158×144	50	1 軽石、砂壤土を含む褐色土 2 軽石を含む暗褐色土 3 ロームブロックを含む暗褐色土
58号土坑	I a	Bt 20	112×110	58	1 砂壤土を含む褐色土 2 砂壤土を多く含む 3 暗褐色土 4 黒褐色土 5 暗茶褐色土
59号土坑	I a	Al 10	158×150	46	1 白色軽石、砂壤土を含む灰褐色土 2 軽石、ロームを含む暗褐色土 3 ロームを多く含む
73号土坑	I b	Bh 17	138×118	140	1 砂壤土ブロックを含む褐色土 2 砂壤土を含む褐色土 3 砂壤土を多量に含む褐色土
8号土坑	I b	De 06	122×96	132	
74号土坑	I b	Bc 16	133×129	176	1 砂壤土ブロック 2 砂壤土を含む暗褐色土 3 砂壤土を多く含む 4 黒褐色土 5 褐色土
46号土坑	I b	Bv 20	220×190	147	1 砂壤土ブロック 2 砂壤土を含む暗褐色土 3 砂壤土を多く含む 4 黒褐色土 5 褐色土
51号土坑	I c	Cv 23	200×182	110	1 暗褐色土 2 褐色土 3 茶褐色土 4 砂質土 5 褐色砂壤土 6 砂壤土粒 7 砂ブロック
9号土坑	II a	Dh 09	192×183	36	1 白色軽石、炭化物を含む褐色土 2 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
10号土坑	II b	Df 08	188×123	50	1 砂壤土ブロックを含む褐色土
15号土坑	II b	Dm 12	224×140	17	
45号土坑	II b	Ci 22	220×176	58	1 砂壤土ブロックを含む黒褐色土
60号土坑	II b	Di 11	216×150	32	1 白色軽石粒、砂壤土を含む暗褐色土 2 砂壤土を少量含む暗褐色土
6号土坑	II c	Dd 05	286×160	48	1 暗褐色土 2 褐色砂壤土 3 黒褐色土 4 暗褐色土 5 暗褐色砂質土
16号土坑	II c	Dk 12	226	14	
7号土坑	II d	Df 05	280×106	42	1 暗褐色土 2 暗褐色砂質土 3 褐色砂壤土 4 砂壤土ブロックを含む暗褐色土
17号土坑	II d	Dh 10	220×114	24	
18号土坑	II d	Dh 10	240×88	34	
75号土坑	II d	Ba 17	400×100	86	1 砂壤土ブロックを多く含む褐色土 2 砂壤土を少量含む褐色土
57号土坑	II c	Br 19	170×96	24	
34号土坑	III	Ak 14	192×128	52	1 ローム粒を含む褐色土 2 ロームブロックを含む暗褐色土 3 ロームブロックを含む褐色土
1号土坑	IV	Dq 07	250×170	36	1 暗褐色砂質土 2 褐色砂質土 3 白色軽石粒、焼土粒を含む黒褐色土
11号土坑	IV	Dh 10	196×120	24	1 白色軽石粒、砂壤土を含む暗褐色土 2 砂壤土、暗褐色土の混在土
24号土坑	IV	Ax 10	168×95	52	1 砂壤土を含む褐色土 2 砂壤土ブロックを多く含む褐色土 3 砂壤土を含む褐色土
39号土坑	IV	Co 01	162×104	18	1 白色軽石粒を含む黒褐色土
43号土坑	IV	Co 23	107×52	32	1 白色軽石粒、砂壤土を含む黒褐色土
47号土坑	IV	Bv 23	214×118	30	1 白色軽石粒を含む黒褐色土 2 白色軽石粒を含む暗褐色土
56号土坑	IV	Bk 16	220×172	62	1 灰褐色砂質土 2 ロームを含む暗褐色土 3 砂壤土を多く含む灰黄褐色土



第158图 土坑(1)



第159图 土坑(2)

(3) 井戸 (第160図 PL55)

井戸は計7基確認された。A区に1基、B区に3基、D区に3基存在し、いずれも表土下砂壤土上面およびローム層上面において検出している。

各井戸の時期については、確定できる調査所見が得られておらず不明となっている。

1号井戸

径70cm、深さ150cmで円筒形断面を示す。

2号井戸

径50cm、深さ150cmで円筒形断面を示す。

3号井戸

径60cm、深さ150cmで円筒形断面を示す。

4号井戸

径150cm、深さ180cmで底面から60cm上位に湧水点がある。埋土中に河原石が数個混入する。

5号井戸

径90cm、深さ180cmで円筒形断面を示す。

6号井戸

径140cm、深さ200cmで底面から70cm上位に湧水点がある。

7号井戸

径130cm、深さ280cmで底面から70cm上位に湧水点がある。

4号井戸 土層説明

- 1層 褐色土を多く含む黒褐色土
- 2層 指頭大の褐色土ブロックを含むやや砂質の黒褐色土
- 3層 水分を多量に含む軟弱な黒色土
- 4層 褐色土ブロックを含む黒褐色土
- 5層 褐色土を少量含む。水分が多く軟弱な黒色土

5号井戸 土層説明

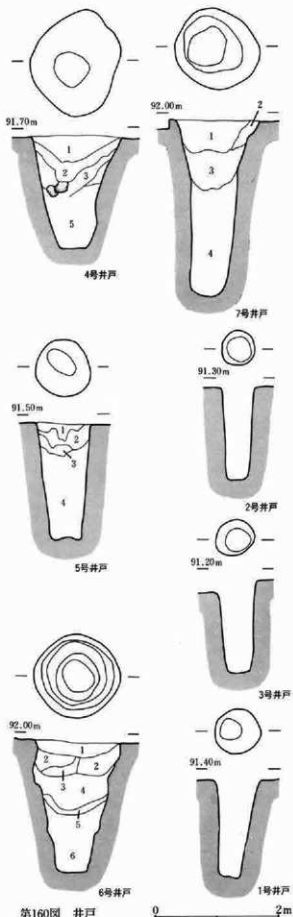
- 1層 褐色土ブロックを含む軟弱な黒褐色土
- 2層 褐色土を少量含む砂質の黒褐色土
- 3層 褐色土ブロックを多く含む軟弱な黒褐色土
- 4層 砂質の黒色土

6号井戸 土層説明

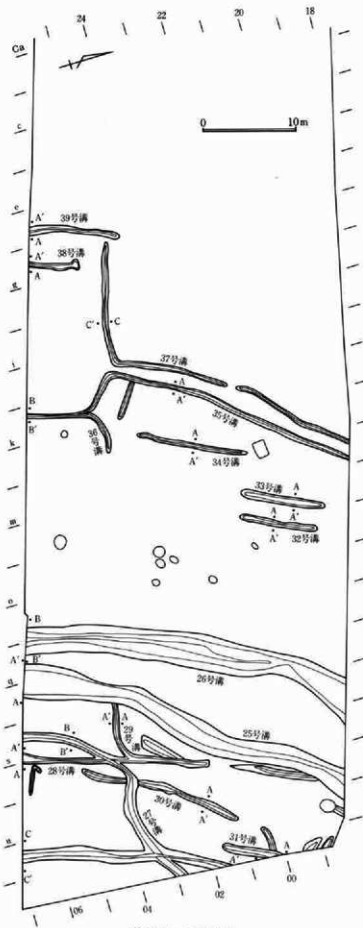
- 1層 ローム殻、黒褐色土ブロックを含む砂質の褐色土
- 2層 粗い砂質の明褐色土
- 3層 黒褐色土ブロックを含む砂質の暗褐色土
- 4層 ロームブロックを含むやや粘質の暗褐色土
- 5層 泥炭質の黒色土
- 6層 ロームブロックを含む粘質の暗褐色土

7号井戸 土層説明

- 1層 褐色土を多く含む砂質の黒褐色土
- 2層 褐色土を多く含む黒色土
- 3層 褐色土を少量含む砂質の黒色土
- 4層 褐色土ブロックを含む砂質の黒色土



第160図 井戸



第161図 C区溝群

(4) 溝

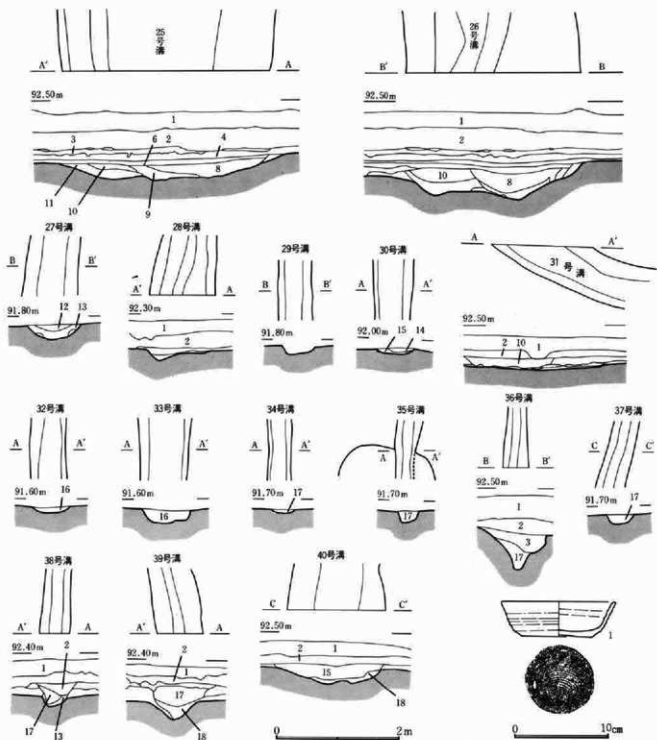
溝状の遺構はC区・D区・E区に特に認められる。全ての溝は遺構確認最上位面で検出されており、各溝の時期は確定できない。出土遺物も縄文土器、石器および土師器、須恵器等が混入しており、溝に伴出するとみられる遺物は確認されていない。

C区・D区・E区においてそれぞれ検出された溝状遺構については各調査区毎に溝群として一括して報告しておきたい。また時期については所属する時間を調査所見では得られておらず、確定する材料に乏しいがここでは中・近世にその時期を求めておきたい。

a C区溝群 (第161・162図 PL56)

C区は、全体的に低地状となっているため、当初は埋没水田の存在も考えられたが調査の結果確認されなかった。

C区では計16条の溝が検出されている。25号溝、26号溝は底面に砂が堆積しており流水の痕跡が明瞭に認められる。流水は一定しておらず、複数回回路が観察され流水がある時期とほとんど流れのない時期があったものとみられる。そのため、全体としてやや幅の広い溝となったものとみられる。27-31号および40号溝も流水痕が認められ相互に重複して存在する。溝走向も一定せず、基本的には地形に沿っているもので自然の流水路と考えられる。これら溝群とやや間隔をおいて西側には32-39号溝が存在する。この溝群は東側の溝群と比べると走向および溝幅も一定しており、ほぼ南北方向に平行して並んでいる。一部流水の痕跡も認められるが明瞭ではなく、境界もしくは区割りに伴う溝の可能性もある。

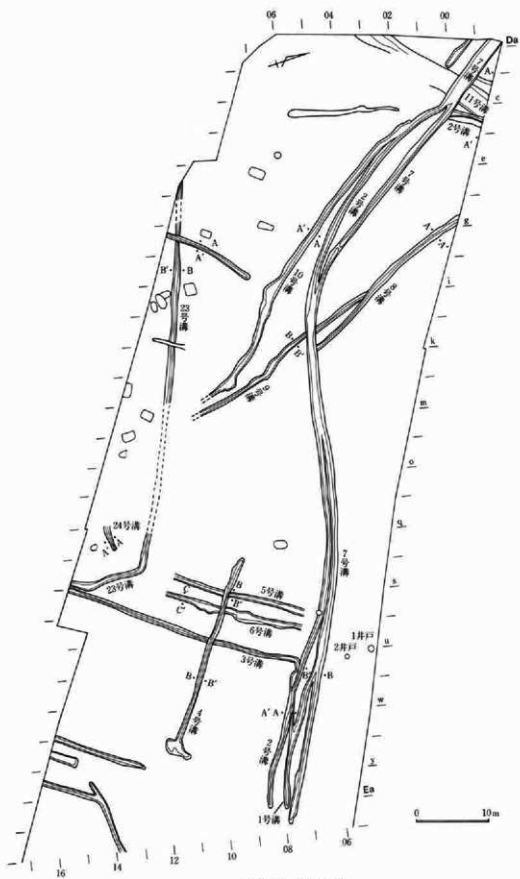


土層説明

- 1層 表土
- 2層 軽石を含む硬くしまった暗褐色土
- 3層 暗褐色砂質土
- 4層 暗褐色砂質土
- 5層 4層と類似するが鉄分沈着がみられる
- 6層 茶褐色土
- 7層 砂礫を含む暗褐色土
- 8層 黒色粘質土
- 9層 砂を多く含む

- 10層 黒褐色粘質土
- 11層 砂を多く含む
- 12層 褐色砂壤土を含む暗褐色土
- 13層 砂粒を含む暗褐色土
- 14層 軽石、砂を含む暗褐色土
- 15層 砂壤土を含む茶褐色土
- 16層 砂壤土、暗褐色粘質土が混在
- 17層 軽石粒を含む黒褐色土
- 18層 暗褐色砂壤土を多く含む褐色土

第162図 C区溝土層図



第163图 D区沟群

b D区溝群 (第163・164図 PL56)

D区では溝状遺構として記録したものは計14条である。

調査区内を東西方向に延びる溝群-1号・2号・4号・7号・10号・24号溝と、南北方向に延びる溝群-3号・5号・6号・12号溝が認められる。

東西方向に延びる溝群はいずれも時期的には新しい溝とみられ、埋土内からはコンクリートブロックやビニール片が出土しており、最近の掘削溝も含まれている。

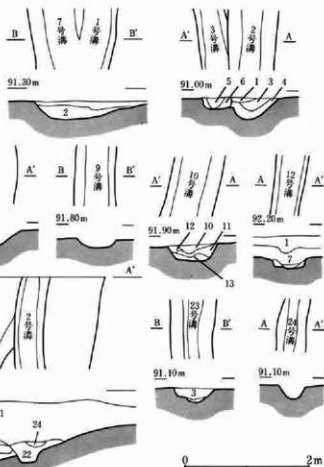
南北方向に走行する溝群3号・5号・6号はほぼ平行して存在する。土層断面からは流水の痕跡は確認されておらず、水路というより区画に用いられた溝の可能性もある。

23溝は調査時は確認できなかったが、その走向をみると東西方向に延びDg-12G付近で南方向へ走向を変えている。一部であるため全体の形状は不明であるが、やはり区画に用いられた溝であろうか。

8号・9号には流水の痕跡が認められており、地形に沿って存在することから自然流路の痕跡とみられる。

D区 溝群 土層説明

- 1層 砂埃土を含む褐色土
- 2層 軽石粒を含む茶褐色土
- 3層 軽石、砂埃土を多く含む茶褐色土
- 4層 黄褐色砂埃土をブロック状に含む褐色土
- 5層 黒褐色砂質土を含む褐色土
- 6層 黒褐色砂質土と黄褐色土の混土層
- 7層 軽石粒を含む暗褐色土
- 8層 褐色土を多く含む軟弱な暗褐色土
- 9層 褐色土を多く含む暗褐色土
- 10層 暗褐色土を混在する黒褐色土
- 11層 黄褐色砂埃土を多く含む暗褐色土
- 12層 黄褐色砂埃土、暗褐色土の混土層
- 13層 黄褐色砂埃土、暗褐色砂埃土の混土層
- 14層 砂質の暗褐色土(表土を攪乱する)
- 15層 礫を含む黒褐色砂質土
- 16層 礫を含む青灰色砂質土
- 17層 礫を含む赤褐色砂質土
- 18層 礫を含む褐色砂質土
- 19層 礫を含む茶褐色砂質土
- 20層 < 3cm前後の礫を多く含む砂礫層
- 21層 褐色砂礫
- 22層 粘性をもつ暗褐色土
- 23層 黄褐色砂埃土を含む暗褐色土
- 24層 やや砂質で粘性の乏しい暗褐色土



第164図 D区溝土層図

c E区溝群

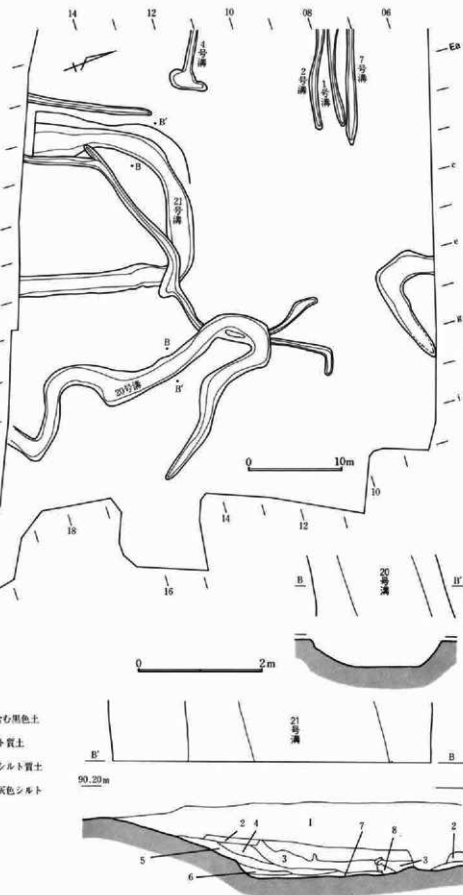
(第165図 PL57)

D区砂状土性台地上に存在する住居群の検出に伴い、低地部にあたるE区については埋没水田の可能性が考えられた。

しかし、調査の結果溝が数条検出されたのみで水田については確認されなかった。またこれらの溝群も走向、形状等一定せず、流水痕も認められることから自然流路の痕跡と考えられる。なおE区低地部では浅間C軽石の純層が確認されている。この軽石層下についても水田等の遺構は存在していない。

E区溝群 土層説明

- 1層 表土
- 2層 浅間C軽石、砂粒を含む黒色土
- 3層 砂礫を含む灰色シルト質土
- 4層 砂礫を多く含む灰色シルト質土
- 5層 砂礫、黒色土を含む灰色シルト質土
- 6層 灰色砂質土
- 7層 浅間C軽石
- 8層 灰色シルト質土



第165図 E区溝群と土層図

7. まとめ

飯土井二本松遺跡の調査によって、これまで報告したように多岐にわたる時期の遺物、遺構を確認し得た。

各遺構・遺物とも興味ある内容をもっており、個々について分析、検討を加えなければならない必要性を痛感するが、この報告ではそのうちいくつかの点の指摘に止めなければならない。ここでは遺跡の特徴および縄文時代の遺構・遺物に関して調査のまとめとしておきたい。

なお、今回の調査成果については引き続き実施されるであろう上武道路関連の調査報告に何らかの形で活用できればと考えている。

a 遺構の特徴

この遺跡が砂壤土性の微高地に立地することは、すでに行われていた覚嵐二之取遺跡をはじめ周辺遺跡の調査成果により当初から把握されていた。さらに試掘調査によっても遺跡の大部分に砂壤土の存在を確認し得ている。

表土下には遺跡西端部にローム層が認められたのみで、この東から神沢川にいたるまで砂壤土に覆われている。なお、この遺跡に西接する飯土井中央遺跡についても調査が行われているが、この地区では砂壤土の堆積は認められず、飯土井二本松遺跡西端部に連続してローム層が広がっている。

さらに、周辺遺跡の調査によりこの砂壤土上には縄文時代中期後半以降の遺構類が検出されていることから、同期以前の堆積であることは判明していたが、その堆積時期がいつであるかは不明であった。

このようなことから今回の調査では、この砂壤土の堆積時期を明らかにすることが目的の一つとして設定されるものとなった。

表土下の砂壤土は遺跡の大部分を覆っているが、さらにこの砂壤土（上位砂壤土層）の下層にも同層を挟んで複数の砂壤土層が存在することを確認し得た。この同層はいずれも遺物包含層を形成し、時期的には縄文時代各期にもとめられ、同時に砂壤土層

の堆積時期も確定できることになる。

その結果、早期・前期・中期前半の各期を覆う砂壤土層が確認され、上位砂壤土層を含む計4層におよぶ堆積が縄文時代に推移したことがあきらかとなった。

その堆積状態をみると、上位砂壤土層はほぼ遺跡全域に広がりをもつものの、以下の砂壤土層およびこれに伴う各期包含層については地点を異にして存在が認められている。

早期包含層は遺跡東部にあたるD区に、前期包含層、中期前半包含層はA・B区間に位置する埋没河川の両岸部にそれぞれ存在が認められ、各々砂壤土により覆われている。この分布域の相違は明瞭であり、各包含層が同一地点において連続的に確認されることはない。

このことは当時の分布域（居住域）をそのまま反映したものととらえることが、遺物のあり方からも考えられる。早期包含層についてみると、遺物は比較的高位部に主として分布し、低位部にはほとんど認められていない。また、その中においても集中分布域もみられることから、砂壤土が堆積する段階においてもそれほど大きな移動は行われなかったように判断され、遺物の流出により分布域が形成されたものとは考えにくい。さらに、不明瞭ながらも芽状遺構が存在する点からみればこの部分が早期において居住域として利用されていたものといえよう。この砂壤土は山体崩落に伴う河川性の堆積物と考えられているが、具体的な堆積状況は不明ながら早期面を埋没する時点では一気に流入したのではなく、比較的ゆるやかに第一次的堆積が進行しているとみられる。このことが早期包含層の保持に要因しているといえるが、同時にこの地域における地表面での早期遺物の確認を困難にもしているのである。

早期包含層を形成する黒色土層中には、縄文時代早期後半以降と推定されるアカホヤ火山灰（Ah）の存在は不明であり、同火山灰降下前の包含層であるとの可能性も指摘されている。

なお、堆積する砂壤土層中には遺物・遺構とも認

められておらず、今回の調査では無遺物層との判断がなされている。

このような調査所見はA区・B区に確認された前期、中期前半の包含層および砂壤土層においても基本的に同様であると考えられる。ただし両分布域が旧河川を挟んでそれぞれ形成されることから、河川縁辺付近については浸蝕、再堆積の影響もあり一部では時期的な混在状況も観察されており、早期面を覆う砂壤土層に比較すればやや複雑な様相も看取される。しかし、時期を異にした砂壤土の堆積は事実として認識され得るものであり、周辺地域の調査によりさらに実体があきらかとなっていくものと期待したい。

また、各期を埋没するそれぞれの砂壤土については極めて類似した土壌であり、時期毎に性格を異にしているか否かについては調査の中では認識できていない。このことも今後の調査の課題として残されるものとなろう。

b 縄文時代の遺物・遺構

縄文時代については早期から後期にわたる遺物類が得られ、遺構は陥穴群および住居状遺構が確認された。

特に注目されるものは早期の遺物群であろう。検出状況から一括資料として認識されるものと考えられたが、出土土器からみると複数の時期にわたるものとみられる。小破片が大半をしめるとともに、関連資料の分析が不十分であるため編年の位置については今後の課題としなければならない。ここでは、概括的な特徴についてのみみるものとする。

器形復元できた土器は尖底土器のみである。この土器はやや肉厚で、口縁下にわずかに段が認められ砲弾状の尖底部をもち、器形からみると三戸式土器段階の特徴が観察される。整形は雑であり、器面にも起伏が認められるとともに、剥落も目立つことから加えられる文様も判読しにくい。文様は縄文および絡条体を用いられ、帯状に交互施文されている。両原体ともやや太めであり、施文はあまり丁寧ではない。施文は口唇部および尖底部付近の一部を残し

器全面にわたり横位施文は5帯が観察される。縄文はL R横位、絡条体は単軸絡条体第Ⅰ類と観察されたが、絡条体に使用される1段縄の撻方向については不明である。

このような文様構成について、今回の出土例についてみると押型土器の帯状施文と比較することも可能である。兩種は胎土、整形等土器自体は全く異なるものであるが、文様表出技法、構成には類似する点も認められる。原体は異種であるものの横位回転手法が用いられ、帯状の交互施文により器面を覆うという特徴は、文様構成上の共通性として理解し得るものである。このことから推定すると、類例が乏しく積極的な根拠を欠いているが、兩種は編年のには近い関係にあると考えておきたい。

押型土器は複数原体による横位密接施文という特徴からみて細久保式土器に位置付けられる資料と考えられ、検出例のなかでは大形の破片が得られている。点数は5片であるが、個体数でみれば2個体分に相当する。

早期包含層出土土器の主体を占めるものは各種条痕文土器である。いずれも小破片であり接合資料はほとんどなく器形、文様構成等不明な点が多い。分類に際しては報告にあるように器厚、胎土および文様の比較から類似する破片毎に行っており、基本的に個体別を意識したものである。これら条痕文土器とした一群に関して編年のどの段階に位置付けられるかについては、ここでは留保しておきたい。また、器壁の厚いものには胎土中に繊維を含む可能性のある資料も存在し、各種条痕文土器間にも時間差を考慮しなければならない点もある。このように早期包含層の量的主体をしめる条痕文土器には今後の課題とすべき内容が多く、問題もあるが出土状況を考えあわせ沈線文系土器に伴う可能性も想定させる。

ここ数年、早期土器とりわけ沈線文系土器に関する形式学的再検討が行われているが、現在も流動的な内容ももっている。これらの動向をふまえ今回の出土資料については、改めて分析する機会を設けるものとする。

下江田前遺跡



I 発掘調査の経過

1. 発掘調査の経過

調査は地権者金子規矩雄氏の全面的な協力を得て昭和49年3月4日から3月15日まで実施された。調査はトレンチ法によることを原則とし、路線中心坑を中心に10m毎に方形のグリッドを設定、各直行方向に1.5m巾、長さ9mのトレンチを入れ、トレンチに遺構の確認された部分の拡張を行なった。

2. 遺跡の位置

本遺跡は県道境・太田線と東部伊勢崎線にはさまれた地域で、西南に世良田部落、東北に新田町下江田部落が接している。地形は両部落が台地上にあり、その間を世良田駅東から南南東方向に走る石田川が形成した沖積低地が分け、広い水田地帯が開ける中にある。

特に石田川は遺跡地点まで耕地整理により改修されて直流しているが、以前は遺跡から東方のような蛇行した状態を呈していた。

付近には北300mの下江田部落西南端の矢抜神社境内に角四石安山岩使用の石室をもつ前方後円墳があり、その南から西にかけての台地縁辺には縄文早・前期、奈良時代の遺物が散布している。また世良田駅の周辺には古墳時代中期前半の散布地、そこから南にかけての微高地には小円墳が続き、遺跡南西の世良田部落までのびている。

本遺跡はこうした中において石田川右岸に接してわずかの遺物を散布していた。

II 発掘調査の成果

1. 調査の概要

(1) 遺構

トレンチの所見による標準層序は下のようであった。

上記のうち、2～5層までは上面における水田耕作によりかなり各層が圧縮されたものとみられ、その厚さも20cm内外にすぎない。

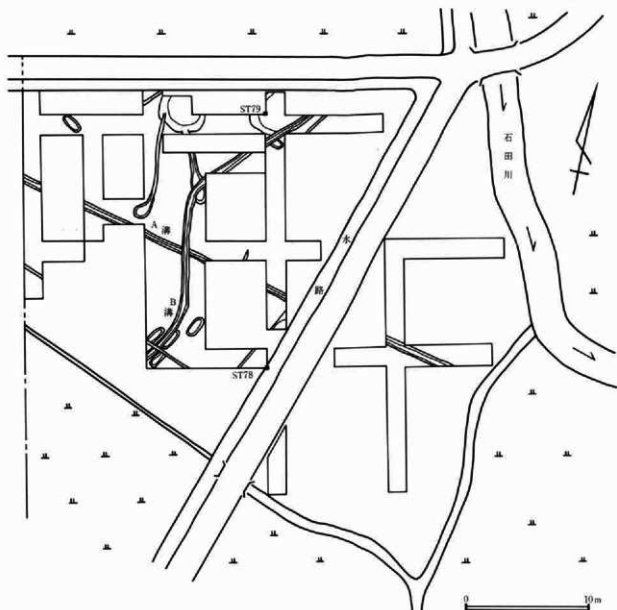
6～8層は主として二次堆積によるものであると考えられ、特に6層より上の堆積は何度かにわたる水積の繰り返により形成された可能性が大きい。このことはマンガン、鉄分の凝集によっても裏づけられ、更に、すぐ東を流れる石田川の流れと関連するものとみられる。即ち、現在の石田川は耕地整理により改修されているが、それ以前の耕地図をみるとかなり蛇行しており、未整理の本遺構のすぐ東から下流ではかなり蛇行し、往時をしのばせている。これらから、この地域は石田川流域の氾濫源にあり、古くから冠水を何度か繰り返したにちがいない。このことは後述する遺跡の状態からも裏づけられている。

遺構は6層を中心に掘り込まれており、南北方向に5本の溝が認められたほか、隅丸長方形の土坑が6基認められた。溝は前述の冠水に対する配慮による排水溝とみられ、時期的にも数次に及ぶものとみられる。土坑はその性格を表づけるものは全くなく、掘り込み面から時期を推定するにとどまる。

溝状遺構

7条の溝は大きく分けて排水溝と田の区画を示すものの二通りがあるとみられる。このうち、前者は6層から掘り込んだA・Bの二溝であり、C・Dは掘り込み面も4層からとみられ、現在の田の畦畔とほぼ合致するところから後者のものとみられる。

その他、E・F・G溝は途中で立ち消えになるものも多く、方向性、規格性を欠くところからその性



第1図 下江田前遺跡全体図

層序	層名	色調	組成等
1層	耕作土	黒色	粘性有機物を含む
2層	浮石層	灰茶褐色	浮石を含む(Aスコリア?)
3層	粘質土層(1)	暗灰白色	粘土と黒色土の混じり、鉄分を含む
4層	粘質土層(2)	灰黄褐色	マンガン、鉄の凝集層だが鉄分多し
5層	粘質土層(3)	暗灰白色	同上、マンガン多し
6層	砂質土層	明黄褐色	ロームの二次堆積
7層	粘土層(1)	灰白色	粒子の大きい粘土
8層	粘土層(2)	暗灰白色	“高師小僧”が多い粘土

格は不明である。そこで、以下A・B溝について主として述べることにする。

A溝

本調査中、最もしっかりした溝で、しかもほぼ東西方向に直にのびている。規模は上巾40cm、深さ30cm内外で部分的に片・両の段を有するU字溝である。掘り込み面は6層上面からで遺物はこれに確実につくものは発見されなかった。

B溝

南北方向に蛇行して走る溝でA溝と交わるが、その部分の所見では明らかにA溝に後行するものであった。上巾は40cm内外でA溝と等しいが深さは10cm内外A溝より深い。

レベルからみると、A溝は西から東へ、B溝は南から北方向に水が流れたとみられる。この二方向の溝は推定の域を出ないが石田川の流路の変更によって掘りかえられたことも考えられる。即ち、蛇行する石田川がA溝が掘られた時点で東を流れ、B溝の時点で北側を東西方向に流路を変更したために掘りかえられたものかも知れない。このことを裏書きするように、遺跡の北側部分は中央部分より40cm内外低く、東方向に傾いている。

その他の溝

規模は巾20cm内外、深さ5cm内外と小さく、掘りかたも不明瞭である。前述の北側の低い部分に向かって集まる傾向をみせており、途中で立ち消えになるものもあり、不明瞭である。掘り込み面も5層上面からのものが多いことからA・B溝の後に掘られたものであることは明らかである。遺物はほとんどない。

土坑状遺構

すべてがほぼ同一の規模をみせ、巾0.5m、長さ1.1m内外の隅丸長方形である。深さは概ね6層から20cmほどである。時間的には5層下面からの掘りこみとみられ、B溝と交わる3基の土坑はその切り合い関係からB溝に先行することは明らかであり、ほぼ各土坑とも同一時期のものとみられることから、A溝が掘られた後や間をおいてB溝開掘以前

に掘られたものとみられる。遺物は全くない。

(2) 遺物

遺物はほとんどなく、わずかに北側落ちこみ部分に埴輪片が十数片、板碑一片が認められたほか、4層以下で灯明皿片、鉄残片が認められたにすぎない。落ちこみ部分のものは水により流されてきたものとみられ、下面にノロ状の泥が密着していた。灯明皿は砂を多量に含んだ胎土で焼成整形技法からみて鎌倉期以後のものと思われる。

2. ま と め

以上、下江田地区77-79地点の調査結果の所見について概要をのべてきたが、結論的には、溝の走行を認めたが、その時間的なもの、性格については不明な点が多い。

こうした中で推察の域を出ないが、まとめをのべる。

- (1) 溝は時間的にも性格的にも一律でなく、排水、田の畦畔に沿った溝等であろう。
- (2) 土坑は時期、性格とも不明だが、中世の墓坑的な様相が認められる。
- (3) 時間的には確実な資料が欠くが、6層は、北1km地点での古墳時代中期の住居跡掘りこみ面でもあるので、それと余りへだたない時期のものであろう。
- (4) 灯明皿、板碑等の様相からみると室町～南北朝期のものであろう。

以上の所見から溝が最初に掘られたのは、掘り方からみると古代的様相をみることができると。その意味から時期を限定するとすれば、平安期ごろから南北朝期ごろまで本道跡面は地表を出し、度々の冠水に洗われていたものとみることが妥当ではないかと考える。

遺物觀察一覽表

縄文時代早期 (PL58)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
18回-1 尖底深鉢	口径 20.0 高さ 25.5	Di-04	水平口径の尖底深鉢。口径付近と底部に無文帯をもつ。縄文と結糸体による交互横位施文で5段構成をもつ。	①輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③器形から判断して三戸式段階に位置づけられる。
18回-2 深鉢	口縁部	Da-07	楕円押型文は横位、縦位に加えられる。口唇部は平坦面をもち内面ザラつく。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③楕円押型文。
18回-3 深鉢	胴部	Dr-05	楕円押型文が横位に加えられる。押型文は精緻で施文は良好。	①砂粒、輝石粒を含み胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③楕円押型文。
18回-4 深鉢	胴部	Dx-05 06	楕円押型文。杉皮状押型文を交互に帯状施文する。押型文は精緻で施文良好。	①砂粒、輝石粒を含み胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③押型文。
18回-5 深鉢	胴部	Dx-05	4と同一個体。	
18回-6 深鉢	胴部	Dx-05	4と同一個体。	
19回-1 深鉢	口縁部	Di-04	黒赤文土器。単軸筋条体第1類でRを巻く。糸割網、節ともやや深さき。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③桶形底式段階。
19回-2 深鉢	口縁部	De-05	口唇部外側ざ状。等間隔の横位沈線を施す。	①砂粒を多く含む。 ②黄褐色。 ③田戸下層式段階。
19回-3 深鉢	口縁部	Dr-05	口縁は内湾し、口唇は尖りざみ。幅1mmの沈線は明瞭で格子目構成をもつ。	①含有物の粒子細かく胎土は緻密。 ②赤褐色。 ③沈線文系土器。
19回-4 深鉢	口縁部	Dh-02	沈線は不明瞭ながら横位に認められる。整形は良好で、器厚は7mm程度である。	①輝石粒を多く含む。胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③第3類d種。
19回-5 深鉢	口縁部	Dh-02	口唇上は平坦。沈線は不明瞭であり、4に類似する。	①輝石粒を多く含む。胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③第3類d種。
19回-6 深鉢	胴部	Dv-06	沈線は幅広(4mm程度)だが施文は浅い。	①粒子細かく胎土は緻密。繊維を含む可能性がある。 ②暗褐色。 ③第3類e種。
19回-7 深鉢	胴部	Dw-06	沈線は幅3mm程度で格子状の構成をもつ。	①含有物の粒子細かく、胎土は緻密。繊維が含まれる可能性がある。②暗褐色。 ③第3類e種。
19回-8 深鉢	胴部	Da-04 05	格子状構成の沈線文間に集合条線文が加えられる。	①砂粒含む。焼成良好。 ②暗褐色。 ③第3類。
19回-9 深鉢	胴部	Df-03	縦走する沈線は施文具を器面に対し斜位に施す。	①砂粒を多く含む目立つが整形は良好。 ②暗褐色。 ③第3類。

縄文時代早期 (Pl.58・59)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	産・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
19図-10 深鉢	胴部	Dw-07	器厚が厚く、沈線は太く浅い。器面には不規則な scratches が認められる。	①砂粒を多く含む器内面はザラつく。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-11 深鉢	口縁部	Dx-07	口唇上にも条痕が加えられ上端部は面をもつ。内面は横位の整形痕がある。	①胎土は緻密で焼成は良好。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-12 深鉢	胴部	Dr-05	条痕はあまり密集せず、施文写の間隔が認められる。器内面はザラつく。	①砂粒多く、焼成は良好であり器外面は平滑となる。 ②橙褐色。
19図-13 深鉢	胴部	Dr-04	条痕の加えられる器面は平滑であるが内面はザラつく。	①砂粒を多く含む、焼成は良好。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-14 深鉢	胴部	Dx-07	条痕はやや浅いが密に加えられる。器面は平滑であるが、内面はザラつく。	①砂粒多く含むが焼成は良好。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-15 深鉢	胴部	Dr-04	条痕は密に加えられ、細く明瞭。器面は平滑であるが、内面はザラつく。	①砂粒を含み焼成は良好で胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-16 深鉢	胴部	Dr-04	条痕は密に加えられる。器面は平滑であるが内面はザラつく。	①砂粒多く含む焼成は良好で器厚は薄手。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-17 深鉢	胴部	Dr-07	条痕はやや浅いが器面は平滑である。内面は荒れてザラつく。器厚は薄い。	①砂粒、輝石粒を含み焼成は良好。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-18 尖底深鉢	底部	Ds-07	尖底部近くの破片で見られる。条痕は施文がやや粗であるが器面は平滑。	①砂粒、輝石粒を含み焼成は良好。内面は割落が多い。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-19 深鉢	胴部	Dp-06	不明瞭だが同位の条痕が認められる。器内外面とも荒れてザラつく。	①砂粒、輝石粒を含み器面に多く露出する。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-20 深鉢	胴部	Dq-04	不明瞭だが細い条痕が施される。器内外面とも荒れてザラつく。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-21 深鉢	胴部	Ec-08	細い条痕が施される。器内外面とも整形は良好。内面に炭化物が付着する。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③第3期。
19図-22 深鉢	胴部	Dx-07	条痕は密接し施文は明瞭。器面は平滑であるが内面は凹凸する。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③第3期。
19図-23 深鉢	胴部	Dv-06	条痕は密接し施文は良好。器面は平滑だが内面は凹凸し炭化物付着する。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③第3期。

縄文時代早期 (PL59)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
1900-24 深鉢		Do-07	条痕は密で施文はやや不規則。器面は平滑であるが内面は凹凸する。	①小さな空洞がみられ繊維の混入する可能性有。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-25 深鉢		Dt-05	条痕は密接し施文は明瞭。器面は平滑であるが内面は凹凸する。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-26 深鉢		Dq-04	浅い条痕が横位、縦位に認められる。器面は平滑であるが内面は凹凸する。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-27 深鉢		Do-07	不明瞭だが不規則な条痕が認められる。器面は平滑であるが内面は凹凸する。	①胎土中に小さな空洞が認められ繊維を含む可能性がある。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-28 深鉢		Dw-06	条痕は太めで間隔もややあきざみ。器面は平滑だが内面は凹凸する。	①胎土中に小さな空洞があり繊維が混入された可能性がある。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-29 深鉢		Di-02	条痕は浅く太めで施文は不規則。内面の整形やや雑だが外面は平滑である。	①胎土中に空洞が認められ繊維を混入している可能性がある。 ②明褐色。 ③第3類。
1900-30 深鉢		Df-05	器内外面とも整形やや雑で凹凸する。捺痕が認められる他、無文である。	①胎土中に空洞が認められ繊維が含まれる可能性がある。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-31 深鉢		Dt-09	器面には不明瞭な捺痕が認められる。内面は凹凸するが外面は平滑である。	①砂粒を含み焼成良好。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-32 深鉢		Dk-02	器内外面とも平滑であり無文。	①砂粒、輝石粒を含み胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-33 深鉢		Dh-02	横走する浅い沈線が施される。器内外面とも整形は良好で、外面は平滑。	①砂粒、輝石粒を含み胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③第3類。
1900-34 深鉢		Dg-02	横位の浅い沈線が認められる。33と類似する資料。	①砂粒、輝石粒を含み胎土は緻密。 ②橙褐色。 ③第3類。

縄文時代前期 (PL59・60)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
43図-1 深鉢	口径 25.0 高さ[34.0] 底部欠損	Ay-18 Ba-18	口縁の整形は指でゆるやかな起伏をもつ水平口縁。R L、L R 横位を同一縄文帯に加え、菱形状構成をもつ。底部回転に伴う胎土の盛り上がりも部分的に認められる。	①含繊維、内外面に繊維痕やや残る。 ②におい赤褐色。 ③黒沢式。
43図-2 深鉢	口縁部	Ba-17	口縁に沿って連続爪形文が2条送り、以下0段3条L R横位が施される。整形は良好で、内面は平滑である。	①含繊維。 ②におい褐色。 ③黒沢式。
43図-3 深鉢	口縁部	Ba-19	口縁部はやや内湾ぎみに立ち上る。器内外面とも整形は良好で繊維は器外へ露出しない。口縁に沿って2条連続爪形文が送り以下L R横位が施される。	①含繊維。 ②におい赤褐色。 ③黒沢式。
43図-4 深鉢	胴部	Bd-14	列点状刺突文により文様構成する。縄文は施されない。	①繊維が少量混入される他、細砂や多い。 ②黄褐色。 ③有尾系。
43図-5 深鉢	胴部	Ba-17	浮線文は偏平でヘラ状工具により細く鋭い刷目が加えられる。縄文はR L横位が観察される。内外面とも整形は良好である。	①白色粒子の他、輝石粒が認められる。 ②におい褐色。 ③透織b式。
43図-6 深鉢	胴部	Ba-17	浮線文は偏平で、ヘラ状工具による細く鋭い刷目が加えられる。縄文はR L横位が施される。整形は内外面とも良好。一部に結節回転も観察される。	①白色粒子の他、輝石粒が認められる。焼成良好。 ②明褐色。 ③透織b式。
43図-7 深鉢	胴部	63土坑	浮線文は偏平でヘラ状工具による刷目が加えられる。縄文はR L横位が認められる。内外面とも整形は良好。	①白色粒子の他、輝石粒が目立つ。焼成良好。 ②明褐色。 ③透織b式。
43図-8 深鉢	胴部	Bk-16	平行線文により矢羽状構成の文様が施され、その上に粘土粒の貼付文が付される。整形は外面は平滑で良好だが内面はやや粗い。	①白色粒子がやや目立つ。焼成良好。 ②褐色。 ③透織c式。
43図-9 深鉢	胴部	Ay-17	平行線による横位文様が施される。縄文は加えられない。内面にスス付着。	①白色粒、輝石粒を含む。 ②におい褐色。 ③透織b式?

縄文時代中期前半 (PL60)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
54図-1 深鉢	口縁部	At-09	口縁部に把手の刺落痕が認められる。縄文は不明瞭だがR L横位が観察される。口縁は内湾ぎみで、口唇部は内側に面をもつ。内面平滑。	①細砂、輝石粒が含まれる。 ②黄褐色。 ③阿玉台I b式。54図-2と類似個体。
54図-2 深鉢	口縁部	Ba-12	口縁部は内湾し、口唇部は内側に面をもつ。不明瞭な縄文が認められるがR L横位と観察される。内面は平滑な面を形成する。	①細砂、輝石粒が含まれる。 ②赤褐色。 ③阿玉台I b式。

縄文時代中期前半 (PL60)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
54図-3 深鉢	口縁部	Aw-14	口唇部は内側に面をもち、口縁端部に斜目を加える。縄文は不明瞭ながらRし横位が観察される。	①細砂、輝石粒が含まれる。 ②赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-4 深鉢	胴部	As-14	器面は割漆が著しい。縄文はL R横位が施される。	①細砂を含む。 ②赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-5 深鉢	胴部	As-10	太目の鋸歯状沈線により区画文および充塞文が加えられる。	①細砂を含み焼成良好。 ②赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-6 深鉢	胴部	Av-11	横位の押圧文が連続して加えられる。	①細砂、輝石粒を含み、焼成良好。 ②にぶい褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-7 深鉢	胴部	Au-11	横位の押圧文が連続して加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-8 深鉢	胴部	Au-10	横位の押圧文が連続して加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-9 深鉢	胴部	As-11	横位の押圧文が連続して加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-10 深鉢	胴部	Aw-11	横位の押圧文が連続して加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-11 深鉢	胴部	Aw-10	横位の押圧文が加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-12 深鉢	胴部	Au-11	横位の押圧文が3～4cmの間隔で加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-13 深鉢	底部	Au-10	横位の押圧文が底部付近にまで及ぶ。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黄褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-14 深鉢	底部	Au-10	横位の押圧文が加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-15 深鉢	口縁部	Au-13	口縁はやや内湾し、口唇上に凹面をもつ。鋸歯状沈線により文様構成し、縄文はRし横位が施される。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54図-16 深鉢	胴部	Av-13	縄文はRし横位が施される。原体は柔軟なものとみられ、胎の形状がやや不明瞭となる。	①砂粒の他、輝石粒が目立つ。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。

縄文時代中期前半 (PL61・62)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
54回-17 深鉢	口径 28.6 器高 35.7 底径 17.0	Ao・Ai・Au Av-10・11	胴部は筒状で、口縁部が深く深鉢。口縁部には隆帯による区画文を施し、ボタン状貼付文を加える。胴部にはY字状隆帯を垂下させる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
54回-18 深鉢	口縁部	Ao・As-09 Ax-10 Av-11	口唇部は内外面に面をもち、内側に使がみられる。整形は良好で平滑。LR縦位。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
54回-19 深鉢	口縁部	As-10 Au-10・11 Av・Aw-11	口縁部はやや湾曲した水平口縁をなす。1列の角押文および縦歯状隆帯文により文様を構成する。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-1 深鉢	口縁部	Ba-12	口唇は尖りぎみで両側に面をもつ。文様帯は隆帯文、1列の角押文により構成される。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-2 深鉢	口縁部	Ba-12	口縁は内湾し、口唇部には凹面をもつ。1列の角押文により、区画文が加えられる。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-3 深鉢	口縁部	Ba-10	波状口縁をなす。口縁は内湾ぎみで、口唇部は内側に面をもつ。1列の角押文が施され、波頂部下にはボタン状貼付文が付される。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-4 深鉢	頸部	Ba-11	1列の角押文により文様構成される。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-5 深鉢	頸部	Ay-13	1列の角押文および押圧文により文様構成される。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-6 深鉢	頸部	Ay-12	横位の押圧文が加えられ、その上に1列の角押文が施される。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-7 深鉢	胴部	Ba-12	1列の角押文が2条横走する。	①細砂、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-8 深鉢	口縁部	Be-15	口縁部に付される縦歯状突起部分。口唇部に刷目をもつ。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③阿玉台1b式。
55回-9 ・10・11 深鉢	底部	Be-15	隆帯文上には刷目を加え、区画内に1列の角押文を施し、その間に刺突文を充塞する。	①細砂、輝石粒を含む。 ②赤褐色。 ③阿玉台1b式。
56回-1 浅鉢	口縁部	B区76土坑	無文の浅鉢。器内外面とも整形は良好で、横位の調整帯が認められる。口縁下に一段凹面をもつ。	①砂粒を多く含む。 ②輪状、にぶい黄褐色。 ③阿玉台1b式?

縄文時代中期後半 (PL62・63)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
60図-1 深鉢	胴部	Bp-22	糸は密集して巻かれる。早輪結帯体第1類 Y R。外面は整形良好であるが内面はやや粗い。	①緻密で夾雑物少ない。 ②赤褐色。 ③熟赤文系。
60図-2 深鉢	胴部	Bm-20	やや内厚で内外面とも整形は良好である。条間隔は一定しており厚体は丁寧に巻かれている。 早輪結帯体第1類 Y R。	①緻密で夾雑物少ない。 ②棕色。 ③熟赤文系。
60図-3 深鉢	胴部	Bn-22	60図-2と類似しており同一個体の可能性が高い。早輪結帯体第1類 Y R。	①緻密で夾雑物少ない。焼成良好。 ②明赤褐色。 ③熟赤文系。
62図-1 深鉢	口径 27.0 口縁-胴部 1/2	1号縄文遺構	液状口縁は4単位。文様は隆帯により構成され、縄文はR L、方位は縦位が主であるが、口縁付近には横位が認められる。整形は良好で器面平滑。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②灰黄褐色。 ③加曽利E 3式。
62図-2 深鉢	胴部	1号縄文遺構	隆帯文により文様構成。縄文はR L縦位。整形は良好で、外面は平滑、内面はやや荒れている。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②明黄褐色。 ③加曽利E 3式。
67図-1 深鉢	口径[23.6] 高さ[29.3] 底部欠損	Bh-15 Bh-16	液状口縁。文様構成とも4単位。口縁部の褐色文は3単位が左色で、1単位のみ右巻構成となる。縄文は口縁付近R L横位、以下R L縦位となる。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②灰黄褐色。 ③加曽利E 3式。
67図-2 垂飾	長さ2.0 巾0.8 厚み0.4 孔穴0.2 重量1.9g		Bh-15 定形	①粒紋岩。
69図-1 深鉢	口縁-胴部	Bi-20 Bi-15	口縁部に幅広い無文帯を持ち、その下に指内形区画文及び把手を加える。区画文内にはR L横位が施され、胴部には条線文が配される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③加曽利E 3式。
69図-2 深鉢	胴部	Bi-15 Bh-15	口縁部は隆帯文により区画文が加えられ、縄文はR L縦位が施される。胴部は斜位に近く、糸が縦走している。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
69図-3 深鉢	胴部	Bi-15	縄文はR Lであるが、指文方位は縦位斜位と不規則である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②棕色。 ③加曽利E 3式。
69図-4 深鉢	口縁部	Bi-16	口縁部区画文内はR L斜位、胴部はR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③加曽利E 3式。
69図-5 深鉢	胴部	Bh-15 Bk-21 Bi-16	縄文はR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明黄褐色。 ③加曽利E 3式。
69図-6 浅鉢	胴部	Bi-15	大型の浅鉢と見られる。縄文は異束のR L縦位が器全面に施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②棕色。 ③加曽利E 3式。

縄文時代中期後半 (PL63・64・65)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
70図-1 深鉢	口径(56.0) 高さ[32.0] 口縁-胴部	2号縄文遺構	単位のゆるやかな波状口縁を持つ大型土器。楕円形区画文下から懸垂文を垂下させる。縄文は区画文内にR L横位。胴部はR L縦位が施される。	①砂粒を多く含む。焼成良好。 ②浅黄褐色。 ③加曽利E 3式。
70図-2 深鉢	口径(43.0) 高さ[32.7] 口縁-胴部	2号縄文遺構	単位のゆるやかな波状口縁を持つ大型土器。楕円形区画文下から懸垂文を加える。縄文はR Lを用いるが、施文方位はやや不規則。	①砂粒を多く含む。焼成良好。 ②浅黄褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-1 深鉢	口径(35.3) 高さ[31.9] 口縁-胴部	Cm-01	波状口縁のキャリアー形深鉢。楕円形区画文下から懸垂文を加える。区画文内には条線文が施される。	①砂粒を含む。焼成良好。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-2 深鉢	波状口縁部	Dk-11	楕円形区画文内には0段3条R L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-3 深鉢	胴部	Cw-03 Cw-02 Cs-03	懸垂文間には磨消縄文。縄文はR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-4 深鉢	波状口縁部	Cp-22	口縁部には隆線による円文が加えられ、胴部にはワラビ手状沈線文が認められる。縄文はR Lが用いられる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-5 深鉢	胴部	De-03	区画文内にはR L縦位の縄文が施され、その間にワラビ手状沈線文が加えられる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-6 深鉢	口縁部	Dk-11	口縁部は内湾さみ。楕円形区画文内にはR L横位、胴部にはR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-7 深鉢	胴部	De-02	懸垂文間にR L縦位の縄文が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-8 深鉢	胴部	Cu-05 Cu-06 Cl-06	隆線による区画文が加えられ、部分的には突起状の構成も見られる。縄文はR L、区画文内は横位、胴部は縦位に施す。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-9 深鉢	胴部	Dj-10	懸垂文帯間に直前段反L L R縦位が施され、さらに曲線文が垂下する。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-10 深鉢	胴部	Cl-01 Cl-04 Cw-24 Cv-23 Cr-23 Cr-24	口縁部は大隆線により文帯帯が構成され、R L横位が施される。胴部には懸垂文およびR L縦位が加えられる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
71図-11 鉢形土器 1編-見取断片	口径(10.8) 高さ[15.1]	Bo-17 Bo-16	沈線により文帯帯成し、区画文内にはR L横位が施される。縄文は細く、整形は内外面とも丁寧。	①砂粒を多く含む。 ②褐色。 ③加曽利B 2式。
72図-1 深鉢	口縁部	Bi-14	口縁下にたく浅い沈線が一条走り、以下L R縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 4式。

縄文時代中期後半 (PL65・66)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
72回-2 深鉢	波状口縁部	Bi-15	波状部は外反ぎみに開く。楕円形区画内にはR Lの縄文が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
72回-3 深鉢	波状口縁部	Bv-19 Bi-12	口唇部は肥厚し、上端に面をもつ。曲線状区画内にR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 4式。
72回-4 深鉢	波状口縁部	Bh-15	口縁部は強く内湾する。曲線状区画内にはR L横位が施されるが、口縁付近には横位も認められる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 4式。
72回-5 深鉢	把手部分	Bi-15	輪状把手部。ワッピ手状大沈線およびR L縄文が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
72回-6 深鉢	胴部	Bi-14 Bi-15 Bh-15	縄文はR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
72回-7 深鉢	胴部	Bi-15	縄文はR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
72回-8 深鉢	波状口縁部	Bi-16	口縁部は隆線により楕円形区画が加えられる。縄文は直前段反摺R L横位。器面に細かな亀裂が認められる。	①砂粒を多く含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
72回-9 深鉢	胴部	Bi-15	縄文はR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
72回-10 深鉢	胴部	Be-13	胴部隆帯土器の胴部片。縄文はR L横位。器内外面とも整形は良好である。	①砂粒、輝石粒を含む。焼成良好。 ②淡黄色。 ③加曽利E 3式。
72回-11 深鉢	波状口縁部	An-10 Be-13	口唇部を欠く。口縁に沿って隆線文が走り、以下曲線文が認められる。不明瞭だが縄文も観察される。	①砂粒多く含む。 ②明黄褐色。 ③加曽利E 3式。
73回-1 深鉢	口縁部	Bh-18	隆線文により文様を構成する。区画内にはR L横位が施される。器内外面とも整形は丁寧。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
73回-2 深鉢	波状口縁部	Bi-20	口縁部区画内にはR横位が施される。器内外面とも整形は丁寧。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明赤褐色。 ③加曽利E 3式。
73回-3 深鉢	口縁部	Bi-15 Bm-14 Bi-15	口縁部は内湾し、口唇部やや肥厚ぎみで、上端に面をもつ。区画文は太く浅い。縄文は直前段反摺R L横位である。整形は内外面とも良好。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②淡黄、黄灰色。 ③加曽利E 3式。
73回-4 深鉢	口縁部	Bi-19	口縁下に大沈線が走り、以下0段3条R L横位が施され、胴部は横位となる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。

縄文時代中期後半 (PL66・67)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
73回-5 深鉢	流状口縁部	Bk-18	口縁流状部は外反さみに開く。縄文はR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい棕色。 ③加曽利E 4式。
73回-6 深鉢	流状口縁部	Bk-19	縄文は0段3条R Lが用いられ、口縁付近は横位、以下縦位に施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄棕色。 ③加曽利E 4式。
73回-7 深鉢	口縁部	Bc-17	曲線文調は磨消縄文とする。縄文はR Lで、口縁付近は横位、以下縦位に施す。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄棕色。 ③加曽利E 4式。
73回-8 深鉢	口縁部	Bw-19	口縁下に沈線が一条走り、以下R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②棕色。 ③加曽利E 4式。
73回-9 深鉢	口縁部	Bl-14	縄文はR Lで、口縁付近は横位、以下縦位に施す。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄棕色。 ③加曽利E 3式。
73回-10 深鉢	流状口縁部	Ba-18	隆線による区画文内にR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい棕色。 ③加曽利E 3式。
73回-11 深鉢	胴部	B区	縄文は直々段反摺R L L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄棕色。 ③加曽利E 5式。
73回-12 深鉢	胴部	Bw-19	縄文は0段3条R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②棕色。 ③加曽利E 3式。
73回-13 深鉢	胴部	Dc-20	懸垂文帯は幅広く、整形は丁寧。縄文は0段3条R L縦位で、施文は良好である。	①細砂、輝石粒を含む。 ②にぶい黄棕色。 ③加曽利E 3式。
73回-14 深鉢	胴部	Br-21	縄文部片。縄文はR L、施文方位は斜位に近い横位で、条が縦走する。整形は器内外面とも良好。	①細砂、輝石粒を含む。 ②棕色。 ③加曽利E 5式。
73回-15 深鉢	口縁部	Dc-19	楕円形区画文内にR L横位が施文される。器面は磨耗が著しい。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄棕色。 ③加曽利E 3式。
73回-16 深鉢	胴部	Bh-18	曲線状の懸垂文が認められる。沈線は太く明瞭。縄文は直前段反摺R L L縦位で施文は良好である。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②内一にぶい赤褐色。外一灰白色。 ③加曽利E 3式。
73回-17 深鉢	胴部	Ba-17	胴部段寄文土器部片。縄文はR L縦位。器内外面ともややザラつく。	①砂粒多く含む他、輝石粒も見られる。 ②にぶい黄棕色。 ③加曽利E 3式。
73回-18 深鉢	胴部	Bc-15	懸垂する沈線は幅広く浅い。縄文はR L縦位。器内外面とも整形は良好であるが、やや割蓋が目立つ。	①砂粒、輝石粒を含む。焼成良好。 ②にぶい棕色。 ③加曽利E 3式。

縄文時代中期後半 (PL.67・68)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
74図-1 深鉢	口縁部	C区25溝	楕円形区画文内にR.L.縦位を施す。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②黒灰、褐色。 ③加曽利E3式。
74図-2 深鉢	口縁部	Cm-01	隆線により楕円形区画文が加えられ、器面摩耗著しい。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E3式。
74図-3 深鉢	口縁部	Cm-04	口縁を欠く。楕円形区画文内にR.L.横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E3式。
74図-4 深鉢	波状口縁部	Cs-02	大きく浅い波状沈線が加えられる。縄文はR.L.横位である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②黄灰色。 ③加曽利E3式。
74図-5 深鉢	波状口縁部	Cl-04	口縁下に隆起線文が走り、以下R.L.横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明赤褐色。 ③加曽利E4式。
74図-6 深鉢	胴部	Cv-24	口縁部の区画文は隆線により加えられる。胴部の縄文はR.L.で異変と見られる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E3式。
74図-7 深鉢	口縁部	Cm-03	口唇部を欠く。隆線により文様帯が構成される。区画文内には縄文が見られるが、不明瞭。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。
74図-8 深鉢	胴部	Ca-03	縄文はR.L.横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰黄色。 ③加曽利E3式。
74図-9 深鉢	胴部	Cv-09	縄文はR.L.横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③加曽利E3式。
74図-10 深鉢	波状口縁部	Cv-05	口縁にワラビ状、弧状沈線およびL.横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③明赤褐色。 ③加曽利E3式。
74図-11 深鉢	口縁部	C区表採	口縁下に沈線が一帯走り、以下は無文である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③褐色。 ③加曽利E4式?
74図-12 深鉢	胴部	Cm-04	口縁部は隆線による凹文、楕円形区画文が構成される。縄文はR.L.横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E3式。
74図-13 深鉢	胴部	Cp-22	集合条線は半截竹管により加えられる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。
74図-14 深鉢	胴部	Ce-23	条線文が密集して加えられる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色-灰黄褐色。 ③加曽利E3式。

縄文時代中期後半 (PL68・69)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
74回-15 深鉢	底 部	Ck-03 Co-23	小型土器の底部。不規則な条線文が施される。底面の整形はやや雑。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②橙色。 ③加曽利 E 3 式。
74回-16 深鉢	胴 部	Ct-01	深く力強い集合沈線文により文様構成される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰黄褐色。 ③74回-17と類似個体。
74回-17 深鉢	胴 部	Cv-01	深く力強い集合沈線文が施され、区画文の一部も認められる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄橙～暗灰色。 ③74回-16と類似個体。
74回-18 土製品		Ce-01	土器片を再利用したものとみられ、縁辺部に整形痕が残る。器面には R L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色？ ③前期法縄式？
75回-1 深鉢	胴 部	Cv-24	縄文は L 縦位が施される。	①砂粒、輝石が含まれる。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-2 深鉢	胴 部	Ct-02	縄文は R L 縦位が施される。器面は摩耗が著しい。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②内～暗褐色。外～にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-3 深鉢	胴 部	Ct-04	縄文は R L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-4 深鉢	胴 部	C 区表採	縄文は R L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③加曽利 E 5 式。
75回-5 深鉢	胴 部	Ca-04 Cm-04	型垂文は深く明瞭。縄文は L R 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-6 深鉢	胴 部	Cd-18	陰帯文により文様構成し、縄文は 0 段 3 条 R L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-7 深鉢	胴 部	Ct-01	縄文は前々段反照 R L L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-8 深鉢	胴 部	Ct-02	縄文は前々段反照 R L L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-9 深鉢	胴 部	Ca-05	縄文は L R L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②内～灰黄褐色。外～にぶい褐色。 ③加曽利 E 3 式。
75回-10 深鉢	胴 部	Cv-05	縄文は L R L 縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3 式。

縄文時代中期後半 (PL68・69・70)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
75図-11 深鉢	胴部	Cn-24	縄文はL R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②暗灰色。 ③加曽利E 3式。
75図-12 深鉢	胴部	Cr-05	縄文はR L R縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③にふい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
75図-13 深鉢	胴部	Ct-06	縄文はR L R縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③にふい褐色。 ③加曽利E 3式。
75図-14 深鉢	波状口縁部	C区26溝	外反さみの波状口縁。刺突文帯が1条横走する。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③にふい褐色。 ③加曽利B 2式。
75図-15 深鉢	胴部	Cv-05	縄文はL R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-1 深鉢	波状口縁部	D区11溝	口縁部は楕円形区画文が沈線により施される。区画文内にはR L横位が加えられる。器内外面とも整形は良好。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②にふい褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-2 深鉢	口縁部	D区表採	楕円形区画文内にR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③黄褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-3 深鉢	波状口縁部	Dk-02	口縁部には楕円形区画文が施される。縄文はL縦位で、施文は良好である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-4 深鉢	波状口縁部	Dp-12	楕円形区画文内にR L横位が施される。整形は良好である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③にふい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-5 深鉢	口縁部	Dk-11	口縁部に渦巻文の一部が認められる。縄文は不明瞭であるが、R L横位が施される。器内外面とも整形は良好である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③にふい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-6 深鉢	口縁部	D区7溝	口縁部は楕円形区画文が施される。縄文は区画文内に直前段反照L R R横位下位に直前段反照L L縦位が加えられる。内外面とも整形は良好。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②暗赤褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-7 深鉢	波状口縁部	De-03	楕円形区画文内にR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③褐色。 ③加曽利E 3式。
76図-8 深鉢	波状口縁部	Di-02	楕円形区画文内にR L横位が施される。施文はやや粗く不明瞭。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②暗赤灰色。 ③加曽利E 3式。
76図-9 深鉢	波状口縁部	Di-11	楕円形区画文内にR L横位が施される。縄文は施文が粗く、不明瞭。器厚はやや薄手。	①砂粒、輝石粒を含む。 ③褐色。 ③加曽利E 3式。

縄文時代中期後半 (PL70・71)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①粘土②色調③備考
76図-10 深鉢	胴部	Dk-11	口縁部区画内はR L横位。胴部はR L縦位が施される。懸垂する沈線はやや不明瞭。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3式。
76図-11 深鉢	波状口縁部	Dk-11	楕円形区画内にR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3式。
76図-12 深鉢	口縁部	Dw-11	口唇部を欠く。楕円形区画内の縄文は不明瞭であり原形判別できない。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②黒灰色。 ③加曽利 E 3式。
76図-13 深鉢	胴部	Dk-12	R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰黄褐色。 ③加曽利 E 3式。
76図-14 深鉢	胴部	Dk-10	楕円形区画文の一部が認められる。縄文はR L縦位で施文は明瞭。器内外面とも整形は良好。	①細砂、輝石粒を含む。 ②暗赤褐色。 ③加曽利 E 3式。
76図-15 深鉢	胴部	D区	縄文はR L、L Rの2種が認められ、それぞれ横位に施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明赤褐色。 ③加曽利 E 3式。
76図-16 深鉢	胴部	D区口溝	懸垂文は浅く不明瞭。縄文はR L縦位で施文はやや粗い。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②内一帯灰色。外にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3式。
77図-1 深鉢	波状口縁部	Dk-10	口縁波状部は外反ぎみに開く。楕円形区画内にはR L横位が加えられる。器内外面とも整形は良好。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利 E 3式。77図-2と類似個体。
77図-2 深鉢	波状口縁部	Dk-11	口縁波状部は外反ぎみに開く。楕円形の区画文は施文がやや強で、区画内にはR L横位が加えられる。器内外面とも整形は良好。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利 E 3式。77図-1と類似個体。
77図-3 深鉢	口縁部	Dk-10	口縁はやや内湾さみ。沈線下に条線文が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③加曽利 E 3式?
77図-4 深鉢	口縁部	D1-02	口縁は内湾し、口唇部やや肥厚さみ。曲線状の区画文が沈線により施される。縄文は0段3条R Lが用いられ、口縁部は横位、以下縦位となる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰黄褐色。 ③加曽利 E 4式。
77図-5 深鉢	口縁部	24住	口縁下に沈線が一条通り、下位に曲線文が配される。縄文は口縁付近が0段3条R L横位、以下縦位に施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②暗灰色。 ③加曽利 E 4式。
77図-6 深鉢	口縁部	D区8溝	口縁部は強く内湾する。区画文は太く明瞭。縄文はR L R。整形は内外面とも良好である。	①細砂、輝石粒を含む。焼成良好。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3式。
77図-7 深鉢	波状口縁部	Dk-11	縄文はR L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利 E 3式。

縄文時代中期後半 (PL70・71・72)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
77図-8 深鉢	胴部	Dc-02	縄文は直前段多条R L縦位。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E3式。
77図-9 深鉢	胴部	IS溝	縄文はR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E3式。
77図-10 深鉢	胴部	Dk-11	縄文はR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。
77図-11 深鉢	胴部	Db-13	底部近く。縄文はR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E3式。
77図-12 深鉢	胴部	Di-01	懸垂文間に縄文が施される。縄文帯の幅は狭く約1.5cm程度である。縄文はR L縦位が用いられる。器内外面とも整形は良好である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②浅黄褐色。 ③加曽利E3式。
77図-13 深鉢	胴部	Dk-11	縄文はR L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。
77図-14 深鉢	胴部	Di-10	縄文はR L縦位が施される。内面には横位の整形痕が明瞭に残る。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。
77図-15 深鉢	口縁部	D区	口唇上端および内側に沈線が加えられる。口縁無文部下には刷目をもつ隆線が走り、以下L R横位が施される。	①細砂が含まれ、胎土緻密である。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利B1式?
78図-1 深鉢	胴部	Dk-11	条線文が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい赤褐色。 ③加曽利E3式。
78図-2 深鉢	胴部	Dc-02	懸垂文間に条線文が施される。縄文は用いられない。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。
78図-3 深鉢	胴部	Du-10	縄文はL縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E3式。
78図-4 深鉢	胴部	Du-10	縄文は不明瞭であるがR縦位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E3式。
78図-5 深鉢	胴部	D区	縄文はL縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。
78図-6 深鉢	胴部	Dr-09	懸垂文間にL縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E3式。

縄文時代中期後半（PL71・72）

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
78図-7 深鉢	胴部	Dk-11	縄文はやや不明瞭であるが、直前段反照LR R縦位と観察される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②黒灰色。 ③加曽利E 3式。
78図-8 深鉢	胴部	Dk-11	縄文は直前段多条R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-9 深鉢	胴部	Dj-11	縄文は0段4条L R横位が施される。原体とすれば前々段反照LR Rの可能性もある。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-10 深鉢	胴部	Dj-10	縄文は0段3条R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰黄褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-11 深鉢	胴部	Di-03	縄文は前々段反照R L L横位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-12 深鉢	胴部	Dj-04	縄文は反照L R横位が施される。	①砂粒を多く含む他、輝石粒も認められる。 ②にぶい赤褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-13 深鉢	胴部	Dh-10	縄文は反照R R横位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-14 深鉢	胴部	Dj-10	縄文は前々段反照LR R縦位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②明赤褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-15 深鉢	胴部	Di-10	前々段反照LR R縦位を施した後に沈線文が加えられる。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-16 深鉢	胴部	Dj-10	縄文は反照R R縦位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-17 深鉢	胴部	Dn-10	縄文は前々段反照LR R縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明赤褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-18 深鉢	胴部	Dj-11	縄文は前々段反照LR R縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②にぶい褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-19 深鉢	胴部	Dk-09	縄文はL R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②褐色。 ③加曽利E 3式。
78図-20 深鉢	胴部	Dn-10	縄文はL R L縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明褐色。 ③加曽利E 3式。

縄文時代中期後半 (PL72)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	①胎土②色調③備考
78回-21 深鉢	胴部	Di-10	縄文はLRL縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②黒褐色。 ③加曽利E3式。
78回-22 深鉢	胴部	Dj-10	縄文はRLR縦位が施される。施文はやや粗く、筋、条がまばら。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明赤褐色。 ③加曽利E3式。
78回-23 深鉢	胴部	Dk-09	縄文はLLR縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②赤黄色。 ③加曽利E3式。
78回-24 深鉢	胴部	Dj-10	縄文はLLR縦位が施される。器内外面とも整形は良好である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰色。 ③加曽利E3式。
78回-25 深鉢	胴部	Dk-11	縄文はLLR縦位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②黄灰色。 ③加曽利E3式。
78回-26 深鉢	胴部	Dk-11	縄文はRLR縦位である。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②灰黄褐色。 ③加曽利E3式。
78回-27 深鉢	胴部	Dj-10	縄文はRLR縦位が施される。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②棕色。 ③加曽利E3式。
78回-28 深鉢	胴部	Di-01	縄文は0段3条RLR縦位が施される。	①砂粒、輝石粒が含まれる。 ②にぶい黄褐色。 ③加曽利E3式。
78回-29 深鉢	流状口縁部	Di-10	突起状の流状口縁をもつ。縄文はRLを横位、斜位に施す。	①砂粒、輝石粒を含む。 ②明赤褐色。 ③加曽利E3式。
78回-30 深鉢	胴部	Dk-03	隆線文上に筋目が加えられる。隆線文は円形の構成が見られ、筋目は深く明確。	①砂礫が含まれる。 ②にぶい赤褐色。 ③加曽利E4式。

1号住居跡(PL82)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②焼成③色調④その他
105図-1 土器器台 形土器?	最大(11.8) 高さ[2.5]	埋土 小片	上器面布状工具の擦痕が残り平滑である。下部は濡らして丁寧にナデ器面平滑で整形痕を残さない。小片のため不明確。	①砂粒、石英粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
105図-2 紡錘車形 石製品	径 (4.2) 厚み 0.9 孔穴 0.4 重量 5.1g	5住埋土 1/5	平面形はほぼ円形。断面形は段を持つ台形。	①灰玄武岩。 ③暗緑灰色。
105図-3 白玉	径1.5 厚み0.6 孔穴0.35 重量1.3g		3号井戸 完形	①頁岩。 ③灰色。
107図-1 養生 壺	口径(17.0) 頸部(13.9) 高さ[5.1]	No.14 口縁部小片	外面は濡らして先の尖ったヘラ状工具で扇状に下へ上方向へと傾るように擦痕が入る。内面研磨を施す。工具痕残。	①砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③内一明赤褐色。外一黒褐色。ヌス付着?
107図-2 養生 瓶	口径(15.5) 高さ[8.5] 底径 4.7 穿孔 1.8	No. 4 埋土 口縁部1/3欠損	外面斜位のヘラ削り。口縁部に粘土帯を張り付け、指頭痕残す。内面のナデはヘラ状工具で施し下半に鋭い擦痕残す。	①砂粒、石英、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③赤褐色。
107図-3 養生 瓶	口径 20.8 高さ 13.1 底径 4.6 穿孔 1.7	No.20 No.26 埋土 1/2強	外面丁寧な削り。口縁部に粘土帯を張り付け指頭痕残す。内面は機状工具で丁寧にナデる。のち内外面共に研磨。	①石英、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。赤色染彩しているか。
107図-4 小型高杯	口径 13.2 高さ[11.1]	No. 8 No. 9 埋土 脚部少し欠損	杯部と脚部の付け部乾燥のしない内に研磨のため削り状の研ぎ痕残す。脚部内面へく状工具ナデ。脚に4つの穿孔。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③杯部一明褐色。脚部一明褐色。明赤褐色。
107図-5 養生 高杯	口径(10.8) 高さ[4.9]	No.22 埋土 削削り方 杯部のみ1/2	内外面共に塗彩後横方向への丁寧な研磨を施す。	②酸化。 ③赤色。
107図-6 高杯杯部	口径(22.0) 高さ[9.3]	No. 7 埋土 口縁部少し欠損	外面は口縁部に横方向の丁寧な削りを施す。内面は丁寧にナデる。のち内外面共に放射状の研磨を施す。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
107図-7 養生 高杯杯部	口径(25.9) 高さ[6.0]	No. 7 埋土 杯部のみ1/2	内外面に塗彩後体部に放射状、口縁部に横方向に研磨を施す。口縁部に2個一対の扇状突起を4ヶ所に張付け。	①砂礫含む。 ②酸化。 ③赤褐色。
107図-8 養生 高杯杯部	口径(25.4) 高さ[2.3]	No. 7 杯部口縁小片	内外面に塗彩後口縁部に横方向への丁寧な研磨を施す。体部は放射状に施す。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
107図-9 小型器台	口径 6.9 頸部 3.0 高さ 9.3 底径 10.4	No.13 略定形	内外面共にやや乾燥の進んだ状態で研磨を施す。脚内面上半円筒状のヘラナデ。下半機状ナデ。脚部に4つ穿孔。	①石英、石礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
107図-10 小型器台	口径 6.7 頸部 2.7 高さ 7.8 底径 9.9	No. 1 脚部少し欠損	杯部と脚部の付け部乾燥のしない内に研磨のため削り状の研ぎ痕残す。下半斜め方向の細かい研磨。脚部に3つ穿孔。	①石英、砂礫含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
107図-11 小型砂台	口径 6.8 胴部 2.5 高さ 7.1-7.7 底径 8.9	No.25 略定形	内外面共に乾燥の進んだ状態で研削を施す。胴内面丁寧なナデである。胴部に3つ穿孔。	①石英、砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③内-明赤褐色-灰褐色。外-明赤褐色-暗灰黄色。
107図-12 弥生壺	最大[17.0] 高さ[12.6]	埋土 胴部片	外面の胴部横方向のヘラ削り後、ハケ目。肩部に帯状縄文(LRL)施文。	①石英、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③内-灰黄褐色。外-刷灰色。
107図-13 弥生壺	口縁部	埋土	口唇部は平直面をもつ。縄文は口唇部直下から加えられ、LRL横位である。原体は糸状の細いものが用いられ、細線な複筋縄文が施される。	①石英、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③黒褐色。
107図-14 弥生壺	口縁部	埋土	口唇部は丸みをもち、縄文はLRL横位を施す。	①石英粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③黒褐色。
107図-15 弥生壺	口縁部	埋土	有段口縁をもち、縄文が口唇部、口縁部に加えられる。LRL横位である。	①石英粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③黒褐色。
107図-16 弥生壺	口縁部	埋土	口縁部は粘土帯貼付により有段口縁とし、この部分にLRL横位が加えられる。	①石英、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③黒褐色。
107図-17 弥生壺	頸部	埋土	LRL横位が施される。	①石英粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
107図-18 弥生壺	頸部	埋土	LRL横位を施す。原体は糸状のものが用いられ、細線な複筋縄文となる。	①石英粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。
107図-19 弥生壺	頸部	埋土	LRL横位が施される。	①石英粒、白色鉱物粒子を含む。 ②酸化。 ③褐色。
107図-20 弥生壺	頸部	埋土	LRL横位が施される。縄文は細線な複筋縄文となる。	①石英粒、白色鉱物粒子を含む。 ②酸化。 ③黒褐色。
107図-21 弥生壺	胴部	埋土	LRL横位が施される。	①石英粒、白色鉱物粒子を含む。 ②酸化。 ③暗褐色。

2号住居跡 (PL83)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
109図-1 土師杯	口径[13.6] 高さ[3.1]	掘り方 1/4	外底の削り強く、砂粒の動き残す。口縁丁寧なナデ、下半は無調整。内面は同心円状のナデ残す。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③鈍い褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
109図-2 土師杯	口径(13.8) 高さ 2.9	埋土 1/5	外底は削り調整。不規則な削り痕を残す。内底は中央部でやや凹凸し、口縁部辺は濡らしてナデを施す。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
109図-3 土師杯	口径(13.0) 高さ[2.8]	埋土 小片	外底の削り幅細く、砂粒の流れ残す。口縁丁寧なナデ。下半は無調整内面丁寧なナデだがやや凹凸し平滑さ欠く。	①石英粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
109図-4 土師杯	口径(14.0) 高さ[2.9]	No. 1 1/4割	外底の削り不鮮明で、砂粒の動き僅かに残す。内面の口縁部強いナデ、内底凹凸で平滑さ欠く。	①石英粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③黄褐色。 ④全体に摩滅している。
109図-5	長さ55.4 幅20.8 厚み17.3 重量28,500g		カマド軸石	①粗粒安山岩。
109図-6	長さ20.1 幅7.6 厚み7.0 重量1,450g		棒状礎	①粗粒安山岩。

3号住居跡 (PL83)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
110図-1 土師杯	口径(13.0) 高さ 3.5	埋土 口縁部4/5欠損	外底の削りやや強く丁寧。砂粒の流れ残す。内面のナデは平滑に仕上げている。	①細礫、石英粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
110図-2 葉志杯	口径 13.5-14.0 高さ 2.9 底径 7.1	埋土 略完形	右回転ロクロー回糸無調整。外面ロクロ痕僅かに残す。内底中心の凹凸。平面形は楕円形に重む。	①砂粒、石英粒、白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②中性焰。 ③にぶい褐色。底部に黒斑有り。
110図-3 葉志杯	口径(13.6) 高さ 3.8 底径(8.5)	No. 5 埋土 1/3	右回転ロクロー回糸無調整。体部内外面に削り不明瞭なロクロ痕残す。口縁部強いナデ。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。口縁部に黒斑有。重ね焼き残す。
110図-4 葉志壺	口径(22.0) 高さ[3.0]	No. 6 口縁部小片	口縁部は折り返し口縁で強い横ナデを施し後を残す。口唇部に自然輪付着。小片で重みがひどく径は明確でない。	①小石、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。断面セピア色。
110図-5 土師壺	胴部(22.0) 高さ[14.5]	No. 1 埋土 胴部小片	外面は細かく削りで、砂粒の流れを残す。内面好部は削りに近いやや強いナデ。胴下部器面に凹凸有り。接合痕残す。	①砂粒、石英粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
110図-6 土師壺	胴部(24.0) 高さ[11.5]	4溝 胴部小片	胴部外面削り痕残す。内面ハラ状工具のナデで平滑さ欠く。胴下半に接合痕残す。	①砂粒、石英粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④二次加熱受ける。
110図-7 土師壺	高さ[10.5] 底径 7.4	埋土 4溝 胴部小片	外面は細かく丁寧な削りで、底部辺は強い削り痕残す。内底は削りに近い強いナデ。胴部辺に接合痕残す。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。底部に黒斑有り。 ④二次加熱受ける。
110図-8 鉄 器	(7.0)×0.55×0.4	埋土 重量4.0g	刀子のナゴゴ？先端部分欠損。	
110図-9	長さ(7.6) 幅(13.6) 厚み(2.5) 重量500g		磨石	①粗粒安山岩。

4号住居跡 (PL83・84)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	産・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
111Ⅷ-1 土師杯	口径 12.0 高さ 3.5 船底 9.3	No.35 口縁部1/3欠損	外底は強い削り。外面に指頭痕の窪み有り。口縁工具のナデ平滑さ欠く。下半無調整。内底同心円状のナデが残る。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。口縁部に黒面有り。
111Ⅷ-2 土師杯	口径 12.3 高さ 3.2-3.5 船底 9.0	No.30 略定形	111Ⅷ-1と同巧。	①111Ⅷ-1と同じ。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。 ④少しいびつである。口縁端部スス状の付着物。
111Ⅷ-3 土師杯	口径 12.6 高さ 3.5 船底 9.0	No.2 No.28 埋土 約1/2残存	外底の削りはやや強。口縁部幅広くナデ。下半は無調整。内底のナデ中心部平滑さ欠く。口縁部平面は底状に歪む。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④口縁部少しいびつである。
111Ⅷ-4 土師杯	口径 12.0 高さ 3.6 船底 9.0	No.17 略定形	外底の削り細かく丁寧。口縁へツ状工具のナデ。内面同心円状の強いナデ。中心部平滑さ欠く。底部に接合痕残す。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③赤褐色。にぶい褐色のアナ状。 ④口縁内端部摩滅する。
111Ⅷ-5 土師杯	口径 18.7 高さ 3.6 船底 8.8	No.22 完形	外底の削りは乾燥の進んだ状態で施し平滑さ欠く。内面は同心円状のナデで工具痕残り、中心部は凹凸し肥厚。	①褐色、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。視調。 ③底部辺褐色。 ④底部辺スス状付着。
111Ⅷ-6 土師杯	口径 12.5 高さ 3.7 船底 9.2	No.34 1/3欠損	外底は丁寧な削り。砂粒の流れ残る。口縁のナデ丁寧。内面同心円状のナデ。体一底部僅かに接合痕有り。平面楕円形。	①砂粒少し、石英粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
111Ⅷ-7 土師杯	口径 12.6 高さ 3.5 船底 9.2	No.24 略定形	外底の削り強く、砂粒の流れ残す。口縁部幅広くナデ。下半は指頭痕で平滑さ欠く。内面ナデ、内底平滑さ欠く。	①111Ⅷ-3と同じ。 ②酸化。 ③外面底部に黒面有り。
111Ⅷ-8 土師杯	口径 12.5 高さ 3.1 船底 9.6	カマド 1/3欠損	外底やや強く幅広い削り。口縁工具ナデ平滑さ欠く。下半無調整。内底底部に工具のナデ痕有り。中心部器面薄い。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④器面にケール状の不明瞭な付着。
112Ⅷ-1 土師杯	口径 13.5 高さ 4.3 船底 9.0	No.25 埋土 口縁部1/3欠損	外底丁寧な削り。砂粒の流れ残す。口縁部磨らしてナデ。内面丁寧なナデで底部に放射状の細目の暗文を施す。	①砂粒、石英粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。底部辺に少し薄い黒面有り。
112Ⅷ-2 土師杯	口径(14.0) 高さ 4.6 船底(10.4)	カマド 埋土 1/5	外底の削りは幅広く長い。外面の削りは細かく鋭い。内面は同心円状のナデで平滑に仕上げている。	①砂粒、石英粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
112Ⅷ-3 土師杯	口径(12.3) 高さ 2.8	No.31 埋土 1/3	外底の削り強く、砂粒の流れ残す。口縁は工具ナデ。内面同心円状の丁寧なナデで平滑。平面は楕円状に歪む。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
112Ⅷ-4 土師杯	口径(12.7) 高さ 3.5 船底(8.0)	埋土 小片	外底削り。口縁下半は、指頭状の圧痕か？器面が凹凸している。内面ナデは濡らして施し、工具痕残す。	①石英粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
112図-5 土師杯	高さ[1.8]	埋土 底部小片	外底の削りやや強く、砂粒の流れ残る。 内面ナデ丁家で平滑である。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④底部に墨書が有るが小片のため不明確。
112図-6 土師杯	口径(12.0) 高さ[2.5]	埋土 口縁部小片	外面削り。口縁部ナデ。内面ナデ調整。 径は小破片のため不明確である。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④体部に墨書有り。
112図-7 土師杯		埋土 底部のみ小片	外底削りやや強である。内面ナデ平滑さ欠く。	①白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④底部外面に墨書有り。
112図-8 土師甕	口径(20.6) 頸部(19.0) 最大(22.0) 高さ[19.0]	カマド 埋土 口縁-胴部小片	輪積みか。外面の削り細く丁寧。砂粒の流れ残る。内面ナデ。胴部に接合痕残す。口径小片のため不明確。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④二次加熱受ける。
112図-9 土師甕	口径(20.0) 頸部(17.0) 最大(20.0) 高さ[18.0]	カマド 埋土 口縁-胴部小片	輪積みか。外面の削りは鋭く、砂粒の動き多い。ロー頸部強いナデ。内面丁家なナデ。胴下部に明瞭な接合痕有り。	①砂粒、小石、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。黒斑有り。 ④二次加熱受ける。
112図-10 土師甕	口径(21.0) 頸部(18.6) 高さ[8.3]	No.16 埋土 口縁-胴部小片	外面の削りは鋭く、砂粒の流れ残る。口縁部近ナデ。内面へつ杖工具のナデ。小破片のため径、粗さ不明確。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③赤褐色。にぶい赤褐色。
112図-11 土師甕	口径(22.0) 高さ[7.7]	No.15 No.20 埋土 口縁部小片	輪積みか。外面の削りはやや鋭く、口縁部強く丁寧なナデ。内面口縁-胴部ナデ平滑である。	①砂粒、石英粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。
112図-12 土師甕	口径(18.0) 頸部(15.4) 高さ[5.7]	No.23 小片	外面の削り鋭く、砂粒の流れ残る。口縁-頸部強いナデ。内面の胴部へつ杖工具のナデと、頸部痕状のナデで平滑さ欠く。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
112図-13 土師鉢	口径 21.0 高さ 11.0 底径 12.4	No.12 No.13 カマド 実形	外底面の器面厚減のための削り不鮮明。口縁部強いナデ。内面底部近丁寧なナデ。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④口縁部に灰?スス付着。外底割落進む。
112図-14 須恵鉢?	高さ[3.4] 胴-高台付部 径 (9.4)	埋土 底部小片	右回転ロクロ→回転→ロクロ使用高台貼付け。体部の横ナデ間隔狭く、砂粒の移動少ない。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。 ④高台部欠損。
112図-15 須恵鉢	高さ[2.4] 底径 3.2	埋土 底部のみ	回転ロクロ→回転へつ切り。踵で不規則な削り調整。平滑さ欠く。内底面に回転の凹凸有り。	①砂粒、小石粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
112図-16 須恵 高台付鉢	高さ[2.6] 底径 11.4	No.32 底部のみ	右回転ロクロ→回転→ロクロ使用高台取付け後丁寧なナデ。内面丁寧なナデ調整。内底中心部凹有り。	①砂粒、小石粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。一部黒色。 ④破損後に二次加熱受ける。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②地成③色調④その他
112回-17 須志壺	高さ[8.5]	埋土 破片	外面平行印さめ痕。内面押圧痕有り。 小破片のため角成不明確。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
112回-18 平瓦	巾(14.0) 長さ(24.8) 厚み 1.8	No. 7 カマド 破片	表布目痕。構状工具の擦痕残し、不規則な指頭ナデ施す。裏は傾り痕残し平滑さ欠く。周縁部面取の傾りを施す。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ③灰黄色。
112回-19 平瓦	巾 28.4 長さ(28.2) 厚み 1.4~2.5	No. 2 No. 3 カマド	表布目痕。構状工具の擦痕有り。裏正格子押圧痕、構状工具の擦痕残る。周縁部に面取の不規則な傾りを施す。	③黄灰色。

5号住居跡(PL8)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②地成③色調④その他
114回-1 土師杯	口径 10.5 高さ 2.8 底径 7.8	No. 9 完形	外底の傾り処理の進んだ状態で施す。 口縁のナデ工具痕残し、下半に指頭流る。 内底のナデ縁で凹凸し、平滑さ欠く。	①砂礫、雲母、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。体部-口縁かけて黒斑有り。 ④灯芯痕有り。
114回-2 土師杯		埋土 底部小片	外底削りやや強く、器面に小さな凹凸有り。内底ナデ丁寧である。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。 ④外面底部部小片で不明確。
114回-3 須志 高台付樽	口径(14.8) 高さ 5.7 底径 7.0	No. 13 No. 14 口縁部3/4欠損	右回転ロクロ→回赤→ロクロ使用高台 取付け。外面に回転時の布状痕跡に 残る。内底僅かに凹凸有り。	①砂礫、砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②いぶし。 ③灰黄褐色。黒色。
114回-4 須志 高台付樽	口径 15.6 高さ 5.2 底径 7.3	No. 7 口縁部2/3欠損	右回転ロクロ→回赤→ロクロ使用高台 取付け。取付け時の粘土バリ付着。内 底回転時の凹凸で平滑さ欠く。	①砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
114回-5 須志 高台付樽	口径 15.6 高さ 5.8 底径 7.4	No. 16 埋土 1/2強	右回転ロクロ→回赤→ロクロ使用高台 取り付け。外底は取り付け時のナデ で凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②中性焙。 ③にぶい褐色。
114回-6 須志 高台付樽	口径(15.0) 高さ 5.3 底径 7.6	埋土 口-底部小片	右回転ロクロ→回赤→ロクロ使用高台 取付け。ロクロ間隔狭く、砂粒の流れ 少ない。内底凹凸し平滑さ欠く。	①砂礫、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
114回-7 須志杯	口径(13.6) 高さ 3.7 底径 6.6	オマド埋土 オマド振り方 1/3	右回転ロクロ→回赤無調整。口縁部僅 ナデ強く端部外反する。内底のナゲ丁 寒で平滑である。	①砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰黄色。
114回-8 須志杯	口径 14.0 高さ 4.0 底径(6.7)	No. 31 オマド埋土 1/2弱	右回転ロクロ→回赤無調整。切り難し 時外底粘土付着。内外面共にロクロ痕 やや強く平滑さ欠く。	①砂礫、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。
114回-9 須志輪	高さ[3.7] 底径 9.0	No. 17 埋土 底部小片	右回転ロクロ→回赤無調整。切り難し 時外底に粘土付着。外面ロクロ痕残り 平滑さ欠く。内底凹凸僅かに残る。	①砂礫、砂粒、白色鉱物粒子多量に含む。 ②還元。 ③灰色。内面灰褐色。
114回-10 須志杯 (皿)	口径(13.0) 高さ 2.1 底径(6.6)	埋土 口-底部小片	右回転ロクロ→回赤→ロクロ使用高台 取り付け。内底回転時の凹凸を残し平 滑さ欠く。	①細砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰黄色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
114図-11 土師壺	口径 20.4 頸部 18.2 最大(22.2) 高さ[22.2]	カマド 口縁部1/3	外面削り細かく、丁寧で器面平滑である。口縁丁寧なナデ、頸部のみやや肉厚。内面に接合痕残す。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい棕色。にぶい赤褐色。黒斑有り。
114図-12 土師壺	口径(20.4) 頸部(18.8) 高さ[6.3]	埋土 口縁部小片	外面削りは乾燥の進んだ状態で施す。頸部外面に指頭痕状の跡み有り。口縁上、下に工具状のナデ痕明瞭に残す。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③棕色。
114図-13 土師壺	口径(22.0) 頸部(20.2) 高さ[5.5]	No.11 口縁部小片	外面削りに削り時の工具痕残る。口縁→頸部上、下に工具状のナデ痕明瞭に残る。小片のため径は明確でない。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい棕色。
114図-14 土師壺	口径(21.0) 頸部(18.5) 高さ[6.3]	No.36 小片	外面削り丁寧。口縁上半丁寧なナデ、頸部逆に接合痕残る。内面頸部指頭状の痕僅かに残し、平滑さ欠く。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③棕色。
114図-15 土師壺	口径(18.0) 頸部(16.6) 高さ[4.4]	No.33 口縁部小片	口縁上半強いナデ。接合痕僅かに残す。内面ナデ丁寧で平滑である。	①白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい赤褐色。 ④外面にケール状の不規則な物付着。
114図-16 須恵大甕	口径(42.4) 高さ[9.5]	No. 8 埋土 口縁部小片	口縁部は折り返し口縁で強い傾ナデを施し段を残す。内外面共にナデが強く平滑さ欠く。	①細砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
114図-17 須恵 高台付壺	高さ[6.4] 底部(14.0)	No.18 埋土 1/5	回転ロクロ→回転ヘラ切り→回転使用高台取り付け。内外自然輪付着。ナデ強く砂粒移動。高台部棒状痕で凹凸著しい。	①細砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③内一灰色。外一褐色。 ④断面セピア色混ざる。
114図-18 灰輪陶器 碗	口径(17.0) 高さ[3.7]	カマド削り方 埋土 口縁部小片	右回転ロクロ→外面ロクロ痕やや強く布状の拭くような磨痕が残る。内面やや厚く丁寧なナデ。輪は潰掛けか。	①密である。 ②還元。 ③灰白色。輪は灰黄色。
114図-19 灰輪陶器 碗	口径(18.0) 高さ[3.6]	埋土 口縁部小片	114図-18と同く。口縁端部やや外反が強い。	①114図-18と同じ。 ② * ③ *
114図-20 灰輪土器 壺	口径(11.0) 高さ[5.4]	埋土 口縁部小片	右回転ロクロ。口縁端部尖る。ロクロ痕細かい。残存部分全体に輪がかかる。口縁部内面に自然輪厚くかかる。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。輪は透明。自然輪部分は緑色が濃い。
114図-21 須恵壺	高さ[4.3] 底径(10.8)	埋土 底部小片	右回転ロクロ→回転ヘラ削りナデ。内外面共に工具状痕痕残る。内面平滑さ欠く。外面自然輪付着。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③オリーブ灰色。 ④外面自然輪付着。
114図-22 瓦		No.19 小片		③灰黄褐色。にぶい黄棕色。
114図-23 羽口		埋土 小片	削り痕僅かに残る。？炭がかなり、使用した感有り。小片のため径、長さ不明瞭。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ③棕色。褐灰色。
114図-24	長さ13.0 幅3.95 厚み3.8 重量350g		棒状破	①粗粒安山岩。

6号住居跡 (PL85・86)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②地成③色調④その他
1158回-1 土師杯	口径 13.2 高さ 3.5	No. 2 カマド 1/3	外底削り細かく丁家。口縁下半無調整。 内面同心円状ナデ。中央部僅かに凹凸 残り平滑さ欠く。	①砂粒、雲母、白色鉱物粒子含む。 ②難化。 ③褐色。
1158回-2 土師杯	口径(15.8) 高さ[3.5]	埋土 1/3弱	外底削り丁家。器面摩滅のためやや不明。 口縁内外面共に丁寧なナデ、内 底凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、砂難含む。 ②難化。 ③褐色。
1158回-3 土師甕	口径(25.5) 頸部(21.0) 高さ[23.0]	埋土 口縁1/8	外面削りはやや深い。口縁丁寧なナデ。 頸部のみ内厚である。内面ナデ丁家。 器面摩滅している。	①白色鉱物粒、砂粒多量、褐色鉱物粒子含む。 ②難化。 ③明褐色。 ④二次加熱受ける。

7号住居跡 (PL86)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②地成③色調④その他
117回-1 須恵杯	口径 13.1 高さ 3.8 底径 6.2	No. 4 口縁部少し欠損	内外面に墨書有り、又底部一底面にか けて黒線有り。	②還元。
117回-2 土師甕	口径(16.6) 高さ[7.9]	No. 13 カマド埋土 口縁部片	輪積みか。外面の削り細かく丁家。口 縁のナデやや僅で平滑さ欠く。内面ナ デ丁家。接合痕残す。	①砂粒、褐色粘土粒。 ②難化。 ③褐色。
117回-3 土師甕	高さ[6.8] 底径 3.8	No. 2 底部片	輪積みか。外面削りは乾燥の進んだ状 態で鋭く削る。内底にナデ工具による 強いナデ。接合痕残る。	①砂粒。 ②難化。 ③にぶい褐色。
117回-4 須恵甕	高さ[13.8] 底径(15.0)	No. 1 頸部少破片		①小石、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
117回-5	長さ8.9 幅12.4 厚み2.9 重量450g		磁石	①粗粒安山岩。

8号住居跡 (PL86)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②地成③色調④その他
118回-1 紡錘車	径5.4 厚み1.8 孔穴1.0 重量68.4g		No. 8 完形	①砥石。
118回-2	長さ(22.4) 幅17.0 厚み11.3 重量7,300g		カマド基石	①粗粒安山岩。
118回-3	長さ(10.8) 幅6.4 厚み5.4 重量550g		磁石	①粗粒安山岩。
119回-1 須恵杯	口径 12.4 高さ 3.8 底径 6.2	No. 14 完形	右回転ロクロ→回糸無調整。ロクロ直 細かく、内面工具ナデ接痕残す。内底 凹凸で平滑さ欠く。	①小石、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰黄色。
119回-2 須恵 高台付甕	口径(14.6) 高さ 5.1 底径 6.1	No. 13 カマド埋土 1/3	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台 取付け。布杖工具で水引き接痕残す。 内底回転痕を残し平滑さ欠く。	①小石、砂粒。 ②還元。 ③灰黄褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
11904-3 須忠 高台付碗	口径 15.5 高さ 4.8 底径 6.6	No.45 掘り方 口縁一部欠損	右回転クローロー回糸→ロクロ使用高台 取付。口縁部丁寧なナデ。内面ロクロ 痕残さず平滑。内底僅かに凹凸有り。	①砂礫、砂粒。 ②還元。 ③灰白色。
11904-4 須忠碗 (土師質)	口径(15.3) 高さ 4.8 底径 5.2	No.26 No.28 埋土	右回転クローロー回糸無調整。外面ロク ロ痕強く残る。口縁部幅広く水引調整。 内面ロクロ痕残さず平滑に仕上げている。	①砂礫、砂粒、雲母。 ②中性胎。 ③にぶい黄褐色。 ④外底に墨書有り。(南)
11904-5 須忠 高台付碗	口径 14.6 高さ 5.9 底径 7.4	No.24 カマド左袖裏 カマド埋土 1/2	右回転クローロー回糸→ロクロ使用高台 取付け。外面水引で再調整しロクロ痕 をナデ消す。内面ロクロ痕残す。	①小石、砂粒、雲母。 ②中性胎。 ③灰黄褐色。底部に黒線有り。
11904-6 須忠 高台付碗	高さ[3.2] 底径 6.6	No. 4 底部のみ	右回転クローロー回糸→ロクロ使用高台 取付け。外面の平滑さ欠く。内底回 転痕残り平滑でない。重焼き痕有り。	①砂礫。 ②還元。 ③灰黄褐色。
11904-7 土師杯	口径(12.9) 高さ[4.6]	No.16 小片	外底の削り鋭く、砂粒の動き鮮明に残 る。口縁部ナゲ丁寧。内面同心円状の ナゲ丁寧で平滑である。暗文僅かに残 る。	①小石、雲母。 ②還元。 ③褐色。
11904-8 土師杯	口径(11.8) 高さ[3.7]	No.19 小片	口縁部ナゲ工具の擦痕明瞭に残る。下 半の無調整明瞭の幅広く、指痕痕残す。 内面同心円状のナゲで丁寧である。	①雲母、砂礫、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。
11904-9 須忠碗	口径(11.5) 高さ[4.9]	埋土 口縁部小片	右回転クローロー。巻状工具で水引き擦痕 残す。内面ナゲ痕僅かに残す。	①雲母、砂粒含む。 ②還元。 ③にぶい黄褐色。 ④墨書、小片のための不鮮明。
11904-10 須忠 高台付杯	口径 14.1 高さ 2.9 底径 6.7	No.35 口縁部一部欠損	右回転クローロー回糸→ロクロ使用高台 取付け。内外面共に丁寧なナゲ平滑で ある。内底回転時の凹凸で平滑さ欠く。	①小石、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい黄褐色。
11904-11 土師合付 小型壺	高さ[9.1] 底径 6.3	No.29 No.32 埋土 胴-底部	外底削り細かく丁寧。内底ナゲ縁で凹 凸著しい。接合明瞭に残る。胴部内 面強い布状の擦痕残る。胴部歪み。	①砂粒、雲母、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③明赤褐色。
11904-12 土師甕	口径(18.9) 高さ[16.7]	カマド左袖裏 カマド埋土 口縁-胴部片	外面削りは乾燥の進んだ状態です。 口縁下に工具状のナゲ痕残す。内面 ナゲやや平滑さ欠く。接合痕僅か残す。	①砂粒。 ②還元。 ③褐色。
11904-13 土師甕	口径(22.0) 頸部(20.0) 高さ[5.5]	No.12 埋土 口縁部小片	外面削りやや鋭く、砂粒の配れ多い。 頸部上半に工具状のナゲ時の沈線残る。 中間ナゲ密く接合痕残る。内面工具ナ ゲ。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。
11904-14 土師壺	口径(19.0) 頸部(17.4) 高さ[9.3]	No.17 埋土 11住No. 2 口縁部小片	外面削り幅広く。頸部中間ナゲ密く削り 時の工具擦痕残る。内面口頸部巻状工 具の擦痕残り、平滑に仕上げている。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい褐色。褐灰色。 ④小片のため僅は不明確。
11904-15 土師小型 壺	口径(11.2) 頸部(10.0) 高さ[7.3]	No.40 埋土 口縁部小片	外面削りやや縁で、器面平滑さ欠く。 口縁-頸部部らしてナゲを施す。内面 工具によるナゲ。指痕状擦痕残る。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。にぶい褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②地成③色調④その他
119回-16 土師 小型壺	口径(12.1) 高さ[5.5]	No.18 埋土 口縁部小片	外面削りやや鋭い。頸部に削り時の工具痕が残る。内面丁寧なナデで平滑である。接合痕が残る。	①雲母、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③棕色。外面黒炭有り？ ④二次加熱を受ける。

9号住居跡(PL87)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②地成③色調④その他
120回-1	長さ18.1 幅6.5 厚み2.9 重量740g		排状礫	①粗粒安山岩。
120回-2	長さ39.0 幅19.4 厚み15.4 重量2,850g		磨石	①粗粒安山岩。
121回-1 須恵杯	口径 13.6 高さ 3.8 底径 6.4	No.32 掘り方 1/3	右回転ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕細かくやや強い褐色状を呈す。内底に回転痕残り平滑さ欠く。	①白色、褐色鉱物粒子、小石含む。 ②還元。 ③にぶい黄橙～灰色。
121回-2 須恵杯	口径 11.7 高さ 3.6～3.8 底径 5.4	No.21 埋土 1/2残存	右回転ロクロ→回糸無調整。ロクロ強く褐色状を呈す。外底上に糸切時の切痕有り。内面ロクロ痕弱く平滑。	①砂礫(1cmの石含む)、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
121回-3 須恵 高台付碗	口径 14.4 高さ 6.6～6.7 底径 8.2	No.26 埋土 1/2強	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。内面ロクロ痕残さず平滑に仕上げ。接合痕残す。	①褐色、白色鉱物粒子含む。砂礫。 ②還元。 ③灰黄色。
121回-4 須恵 高台付碗	口径 15.9 高さ 7.1 底径 8.6	No.9 1/2	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。内外面共にロクロ痕細かく明確に残す。内底回転痕で平滑さ欠く。	①白色、褐色鉱物粒子含む。砂礫。 ②還元。 ③灰色～にぶい褐色(底部)。
121回-5 須恵 高台付碗	口径 14.6～14.8 高さ 6.5～6.6 底径 7.8	No.8 埋土 1/2強	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。外面ロクロ痕僅かに残す。内面平滑に仕上げ。平面楕円形に歪む。	①褐色鉱物粒子、砂礫含む。 ②還元。 ③灰黄色。
121回-6 土師杯	口径 12.0 高さ 3.3 底径 8.0	No.38 定形	外底は乾燥の進んだ状態で壁に鋭く削り平滑さ欠く。口縁下半無調整で指頭痕が深る。内面同心円状のナデで平滑さ欠く。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③棕色。 ④内底に黒炭有り。
121回-7 土師杯	口径 12.6 高さ 3.3～3.5 底径 7.9	埋土 1/2強	外底の削り丁寧で平滑である。口縁丁寧なナデ。内面同心状ナデ丁寧。内底凹凸し平滑さ欠く。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。黒炭有り。
121回-8 土師杯	口径(6.3) 高さ 3.8 底径 4.7	No.34 埋土 小片	外底の削りは乾燥の進んだ状態で施し、口縁のナデ平滑さ欠く。下半無調整。内底中心部肥厚し平滑でない。	①小石、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④内外底面に黒炭(P)。
121回-9 土師杯	高さ[2.0] 底径 8.2	埋土 底部	外底の削りやや強く、砂粒動き多い。内底ナデ時の擦痕残りして凹凸し平滑さ欠く。	①砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③棕色。 ④底部内外面に黒炭有り(八)？
121回-10 土師杯	底面幅4.4～6.1	埋土 底部のみ	外面乾燥した状態で削り、砂粒の動き残す。内面凹凸し平滑さ欠く。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④スス付着。内外面黒炭有り(八)？

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・成形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
121図-11 土師杯	口径 12.3 高さ 3.3 底径 8.6	No.48 掘り方 掘り方埋土 1/3	外底の削り鋭く、砂粒の動き多い。口縁ナデ強く下半は無調整。内面濡らしてナデ工具痕残す。平面形は歪む。	①石英、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。スス付着。
121図-12 土師杯	口径(6.0) 高さ 3.8 底径 4.7	No.14 埋土 小片	外面の削りが乾燥の進んだ状態で出土。口縁下半無調整。内面丁寧なナデで平滑である。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
121図-13 土師杯	口径 11.8-12.0 高さ 3.6 底径 8.0-8.2	No.10 カマド埋土 完形	外底の削りやや強く、器面凹凸有り。口縁下半無調整。口縁-内面丁寧なナデ、春日状の擦痕残る。口縁形状に歪む。	①雲母、小石、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。外面スス付着。
121図-14 土師杯	口径 13.5 高さ 4.4 底径 9.0	No. 5 略完形	外底の削り鋭く、砂粒の流れ残る。内面ナデは凹凸し平滑さ欠く。体部全体に放射状、中心部に十文字状に研削。	①黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④略文。
121図-15 須恵蓋？ 皿？	口径 15.6 高さ 2.6 底径 7.6	No. 7 埋土 1/2強	右回転ロクロ回糸。リング状つまみ割落か？内外面丁寧にナデ平滑。内面天井部回転痕残す。外底棒状圧痕有り。	①砂礫、白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。 ④状色。
121図-16 蓋小皿	口径 16.0 高さ 2.7	No. 4 No. 6 埋土 1/2強	右回転ロクロ回糸。リング状つまみ割落か？口縁部丁寧なナデ。内面天井部回転痕残り平滑さ欠く。	①砂礫、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③外一灰オリーブ色。内一暗灰黄色。 ④重焼き痕残す？
121図-17 蓋	口径 17.5 高さ[3.3] つまみ3.1	No.24 1/2強	右回転ロクロ回糸使用つまみ取付け。内外面僅かにロクロ痕残す。内面天井部回転痕残す。	①砂礫、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②中性胎。 ③にぶい赤褐色。灰黄褐色。重焼き痕残す？
121図-18 土師 小型壺	口径 13.2-13.6 高さ 13.9-14.3 底径 4.4-5.0	No.10,16,18 埋土 口縁-底部1/2	輪積みか。外面削り強く細かい。肩-頸部のナデ強く丁寧。内面のナデ丁寧に平滑に仕上げる。頸部に接合痕残す。	①砂粒、小石。 ②還元。 ③にぶい赤褐色-黒褐色。
121図-19 土師壺	口径 21.0 頸部 18.7 胴部 23.5 高さ 29.6 底径 3.2	No. 4, 15, 20, 45 カマド 埋土 略完形	輪積みか。外面削りやや丁寧で平滑に仕上げる。内面工具ナデの擦痕僅かに残す。底部辺に板状工具の強い圧痕有り。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
121図-20 土師壺	口径 20.4 頸部 18.0 胴部 22.5 高さ 28.1-28.7 底径 5.1	カマドNo. 3、4、 23 カマド埋土 埋土 略完形	輪積みか。外面の削りが乾燥の進んだ状態で出土。口頸部のナデ強く凹凸し平滑さ欠く。内面ナデ丁寧。口縁歪む。	①雲母、小石、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。外面炭化有機物。スス付着。
121図-21 土師壺	口径[14.0] 高さ[7.5]	埋土 口縁部小片	外面の削り強く、砂粒の流れ残る。口縁-頸部ナデ丁寧である。内面板状工具痕残す。	①褐色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。
121図-22 土師 高台付壺	高さ[7.8] 底径 9.1	No.27 埋土 胴-頸部	外面の削り鋭く器面に凹凸有り。肩は内外面共、工具によるナデの擦痕残す。内底板状の工具痕有り。	①金雲母、砂粒。 ②酸化。 ③明褐色。外面スス付着。

10号住居跡 (PL88)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
122図-1 土師杯	口径 15.8 高さ 3.2 底径(10.4)	No. 2 1/2弱	外底の削り強く、砂粒の流れ残る。口縁部丁寧なナデ。内面丁寧なナデで平滑に仕上げる。	①雲母、砂礫、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明褐色。
122図-2 土師杯	口径(14.4) 高さ[2.4]	埋土 1/4	外底の削り強く、砂粒の流れ残る。口縁下半部らしてナデ調整。内底僅かに凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、雲母。 ②酸化。 ③褐色。
122図-3 須恵蓋	口径 20.3-21.3 高さ[4.1]	埋土 つまみ部欠損	左回転ロクローロクロ使用の天井部回転へう削。ロクロ痕は全体で細かく渦巻状を呈す。平面形は楕円形に歪む。	①砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰-灰白色。
122図-4 土師杯 (皿)	口径 14.3 高さ 3.0 底径(8.6)	カマド埋土 1/3	外底の削りやや強く、砂粒の流れ残る。口縁部のナデ強く平滑である。内器面摩滅し荒れている。	①黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。
122図-5 土師甕	口径 23.6-24.2 頸部 19.0 胴部 20.6 高さ 31.8 底径 4.4	No. 1 埋土 略定形	輪積みか。外面の削りは長く、頸部のみ肉厚で粘土を削り落としている。口縁内外面共に強いナデ。内面板状擦痕有り。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
122図-6 土師甕	口径(21.0) 頸部 17.0 最大 20.2 高さ 31.7 底径(5.6)	カマド埋土 埋土 1/2	輪積みか。外面の削りは長く長い。頸部のナデ弱く工具痕残す。口縁部ナデ丁寧。内面ナデ丁寧。内底器面摩滅している。	①砂粒、石英、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③に白い褐色。
122図-7 土師甕	口径 22.0 頸部 18.3 胴部 20.6 高さ 29.6 底径 6.3	埋土 略定形	輪積みか。外面削りはやや鋭い。口縁-頸部に帯頭痕高り平滑さ欠く。内面のナデ丁寧である。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
122図-8 土師甕	口径 24.0 頸部 19.0 胴部 21.6 高さ 30.4 底径 5.1	カマド 埋土 3/5位	輪積みか。外面の削りは上半で長く、下半は細かく丁寧。頸部のみ肉厚で粘土を削り落している?内面ナデ丁寧。	①雲母、砂粒含む。 ②酸化。 ③褐色。
123図-1 土師甕	口径 23.0 頸部 17.4 胴部 20.8 高さ[21.7]	カマド 埋土 口縁-胴部1/2	外面の削り鋭い。削りは細かく砂粒の移動多い。頸部に削り時の擦痕残る。内面のナデ丁寧。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。外面有機物付着。
123図-2 土師甕	口径 24.0 頸部 21.0 最大 20.8 高さ[26.5]	カマド 埋土 2/5位	輪積みか。外面の削り鋭く、砂粒の移動多い。頸部に削り時の擦痕残る。内面ナデ丁寧である。擦痕残る。	②酸化。 ③に白い褐色。
123図-3 須恵甕	高さ[9.6]	No. 4 小破片	外面平行叩き目痕。内面同心円文明瞭に残す。小片のため径は不明瞭。	①砂礫含む。 ②還元。 ③内-黄灰色。外-灰黄色。
123図-4 須恵甕	高さ[12.1]	No. 5 小破片	外面平行叩き目痕。内面同心円文残す。小片のため径は不明瞭。	①砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。

11号住居跡 (PL88・89)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
125図-1 土師杯	口径 13.9 高さ 3.4	埋土 1/2	外底の削り強い。口縁下半調整だが不明瞭なナデを施す。内面ナデ丁寧。	①砂粒。 ②酸化。 ③にぶい橙色。
125図-2 須忠 高台付輪	口径 13.7 高さ 4.6 底径 9.0	No.5 埋土 カマド埋土 1/2	右回転ロクロ→回転ヘラ切り→ロクロ使用高台取付け。内外面共にロクロ痕残さず平滑。器面割落、小さな凹凸有り。	①砂粒、砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②中性質。 ③灰褐色。
125図-3 須忠蓋	口径 16.0 高さ 2.6 つまみ3.6	埋土 8住埋土 1/5	右回転ロクロ→ロクロ使用鋸取付け。内外面共にナデ丁寧で平滑である。内面天井部回転痕残す。頂上復元図る。	①砂粒。 ②還元。 ③灰色。
125図-4 須忠蓋	口径(20.0) 高さ[2.3]	埋土 8住埋土 口縁部小片	右回転ロクロ。内外面共にナデ調整が丁寧である。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰褐色。断面はセピア色。
125図-5 土師瓶	口径(30.0) 高さ[16.0]	No.2 埋土 カマド埋土 口縁部破片	外面の削りは鋭く、砂粒の移動多い。頸部のみ内厚で粘土を削り落した感有り。内器面厚減しナデ不明である。	①小石、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい橙色。
125図-6 土師瓶	口径 26.0 頸部 22.0 高さ[22.3]	No.2 埋土 カマド埋土 口縁-胴部下位	外面削りは乾燥の進んだ状態です。口縁-頸部のみ内厚で上-下半へ粘土を削り落としている感有り。全体に厚減している。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい橙色。
125図-7 土師罌	高さ[15.9] 底径 5.5	No.2 カマド埋土 胴部-底部片	乾燥の進んだ状態で削りを施すが全体に器面が厚減のため不明瞭で内外面共に凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子多く含む。 ②還元。 ③灰褐色。
125図-8 紡錘車	径3.3 厚み1.8 孔穴0.8 重量20.8g		No.1 完形	①砥石石。
125図-9	長さ11.7 幅12.5 厚み4.2 重量1.050g		磨石	①粗粒安山岩。
125図-10	長さ15.0 幅6.2 厚み4.1 重量610g		棒状礫	①粗粒安山岩。
125図-11	長さ12.5 幅5.8 厚み3.8 重量470g		棒状礫	①粗粒安山岩。

12号住居跡 (PL89)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
126図-1 須忠杯	口径 12.0 高さ 3.5 底径 7.8	No.4 完形	右回転ロクロ→ヘラ切り→手持ちヘラ削り。内外面共にロクロ痕残さず平滑である。内底僅かに回転痕残す。	①砂粒。 ②還元。 ③内-灰白色。外-灰色。
126図-2 須忠杯	口径 12.7 高さ 4.0 底径 3.8	No.3 完形	右回転ロクロ→回糸→手持ちヘラ削り。内外面共にロクロ痕残さず平滑である。内底僅かに回転痕残している。	①砂粒、砂礫。 ②還元。 ③灰白色。
126図-3 須忠 高台付輪	口径 15.9 高さ 6.2 底径 8.6	No.1 1/2	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。ロクロ周縁狭く明瞭に残す。内底僅かにロクロ痕残す平滑である。	①砂粒。 ②還元。 ③灰色。

No.・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②焼成③色調④その他
126図-4 土師罎	口径(18.1) 頸部(16.0) 胴部(19.5) 高さ[19.8]	No. 6 埋土 1/5	外面の胴りは上半でやや広く、下半は細かく丁家。内面ナデ丁家で平滑に仕上げる。	①砂粒含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④二次加熱受ける。
126図-5 土師罎	高さ[8.8] 底径 5.0	埋土 底部	外面の胴りやや強く、砂粒の移動残る。底部は粘土を削り落としていることが判る。内面のナデ丁家で平滑に仕上げている。	①砂粒。 ②酸化。 ③明赤褐色。
126図-6 土師罎	口径 11.4 頸部 10.3 高さ[6.0]	No. 2、5 カマド埋土 口縁1/2	外面削り鋭く、砂粒の移動多い。口縁～頸部工具ナデ強く擦痕残す。内面ナデ丁家で平滑に仕上げている。	①砂粒、砂粒。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
126図-7 置き壺 手ずくね	高さ[6.9] 厚み 3.9	カマド廻り方 脚部小片	輪積みか。胴部下端に粘土塊を取付け底部のみ内厚で安定を図る。外器面割落。内面ナデで凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③外にぶい赤褐色～暗赤灰色。内にぶい褐色。

13号住居跡 (PL89 - 90)

No.・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②焼成③色調④その他
127図-1	長さ(19.8)	幅11.8 厚み5.7 重量2,860g	カマド礫石	①煎粒安山岩。
127図-2	長さ(11.1)	幅15.4 厚み3.5 重量1,030g	礫石	①石英閃緑岩。
127図-3	長さ16.1	幅8.2 厚み2.9 重量400g	礫石	①煎粒安山岩。
127図-4	長さ8.9	幅8.1 厚み3.5 重量350g	礫石	①砥沢石。
128図-1 須恵 高台付輪	口径 13.7 高さ 8.9 底径 8.9	No. 18 口縁部1/4欠損	右回転ロクロ→回転ヘラ切り→ロクロ使用高台取付け。ロクロ痕幅広く残す。底部凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。
128図-2 須恵杯 高台付?	口径 (6.3) 高さ[4.5]	No. 6 口縁部小片	右回転ロクロ→回転ヘラ切り→ロクロ使用高台取付けの可能性あり(割落のため不明確である)。高台取付け時の粘土付着。	①白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
128図-3 須恵杯	高さ[3.0] 底径(9.0)	埋土 底部のみ	右回転ロクロ→回転ヘラ切り→ロクロ使用高台削り出した可能性。高台周辺丁家で削り調整。内器面摩滅し凹凸している。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。内面のみセピア色。
128図-4 須恵杯	高さ[1.8] 底径(8.0)	埋土 底部片	右回転ロクロ→回転ヘラ切り→手持ちヘラ削り。切り離し時の粘土取付着。内底中心部削削時の凹凸より平滑さ欠く。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
128図-5 須恵杯	高さ[1.5] 底径(8.0)	埋土 底部のみ	右回転ロクロ→回転ヘラ切り。外底に棒状圧痕僅かに残る。内面回転痕で平滑さやや欠ける。	①砂粒。 ②還元。 ③灰色。
128図-6 土師杯	口径 12.0-12.8 高さ 3.4	No. 21 No. 22 埋土 略定形	外底の削り鋭く、砂粒の流れ残る。口縁下半無調整。内面は同心円状。中央部凹凸し平滑さ欠く。楕円形に歪む。	①石英、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②酸化③色調④その他
128回-7 土師杯	口径 12.5-12.8 高さ 3.4	No.11 No.12 略定形	外面の削り乾燥の進んだ状態で施す。 底部内外面に指頭圧痕残り、やや平滑 さ欠く。	①石英、白色、黒色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。口縁部スス付着（黒斑）。
128回-8 土師杯	口径 12.2 高さ 3.0	埋土 口縁部少し欠損	外面の削りやや乾燥した状態で施す。 内面は濡らして同心円状にナデ中心部 は凹凸し平滑さ欠く。平滑少し進む。	①雲母、黒色、白色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。口縁部黒斑。
128回-9 土師杯	口径 6.5 高さ 3.7	No.7 No.13 埋土 口縁部少し欠損	外底の削り丁寧。口縁下半不明瞭なナ デで指頭圧痕進む。内面同心円状ナデ。 中央部不規則なナデで平滑さ欠く。	①雲母、黒色、白色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
128回-10 土師杯	口径 12.8 高さ 3.2	No.23,24,25 口縁部欠損	外面の削りやや強く、砂粒の流れ残る。 口縁下半無調整。内面同心円状のナデ、 中央で一方のナデ平滑に仕上げる。	①雲母、黒色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
128回-11 土師杯	口径 12.4 高さ 3.3	No.12 1/2	外面の削りは強く、砂粒の流れ残る。 口縁部工具によるナデ痕僅か残る。 内面同心円状。中央部凹凸し平滑欠く。	①砂粒、黒色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
128回-12 土師杯	口径(13.4) 高さ[3.7]	埋土 1/5	外面の削り細かく丁寧である。内面ナ デ丁寧。放射状の暗文施す。内外面共 に平滑に仕上げている。	①輝石。 ②酸化。 ③褐色。
128回-13 土師杯	口径(12.5) 高さ 3.2	No.9 1/5	外底の削りやや強い。口縁部のナデ 丁寧。内面のナデ丁寧だが指頭痕残り平 滑さ欠く。	①雲母、黒色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
128回-14 土師杯	口径(12.7) 高さ[3.0]	No.19 1/5	外面の削り丁寧。砂粒の動き少ない。 口縁-内面ナデ丁寧で平滑に仕上げて いる。	①砂粒、白色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
128回-15 土師杯	口径(16.2) 高さ 3.4	埋土 1/4	外底の削り強い。口縁下半不明瞭なナ デで指頭圧痕進む。内面ナデ丁寧で平 滑に仕上げる。	①雲母、黒色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい黄褐色。
128回-16 土師杯	口径 12.3 高さ 3.2	No.3 1/3	外底の削り鋭く、口縁下半無調整だが 指頭痕進む。内面は同心円状ナデ凹凸 し平滑さ欠く。	①雲母、黒色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。内外面スス付着。
128回-17 土師杯	口径 14.0 高さ[3.3]	No.29 1/4	外底の削り乾燥の進んだ状態で施す。 削り幅太い。器面凹凸し平滑さ欠く。 内面上半工具状痕残り。内底平滑。	②酸化。
128回-18 土師杯	口径(12.4) 高さ[3.1]	No.5 口縁-底部1/5	外底の削り乾燥の進んだ状態で施す。 口縁下半無調整。口縁内外面共にナデ 丁寧で平滑である。内底僅かに凹凸有。	①砂粒。 ②酸化。 ③褐色。
128回-19 土師杯	口径(12.0) 高さ 2.7	埋土 1/4	外底の削りやや強い。口縁下半無調整。 内面ナデ丁寧で平滑である。	①雲母、石英、黒色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色-にぶい褐色。口縁部黒斑有り。
128回-20 土師杯	口径(14.5) 高さ[3.2]	No.8 1/4	外底の削り鋭く長い。砂粒の流れ残る。 内面同心円状。平滑に仕上げている。	①砂粒、白色炭物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
128図-21 須恵壺	口径 17.6 頸部 13.7 高さ [9.3]	No.20 口縁→肩部2/3	輪積みか。外面肩部平行厚き目返し、口縁部は折り返し口縁で端部強く積み出す。内面輪積み痕み瞭に残す。	①石英、砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
128図-22 土師壺	口径 20.6 頸部(21.7) 高さ[18.7]	No.22 口縁→胴部1/3	輪積みか。外面の削りは上半で長い。頸部ナデ高く部頭痕残り平滑さ欠く。内面ナデ丁寧。接合痕残す。	①砂礫、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
128図-23 土師壺	口径(21.4) 頸部(18.5) 胴部 20.2 高さ[14.2]	No.1 カマド 口縁→胴部1/5	輪積みか。外面の削りは乾燥の進入だ状態で施す。頸部濡らしてナデている。内面ナデ丁寧。僅かに削工具痕残す。	①黒色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
128図-24 土師壺	口径 21.4 頸部(18.1) 胴部(20.3) 高さ[15.6]	No.28 カマド削り方 口縁→胴部1/3	外面の削りは上半で長く幅太。頸部に削り時の工具痕残すが丁寧にナデ調整。内面丁寧なナデ平滑に仕上げる。	①雲母、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
128図-25 土師 小型壺	口径(5.0) 高さ [6.0]	埋土 口縁部小片	外面の削り鋭く、砂粒の移動多い。頸部工具による強いナデ。内面板状工具ナデ痕残り平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
128図-26 土師 脚付壺	脚付部3.8 高さ [4.8]	埋土 脚部のみ	外底部鋭く削り上げている。脚部は器面を濡らしてナデ付け。内面は板状工具でナデ調整。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
128図-27 鉄製品	(7.8)×0.7×0.4 重量4.6g	埋土	刀子のナカゴ?先端部欠損。	

14号住居跡 (PL90)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
130図-1 須恵杯	口径 12.0 高さ 3.7	削り方 1/3	右回転ロクロ→回糸無調整。外面ロクロ痕強い。内面平滑であるが中心部に回転時の凸残る。	③灰色。
130図-2 須恵 高台付碗	口径(14.0) 高さ 3.8 底径 3.5	埋土 1/2 高台部欠損	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け?高台部剥落か。外面ロクロ痕強。内底平滑に仕上げる。接合痕残る。	①褐色鉱物粒子含む。 ②中性灰。 ③にぶい黄褐色。
130図-3 須恵 高台付杯	口径 14.0 高さ [5.4] 底径 6.5	No.20 カマド 埋土 野穴 1/3高台部欠損	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。高台部剥落。外面ロクロ痕強く残り砂粒の流れ有り。内器面平滑。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ③暗灰色。
130図-4 須恵 灰輪碗	高さ [2.8]	埋土 1/4	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。内底布状で拭くような擦痕残る。軸は滑掛けか、外面やや厚く輪積。軸は滑掛けか、外面やや厚く輪積。	①密である。 ②還元。 ③灰白色。軸は灰黄色。
130図-5 須恵 高台付輪	高さ [1.7] 底径(7.0)	カマド 底部のみ	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。内底回転痕残り平滑さ欠く。高台部多割落している。	①砂礫、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③黄灰色。

No・器械	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②地成③色調④その他
1300回-6 土師甕	口径 20.3 頸部 18.5 胴部 22.6 高さ 26.6 底径 3.6-4.2	No. 2、3 カマド No.17、18、19、21 22 カマド副方 貯穴 埋土 略定形	輪積みか。乾燥の進んだ状態で粘土削りは鋭い。幅は細く長い。器面凹凸し平滑さ欠く。内面副器状工具ナデ。	①赤母、白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③棕色。外面黒皮。 ④二次加熱受ける。
1300回-7 土師甕	口径 19.2 頸部[17.0] 高さ[13.7]	No.15 掘り方 埋土 口縁部小片	外面の削りはやや鋭い。胴部で粘土を削り落としていることが判る。内面ナデ丁寧で平滑である。接合痕残る。	①褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③棕色。 ④二次加熱受ける。
1300回-8 土師甕	口径(19.0) 頸部(16.8) 高さ[6.5]	No.14 埋土 口縁部小片	外面の削りやや鋭い。砂粒の移動残る。口縁部指面痕か、僅かに窪み有り。内面構状工具ナデの擦痕明瞭に残る。	①褐色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ④にぶい棕色。 ④二次加熱受ける。
1300回-9 須恵甕	底径(21.8) 高さ[14.5]	No.1 底部1/5	輪積みか。外面ロクロ痕残さず平滑である。底部辺の削り厚減し不鮮明。内面指面でナデ付け凹凸し平滑さ欠く。	①白色針状鉱物含む。 ②還元。 ③灰色。外面にヒダズキ状の変色部分あり。
1308回-10 鉄 器	(5.1)×1.0×0.35 重量6.5g	No.5	刀子のナカゴ。中心部残存。	
1300回-11	長さ18.8 幅15.4 厚み6.9 重量2.900g		凹石	①粗粒安山岩。

15号住居跡 (PL91)

No・器械	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②地成③色調④その他
132回-1 須恵杯	口径(12.2) 高さ 3.0 底径(4.8)	No.15 カマド 小片	右回転ロクロ→回糸無調整。砂粒の流れ僅かに残す。器面内外共にロクロ痕残さず平滑に仕上げる。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③黄灰色。
132回-2 須恵杯	高さ[3.4] 底径(10.0)	埋土 1/4	右回転ロクロ→回転ヘラ切りか。外面ロクロ痕残さず平滑である。内面工具痕僅かに残すが平滑に仕上げている。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
132回-3 須恵杯	口径(14.4) 高さ 3.4 底径(9.6)	埋土 25住 1/4	右回転ロクロ→回転ヘラ切り→削り調整。内外面共にロクロ痕残さず平滑に仕上げる。内底に重焼きの色調あり。	①小石。 ②還元。 ③灰色。
132回-4 須 恵 高台付甕	口径 15.5 高さ 5.1 底径 7.1	カマド 1/3	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。ロクロ細かく残し砂粒の流れ僅かに残す。内面ナデ丁寧な仕上げる。	①砂粒、褐色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元、中性焰。 ④にぶい橙一にぶい黄褐色。
132回-5 須 恵 高台付甕	口径(11.2) 高さ 5.6 底径(9.1)	No.13 1/5	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。乾燥の進んだ状態で施す。外器面荒れ平滑さ欠く。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化(中性焰)。 ③棕色。
132回-6 須 恵 高台付甕	口径 14.9 高さ 4.6-5.2 底径 7.0	No.15 埋土 1/2	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。器面回転ナデで平滑さ欠く。内底回転痕残し凹凸呈す。平面形歪む。	①小石、7mm大の石、黒色、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰黄-浅黄色。
132回-7 須 恵 灰輪甕	高さ[3.5] 底径 9.3	No.1 埋土 底部のみ	右回転ロクロ→回転ヘラ切り→ロクロ使用高台取付け。他の付け技法不明。内底に軸が穿く残る。重焼き痕明瞭に残る。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
132図-8 須恵 高台付碗	口径 12.4-12.4 高さ 4.8-5.1 底径 5.2-5.4	No.15 カマド 埋土 2/3	右回転ロクロー回糸→ロクロ使用高台 取付け。外面ロクロ痕少し残す。内面 ナデ丁家であるが中心部に凹凸ある。	①砂礫、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②中性焰。 ③内一浅黄色。外一浅黄-黄灰色。
132図-9 須恵 高台付碗	高さ[1.5] 底径 3.3	No.12 底部のみ	右回転ロクロー回糸→ロクロ使用高台 取付け。高台取付け時の粘土バリ付着。 内底器面凹凸し平滑さ欠く。	①砂礫、雲母。 ②還元。 ③灰色。
132図-10 須恵 高台付碗	高さ[2.8] 底径(7.4)	埋土 底部小片	右回転ロクロー回糸→ロクロ使用高台 取付け。内外面共にロクロ痕残さずや や平滑である。内底に色残有り。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。
132図-11 須恵 高台付碗	高さ[1.8] 底径 7.8	No.17 底部のみ	右回転ロクロー回糸→ロクロ使用高台 取付け。内底部中心に回転時の凹残り 平滑さ欠く。	①砂粒、砂礫。 ②中性焰。 ③にぶい黄褐色。
132図-12 土師杯	口径(6.8) 高さ 3.1 底径(10.6)	掘り方 埋土 1/5	外底の削り乾燥の進んだ状態で施す。 口縁下半無調整。内面同心円状ナデ。 口縁に弱い波状の歪み。	①砂礫、石英粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③明赤褐色。 ④内外面スス付着。
132図-13 土師杯	口径(11.8) 底径(9.2)	カマド 埋土 1/5	外底の削り強い。口縁下半無調整。内 面ナデ削で底部凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、雲母、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい褐色。
132図-14 土師杯	口径 12.0 高さ 2.9	No.3 埋土 2/3	外底の削りは口縁下半まで施す。器面 凹凸し平滑さ欠く。内面同心円状、底 部不規則なナデ。	①砂粒。 ②還元。 ③褐色。 ④底部黒書(中)?
132図-15 土師壺	口径 17.9 頸部 15.9 胴部 20.9 高さ[22.0]	埋土 口縁-胴部小片	輪積みか。外面の削りは短く、砂粒の 移動多い。口縁-頸部のナデ丁家で平 滑である。内面ナデ丁家。	①石英、小石、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい赤褐色。 ④内外面スス付着。
132図-16 土師壺	口径(21.0) 高さ[11.3]	カマド 口縁部小片	外面の削り細かく施す。頸部内外面共 に指頭痕ある。内面櫛状工具でナデ。 器面が凹凸し平滑さ欠く。	①石英、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい藍色。 ④二次加熱受ける。
132図-17 土師壺	口径 19.6 頸部(18.0) 高さ[11.7]	No.22 カマド 口縁部小片	輪積みか。外面の削り短く砂粒の移動 多い。頸部の上-下半のナデ強い。中 間のナデが弱く接合痕残る。内面指頭 痕有り。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。黒色。 ④二次加熱受ける。
132図-18 土師壺	口径(21.0) 頸部(20.0) 高さ[7.3]	No.23 口縁部	外面の削りやや強い。口縁端部に工具 状による弱い波痕ある。内面板状工具 によるナデ痕残すが平滑である。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。
132図-19 土師壺	口径(20.0) 頸部 17.0 高さ[7.7]	No.11 埋土 口縁部1/2	外面の削りやや強い。口縁端部に工具 状による強い波痕ある。内面丁家なナ デで平滑に仕上げられる。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。
132図-20 土師壺	口径(19.4) 頸部(18.0) 高さ[5.7]	No.19 口縁部	輪積みか。外面の削りやや強い。頸部 上-下半強いナデ。中間ナデが弱く接 合痕残す。内面板状工具痕残す。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
132図-21 土師壺	口径 18.0 高さ [7.6]	No.14,17,19,20 カマド 埋土 口縁部1/2	外面の削り鋭く、砂粒の移動多い。頸部のナデやや弱く平滑さ欠く。内面扁平状工具の擦痕残す。平面形はやや重む。	①褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。
132図-22 土師壺	口径 19.5 頸部(15.4) 高さ [7.7]	No. 9 口縁部小片	外面の削り鋭く、砂粒の移動多い。口縁部ナデ丁寧で平滑である。内面扁平状工具の擦痕残すが平滑に仕上げる。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
132図-23 土師 台付壺	高さ [3.9] 底径(8.0)	No. 4 脚部のみ	胴一脚部の取付け部強い削りを施す。脚部内面ナデの工具擦痕残す。	①砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④スス付着。
132図-24 須恵鉢	口径(30.0) 胴部(29.8) 高さ [9.9]	No. 2 口縁部小片	右回転ロクローロクロ痕強い。口縁端部摩滅している。	①砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
132図-25 瓦	縦 6.3 横 6.0 厚み 1.4	削り方 小片	小片のため技巧不明確。表格子印き目痕。	①白色鉱物粒子含む。 ②黄灰色。 ④表-スス状の付着物。裏-カマド粘土付着。
132図-26 瓦	厚み 1.5	埋土 小片	桶巻作りか？端を丁寧に面取りの削り調整。表格子印き目痕。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③灰黄褐色。
132図-27 瓦	幅 3.9-4.1 厚み 1.7	削り方 小片	桶巻作りか？端を丁寧に面取りの削り調整。表格子印き目痕。	①白色鉱物粒子含む。 ③灰黄色。

16号住居跡 (PL91)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
133図-1 土師杯	口径(12.8) 高さ [3.2]	No. 1 1/5	外底の削り乾燥の進んだ状態で出土。口縁下半無調整。内面ナデ丁寧。	①砂礫、砂粒。 ②酸化。 ③内-橙色。外-にぶい橙色。底部黒炭有り。
133図-2 土師壺	口径(16.8) 高さ [4.9]	埋土 口縁部小片	口縁部の工具ナデ固く平滑さ欠く。口縁端部に沈線認め、口縁部僅かに重む。	①石英含む。 ②酸化。 ③にぶい橙色。
133図-3 土師壺	口径 11.0 高さ [4.1]	埋土 口縁部小片	外面の削りやや強く、砂粒の移動残す。口縁部扁平状工具ナデの擦痕残す。内面ナデやや平滑さ欠く。	②酸化。 ③にぶい赤褐色。

18号住居跡 (PL91)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
135図-1 須恵杯	口径 11.3 高さ 3.8 底径(6.0)	No.10 1/3	右回転ロクロー回赤無調整。外面水引きでロクロー痕細かく残す。内底に回転痕残り僅かに凹凸有り。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。 ④口縁部重焼き痕残る。
135図-2 須恵 高台付甗	高さ [2.6] 底径 6.8	No.12 底部のみ	右回転ロクロー回赤-ロクロー使用高台取付け。内底回転痕残り平滑さ欠く。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰黄色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②焼成③色調④その他
135図-3 土師壺	口径(19.0) 高さ[7.5]	カマド 口縁部小片	輪積みか。外面の削り鋭く、砂粒の移動多い。口縁部のナゲ丁家である。内面ナゲ丁家で平滑に仕上げられる。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
135図-4 土師壺	口径(17.4) 高さ[5.2]	No.13 埋土 口縁部小片	外面やや乾燥した状態で削りを施す。口縁部のナゲ丁家にして調整し指頭痕僅かに残す。内面にナゲの工具痕摩痕有。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。内外面にスス状の色痕有り。
135図-5 土師壺	口径(19.5) 高さ[6.3]	No. 2 口縁部小片	外面の削りやや乾燥した状態で施す。口縁部のナゲ丁家である。内面工具によるナゲ痕僅かに残す。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。内外面にスス状の色痕有り。
135図-6	長さ(6.9) 幅(9.4) 厚み(4.1)	重量310 g	磨石	①粗粒安山岩

19号住居跡 (PL91・92)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質②焼成③色調④その他
137図-1 土師杯	口径(12.8) 高さ[2.7]	No. 2 1/5	外底の削り口縁下干まで丁寧に施す。内面同心円状で平滑に仕上げられる。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
137図-2 土師杯	口径 13.6 高さ 3.6 底径 12.0輪底	No. 3 1/2強	外底の削りやや乾燥した状態で施す。口縁下半無調整。内面同心円状。中央部不規則だが丁寧なナゲ。	①赤母、石英、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。黒痕あり。
137図-3 土師杯	口径 13.6 高さ[3.3]	埋土 口縁のみ1/2	削りは乾燥の進んだ状態で施す。器面に小さな凹凸あり平滑さ欠く。内面同心円状ナゲ。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
137図-4 土師杯	口径 14.4 高さ 3.6	No. 1, 7 略定形	外底の削りはやや乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半無調整。内底のナゲ不規則で凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
137図-5 土師杯	口径 14.8 高さ 2.7	No. 17 略定形	外底の削り乾燥の進んだ状態で施す。口縁部工具ナゲの痕僅残す。内面同心円状。底部不規則なナゲで平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
137図-6 須恵杯	口径 9.8 高さ 2.5 底径 6.0	No. 4 埋土 口縁一部欠損	右回転クロロ→回転ヘリ切→クロロ使用削り(底部端一体系下端)。中心僅か粘土残。内底回転痕残り平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
137図-7 土師壺	口径 23.0 頸部 18.0 胴部 12.0 高さ[24.5]	No. 4, 5 カマド埋土。 胴部欠損	外面の削り鋭く、幅狭く長い。頸部に削り時の工具痕摩痕残す。内面ナゲ丁寧。接合痕残る。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明褐色。
137図-8 土師壺	口径(26.0) 高さ[29.3]	No. 8, 11, 13, 14 カマド 埋土 1/3	外器面摩滅のため削りやや不明。頸部足の削り強く摩痕残す。内面工具ナゲ平滑さ欠く。全体に摩滅している。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
137図-9	長さ13.7 幅5.5 厚み4.2	重量550 g	棒状磨	①粗粒安山岩。

20号住居跡 (PL92-93)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
139回-1 土師杯	口径16.3] 高さ[4.8] 底径12.0]	埋土 小片	外面の削りやや強く、砂粒の流れ残る。 口縁整形工具ナデの擦痕残す。内面ナ デ丁家。放射状の筋文施す。	①砂粒、石英、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい褐色。
139回-2 須恵碗	口径 14.1 高さ 8.0 底径 6.1	No. 4、5、8 埋土 口縁部少し欠損	右回転ロクロ→回転へう切→不明瞭な 手持ちへう削り。外面口ロ口直線かく 渦巻状を呈す。内面全体に研磨を施し 平滑である。	②還元。 ③にぶい褐色。 ④内黒。
139回-3 土師杯	口径 13.4 高さ[3.7]	No.25,27 1/4	外底の削りはやや強い。口縁下半不明 瞭なナデを施す。内面同心円状の丁家 なナデで平滑。	②還元。 ③にぶい褐色。
139回-4 土師杯	口径 12.0 高さ 3.0	埋土 1/2	外底の削り強い。口縁下半無調整。内 面ナデ丁家、内底やや凹凸し平滑欠く。	①砂粒。 ②還元。③にぶい褐色。
139回-5 土師甕	口径 20.4 頸部 17.7 胴部 20.9 高さ[16.6]	No.14,17カマド カマド 口縁→胴部	輪積みか。外面の削り鋭く、砂粒の移 動多い。内面頸部辺に板状工具ナデ痕 を残すが平滑に仕上げている。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③明赤褐色→にぶい黄褐色。 ④外面スス付着。
139回-6 土師甕	口径 17.5 頸部 15.1 胴部 21.7 高さ 21.7 底径 6.2	No.14 No.14カ マド カマド 埋土 略定形	輪積みか。削りは細かく丁家に施す。 内面ナデ丁家、僅かに板状工具痕残す。 口縁部厚減か波状に歪む。	①砂粒。 ②還元。 ③にぶい褐色。 ④胴部外面に環状にスス付着。
139回-7 土師甕	口径 19.5 頸部(17.3) 胴部(20.2) 高さ[20.6]	No.12,14カマド カマド 埋土 口縁→胴部1/3	外面の削りはやや強い。口縁→頸部ナ デ丁家。内面板状工具の擦痕明瞭に残 す。口縁部僅かに波状に歪む。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③明赤褐色。
139回-8 土師甕	高さ[15.0]	No.12, No.12カ マド カマド 胴部小片	外面の削り細かく、砂粒の流れ僅かに 残す。内面ナデ丁家である。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい褐色。④二次加熱受ける。
139回-9 須恵甕	高さ[20.6]	埋土 胴部小片	胴部外面に平行叩き目痕残し、最大径 付近で叩き目をナデ消している。内面 青海波の圧痕あり。	①白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③内→セビア色。外→灰色。
139回-10 土師甕	高さ[21.0] 底径 5.0	No. 9、10,12,14 カマド 埋土 胴→底部1/3	外面の削りは鋭い。砂粒の移動多い。 底部周辺は粘土を削り落し調整。内面 ナデ不規則で平滑さ欠く。接合痕残す。	②還元。 ③明赤褐色。黒褐色。 ④スス付着。
139回-11 紡錘車	径4.8~5.3 孔径0.8 厚み1.3 重量28.7g		No. 1 定形	①凝灰質岩凝灰岩。
139回-12 紡錘車	径4.0 厚み1.5 孔径0.7 重量24.0g		No.25 定形	①凝灰石。
139回-13	長さ40.0 幅21.6 厚み19.6 重量22.900g		カマド礫石	①粗粒安山岩。
139回-14 刀子	(3.8)×1.1×0.3 重量2.2g		刀子の切っ先、断面は三角状に尖る。	
139回-15 刀子	(6.5)×0.8×0.4 重量2.9g		刀子のナカゴ、先端部分欠損。	

22号住居跡 (PL93)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
140図-1 須恵杯	口径 7.6 高さ 3.8-4.0 底径 5.6	No. 7 掘り方 No. 19 埋土 口縁部少し欠損	右回転ロクロ→回糸。外面ロクロ間隔狭く、砂粒の流れ少ない。内面ロクロ痕残り平滑さ欠く。	①砂礫、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。 ④内外面スス付着。内外面に黒書(矢西)?
140図-2 須恵 高台付碗	口径 15.0-15.5 高さ 5.2 底径 8.0	No. 7 カマド No. 7 口縁部少し欠損	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。ロクロ痕はやや強く渦巻状を呈す。内面ロクロ痕残り平滑さ欠く。	①小石、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。重焼きの色調? ④内外面スス付着?
140図-3 須恵碗	口径(14.8) 高さ 5.6 底径 6.5-6.7	No. 3 カマド 口縁部3/4欠損	140図-2と同巧。	①雲母、砂礫、白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②中性焰。 ③にぶい黄褐色。 ④内外面スス付着?
140図-4 須恵碗	口径 8.2 高さ[4.7]	カマド掘り方 底部欠損	右回転ロクロ。外面のロクロ痕間隔狭く、明瞭な渦巻状を呈す。内面ロクロ痕残り平滑。底部・高台部剥離か。	①4mm大砂礫、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。
140図-5 土師羹	高さ[9.1] 底径(4.6)	No. 1、2 カマド カマド掘り方 カマド 埋土 底部1/4	輪積みか。外面の削りは細かくやや鋭い。内面のナデ板状工具でナデ擦痕残すがやや平滑である。接合痕残す。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい褐色。 ④外面スス付着。
140図-6	長さ18.9 幅13.3 厚み10.6 重量2,740g	No. 5	四石	①粗粒安山岩。
140図-7	長さ10.8 幅4.5 厚み2.7 重量220g	No. 20カマド内	棒状礫	①火岩。

23号住居跡 (PL93)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
141図-1 土師杯	口径(17.0) 高さ[3.8]	No. 4、5 1/4	外底面削りを施しているが器面摩滅のため不明である。口縁下半無調整。内面は同心状、中央部不規則ナデ施す。	①雲母、砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③明褐色。
141図-2 須恵 高台付碗	高さ[4.2] 底径(7.2)	No. 1 小片	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。外面ロクロ痕残さないが平滑さ欠く。高台部大半が剥落。	①小石、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③暗灰黄色。 ④鉄分少し付着。
141図-3 灰輪壺	口径(7.2) 高さ[4.1]	埋土 口縁部小片	右回転ロクロ。内外面共にロクロ痕明瞭に残る。他輪方法不明だが存在部分全体に輪厚くかかる。	①赤である。 ②還元。 ③灰色。他は透明。緑色が濃い。
141図-4 平瓦	厚み 2.0-2.2	埋土 小破片	112図-19と似ている。小破片のため技法不明確。表布目痕・櫛状工具痕残す。	①赤地黒く、雲母、砂礫、褐色鉱物粒子含む。 ②還元焰。 ③棕色。
141図-5 平瓦	厚み 1.4	埋土 小片	小片のため技法不明確。表布目痕有。裏正格子の叩き痕残す。	①白色鉱物粒子含む。 ③灰色。断面セピア色。

24号住居跡 (PL93・94)

No・器種	計測値(m)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
143R-1 須恵杯	口径 13.0 高さ 3.6 底径 7.0	No.42 完形	右回転ロクロー回転ヘラ切。ロクロ痕幅広く、砂粒の流れ少ない。内面ロクロ痕残さず平滑である。	①小石。 ②還元。 ③内一淡黄色。外一灰・灰白色。
143R-2 須恵杯	口径 13.0 高さ 3.5 底径 7.6	No.43,44 完形	143R-1と同巧。内底に重焼き痕残る。	①小石。 ②還元。 ③灰白色。内外面にヒダスキ状の色斑あり。
143R-3 須恵杯	口径 13.7 高さ[3.9] 底径 7.3	No.45 略完形	143R-1・2・4と同巧。外底に溝状痕残す。平面形は楕円形に歪む。	①砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
143R-4 須恵杯	口径 13.0 高さ 4.1 底径 7.0	No.46 略完形	143R-1・3と同巧。内底凹凸し平滑さ欠く。	①砂礫、黒色、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。灰色。
143R-5 須恵杯	口径 13.5 高さ[3.5] 底径 7.4	No.24 埋土 口縁部1/2欠損	143R-1・4と同巧か。内底僅かに回転痕残す。	②還元。 ③灰色。内面セピア色の斑あり。
143R-6 須恵杯	口径 12.6 高さ[3.3] 底径 7.6	No.18 埋土 1/2	右回転ロクロー回糸。手持ちヘラ削り。内外面共にロクロ痕残さず平滑に仕上げている。	①砂礫、黒色、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
143R-7 須恵杯	口径 13.0 高さ[3.5] 底径 8.0	No.22,25 1/2	右回転ロクロー回転ヘラ切→手持ちヘラ削り。外面ロクロ痕狭く渦巻状に残す。内面ロクロ痕残さず平滑に仕上げる。	①砂礫、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③外面灰色。灰白色の色斑あり。
143R-8 土師杯	口径 13.9 高さ 3.5 底径(9.9)	No.35 埋土 1/4	外面の削り強い。砂粒の流れ残る。内面ナゲ凹凸し平滑さ欠く。外部放射状底部にラセン状の暗文を施す。	①砂粒含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④内面暗文。
143R-9 土師杯	口径 11.9 高さ 3.0	No.27 1/2	外底の削り乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半無調整だが指面状のナゲを行う。内面磨らしてナゲやや平滑さ欠く。	①宏形、砂礫、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③灰色。 ④スス付着。
143R-10 須恵杯	口径 12.4 高さ 3.9 底径 6.7	No.12,40 略完形	右回転ロクロー回糸→手持ちヘラ削。外面ロクロ痕僅かに残す。内面ナゲ丁家で平滑。内底に重ね焼き痕有り。	①石英、砂礫、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③内一淡黄・灰白色。外一灰色。 ④内面に墨書有り(尺)?
143R-11 須恵杯	口径 15.0 高さ 5.5 底径(7.0)	No.39 埋土 1/3	右回転ロクロー回転ヘラ切→ロクロ使用削り(底部端一休部下端)。内面丁家なナゲで全体に研磨を施す。	①砂礫、雲母、白色鉱物粒子含む。 ②中性焰。 ③にぶい黄褐色。内面黒色。
143R-12 須恵杯	口径 13.0 高さ 3.7 底径 7.0	No.34,37,38 1/2	右回転ロクロー回転ヘラ切。外底中心粘土を少し残す。内外面共に平滑。内底部少し回転痕残す。僅かに歪む。	①砂礫含む。 ②還元。 ③灰色。底部にヒダスキ状の色斑有り。 ④口縁部に重ね焼き痕。
143R-13 土師杯	厚み0.25-0.55	埋土 底部のみ	外底に削り鋭く、砂粒の流れ残る。内底ナゲ不規則で平滑さ欠く。	①黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④内底に墨書有り。小破片のため字不鮮明。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
143図-14 土師罽	口径 20.4-21.0 頸部 18.7 胴部 21.4 高さ[18.4]	No.43 埋土 胴部下位~底部 欠損	輪縁のみか、外面の削り強く細かく施す。 口頸部濡らしてナデ、平滑さ欠く。内 面胴部下半で板状・指頭ナデ痕残す。	①白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④内外面スス付着。
143図-15 土師罽	口径 16.8 頸部 14.8 胴部 25.1 高さ 23.7 底径 6.8	No.41 略定形	外面のナデ細かく丁寧で器面平滑に仕 上げる。内面ナデ丁寧。器面全体に薄 手。接合痕残す。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙~にぶい褐色。 ④外面スス付着。二次加熱受ける。
143図-16 須恵罽	高さ[12.4]	No.28 小片	唇部か。回転の擦痕残し、平行叩き目 を施す。内面は青海泡の押圧痕僅かで 不規則なナデ調整を残す。	①砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。断面セピア色。
144図-1 鉄鏝?	(3.6)×1.8×0.3 重量4.6g		鋒部分やや湾曲。小片のため不明確。	
144図-2 鉄製品	(6.8)×1.8×1.0 重量16.7g		先端部分欠損。頸部は鉤手状に曲がる。	
144図-3 鉄製品	(2.7)×0.6×0.4 (2.2)×0.6×0.6 重量 2.9g		刀子のナカゴか。先端部欠損。	
144図-4 鉄釘	(5.2)×1.0×0.8 重量10.6g		頸部に打撃痕残る。先端部僅かに欠損。	

25号住居跡 (PL94)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
145図-1 須恵瓦	長さ 16.0×15.9 厚み 1.1	No.43 カマド削り方 小片	表不規則な削りで凹凸し平滑さ欠く。 裏は布目痕鮮明に残す。周縁部を面取 りの削りをする。	①白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。断面はセピア色。
145図-2 瓦	長さ 8.0×6.2 厚み 2.0	埋土 小片	表布目痕の上擦状工具でナデている。 裏は不規則な削り後擦状工具でナデ。 周縁部を面取りの削りをする。	②酸化。 ③にぶい黄褐色。
146図-1 須恵杯	高さ[2.1] 底径 7.5	No.7 削り方	右回転ロクロー回糸無調整。外底摩滅 し、内底は凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。
146図-2 須恵杯	口径 13.8 高さ 3.5 底径 7.7	No.16 埋土 口縁部1/2欠損	右回転ロクロー回糸無調整。内外面共 にロクロ痕残さず平滑である。内底に 明瞭な回転痕残す。	①砂粒、砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。
146図-3 土師杯	口径(13.1) 高さ 2.7 底径 11.3	埋土 1/3	外底の削り強く、砂粒の流れ残る。口 縁下半は無調整。内面斜なナデで凹凸 し平滑さ欠く。	①石英、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙~にぶい褐色。
146図-4 土師杯	口径(13.0) 高さ 3.2 底径 9.3	No.1 削り方 1/3	外底削り。口縁下半無調整。内面ナデ は僅かに凹凸し平滑さ欠く。	①雲母、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
146回-5 土師杯	口径 12.4 高さ [3.6]	No.2 口縁部1/2欠損	外底の削りはやや強く、口縁下半は不規則なナデを施す。内面丁寧なナデだが徐々に平滑さ欠く。	①砂粒。 ②還元。 ③褐色。④外面体部に墨書あり。
146回-6 土師杯	口径 12.2 高さ 3.7 底径(8.8)	No.33 1/2	外底の削り強く器面に凹凸残す。口縁下半無調整だが指痕状の弱い圧痕残。内面同心円状、内底凹凸し平滑さ欠く。	①黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
146回-7 土師杯	高さ [2.3]	埋土 小片	外面削り。内面丁寧にナデ調整。小破片のため径不明確。	①砂粒。②酸化。 ③にぶい褐色。④墨書?小破片のため不鮮明。
146回-8 土師杯	口径 13.0 高さ [3.1] 底径(9.8)	埋土 口縁部小片	外底削り鋭く、砂粒の流れ残る。口縁部のナデ強い。内面のナデ丁寧平滑に仕上げる。	①砂粒、輝石、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
146回-9 土師杯	口径(12.0) 高さ 2.7 底径(8.0)	No.27 口縁部小片	外底削り乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半無調整。内面のナデ平滑さ欠く。器面刺磨している。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。④器面ケール状付着。
146回-10 土師杯	口径(23.0) 高さ [7.4]	埋土 口縁-胴部小片	ロクロ成形か?外面準減のための不明確内面平滑で全体に磨磨を施す。	①砂粒。②酸化。 ③にぶい褐色。黒灰色。④内黒。
146回-11 土師壺	口径(19.2) 高さ [5.3]	埋土 口縁部小片	外面の削り鋭く、砂粒の動き多い。口縁-頸部のナデ丁寧。内面板状工具のナデ痕残す。	①砂粒、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
146回-12 土師壺	口径(19.0) 高さ [6.6]	No.14 掘り方 口縁部小片	外面の削り乾燥の進んだ状態で施す。内面の口縁部濡らして丁寧にナデする。肩部に指痕残す。	①砂粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。二次加熱受ける。
146回-13 土師壺	口径 19.0 高さ [7.8]	No. 8 口縁部小片	外面の削り鋭く、砂粒の動き多い。口縁-頸部ナデ丁寧。内面ナデ丁寧に平滑。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
146回-14 土師 小型甕	口径 10.6 頸部 9.7 胴部 13.1 高さ 16.3 底径 6.9	No. 8、9 埋土 1/3欠損	輪様みか。外面の削り鋭く器面平滑さ欠く。内面頸部工具状ナデの擦痕残す。胴部ナデ丁寧。接合痕残す。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④内外面にスス付着。
146回-15 刀子	(5.6)×1.0×0.3 重量 2.8g		刀子で中心部残存。	

25・41号溝跡 (PL94)

No・器種	計測値(cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質②焼成③色調④その他
152回-1 須恵杯	口径 12.0 高さ [3.7] 底径 7.6	25溝 完形	右回転ロクロ一回糸一手持ちヘラ削りロクロ痕細かく残る。口縁部-内外器面平滑に仕上げる。	①赤褐色、砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
152回-1 甕	高さ [1.8] 底径(9.8)	41溝埋土最下層 底部片	右回転ロクロ一回糸。土器全体に厚手で大型になるか?小破片のため不明確	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
152回-2 陶器甕		Bs-22 No.2 41溝 小片	外面格子叩き目痕残し、内面指痕による圧痕を残し、平滑さ欠く。	①常滑か。白色鉱物粒子含む。 ②焼締め。③内-にぶい黄褐色。 外-自然釉同灰褐色附状に付着。

写真図版



1 遺跡の全景（上空から遺跡を望む）



2 遺跡の全景（東から遺跡を望む）



1 A1-10G 遺物出土状態



2 A1-10G 遺物出土状態



3 Aa-10G 遺物出土状態



4 Aa-10G 遺物出土状態



5 B区 旧石器時代試掘状況



6 D区 旧石器時代試掘状況



7 試掘 (Dk-05G)



8 Dk-05G 北壁土層



1 Ag-13G 北壁土層



2 Ar-10G 北壁土層



3 Bk-19G 北壁土層



4 Bu-19G 北壁土層



5 Ca-21G 北壁土層



6 Dm-07G 北壁土層



7 Ds-07G 北壁土層



8 Du-09G 北壁土層



1 D区 砂壤土下(早期)遺物出土状態(西から)



2 D区 砂壤土下(早期)調査状況

3 D区 北壁土層



1 D区 砂壤土下(縄文時代早期)の調査



2 D区 砂壤土下(縄文時代早期)の調査



1 D区 砂壤土下(縄文時代早期)遺物出土状態



2 D区 遺物出土状態



3 D区 南壁土層断面



4 D区 砂壤土下試掘調査



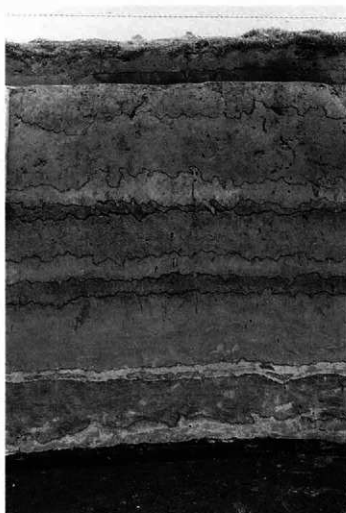
5 遺物出土状態(試掘調査)



1 C区 砂壤土下 全景



2 C区 砂壤土下の調査



3 C区 西壁土層断面



1 A区 砂塚土下(縄文時代中期前半)遺物出土状態



2 A区 砂塚土下旧河川縁辺部の遺物出土状態



1 B区 1号縄文遺構



2 B区 遺物出土状態

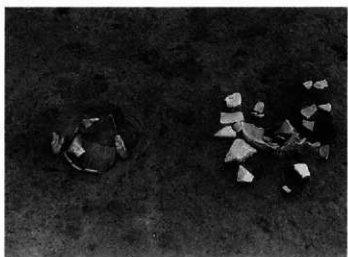


3 B区 調査区全景（西から）



1 B区 2号縄文遺構

2 B区 埋設土器
出土状態



3 B区 埋設土器出土状態



4 B区 埋設土器出土状態



1 C区 砂壤土上位面(旧流路)遺物出土状態



2 C区 砂壤土上位面(旧流路)



3 C区 砂壤土上位面(中期後半)の調査



4 C区 砂壤土上位面(中期後半)の調査



5 A-B区 旧河川(西から)



6 A-B区 旧河川



7 A-B区 旧河川



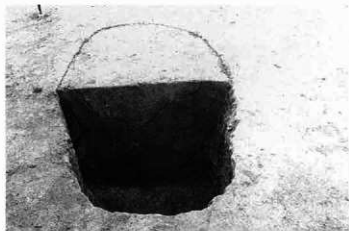
8 A-B区 旧河川埋没土層



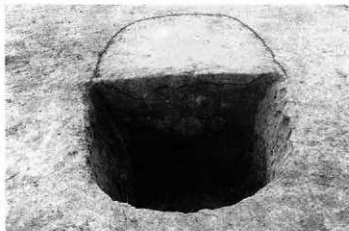
1 B区 砂壤土下陥穴群（西から、手前は旧河川）



2 B区 砂壤土下陥穴群（東から）



1 67号土坑 土層



5 69号土坑 土層



2 全景



6 全景



3 坑底部断面



7 坑底部断面



4 坑底部下部施設



8 坑底部下部施設



1 76号土坑 土層



5 52号土坑 土層



2 全景



6 全景



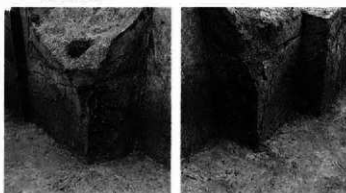
3 坑底部断面



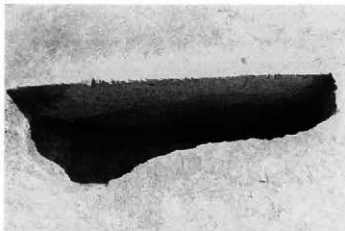
7 坑底部断面



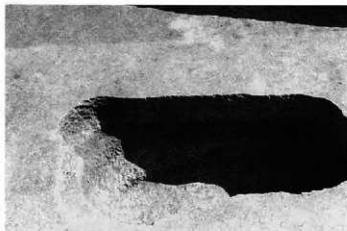
4 坑底部下部施設



8 坑底部下部施設



1 77号土坑 土層



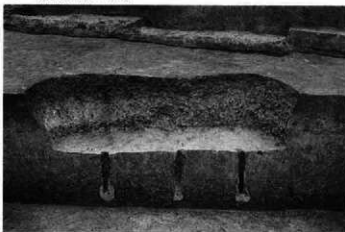
2 全景



3 坑底部断面 (A列)



4 坑底部下部施設 (A列)



5 坑底部断面 (B列)



6 坑底部下部施設 (B列)



7 棒状痕 (A列)



8 小穴掘り方 (B列)



1 62号土坑 確認状態



5 63号土坑 土層



2 土層



6 全景



3 坑底部断面



7 坑底部断面



4 坑底部下部施設



8 坑底部下部施設



1 64号土坑 土層



5 66号土坑 土層



2 坑底部確認状態



6 坑底部確認状態



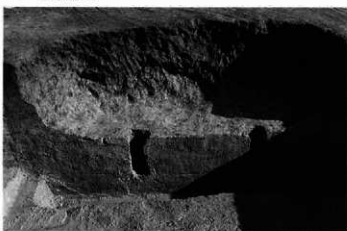
3 坑底部断面



7 坑底部断面



4 坑底部下部施設



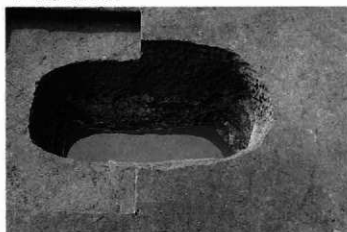
8 坑底部下部施設



1 61号土坑 土層



5 65号土坑 土層



2 全景



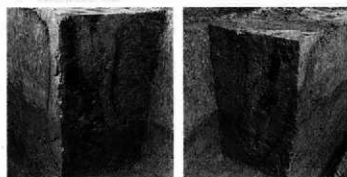
6 坑底部確認狀態



3 坑底部確認狀態



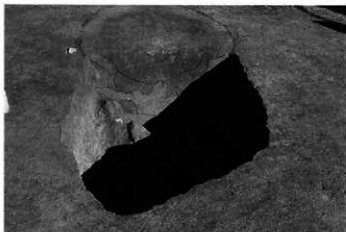
7 坑底部断面



4 下部施設断面



8 坑底部下部施設



1 68号土坑 土層



5 78号土坑 土層



2 全景



6 坑底部確認状態



3 坑底部断面



7 坑底部下部施設



4 坑底部下部施設



8 72号土坑 土層および検出状態



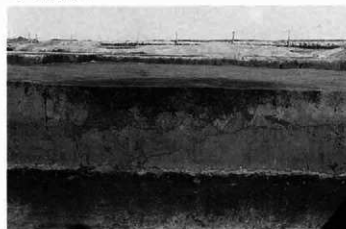
1 53号土坑 土层No. 1



2 土层No. 2



3 土层No. 3



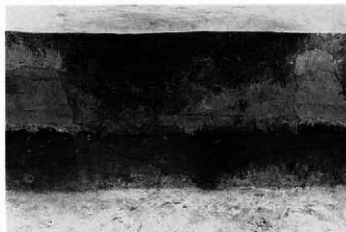
4 土层No. 4



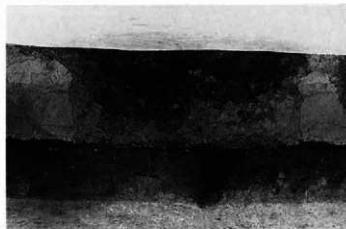
5 土层No. 5



6 土层No. 6



7 土层No. 7



8 土层No. 8



1 53号土坑 土層No. 9



5 土層No.12 a



2 土層No.10



6 土層No.12 b



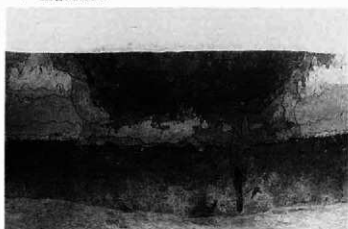
3 土層No.11



7 土層No.13 a



4 土層No.11 (棒状痕)



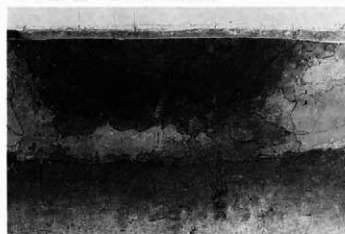
8 土層No.13 b



1 53号土坑 土层No.13 a (棒状痕)



2 土层No.13 b (棒状痕)



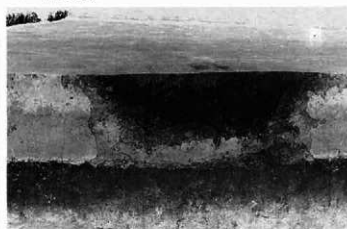
3 土层No.14 a



5 土层No.15



4 土层No.14 b



6 土层No.16



1 53号土坑 土层No.17



5 土层No.21



2 土层No.18



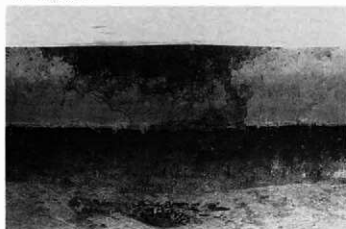
6 土层No.22



3 土层No.19



7 土层No.23



4 土层No.20



8 土层No.24



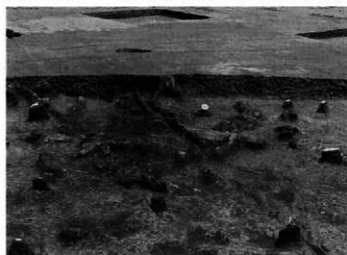
1 D区 全景 (西から)



2 D区 住居群 (西から)



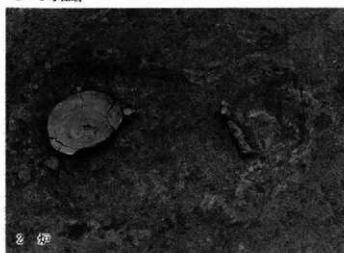
1 1号住居



2 1号住居 遺物および炭化材出土状態



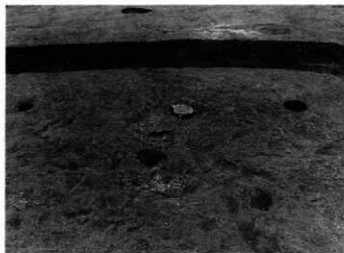
1 1号住居



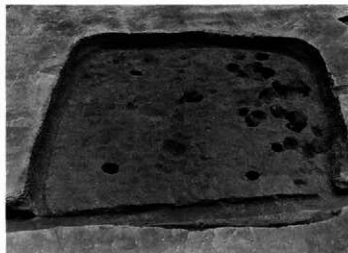
2 ①



3 ②



4 遺物出土状態



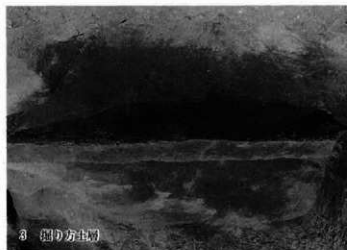
5 住居掘り方



1 2号住居



2 カマド



3 (掘り方住)



4 カマド掘り方



5 住居掘り方



1 3号住居



2 掘り方



3 カマド



4 カマド掘り方



1 4号住居



2 カマド



3 カマド及び貯蔵穴



4 カマド掘り方



5 掘り方



1 5号住居



2 カマド



3 石炭灰



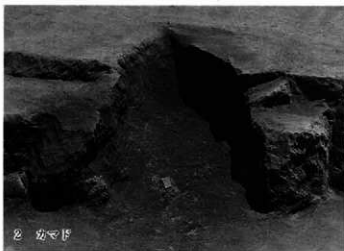
4 カマド掘り方



5 掘り方



1 6a号住居



2 竈マド



3 竈マド内面



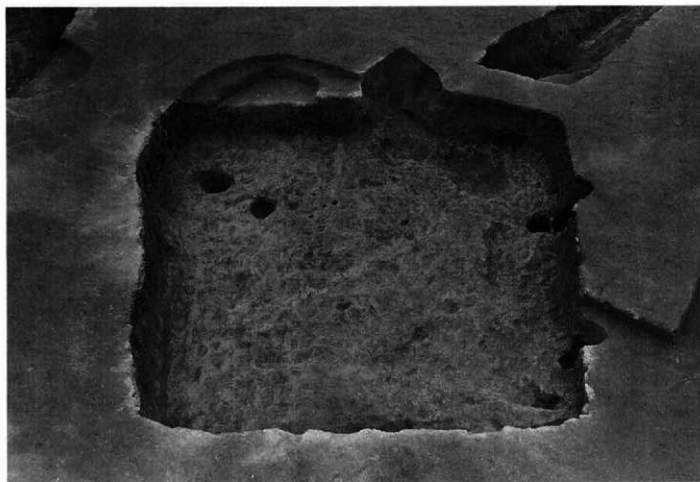
4 カマド土層



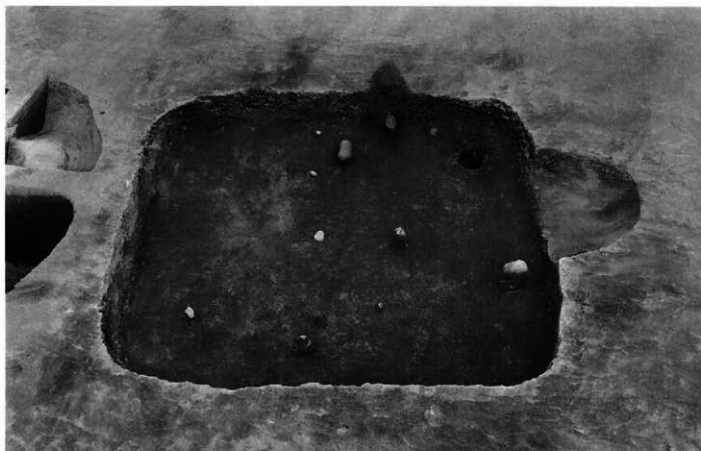
5 貼り床状態



1 6b号住居



2 掘り方



1 7号住居



2 掘り方



3 カマド



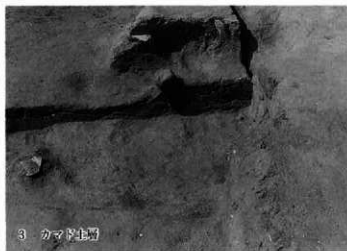
4 カマド掘り方



1 8号住居



2 カマド



3 カマド土甕



4 カマド土甕



5 掘り方



1 9号住居



2 カマド



3 カマド



4 カマド掘り方



5 掘り方



1 10号住居



2 カマド



3 遺物出土位置



4 遺物出土状態



5 遺物出土状態



1 11a号住居



2 穴の中



3 掘り跡



4 11b号住居



5 掘り方



1 12号住居



2 掘り方



3 掘り方土層



4 カマド



1 13号住居



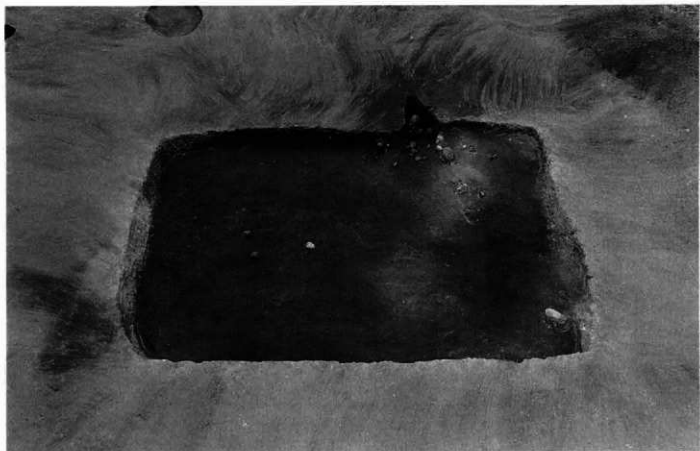
2 掘り方



3 カマド



4 カマド掘り方



1 14号住居



2 カマド



4 穴



3 カマド



5 掘り方



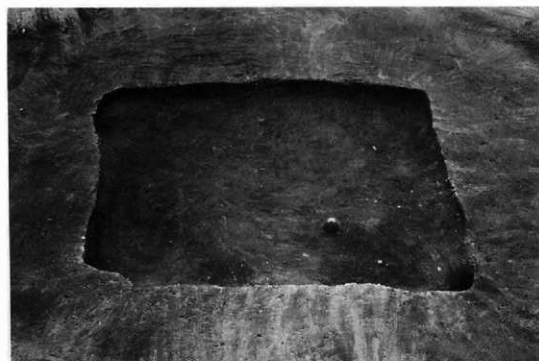
1 15号住居



2 掘り方



3 カマド



4 16号住居



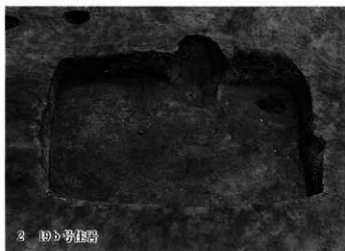
1 17号住居



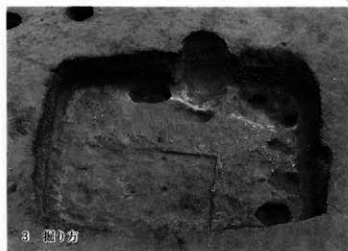
2 18号住居



1 19a号住居



2 19b号住居



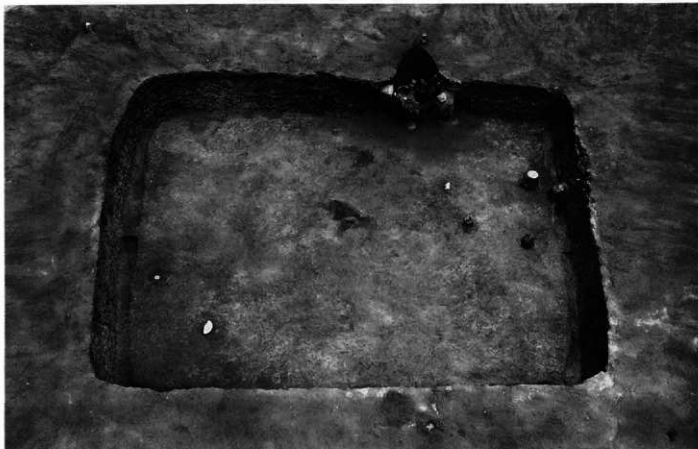
3 掘り方



4 カマド



5 カマド掘り方



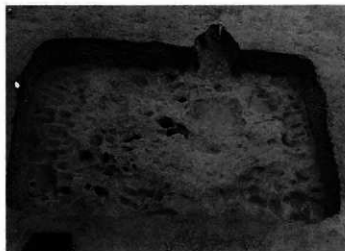
1 20号住居



2 カマド



3 カマド



4 掘り方



5 カマド掘り方



1 22号住居



2 カマド



3 カマド



4 掘り方



5 カマド掘り方



1 23号住居



2 土版



4 カマド



3 掘り方



5 カマド掘り方



1 24号住居 (北半部)



2 24号住居 (中央部)



3 掘り方



4 カマド



5 カマド



1 25号住居



2 産物出土状況



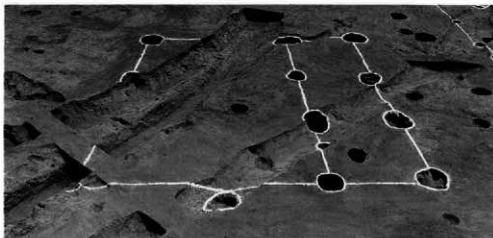
4 カマド



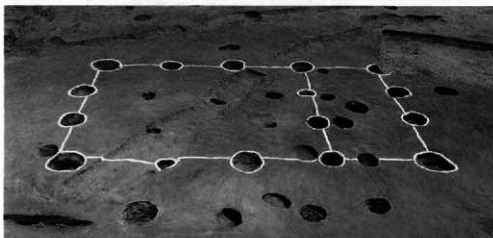
3 掘り方



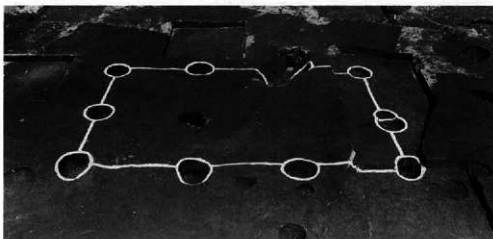
5 カマド掘り方



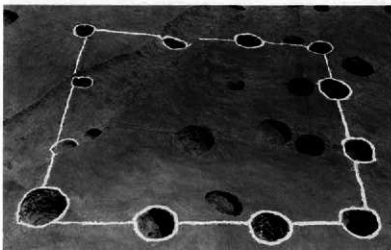
1 1号掘立柱建物



2 3号掘立柱建物



3 4号掘立柱建物



4 2号掘立柱建物



1 17号溝 (東から)



4 41号溝 (北から)



2 17号溝土層



5 全景



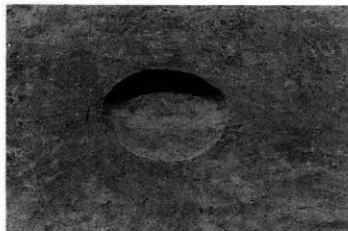
3 41号溝土層



6 17号溝調査状況



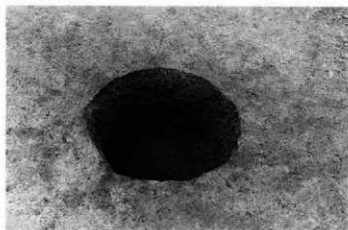
1 19号土坑



2 20号土坑



3 21号土坑



4 22号土坑



5 23号土坑



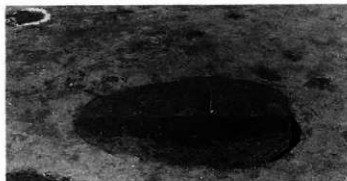
6 25号土坑



7 27号土坑



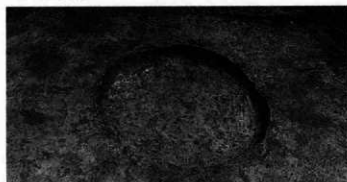
8 28号土坑



1 29号土坑



2 30号土坑



3 31号土坑



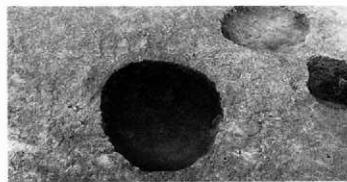
4 37号土坑



5 38号土坑



6 40号土坑



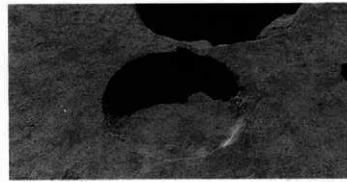
7 41号土坑



8 42号土坑



9 44号土坑



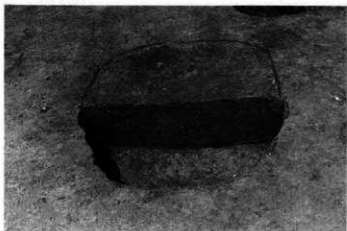
10 48号土坑



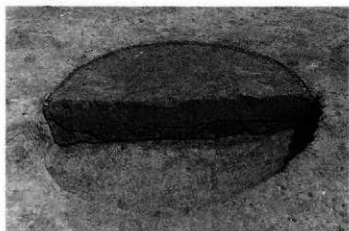
1 49号土坑



2 50号土坑



3 55号土坑



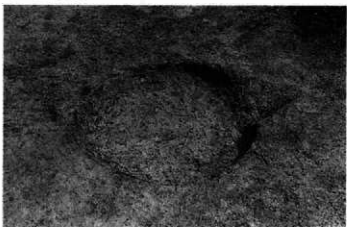
4 58号土坑



5 59号土坑



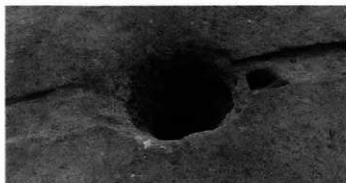
6 73号土坑



7 74号土坑



8 51号土坑



1 46号土坑



2 45号土坑



3 75号土坑



4 57号土坑



5 34号土坑



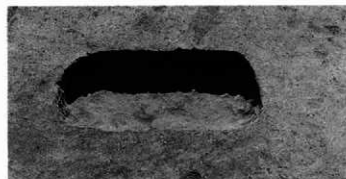
6 24号土坑



7 39号土坑



8 43号土坑



9 47号土坑



10 56号土坑



1 4号井戸



2 4号井戸土層



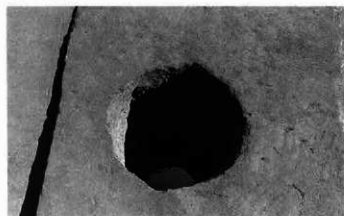
3 7号井戸



4 7号井戸土層



5 5号井戸



6 6号井戸



7 1号井戸



8 2号井戸



9 3号井戸



1 C区 溝群 (東から)



4 4号溝土層



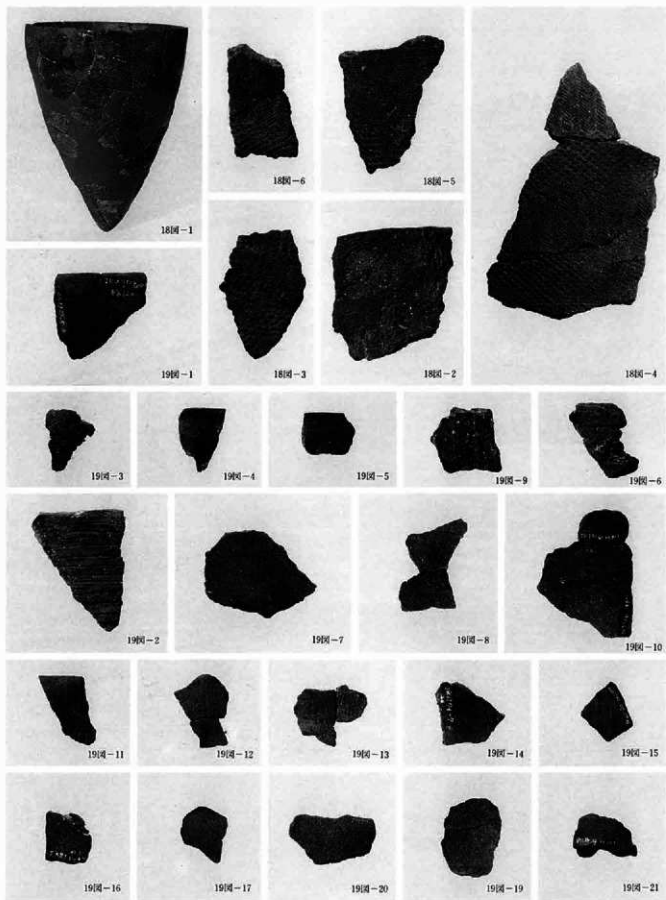
5 11号溝土層



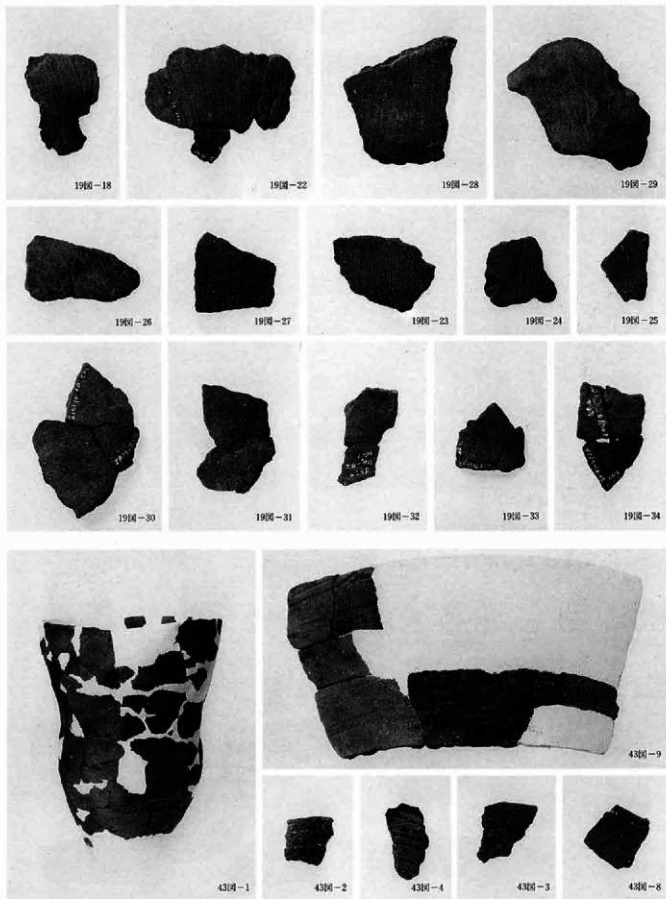
1 E区 全景(北西から)



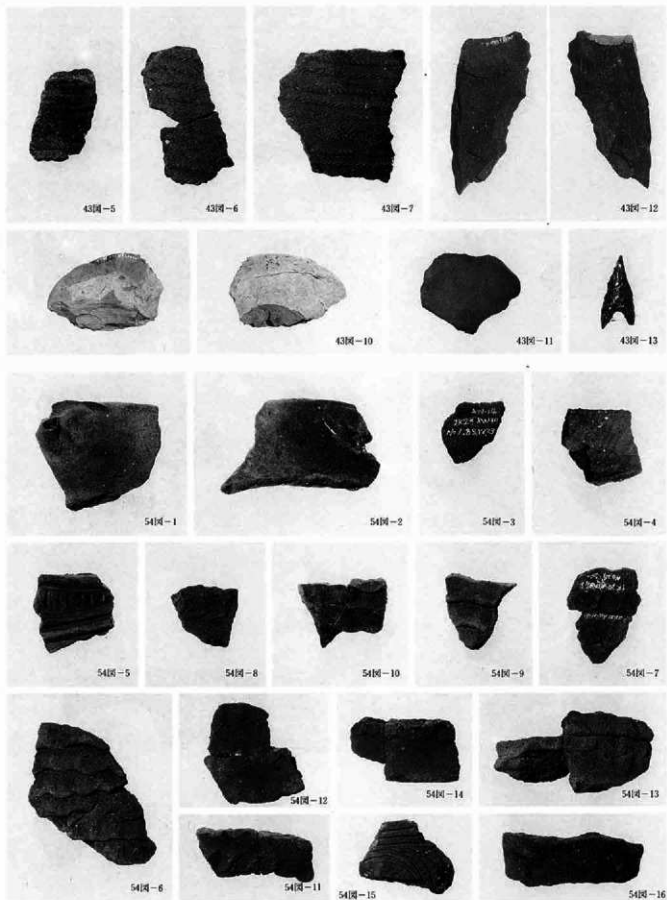
2 E区 清群



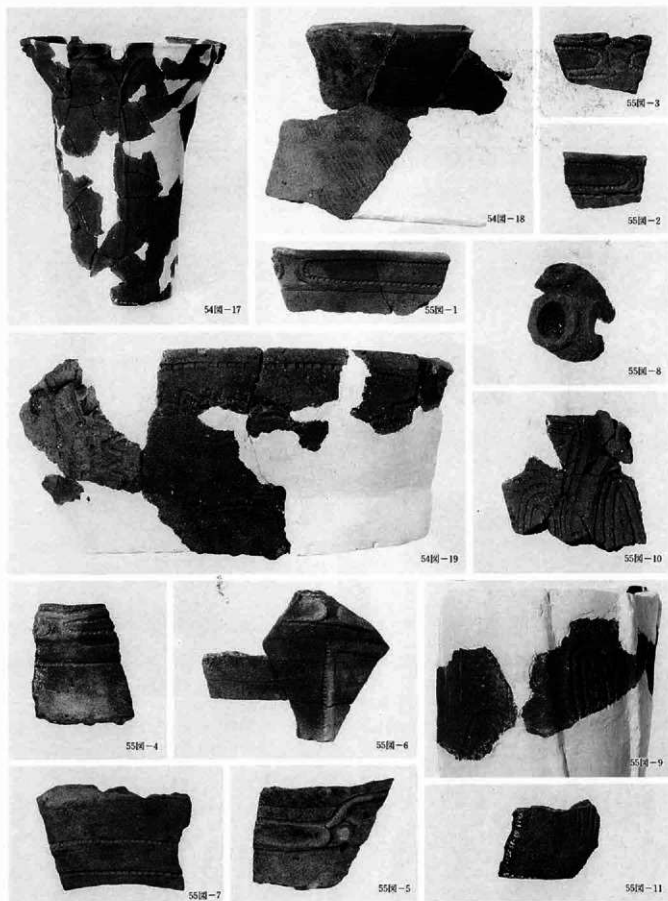
早期包含層出土の土器



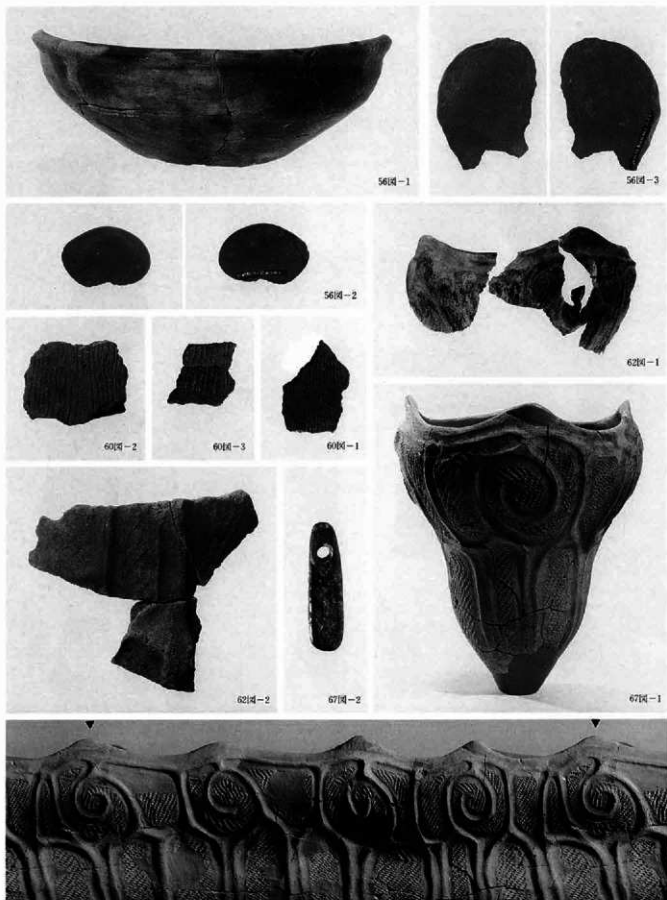
早期・前期包含層出土の土器

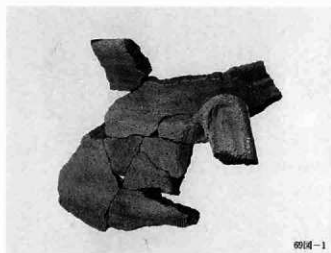


前期・中期前半包含層出土の土器

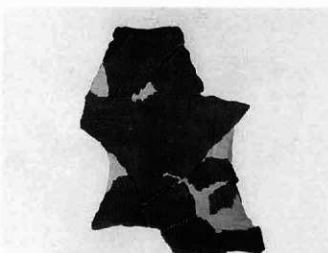


中期前半包含層出土の土器

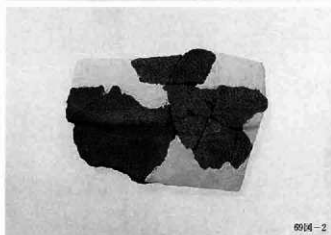




6014-1



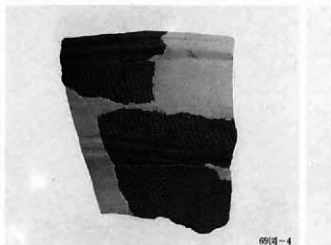
6014-3



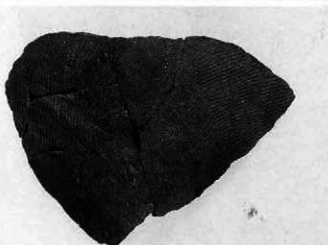
6014-2



6014-5



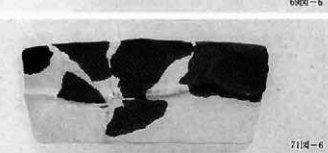
6014-4



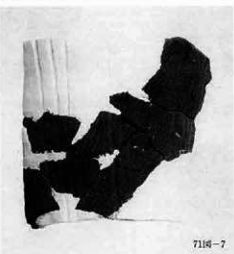
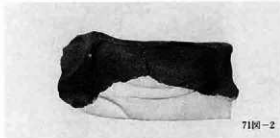
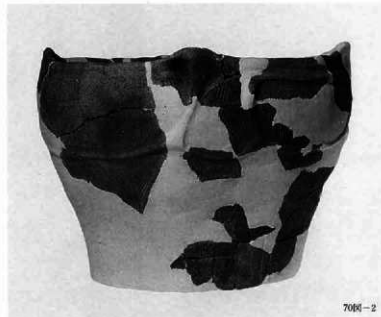
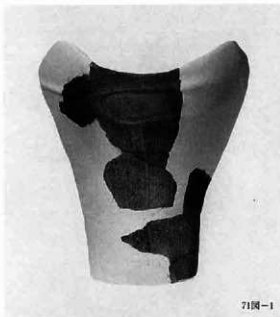
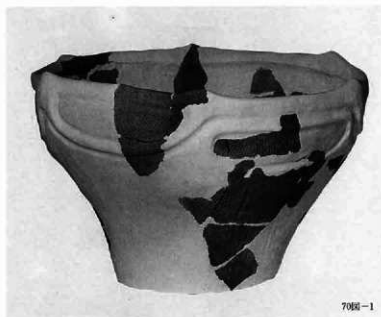
6014-6

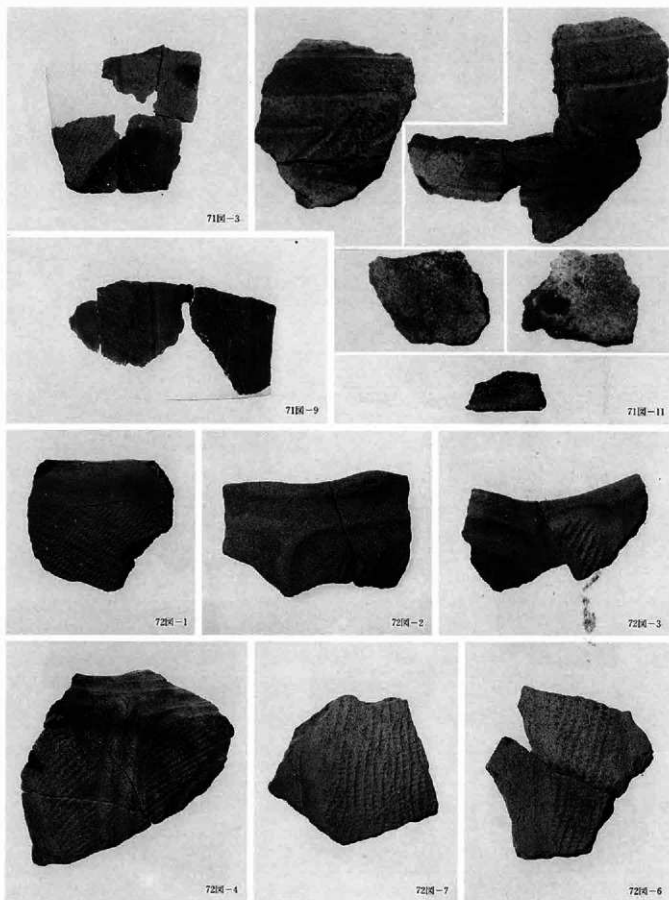


7114-8

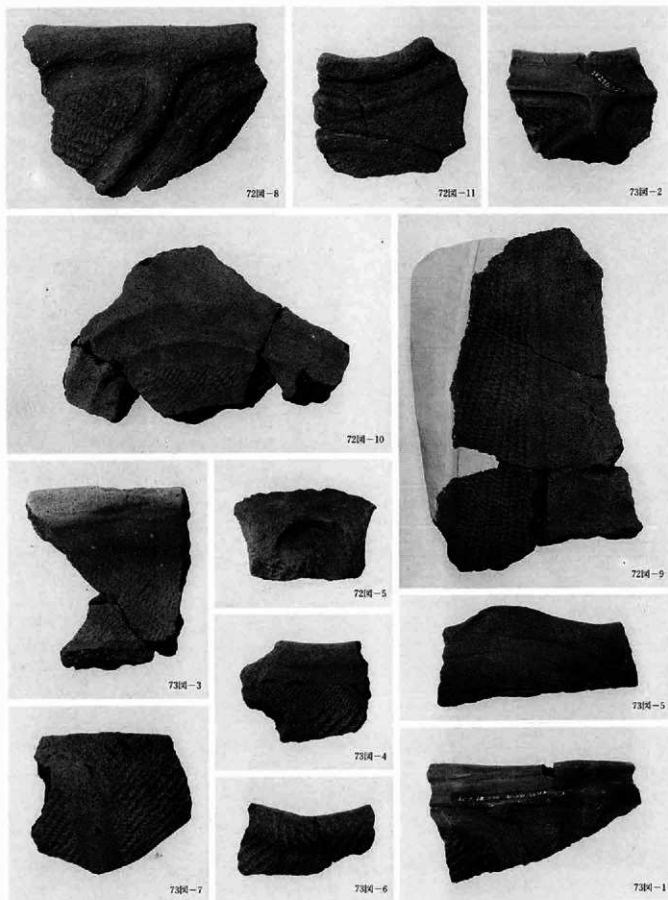


7114-6

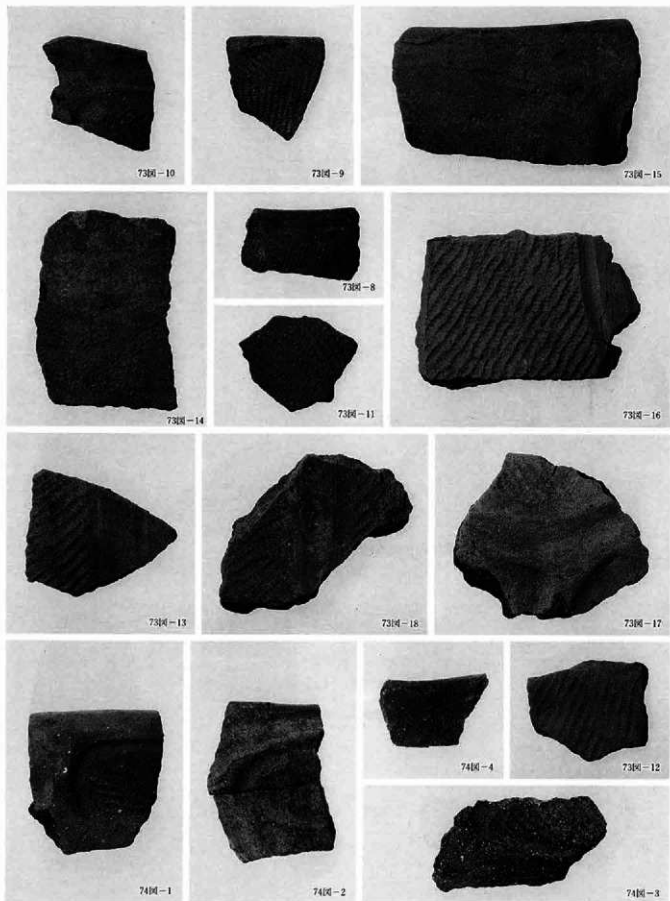




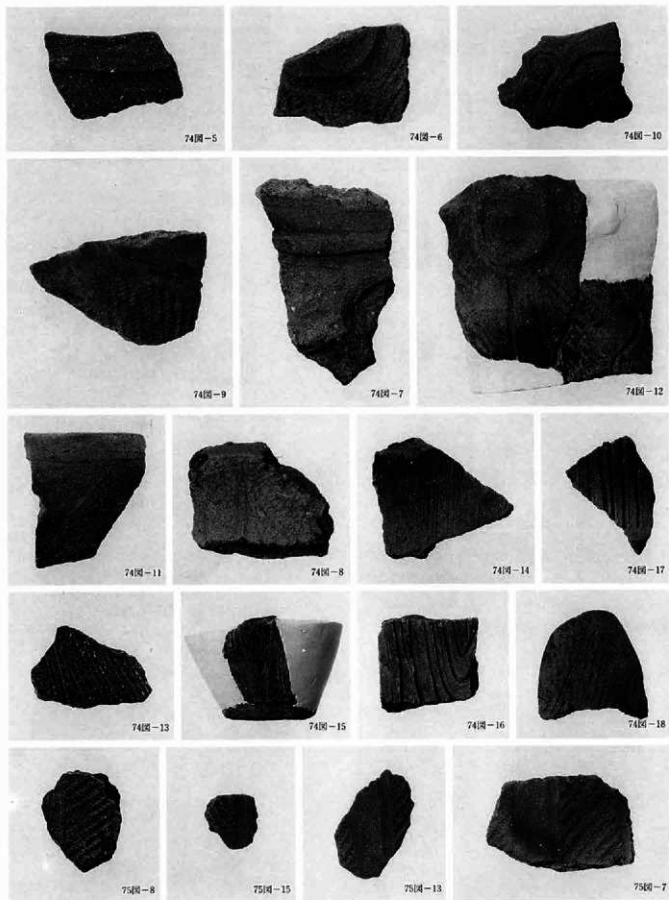
中期後半～後期出土の土器(3)

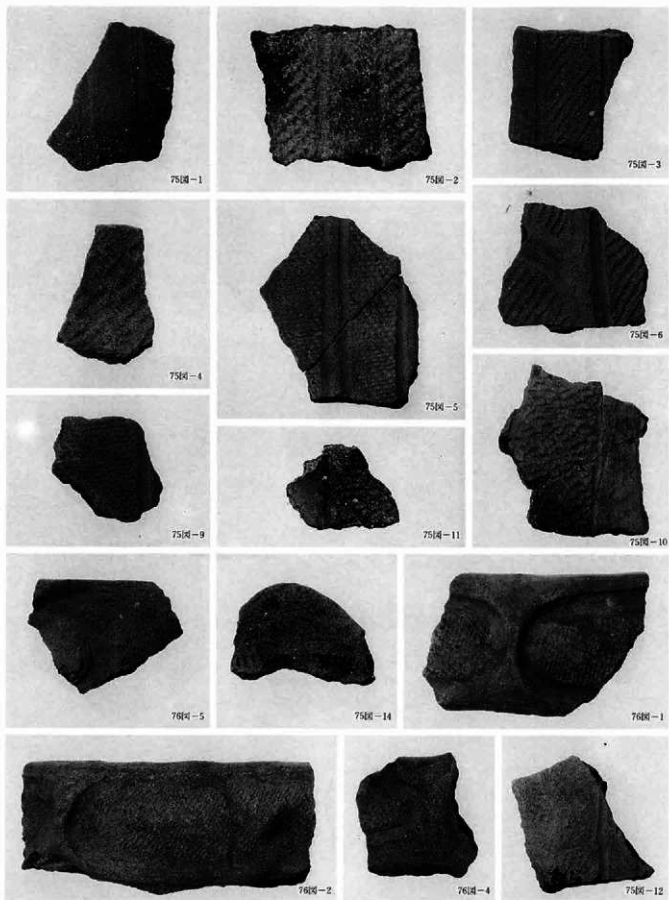


中期後半出土の土器1)

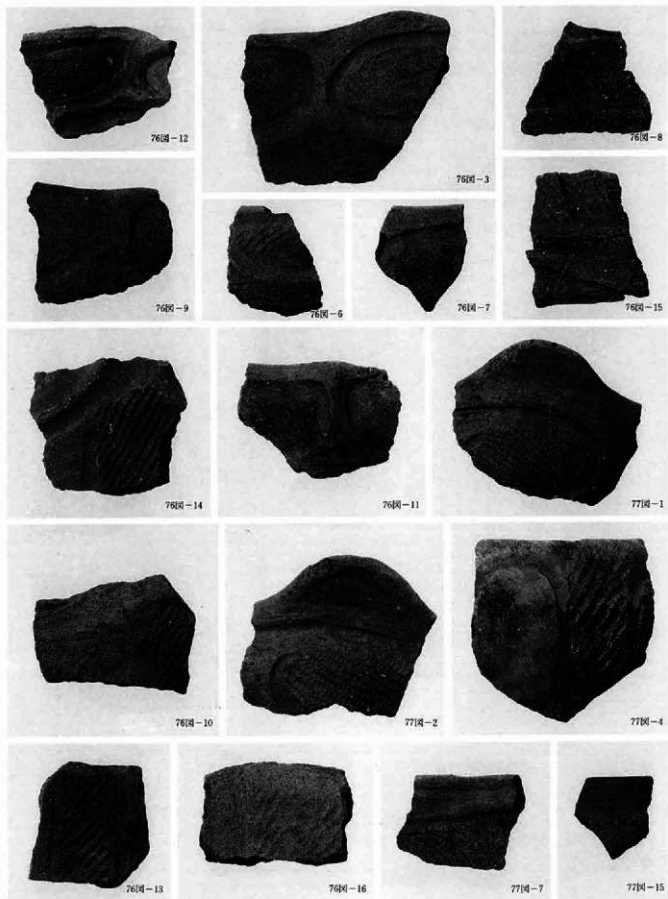


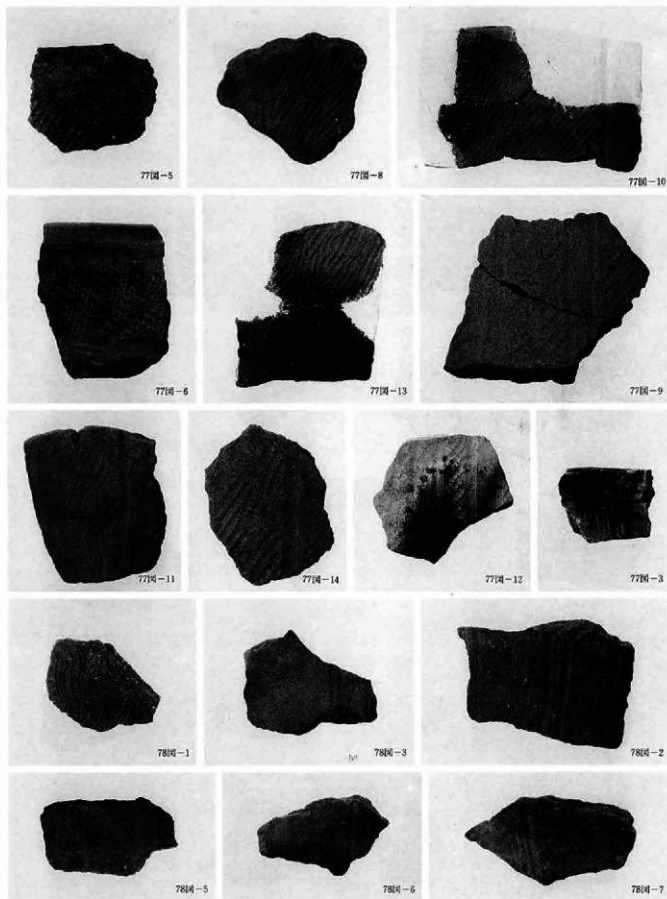
中期後半出土の土器(2)



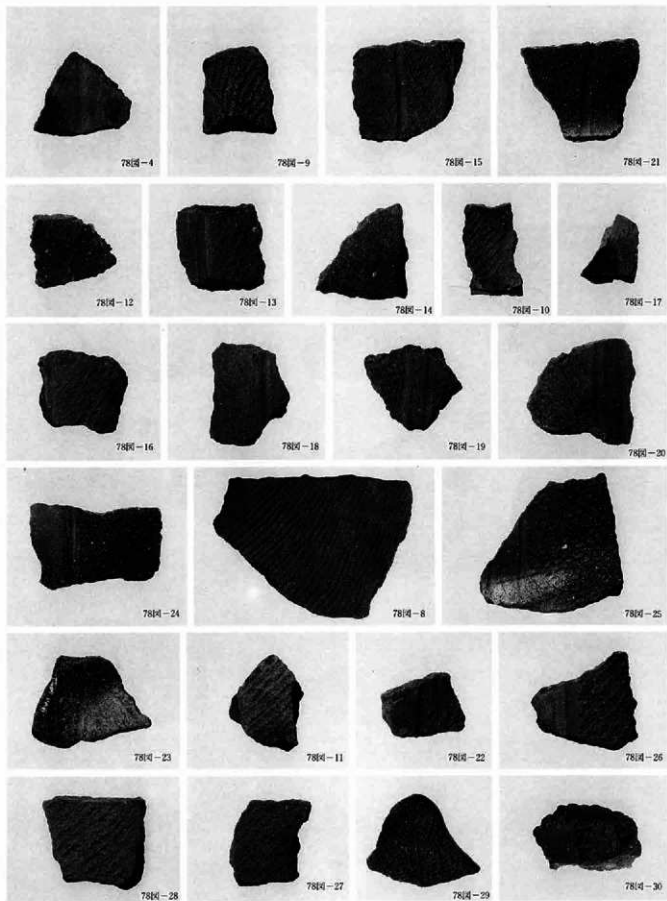


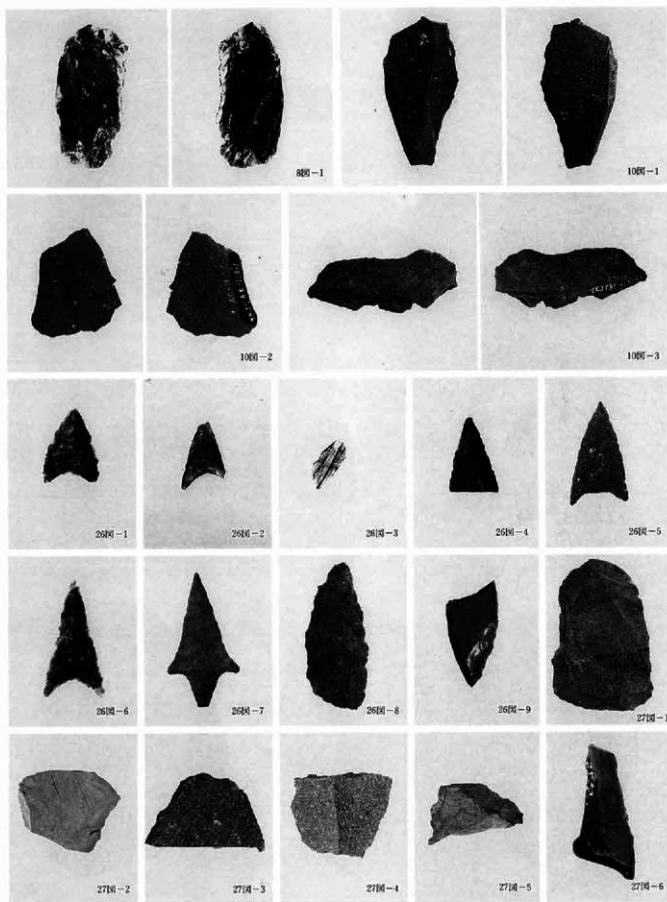
中期後半出土の土器(4)



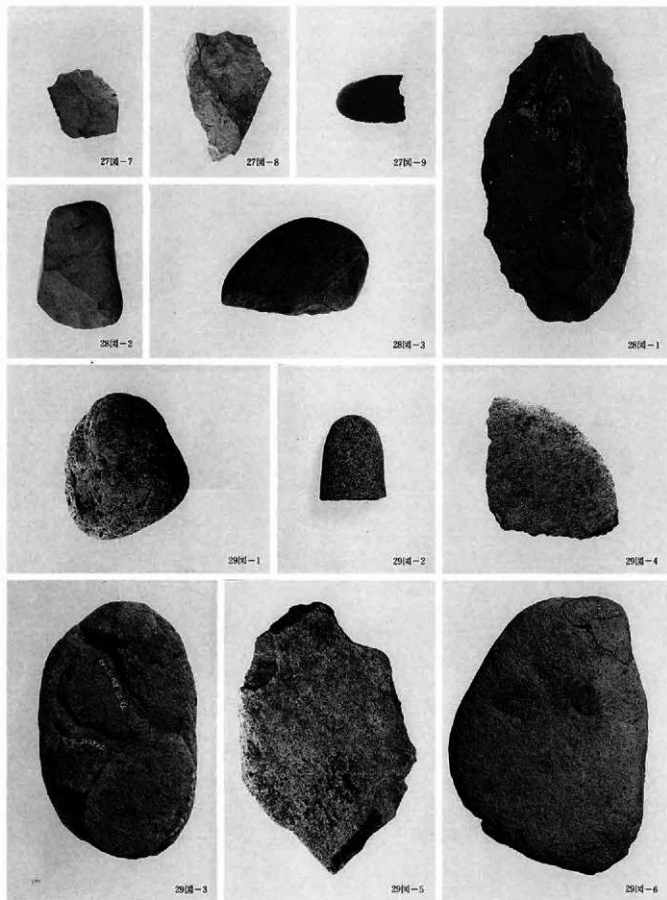


中期後半出土の土器(6)

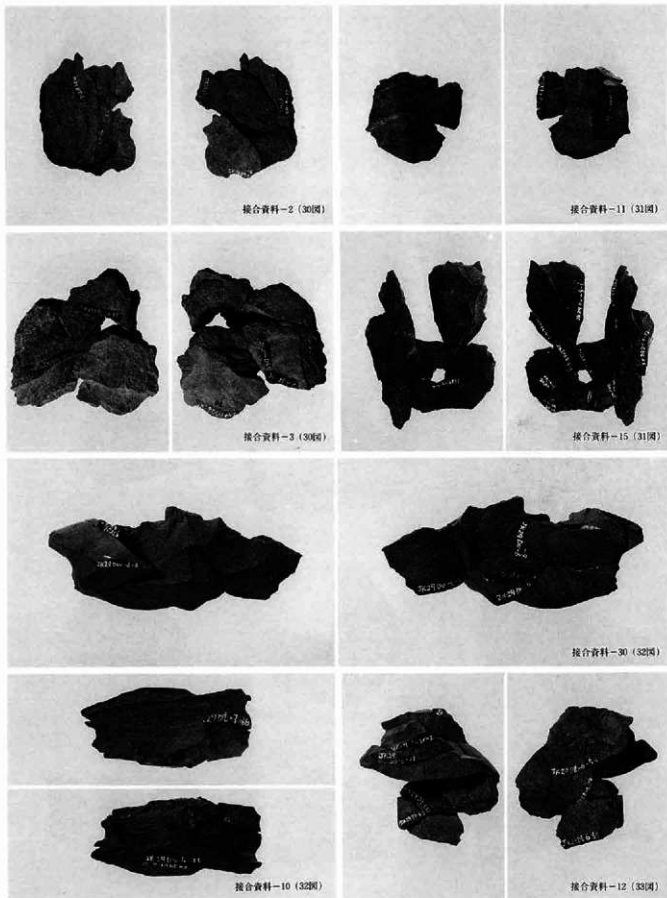




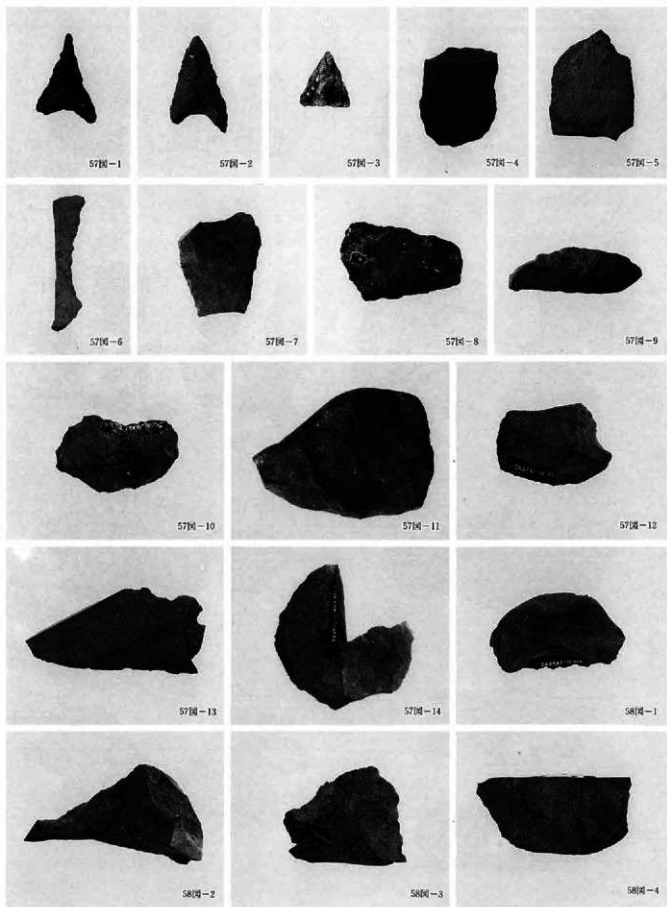
旧石器・早期包含層出土の石器



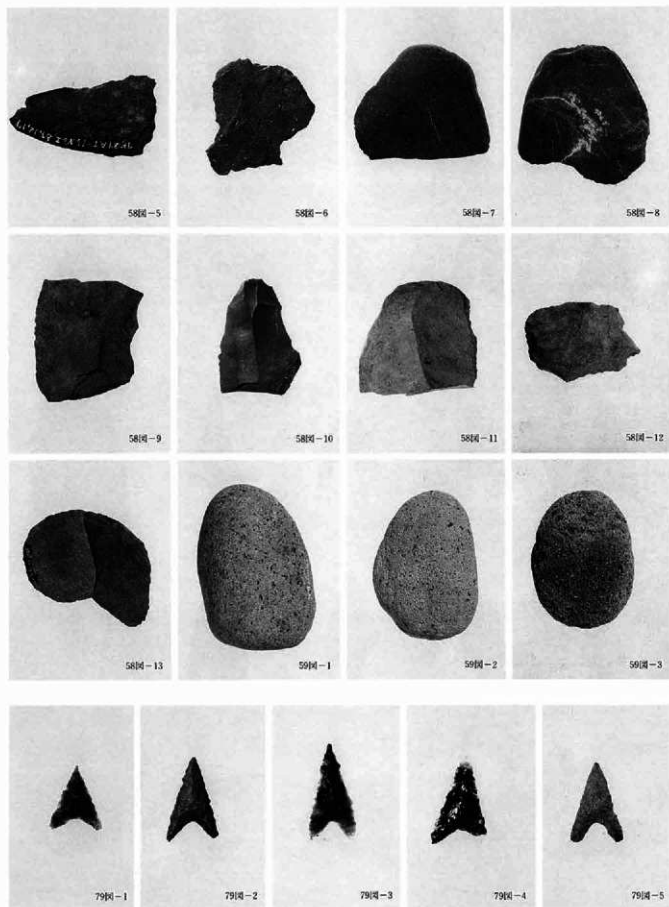
早期・包含層出土の石器



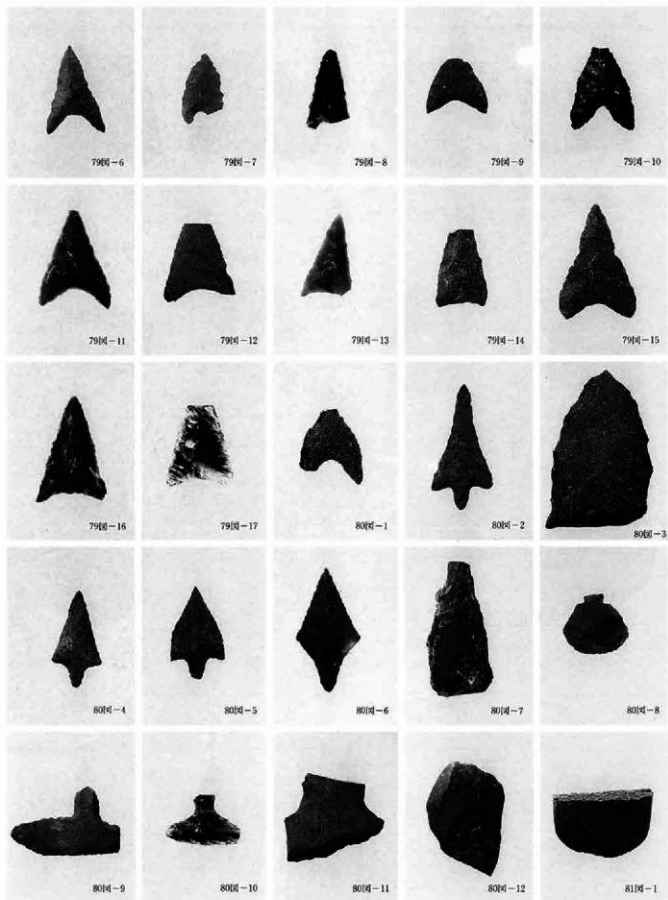
早期包含層出土の石器（接合資料）



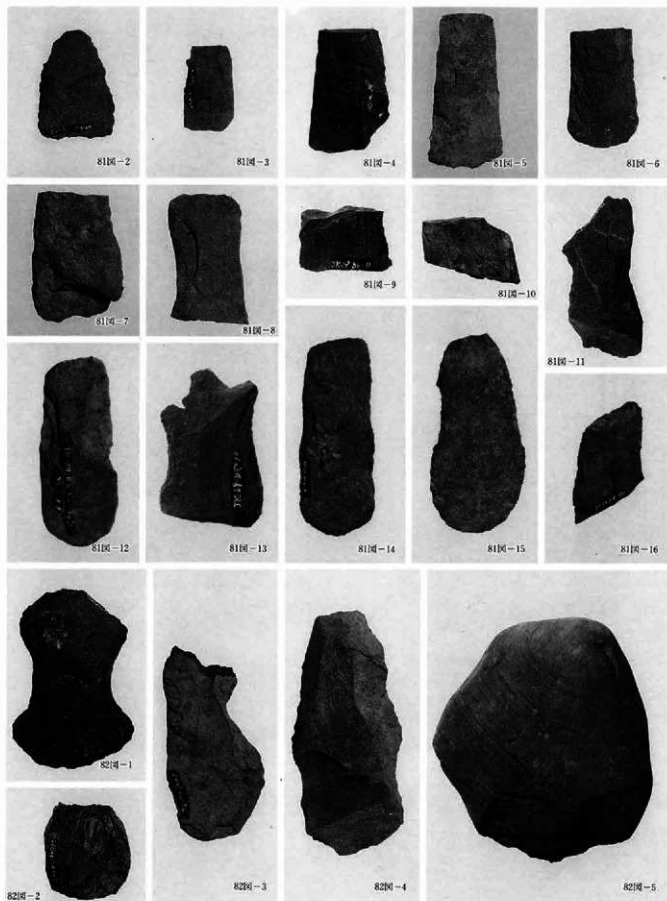
中期前半包含層出土の石器



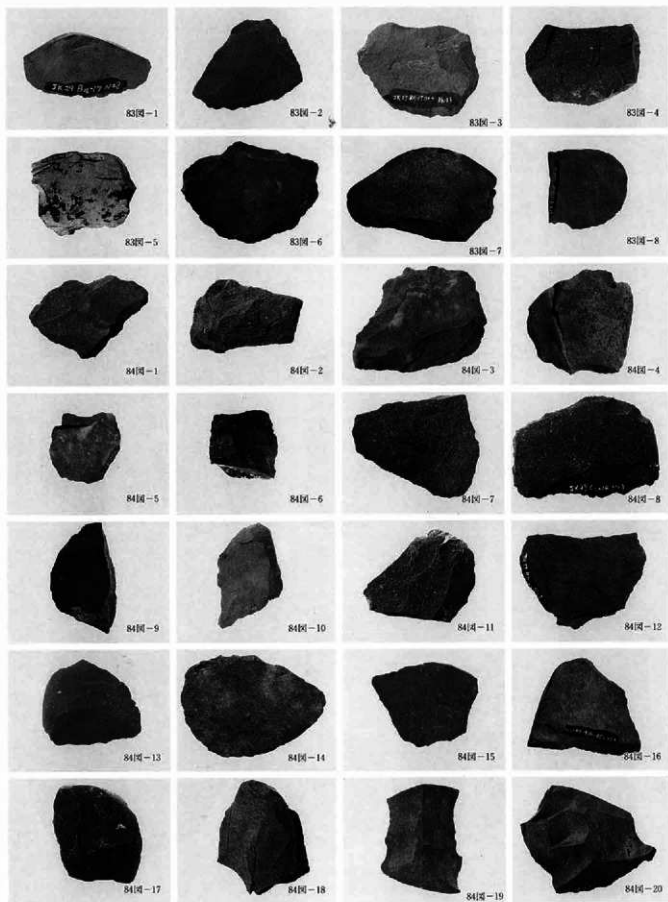
早期・前期包含層出土の石器1)

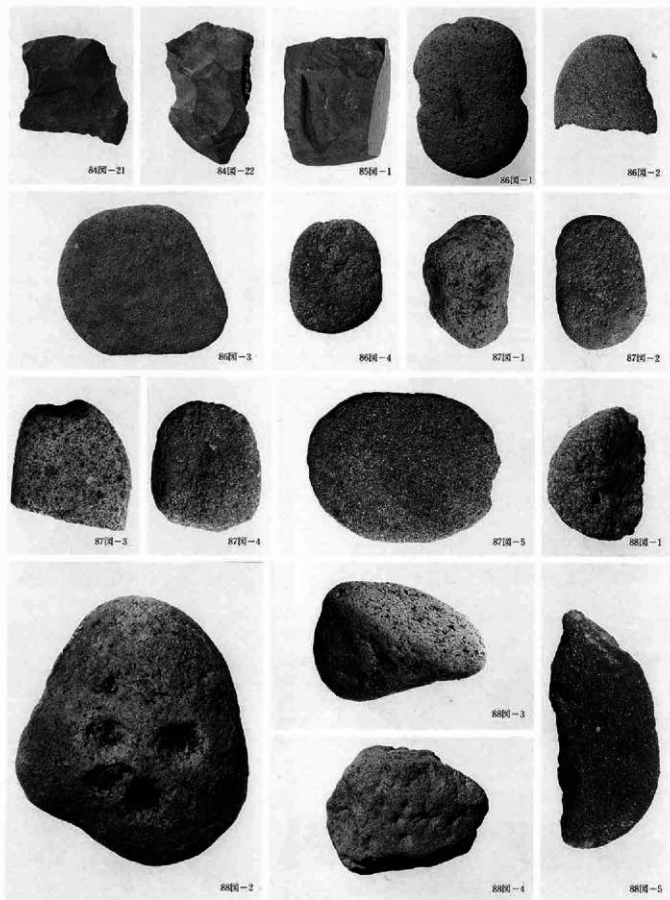


前期包含層出土の石器(2)



包含層出土の石器(1)

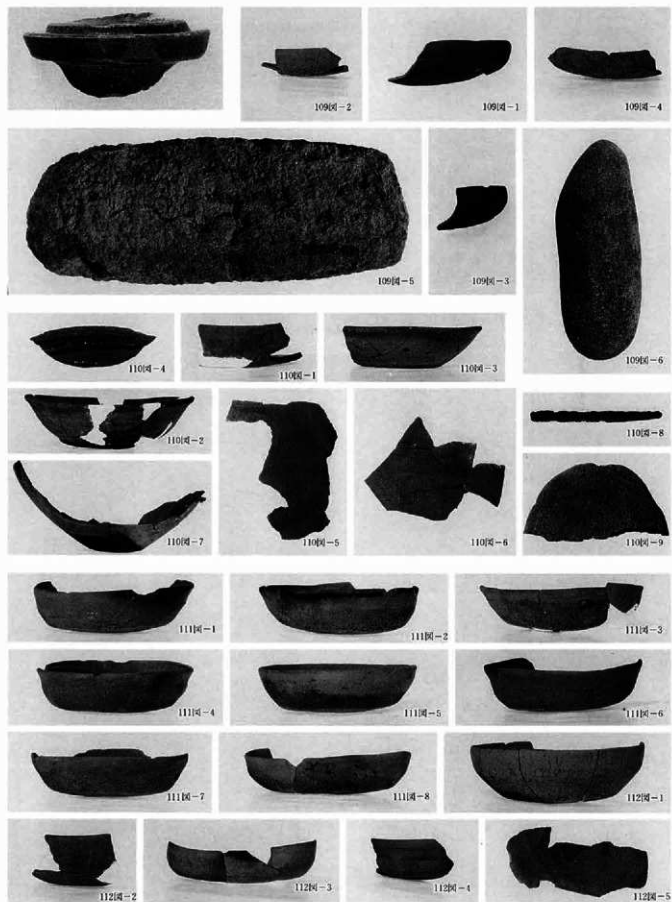




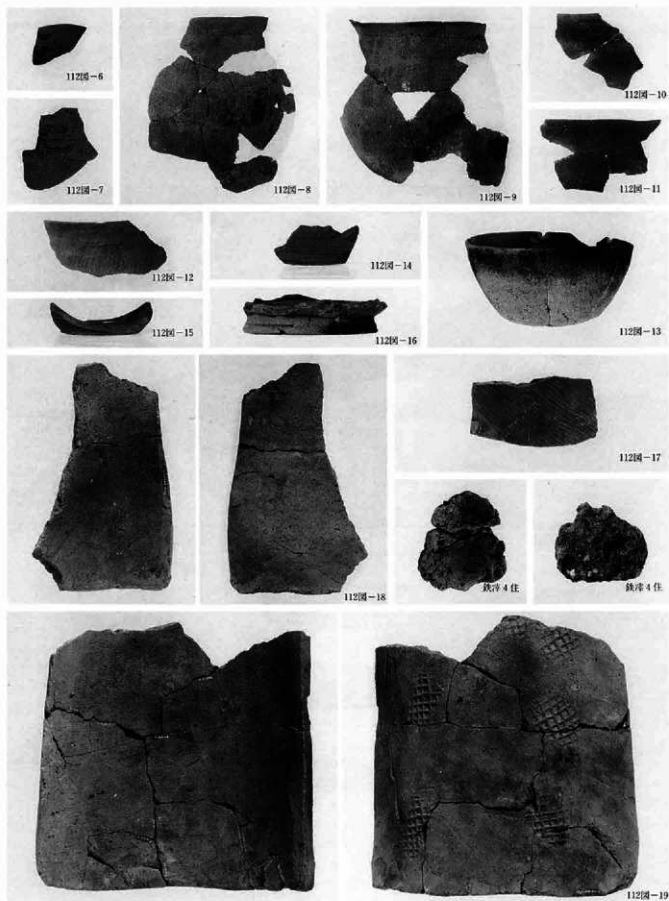
包含層出土の石器(3)

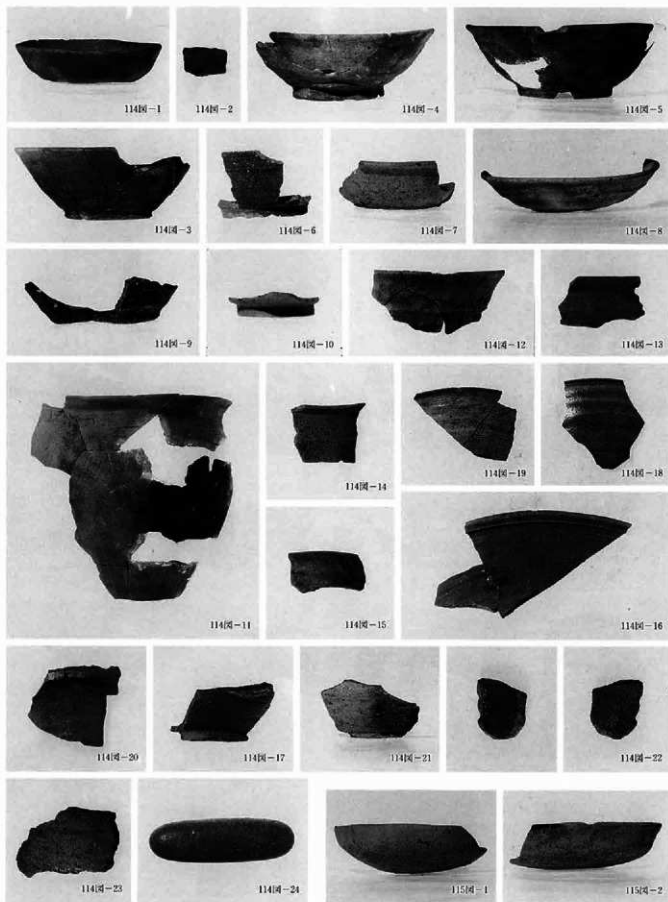


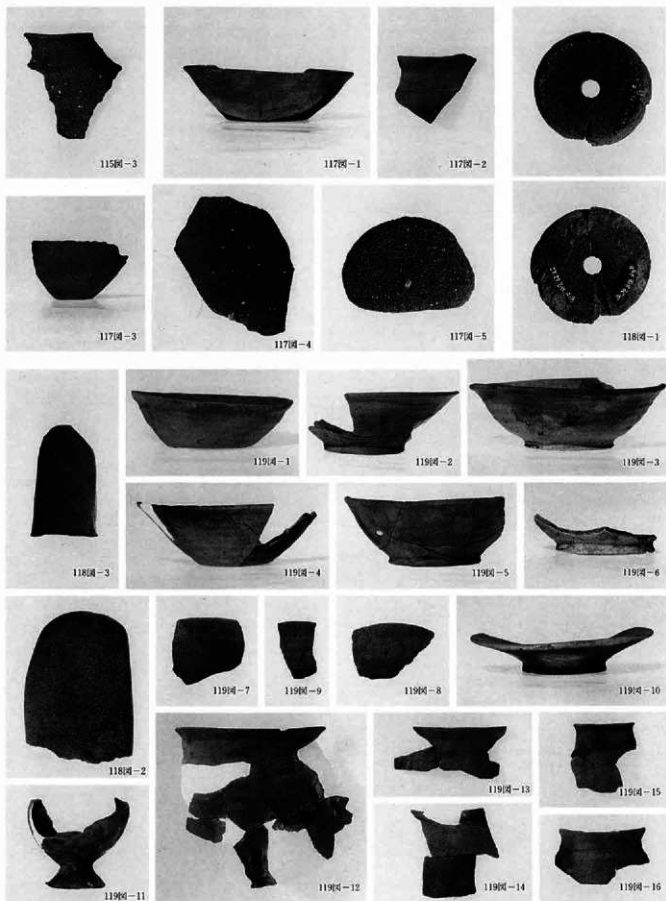
グリッド（古墳時代）・1号住居出土の遺物

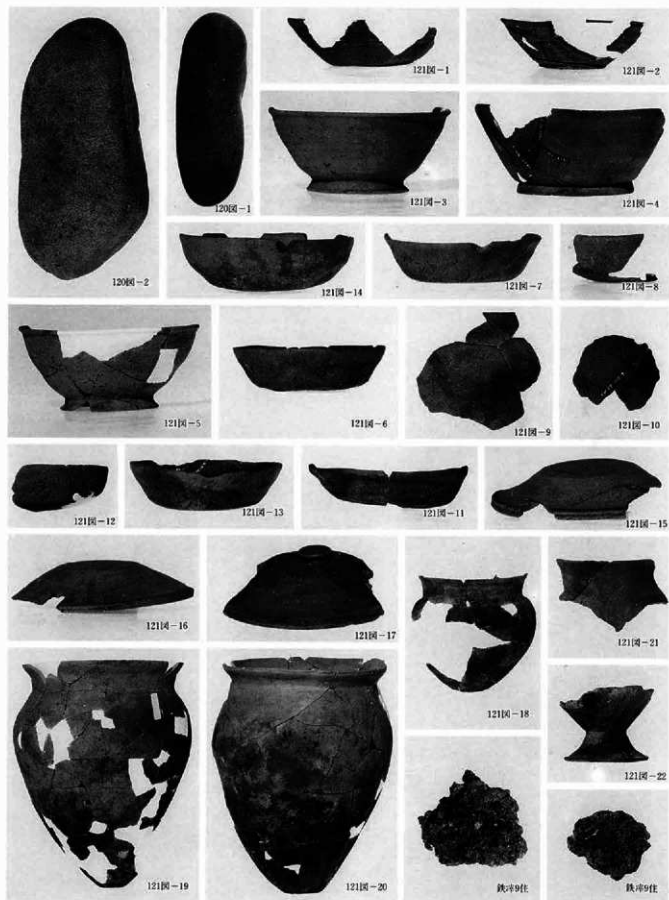


グリッド・2・3・4号住居出土の遺物

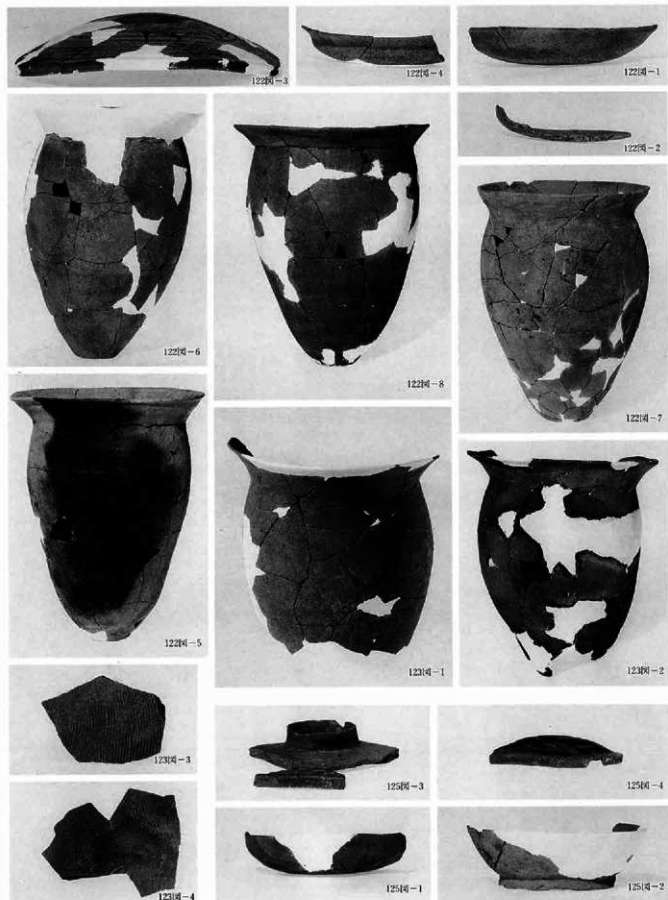


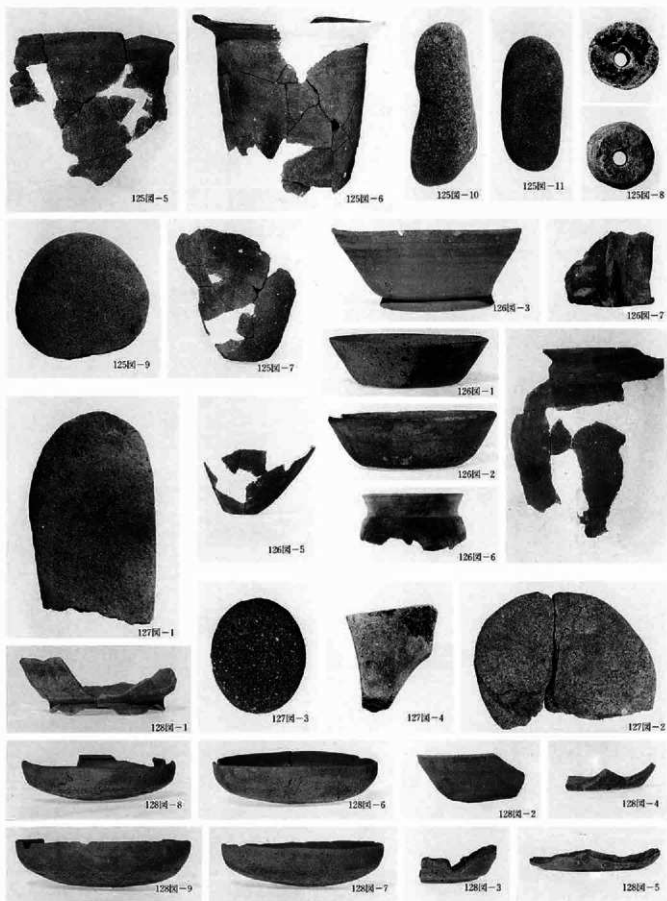


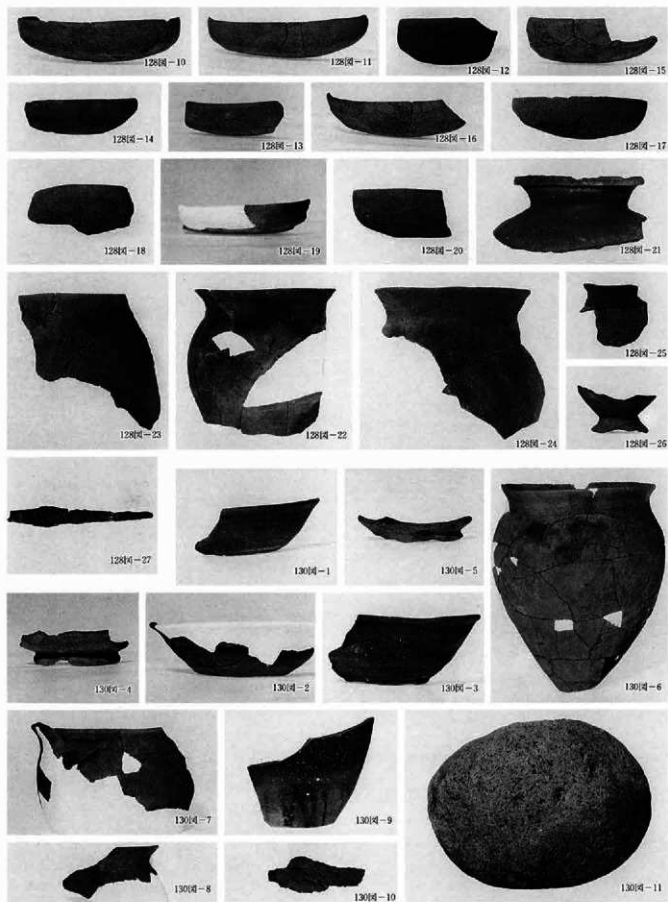


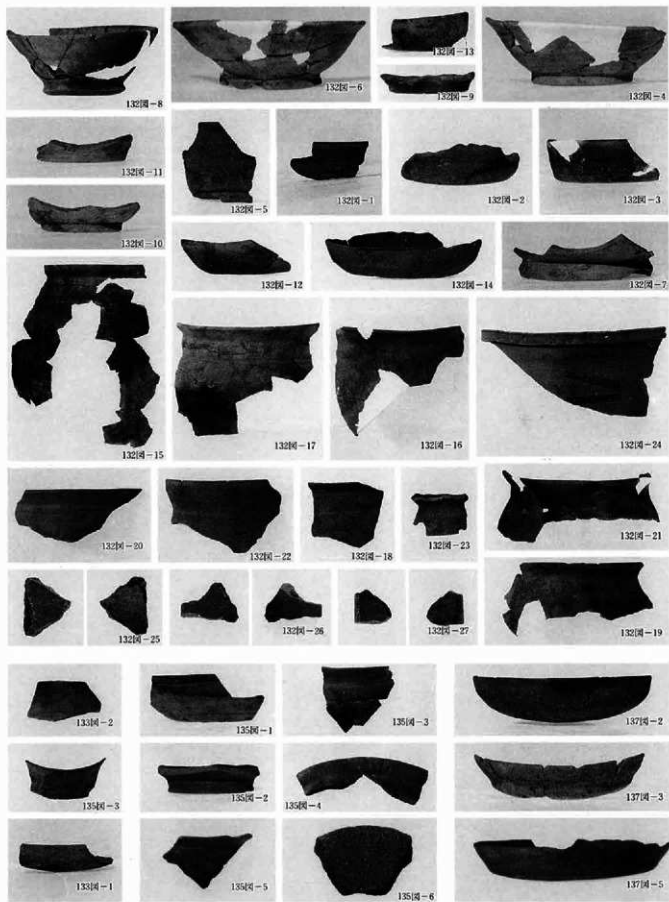


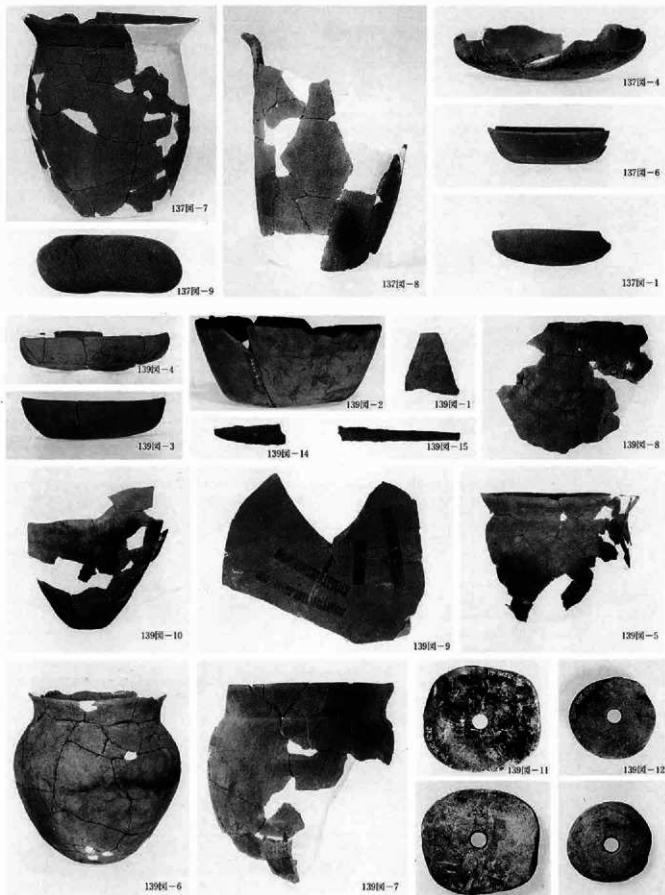
9号住居出土の遺物

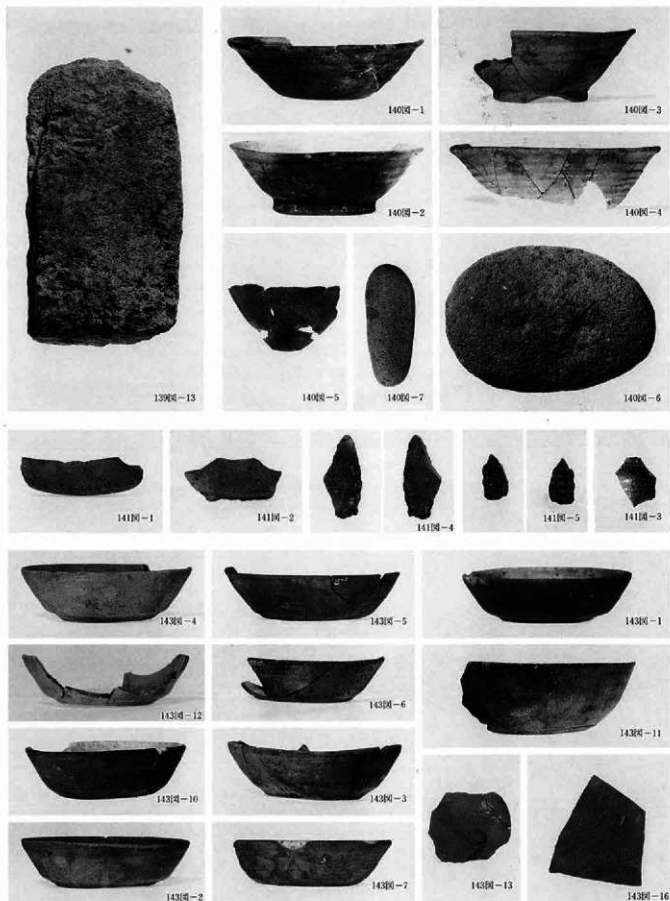


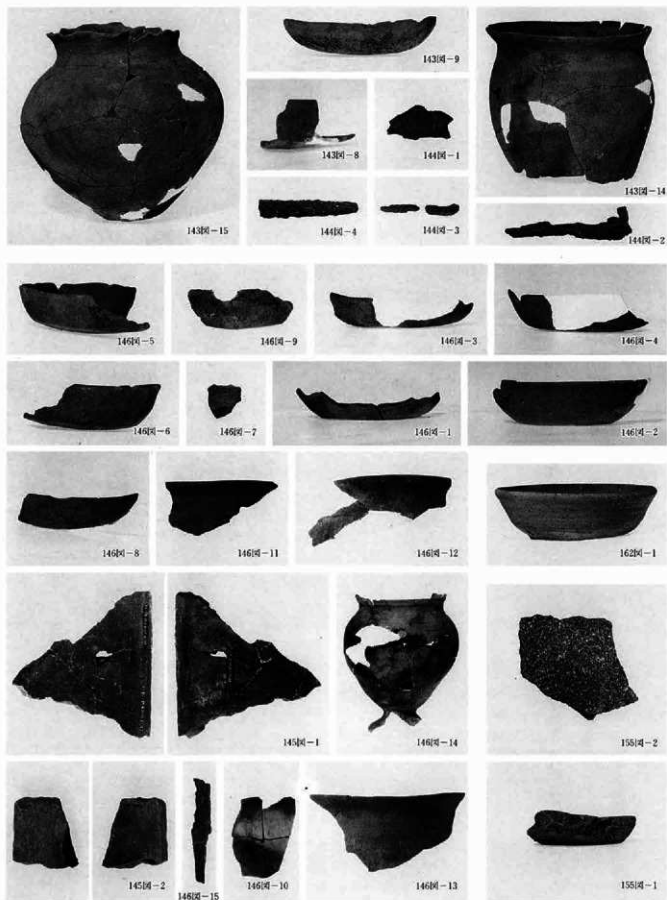




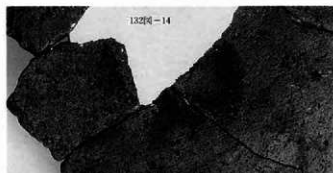












下江田前遺跡



1 調査状況



2 溝土層



3 溝全景

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第113集

**飯土井二本松遺跡
下江田前遺跡**

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年1月24日 印刷

平成3年1月31日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局